

教育年報 2016

岡山県立大学



はじめに

岡山県立大学
学長 辻 英明

今日、我が国では少子・高齢化ならびにグローバル化が進展するとともに、第4次産業革命が進行していると言われていています。こうした社会情勢に対応して、大学には、自立性、協働性ならびに創造性のある人材育成のための教育改革が強く求められています。

このように大きく変化している社会状況を受けて、本学は、平成25年4月より始まった第2期中期計画において、「体系的な教養教育の導入」、「グローバル教育の推進」、「戦略的な地域貢献の取り組み」からなる3つの基本方針を策定し、それを推進するための大学の組織改革を進めてきました。さらに、かねてから構想していた「地域連携教育」を進めるべく、平成27年度には、文部科学省の補助事業である「地（知）の拠点大学による地方創生推進（COC+）事業」に、「地域で学び、地域で未来を拓く生き生きおかやま人材育成事業」として応募し、選定されました。本事業は、教育改革、産学連携及び域学連携の3つの活動からなりますが、その内容は学生を地域社会に送り出し本学教員、地域住民、自治体、企業やNPOと協働（産学連携、域学連携）して地域課題に取り組み、その解決を図る過程を通して学生が社会人になるための基本的素養を身に付ける新しい人材育成システム（地域連携教育）です。本学では、学内で実施する教養教育、専門教育、ならびに新しく加わったフィールドで学ぶ地域連携教育の三つの軸からなる教育システムを構築し、この教育システムによって、より深い教養と高い専門性に加えて他者と協働して課題を解決できる主体性と耐えず前進する力を身に付けた人材育成を推進しています。今後、これらの教育システムの質的、量的な改善と充実を図ることが当面の課題です。

教育年報2016は、教育年報2015と同様に3部で構成されており、第1部は学部及び大学院の教育活動をまとめています。第2部は教育研究開発機構の3つのセンター（大学教育開発センター、国際交流センター、ならびに学術研究推進センター）の活動をまとめています。また、28年度入学生から本格的に実施したCOC+事業の副専攻「岡山創生学」の活動は主として第2部の大学教育開発センターの教育改革WGの項に記載されています。第3部には、附属図書館の活動及び成果をまとめています。

本学の教職員一同は、本学の教育改革活動についてご理解いただき、本学が目標とする深い教養と国際的視野を有し、地域で活躍しうる人材育成の取り組みに引き続きご尽力いただきますようお願い申し上げます。

2017年6月

目次

はじめに

第1部	学部及び大学院における教育活動	1
第1章	学部の教育活動と成果	1
1	概要	1
2	入学者受入	1
2-1	概要	1
2-2	選抜方法	1
2-3	入学前教育	4
2-4	留学・転学受入等	8
2-5	高大連携と高大接続	9
2-6	まとめと課題	10
3	共通教育における学生の学習支援	10
3-1	概要	10
3-2	共通教育部	11
3-3	留学生・転学生	21
3-4	大学コンソーシアム岡山	21
3-5	まとめと課題	25
4	専門教育における学生の学習支援	26
4-1	概要	26
4-2	保健福祉学部	26
4-3	情報工学部	30
4-4	デザイン学部	34
4-5	まとめと課題	41
第2章	研究科の教育活動と成果	42
1	概要	42
2	入学者受入	42
2-1	概要	42
2-2	選抜方法	42
2-3	まとめと課題	43
3	大学院における教育活動	43
3-1	保健福祉学研究科	43
3-2	情報系工学研究科	46
3-3	デザイン学研究科	49
3-4	まとめと課題	49
4	大学院における研究活動	50
4-1	概要	50
4-2	保健福祉学研究科	50
4-3	情報系工学研究科	57
4-4	デザイン学研究科	58
4-5	まとめと課題	58
5	大学院における国際交流	59
5-1	概要	59
5-2	保健福祉学研究科	59

5-3	情報系工学研究科	60
5-4	デザイン学研究科	60
5-5	まとめと課題	61
第2部	教育研究開発機構	62
第1章	大学教育開発センターの活動と成果	62
1	概要	62
2	各部会活動	63
2-1	概要	63
2-2	教育企画室	64
2-3	アドミッション部会	68
2-4	共通教育部会	97
2-5	FD部会	99
2-6	教育評価部会	113
2-7	キャリア形成支援部会	124
2-8	学生支援部会	131
2-9	教育改革WG（「岡山創生学」）	143
2-10	まとめと課題	156
3	教育力向上支援事業	158
3-1	目的	158
3-2	本年度実施事業及び来年度実施予定事業	158
3-3	まとめと課題	181
第2章	国際交流センターの活動と成果	183
1	概要	183
2	国際交流における教育活動	184
2-1	国際交流協定校	184
2-2	語学文化研修等	184
2-3	教育交流	187
2-4	国際交流センター（建物）内での様々な活動	187
2-5	共通教育との連携	189
2-6	まとめと課題	189
3	国際交流における教育・研究支援活動	190
3-1	国際交流協定校	190
3-2	国際研究協力	190
3-3	基盤整備	191
3-4	まとめと課題	191
第3章	学術研究推進センターの活動と成果	192
1	概要	192
2	学術研究推進と教育活動	192
2-1	科研費計画書の提出前検討会の実施	192
2-2	科研費計画書作成・研究倫理教育研修会	192
2-3	教員の研究活動に係る環境整備	194
2-4	まとめと課題	194
第3部	附属図書館の活動と成果	196
1	概要	196

1-1	図書館活用の推進	196
1-2	英語文献利用講習会	200
1-3	電子ジャーナルの利用	201
1-4	リポジトリ公開登録及び利用状況	202
1-5	まとめと課題	202

付録 1

A	入試統計	204
B	卒業時・修了時アンケートの詳細	206
C	全学的就職支援の実施状況	209
D	国際交流	211
E	高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入	213
F	高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）	213
G	学生・クラブの表彰	214
H	委員会等の審議事項	217

付録 2

A	学部ディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシー, アドミッション・ポリシー	222
B	大学院ディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシー, アドミッション・ポリシー	259

編集後記

第1部 学部及び大学院における教育活動

第1部は本学の教育,すなわち学部(学士課程教育-共通教育・専門教育)と大学院における教育活動と成果といった本学の教育活動状況をダイナミックに示す場所であり,教育年報の中でも最重要の位置づけと見なしているところである。昨年度の年報において第1部「学部及び大学院における教育活動」は大幅な改定を行った。一昨年までは各学部及び研究科はそれぞれ独自の項目を立てて記述していたが,そのための見づらさや内容の濃淡が生じる傾向があった。本年度も昨年度同様に作成したが,今後も継続的に見直しを行う予定にしている。その際,各学部及び研究科の項目の立て方を共通にすることは維持して行く予定である。

本年度の教育年報では実現していないが,平成28年度から「地域連携教育」に関する副専攻が立ち上がっており,共通教育と専門教育に跨って教育が実施される。今年度は第2部章で取り扱っているが,今後本学の教育の一つの柱として第1部に編入することも考慮される。また,共通教育と専門教育は明確に区別する方向でカリキュラムが組み立てられてきたが,それ故に両者の学士課程教育における一貫性が問われると思われ,連携性を検討してゆく必要がある。

第1章 学部の教育活動と成果

1 概要

第1章では,主に学部の入学者受け入れ,共通教育における学生の学習支援,専門教育における学生の学習支援を扱っている。特に入学者受け入れについてはアドミッション・ポリシーに基づく対応が進みつつある。

大学院の選抜方法,入学者選抜の変更-大学院入試,については,平成27年度は第1章に置いたが,本年度は第2章研究科の教育活動と成果,に移動した。

2 入学者受入

2-1 概要

平成29年度入学者選抜は,本学アドミッション・ポリシーに基づく平成27年度一般入試における大学入試センター試験利用科目等改訂の内容を引き継ぐ形で実施されている。

平成27年度の入学者受入に関する活動は,大学教育開発センター・アドミッション部会を中心とした,大学入試センター試験利用科目等改訂後の入学者における入試成績と履修状況の相関分析結果の蓄積や高大接続のための大学授業開放企画の実施,ならびに平成32年度に予定される新テストに向けた情報の蓄積等が,学科においては入学前教育の内容改善が挙げられる。

2-2 選抜方法

(1) 平成29年度入学者選抜の概要

平成29年度入学者選抜における志願者数等は,付録1-Aのとおりである。

なお、平成 29 年度入学者選抜では、付録 2 に掲げるアドミッション・ポリシーを基準として、次のとおり試験を実施した。

(ア) 募集人員

(人)

学 部	学科・専攻	入学 定員	一般入試			推薦 入試	帰国生 入 試	私費外国人 留学生入試	
			前期日程	中期日程	後期日程				
保健福祉 学 部	看護学科	40	20	-	8	12	若干人	若干人	
	栄養学科	40	25	-	3	12	若干人	若干人	
	保健福 祉学科	社会福祉学専攻	40	24	-	4	12	若干人	若干人
		子ども学専攻	20	10	-	4	6	若干人	若干人
情報工 学 部	情報通信工学科	50	14	23	-	13	若干人	若干人	
	情報システム工学科	50	14	23	-	13	若干人	若干人	
	人間情報工学科	40	12	15	-	13	若干人	若干人	
デザイン 学 部	デザイン工学科	40	30	-	-	10	若干人	若干人	
	造形デザイン学科	50	38	-	-	12	若干人	若干人	
	計	370	187	61	19	103	-	-	

(イ) 選抜方法

① 一般入試

大学入試センター試験、個別学力検査等及び調査書の内容を総合して行う。

(大学入試センター試験の利用教科・科目)

学科・専攻	日 程	教 科	科 目				
看護学科	前期日程 後期日程	国語	国			必須	
		地理歴史	世 A, 世 B, 日 A, 日 B, 地 A, 地 B			から 1	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経				
		数学	数 I・A			必須	
		理科	物, 化, 生, 地			から 1 : ①	① 又は ②
			物基, 化基, 生基, 地基			から 2 : ②	
外国語	英(リスニング), 独, 仏, 中, 韓			から 1			
栄養学科	前期日程 後期日程	国語	国			必須	
		地理歴史	世 B, 日 B, 地 B			から 1	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経				
		数学	数 I・A			必須	
			数 II・B			必須	
		理科	物, 化, 生			から 2 : ①	① 又は ②
			物, 化, 生		から 1	から 3 : ②	
物基, 化基, 生基		から 2					
外国語	英(リスニング)			必須			
保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程 後期日程	国語	国			必須	
		地理歴史	世 B, 日 B, 地 B			から 1 又は 2 (理科の 「基礎を付した科目」 から 2)	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経				
		数学	数 I・A, 数 II・B, 簿記, 情報				
		理科	物, 化, 生, 地				
			物基, 化基, 生基, 地基		から 2		
外国語	英(リスニング), 独, 仏, 中, 韓			から 1			
情報通信工学科 情報システム工学 科 人間情報工学科	前期日程 中期日程	国語	国			必須	
		数学	数 I・A			必須	
			数 II・B, 簿記, 情報			から 1	
		理科	物			必須	
			化, 生, 地			から 1	
外国語	英(リスニング)			必須			

デザイン工学科	前期日程	国語	国(近代以降の文章)			から2又は3(理科の「基礎を付した科目」から2及び理科以外の教科の科目から1)
		地理歴史	世A, 世B, 日A, 日B, 地A, 地B	から1		
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経			
		数学	数Ⅰ・A			
			数Ⅱ・B			
		理科	物, 化, 生, 地	から1:①	① 又は ②	
物基, 化基, 生基, 地基	から2:②					
外国語	英(リスニング)			必須		
造形デザイン学科	前期日程	国語	国			必須
		地理歴史	世A, 世B, 日A, 日B, 地A, 地B			から1
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経			
		数学	数Ⅰ, 数Ⅰ・A, 簿記, 情報			
		理科	物, 化, 生, 地			
		外国語	英(リスニング)			必須

※ 国語→国, 世界史A→世A, 世界史B→世B, 日本史A→日A, 日本史B→日B, 地理A→地A, 地理B→地B, 現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経, 「倫理, 政治・経済」→倫・政経, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅰ・数学A→数Ⅰ・A, 数学Ⅱ・数学B→数Ⅱ・B, 簿記・会計→簿記, 情報関係基礎→情報, 物理→物, 化学→化, 生物→生, 地学→地, 物理基礎→物基, 化学基礎→化基, 生物基礎→生基, 地学基礎→地基, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓

(個別学力検査等の教科等)

学部・学科・専攻		日程	教科等
保健福祉学部	看護学科 保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程	小論文, 面接
		後期日程	
	栄養学科	前期日程	理科(化学基礎・化学, 生物基礎・生物から1)
		後期日程	個別学力検査等を課さない。
情報工学部		前期日程	数学(数学Ⅰ, 数学Ⅱ, 数学Ⅲ, 数学A, 数学B(数列, ベクトル))
		中期日程	
デザイン学部		前期日程	実技(鉛筆デッサン)

② 推薦入試

学部	教科等
保健福祉学部	書類審査, 小論文, 面接(栄養学科の面接では, 理科に関する試問も行う)
情報工学部	書類審査, 面接(数学, 英語及び理科に関する試問も行う)
デザイン学部	書類審査, 実技(鉛筆デッサン), 面接

③ 帰国生入試

学部	教科等
保健福祉学部	書類審査, 小論文, 面接(一般教科に関する試問も行う)
情報工学部	書類審査, 面接(一般教科に関する試問も行う)
デザイン学部	書類審査, 実技(鉛筆デッサン), 面接

- ④ 私費外国人留学生入試
書類審査及び実技検査等により実施する。

学部・学科		書類審査		実技検査等
		日本留学試験	TOEFL (iBT)	
保健福祉学部		日本語, 理科(2科目), 数学(コース1)		小論文 面接
情報工学部		日本語, 理科(2科目・物理必須) 数学(コース2)		面接
デザイン学部	デザイン 工学科	日本語, 理科(2科目), 数学(コース1)		実技 (鉛筆デッサン) 面接
	造形デザ イン学科	日本語, 総合科目, 数学(コース1)		

※ 保健福祉学部と情報工学部の面接では、一般教科に関する試問も行う。

(2) 入学者選抜の変更

学部の入学者選抜において課す教科・科目の変更等が入学者の受験準備に大きな影響を及ぼす場合は、2年半前にはその内容を予告することとしている。その他の変更についても、入学者保護の観点から可能な限り早期の予告に努めている。

ア 学部入試

保健福祉学部社会福祉学専攻における募集人員の変更（平成26年9月26日予告）

保健福祉学部社会福祉学専攻では、入学者の入試成績を踏まえ、平成29年度入学者選抜試験（一般入試）の募集人員を次のとおり変更することとした。

区分	前期日程	後期日程
平成27, 28年度	20人	8人
平成29年度	24人	4人

(3) 入試業務の改善

前年度の試験実施において整理した課題に対しては、学生募集要項や業務マニュアルの内容を充実する、面接室への受験者の誘導方法を点検するなどの対策を行った。

2-3 入学前教育

2-3-1 保健福祉学部

2-3-1-1 看護学科

看護学科では高校から大学における学習への移行を円滑に図るために、①大学生になる際に必要とされる基礎学力（英語）の充実と思考力の深化を図る、②専門基礎科目、専門科目への橋渡しをするという構成で入学前教育を実施した。

日程及び内容は以下のとおりである。

【第1回】

平成29年2月13日（月） 10時～12時 6405教室

担当教員：高橋幸子教授

タイトル：英語を使ったコミュニケーション能力

講義概要：言語力・コミュニケーション力とは何かを考え、世界の共通語としての英語を学習する意味を確認する。

実施評価：世界で使われている英語（World Englishes）の概念を説明し、岡山県立大学で目指している英語教育を紹介した。母語と第二言語の違いへの「気づき」を促し、入学後に始まる県大英語プログラムの紹介と導入を行った。

【第2回】

平成29年2月13日（月） 13時～15時 6405教室

担当教員：荻野哲也教授，高橋徹教授

タイトル：体表から見た人体の構造と機能

講義概要：体表から見た人体の構造と機能について解説し，実際に各人の身体で体表から触知できる骨格，筋肉，動脈などを確認する。

実施評価：人体骨格模型や配布資料を基に，実際に各人の身体で体表から触知できる骨格，筋肉，動脈を確認し，解剖学に対する関心を高めた。また，解剖生理の知識が臨床活動に密接に関連していることを解説した。

【第3回】

平成29年2月15日（水） 10時～12時 6405教室・6412教室

担当教員：山口三重子教授，佐々木新介准教授，佐藤美恵准教授，高林範子助教

タイトル：看護学への導入①

講義概要：自分自身の生活を振り返り，日常生活について考える。

実施評価：個人ワーク及びグループワークを通して，日常生活には食事・整容・移動・排泄・更衣・入浴・意思の伝達などの基本的な動作（ADL）があることを確認し，日々の日常生活への関心を高めた。

【第4回】

平成29年2月22日（水） 10時～12時 6405教室・6412教室

担当教員：山口三重子教授，佐々木新介准教授，佐藤美恵准教授，高林範子助教

タイトル：看護学への導入②

講義概要：日常生活援助の一部を体験する。

実施評価：日常生活援助の一つとして，車椅子での移送の演習を行った。使用前の車椅子の点検，患者への説明，体位変換，移乗，移送などを行い，ケアを必要とする人々の日常生活援助への関心を高めた。

2-3-1-2 栄養学科

栄養学科では栄養学を学習するために，高等学校で化学並びに生物学を習得しておくことが重要となるため，推薦入試においては，理科の基礎知識を尋ねる口頭試問を実施している。しかしながら，センター試験ならびに個別試験での理科の学力検査に対応するために，高校でこれらの科目を勉強している学生と比較すると，理科の知識が不足しているのが現状である。このような背景から，本学科では推薦入学者への事前教育として，化学と生物について，栄養学科に必要な基礎知識を補充する講義を実施している。

本年は推薦入学者12名に対して以下の実施要項に基づいて入学前指導を行った。

【第1回及び第2回】

平成29年3月16日（木）10時～11時30分（第1回）6117講義室

13時～14時30分（第2回）6117講義室

講義内容：化学（担当教員：伊東秀之 教授）

物質の成り立ち（第1回）及びその有機化合物の性質（第2回）について，「栄養科学シリーズ NEXT 基礎有機化学」（高橋吉孝・辻英明編）講談社サイエンティフィクを参考書として使用し，演習を交えて講義を行った。

【第3回及び第4回】

平成29年3月17日（金）10時～11時30分（第3回）6117講義室

13時～14時30分（第4回）6117講義室

講義内容：生物学（担当教員：田中晃一 准教授）

生命の基本単位（第3回）及びその生命現象のしくみ（第4回）について，「栄養科学シリーズ NEXT 基礎生物学」（岸本妙子・木戸康

博編) 講談社サイエンティフィックを参考書として使用し、演習を交えて講義を行った。

本年度も演習を取り入れることにより、講義のみの入学前教育と比べると学習効果が高めることができた。また、共通教育科目の「基礎有機化学」及び「基礎生物学」で使用する教科書を参考書として取り入れた講義を行うことにより、導入教育も兼ねて、入学後の栄養学の修得に必要な理科の基礎知識をより広範囲にカバーすることができた。今後は、より速やかな栄養学教育への導入を目指して、アンケートを実施する等、受講生からの意見も取り入れながら、教育内容と授業時間数についてさらに検討を行う。

2-3-1-3 保健福祉学科

保健福祉学科では、入学後の社会福祉学及び子ども学に関する専門知識習得のモチベーションを高め、また国際化に対応する英語教育を推進することを目的に入学前教育を実施した。具体的には英文和訳等の課題を課し、その内容に関して講義を行った。更に、福祉専門職や保育・幼児教育専門職に必要な情報収集、問題分析、コミュニケーション、伝達力を高めるためにグループ討議を実施した。日程及び内容は、以下のとおりである。

【第1回】平成29年2月18日(土) 13時～15時 8902教室

①オリエンテーション、自己紹介

②英文課題の提出

入学前教育では、英文の課題を4つ用意し、2回に分けて、英文の和訳、内容に基づく議論を行った。学生は自らの解答と模範解答との比較を行い、教員は学生による文章理解を確認した。なお、英文はすべて訳書が刊行されたものを使用している。

③大学教育の準備としてのミニ講義

社会福祉学専攻(竹本与志人准教授)、子ども学専攻(吉永早苗教授)

ミニ講義では、社会福祉学専攻と子ども学専攻の特色を踏まえて、担当教員がそれぞれ約30分間実施した。

④次回課題の説明

【第2回】平成29年3月9日(木) 13時～15時 8902教室

①英文課題の提出

②グループ討議

英文課題の内容と「健康生成モデル」について

③グループ討議の内容発表

④その他

2-3-2 情報工学部

情報工学部では、入学者の主な選抜は、推薦入試(11月下旬)、前期日程(2月下旬)、中期日程(3月上旬)の3回に分けて実施される。このうち、推薦入試による合格者は、12月上旬の合格発表から4月の入学までの期間、高等学校での学習内容を維持することにより、入学後の授業に無理なく移行することが可能となる。これをサポートするために、以下の3項目を主眼とし、3学科合同で入学前教育を実施している。

- ・ 高校卒業までの3ヶ月間の時間の使い方へ示唆を与える。
- ・ 大学入学までの心と体の健康維持と教養の深め方を示唆する。
- ・ 身の回りの現象を支配している物理や数学から理工系の勉強に興味を持たせる。

日程と内容は以下のとおりである。

【第1回】

日時：平成28年12月26日(月) 13:30～ 約2時間

場所： 情報工学部棟 2202 室

内容： まず，学部長による挨拶が行われ，合格者に英語と数学の課題を配付し，第 2 回目に提出することとした．その後，学科別(情報通信工学科は 2203 室，情報システム工学科は 2202 室，人間情報工学科は 2906 室)に分かれ，各学科長における講話及び数学の小テストを実施した．参加生徒数は，情報通信工学科 13 名，情報システム工学科 14 名，人間情報工学科 14 名であった．

【第 2 回】

日時： 平成 29 年 2 月 21 日 (火) 13:30～約 2 時間

場所： 情報工学部棟 2202 室

内容： まず，英語の課題に関する解説を行った．その後，学科別(情報通信工学科は 2203 室，情報システム工学科は 2202 室，人間情報工学科は 2906 室)に分かれ，第 1 回目に配布した課題を回収した．次いで，数学の課題に関する小テストを実施し，各学科の数名の教員で採点を行いながら個別指導を行った．さらに 4 月までの課題を配布した学科や，学科長の講話を実施した学科もあった．参加生徒数は，情報通信工学科 13 名，情報システム工学科 14 名，人間情報工学科 11 名であった．なお，人間情報工学科の欠席者 3 名については，平成 29 年 3 月 10 日 (金) に個別に実施した．

2-3-3 デザイン学部

2-3-3-1 デザイン工学科

開催日：平成 29 年 3 月 3 日 (金) 8:40～17:30 3311 室

参加者数：11 名

参加教員：小野 英志教授 (学科長)，益岡 了准教授，林 秀紀助教，中原 嘉之助手

(このほか，森下学部長が講評を参観した)

実施概要：ワークショップ形式による入学前オリエンテーション

実施目的：1) 90 分の模擬講義を通じて，大学教育へのスムーズな導入と意識転換を図る．

2) ワorkshop形式での制作体験を通じて，大学教育・デザイン学習へのスムーズな導入を図る．

3) 教員や在学生との交流を通じて，大学への親近感を向上させる．

実施詳細：

事前課題：資料「茶杓をつくる」講読及び事前準備・レポート提出．

8:40～10:20 オリエンテーションならびに基礎トレーニング．

10:30～11:50 茶杓制作．

12:40～17:30 茶杓制作ならびに薄茶体験，講評．

2-3-3-2 造形デザイン学科

造形デザイン学科では，推薦入試による入学予定者に対して，入学までの期間においてデザインの勉学に対するモチベーションと意欲を継続させる目的で以下のように入学前教育を実施した．

◆事前課題

(1)「身の周りの○を見つけよう！」

身の周りにある「まる」「まわる」に関するモノ・コトを見つけ出し，目標は100個として自分で画像撮影したデータをUSBに入れて当日提出．

(2)「デザイン学部卒業制作展レポート」

造形デザイン学科の展示から，気になった作品を 2 つ取り上げ，それぞれA4用紙に鉛筆スケッチと 400 字程度のコメントによるレポートを当日提出．

◆開催日：平成29年3月6日（月）9:30～16:30

参加教員：難波久美子教授，関崎哲准教授，南川茂樹准教授，山下万吉講師，作元朋子講師

参加学生：12名

授業概要：ワークショップ形式による入学前教育を実施した。

- ・プレゼンテーション力，コミュニケーション力を意識させる。
- ・デザインへの関心と勉学への意欲を高める。

スケジュール

9:30 事前課題提出

教員紹介/ 当日スケジュール確認

9:45 他者紹介トークセッションを経て，事前課題(2)「卒業制作展レポート」発表

11:00 事前課題(1)発表

休憩：11:30～12:30

12:30 ワorkshop「絵本の制作」

16:00 成果プレゼンテーション/ 講評

16:30 解散

2-4 留学・転学受入等

(1) 外国人留学生の受入状況

本学では，国際社会に開かれた大学として外国人留学生の受け入れを進めており，主としてアジア諸国を中心に留学生の受け入れを行うとともに，国際交流協定を締結している韓国又松（ウソン）大学校からは学部への転学生や短期の交換留学生の受け入れを行っている。

平成28年度は，韓国の又松（ウソン）大学校から1人の留学生（保健福祉学部転学生），インドネシアのハサヌディン大学校から1人の留学生（保健福祉学研究科に大学院生）を新たに受け入れ，学部と大学院で合わせて現在9人の留学生が在籍している。

[留学生の在籍状況]

単位：人

年度	人数	学部・院別	所属学部等別	国籍別人数
22	14 (2)	学部	保健福祉学部 2 (1) 情報工学部 1 デザイン学部 3 (1)	韓国 5 (1) 中国 1 (1)
		大学院 8	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 3	韓国 4 中国 3 カンボジア 1
23	7 (0)	大学院 7	保健福祉学研究科 5 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 5 中国 2
24	10 (0)	学部 4	保健福祉学部 2 情報工学部 2	韓国 4
		大学院 6	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 4 中国 1 ネパール 1
25	12 (2)	学部 6(2)	保健福祉学部 3(1) 情報工学部 2 デザイン学部 1(1)	韓国 4 中国 1(1) ベトナム 1(1)

		大学院 6	保健福祉学研究科 デザイン学研究科	5 1	韓国 中国 ネパール	3 2 1
26	10 (2)	学部 5(2)	保健福祉学部 情報工学部 デザイン学部	3(1) 1 1(1)	韓国 ベトナム	3 2(2)
		大学院 5	保健福祉学研究科 情報系工学研究科 デザイン学研究科	2 1 2	韓国 中国 ネパール	2 2 1
27	10 (2)	学部 6(2)	保健福祉学部 情報工学部	5(1) 1(1)	韓国 中国	4 2(2)
		大学院 4	保健福祉学研究科 情報系工学研究科 デザイン学研究科	1 1 2	韓国 中国	2 2
28	9 (3)	学部 4(2)	保健福祉学部	4(2)	韓国 中国	2 2(2)
		大学院 5(1)	保健福祉学研究科 情報系工学研究科 デザイン学研究科	3(1) 1 1	中国 インドネシア	4(1) 1

※ () 内は留学生のうち研究生の数

(2) 外国人留学生の受入体制の整備

留学生の受入れは、留学生にとっては、専門知識や技術の修得、本学学生にとっては留学生からの異文化の新鮮なインパクトや国際交流の機会が得られるなど、双方の学生に大変有意義なことであり、グローバル人材の育成を進めていく上でも重要である。

大学院では、留学生の受入れを積極的に進めるために、平成 29 年度入学者から適用することを想定して、試験日程、選抜方法、修了要件などの受入体制を検討した。また、平成 28 年度入学者の学生募集要項の英語版を、全ての研究科で作成し、日本語版と一緒に本学ホームページに掲載した。

2-5 高大連携と高大接続

本学と岡山県高等学校長協会との懇談会及び本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会を、次のとおり実施した。

また、平成 27 年度に続き、高校生向けにアレンジした本学の授業を提供することによって、高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ、大学で学ぶために必要な基礎学力の修得に取り組むきっかけとさせることを目的とした「高校生のための大学授業開放」を実施した。

(1) 本学と岡山県高等学校長協会との懇談会

日 時：平成 28 年 8 月 1 日 (月) 14:30～16:00

場 所：本部棟 2 階大会議室

出席者：高等学校側 13 人、本学 12 人

内 容：本学の概要 (ビデオ上映)、本学の改革、平成 29 年度入学者選抜、議題協議、意見交換等

(2) 本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会

日 時：平成 28 年 6 月 27 日 (月) 13:00～15:00

場 所：学部共通棟 (東) 講義室

出席者：高等学校側 51人, 本学 19人

内容：本学の概要（ビデオ上映）、本学の改革、平成29年度入学者選抜、高等学校等からの事前質問・要望に対する本学の解答と質疑応答、学科ごとの個別相談

(3) 高校生のための大学授業開放

日時：平成28年8月20日（土）10:00～16:00（保健福祉学部・情報工学部・デザイン学部）

場所：各学部棟他

出席者：387人

内容：各学部、学科毎に講義、演習、実験及び実技を交え高校生向けにアレンジした授業

高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入に関するデータは付録1-Eを、高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）に関するデータは付録1-Fを参照されたい。

2-6 まとめと課題

平成25年度に抜本的な改正が行われ、平成27年度に小改訂を施したディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて、平成28年度に受審した大学改革支援・学位授与機構による認証評価の訪問調査において、平成29年度4月にポリシーが義務化されるにあたり、国のガイドラインの観点から学士課程分の記述方式等の「一体性・整合性」に関する改訂の助言があった。これにともない平成28年度末までに従前の内容に基づいて改訂を施した（平成29年4月公表）。ただしアドミッション・ポリシーを含めて内容は従前のものであるため、入学者の受入方法等について大きな変化はない。

大学教育へのスムーズな移行を促すための取組としては、推薦入学予定者への入学前教育の内容の見直しや大学教育開発センター・アドミッション部会企画による高校生のための大学授業開放の継続実施など、高大接続に関する取組が行われた。高大接続に関しては、平成32年度に予定される全国的な入試改革の観点から、岡山県高等学校長協会との高大接続に関する合同作業部会を平成29年度に予定し、そのための準備を実施した。

学士課程の入試については、平成24年度～平成25年度から新しい高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）が適用されたことから、平成27年度入学者における、大学入試センター試験の利用教科・科目の一部変更に伴い、これに基づいた一般入試を実施し、本年度はその3年目にあたるため、平成26年度に告知した保健福祉学科社会福祉学専攻の入試日程別定員の修正内容を実施したに留まる。入学者受入方法の妥当性について、全学的には履修状況と入試成績との相関分析結果を蓄積し分析を試みたが、入学者におけるディプロマ・ポリシーへの適合性に関して、十分な結果が得られたとは言い難いところがあるため、平成29年度に開始する大学教育開発センターによる教学IR活動において、より詳細に入試区分及び日程別の入学者における履修状況と入試成績の比較分析を実施する予定である。

3 共通教育における学生の学習支援

3-1 概要

共通教育部では、本学の建学理念である「人間尊重と福祉の増進」を念頭においた教養教育科目群を編成するとともに、教育研究理念である「人間・社会・自然の関係性を重視した実学の創造による地域貢献人材の育成」を実現するための教育を行っている。

本学の共通教育は、(1) 基礎的な知識を体系的に理解する姿勢の形成、(2) 生涯にわたる知的活動あるいは社会生活において必要とされる論理的思考力・問題発見力・批判力・汎用的な技能の習得と形成、(3) 地域連携等を通じた社会人基礎力や課題解決力の習得、(4) 自己の人間の成長あるいは将来に継続する学習意欲の喚起を、専門分野にとらわれることなく涵養することを目指している。この目標を達成するために、共通教育部内に教養教育推進室、語学教育推進室、情報教育推進室、健康・スポーツ教育推進室、社会連携教育推進室の5つの推進室を設置し、次のような特徴的な科目群を設けている。

- (1) 建学理念「人間尊重と福祉の増進」を体現させるためのカテゴリーを含み、教育方針の一つである「豊かな教養と高い人間性」を身につけるための科目を配置した教養科目群
- (2) 単なる外国語教育のみではなく、修得した外国語コミュニケーション能力を実践するための海外研修など、グローバル化教育に関連する科目を配置した語学国際群
- (3) 社会における自己の役割を理解し、地域社会との協働意識を培うとともに、少子高齢化などの地域社会の課題に対応しうる知識や技能を養う社会連携群

「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために、大学教育開発センター内に共通教育部会が設置されている。共通教育科目に対するカリキュラム等の企画・立案などをこの部会が担当し、共通教育部ならびに各推進室で実施するように役割分担ができています。共通教育科目の実施にあたり、共通教育部を兼務する教員のみだけでなく、学部専任教員にも協力を仰いでいます。

共通教育における平成28年度における重要な成果は、以下に集約される。

- 平成29年度開始予定のクォーター制において、共通教育の学修成果向上を目指した時間割を作成した、
- 英語教育のさらなる充実をめざし、平成28年度から新カリキュラム English Language Program を開始した、
- TOEIC スコアの経年変化を測ることを目的として、平成28年度から入学時にも全員受検を課した、
- 新規科目である「おかやまを学ぶ」、「おかやまボランティア論」、「おかやまボランティア演習」を開講するとともに、平成29年度から開講する「地域再生実践論」、「地域協働演習」の準備を行った、

なお、各推進室における取り込みについては3-2節で述べる。

3-2 共通教育部

共通教育部では、部内に教養教育推進室、語学教育推進室、情報教育推進室、健康・スポーツ教育推進室、社会連携教育推進室の5つの推進室を設置して教育を実施している。とくに、本学の建学理念「人間尊重と福祉の増進」及び教育目的「人間・社会・自然の関係性」の理解を体現するために、

- (1) 基礎的な知識を体系的に理解する姿勢の形成、
- (2) 生涯にわたる知的活動あるいは社会生活において必要とされる論理的思考力・問題発見力・批判力・汎用的な技能の習得と形成、
- (3) 地域連携等を通じた社会人基礎力や課題解決力の習得、
- (4) 自己の人間の成長あるいは将来に継続する学習意欲の喚起を、専門分野にとらわれることのない涵養、

を4項目を柱として、知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を、所属学部に係わることなく全学生に実施している。また、これらを通して、

- 現代社会の複雑化する多様性を理解し、時代の変化に対応することができる豊かな教養を身に付けた「人間力」の育成

- 地域社会あるいは国際社会との連携等を通して、実社会における課題を自ら発見し解決する能力を持った「社会力」の涵養
- 異文化理解あるいはチームワーク活動に不可欠な実践的な「コミュニケーション力」及び科学技術の進展に支えられた「情報処理・活用力」の修得

を軸とした上で、文部科学省が提唱する「学士力」あるいは経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を見据えた教育を目指している。具体的には、次の指針に沿った共通教育科目を実施している。

- (1) 学長の掲げる基本方針（教養教育、国際交流、社会貢献）に合わせ、授業科目を教養教育、語学国際、社会連携に分類し、さらに、建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」に合致する6カテゴリーを設けている。
 - 高校教育から大学教育への円滑な移行を促す「修学基礎」
 - 教養教育としての「人文・社会科学」及び「自然科学」
 - 建学の理念に基づく「健康科学」
 - 国際交流に対する意識付けを涵養する「語学国際」
 - 地域社会との結びつきを育成し、社会の一員である自覚を喚起する「社会連携」

- (2) 各カテゴリーにおいて基礎知識の修得を図るための授業科目としてコア科目（導入科目）を設定するとともに、その多くを全学科で必修科目としている。これらの授業科目を通して、カテゴリー内に配置された他の発展的な授業科目（サブ科目）履修への動機付けを行い、所属学部には捕らわれない汎用的な知識や技能の涵養を目指している。

平成29年度入学生の共通教育科目の概要をまとめると、下の表のようになる。

平成29年度入学生（共通教育科目）

カテゴリー	授業科目数	全学的な必修科目
修学基礎	5	大学で学ぶ、フレッシュマンセミナー
人文・社会科学	17	人文・社会科学入門
自然科学	18	自然科学入門
健康科学	11	
語学国際	25	ELP 1・2・3・4・5・6
社会連携	9	おかやまボランティア論, おかやまを学ぶ
合計	85	

3-2-1 教養教育推進室

教養教育推進室は、前節で述べた6カテゴリーのうち「修学基礎」、「人文・社会科学」及び「自然科学」の教育を推進する組織である。10名のメンバーで構成され、その全員が共通教育部兼務教員である。「修学基礎」カテゴリーにおいては、専門教育を修得する上で重要な共通教育科目の履修指導を行うとともに、新入生対象のフレッシュマンセミナーにおいて、各学部・学科に求められる資質や基礎知識を身に付ける教育を行っている。また、「人文・社会科学」と「自然科学」カテゴリーにおいては、いずれも入門コア科目を導入して基礎知識の修得を図るとともに、サブ科目（発展的科目）において応用能力の修得を図ることで、大学生に求められる教養を身に付けた人材の育成を目指している。

入門コア科目である「人文・社会科学入門」及び「自然科学入門」は全学必修であり、1年次生前期に開講している。いずれの講義も3名の専任教員で構成するオムニバス形式を取っている。また、平成28年度の「人文・社会科学入門」では「哲学」、「社会科学」、「外国文学」の3分野を、「自然科学入門」では「物理学」、「生物学」、「化学」の3分野を5コマずつ講義し、学生の所属学部には依存することなく、各科学分野の基礎を学べるようにして

いる点に特長がある。

教養教育推進室の課題については、共通教育部会において議題として取り上げ、その解決を図っている。平成28年度は(1)クォーター制における時間割の作成、(2)共通教育科目におけるアクティブ・ラーニングの導入、(3)教養科目における新カリキュラム作成、を重点的に取り組んだ。とくに(3)の取組により、現行の「人文・社会科学」分野にはカリキュラムとして求められる体系性がないこと、入門科目があっても応用科目がないこと、「学・論」名称の科目とそれ以外の名称の科目とが理由なく混在していることなどの問題点があきらかとなった。この検討結果を基に、本学にふさわしい教養カリキュラム(案)を次頁に科目対応表の形式で示すように提案した。

表 平成30年度開講計画における新カリキュラム(案)

カテゴリー	科目名称(新)	授業の方法	科目名称(現)		
人文・社会科学 (1+14+8)	人文・社会科学要論	講義	人文・社会科学入門		
	人文科学 (7)	倫理学	講義	倫理学の基礎	
		哲学	講義		
		歴史学	講義	歴史学	
		宗教学	講義		
		心理学	講義	心理学入門	
		文学	講義	日本文学	
		芸術学	講義		
	社会科学 (7)	経済学	講義	現代社会と経済	
		経営学	講義	経営管理	
		人類学	講義	社会人類学	
		法学	講義	現代社会と法律	
		社会学	講義		
		政治学	講義		
		日本国憲法	講義	日本国憲法	
	複合PBL (8)	感性文化論A	講義	音楽の鑑賞	
		感性文化論B	講義	美術の歴史	
		感性文化論C	講義	メディア論	
		感性文化論D	講義	世界の地理と遺産	
		感性文化論E	講義	食糧を考える	
		共生社会論A	講義	子どもと家族	
		共生社会論B	講義	ジェンダー	
	社会現象論	講義	教育と社会		
	自然科学(1+11+6)	自然科学要論	講義	自然科学入門	
		自然科学 (11)	統計学A/B	講義	統計学の基礎A・B
			コンピュータ演習I・II	演習	コンピュータ演習I・II
			数学A	講義	数理と社会
			数学B	講義	基礎線形代数学
数学C			講義	基礎解析学	
物理学A			講義	基礎力学	
物理学B			講義	基礎電磁気学	
化学			講義	基礎有機化学	

	複 合 P B L (6)	生物学	講義	基礎生物学	
		現代科学論 A	講義	情報技術の進展	
		現代科学論 B	講義	みちかなバイオテクノロジー	
		現代科学論 C	講義	地球の科学	
		環境科学論 A	講義	生物と環境	
		環境科学論 B	講義	環境の科学	
		環境科学論 C	講義	エネルギーと環境	
健康科学 (1 + 6 + 3)	自 然 科 学 (6)	健康科学要論	講義	健康科学入門	
		健康スポーツ I	講義・ 実技	スポーツ I	
		健康スポーツ II	講義・ 実技	スポーツ II	
		脳と身体の科学	講義	脳と身体の科学	
		生命倫理学	講義	生命倫理	
		健康心理学	講義	健康と心理	
		スポーツ科学	講義	スポーツの科学	
		複 合 P B L (3)	応用健康科学論 A	講義	運動と健康
			応用健康科学論 B	講義	食と健康
			応用健康科学論 C	講義	住環境と健康

この新カリキュラムについて、平成 30 年度の開講計画にまで昇華させることが平成 29 年度の最優先課題である。

3-2-2 語学教育推進室

平成 28 年度からより高い教育効果を図るため、本学の英語教育を English Language Program (ELP) へと刷新した。本学における英語科目については、「適切で分かりやすい」英語運用能力の獲得を最優先とする」ことを目的とする。すなわち、英語母語話者だけではなく、非英語母語話者とのコミュニケーションを目的とした「国際共通語としての英語」を学ぶことに主眼を置くことにした。また、28 年度より、英語以外の言語にも注目し、韓国語学習の充実に着手した。英語以外の言語に関しては、29 年度以降、さらなる充実に予定している。平成 29 年度以降も、語学教育推進室では、語学学習に関する授業内外でのサポート体制を取っていく。

以下では、ELP 科目と平成 30 年度から実施される ESP 科目 (English for Specific Purposes)、語学教育推進室の役目と利用状況、e-ラーニング教材の利用状況、TOEIC L&R IP の実施状況、スピーカーズコーナー、映画鑑賞会、定期刊行物について述べる。

(1) ELP 科目

英語においては、国際社会で活躍できる次世代の人材を育成するために、クォーター制移行を前に、新しい英語カリキュラム English Language Program (ELP) へと前倒しで移行した。ELP1~4、及び中級英語 I & II (29 年度には ELP5 & 6 に名称変更) は必修科目であり、コミュニケーション能力の涵養を目指したものである。以下の表は、ELP 科目の名称、授業の概要、及び到達目標を示す。

表. 英語必修科目の内容

科目名称	授業の概要	到達目標
ELP 1	文法知識・語彙力の強化	文法知識・語彙力を基盤に、英語の文章を正確に理解できる能力を涵養する。
ELP 2	Listening の基礎となる音韻知識の導入 Essay Writing と Public Speaking の導入	音韻（正確な発音方法と音声変化）の知識を身につける。さらに、パラグラフの基本構造について学び、所与のテーマについて、論理的な一貫性のある 100～200 words の英文が書けるようになる。
ELP 3	文法知識・語彙力の強化 Reading Skills の強化	ELP 1・2 の成果をもとに、英語ネイティブの平均的な音読速度で文章を正確に理解できる能力を涵養する。
ELP 4	Listening の基礎となる音韻知識の強化 Essay Writing と Public Speaking の強化	引き続き音韻の知識を身につける。さらに、プレゼンテーション技術の基本を習得し、所与のテーマに従って論理的な一貫性のあるスクリプトを書き、それを基に短いプレゼンテーションができるようになる。
中級英語 I (ELP 5 に 名称変更)	コミュニケーション能力の獲得	社会・文化問題やアカデミックな内容に関する多読・多聴を通して、正確かつ critical な理解を目指す。
中級英語 II (ELP 6 に 名称変更)	コミュニケーション能力の獲得	社会・文化問題やアカデミックな内容に関する理解を元に発信できる包括的な能力を涵養する。

必修科目の ELP1, 3 は理解力の涵養に焦点を当て、国際的な基準 CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）が求める 5 つの技能のうち、reading と listening をあわせた技能複合型、ELP2, 4 は発信力の涵養に焦点を当て、writing と speaking（interaction & presentation）をあわせた技能複合型にすることで、履修者にも科目の性格が明確となるようにした。特に ELP2, 4 は本学の学生が苦手とする発話力を引き出し、学習効果の質が一定程度確保できるように、平成 27 年度に本学が開発した on-line の speaking 訓練ソフト「Open Voice」と発音力を伸ばすための市販教材「発音検定」を使用した。前期は、CALL 教室がひとつであったため、すべてのクラスにおいて、毎週の授業での e-ラーニング教材の導入や授業時間以外での自主学習ができなかったため、100%の実施率には至らなかった。しかしながら、後期には、CALL 教室が増え、二教室同時使用が可能となり、いずれの教材も、CALL 教室を使って授業内での徹底指導を行ったため、全学 1 年生の実施が可能となり、その実施記録は成績の根拠材料として使われた。また、平成 29 年度は、以下の科目が実施される。上級英語は 30 年度より ESP と名称変更される。

表. 英語選択科目の内容

科目名称	授業の概要	到達目標
ELP 7-10	コミュニケーション能力の涵養 異文化間交渉能力の獲得	複数の力を統合的に扱う言語活動を通して求められる英語力を身につける
上級英語 (ESP)	ELP から専門領域につなげるための科目	それぞれの専門領域に適したコミュニケーション能力の手法を学ぶ

(2) CALL 教室(8122 教室, 後期より 8120 教室)の利用

CALL 教室は、授業での利用だけでなく、授業での使用がない平常時ならびに夏季・春季の長期休暇中に開放し、学生に自主学習の機会を提供している。学生は、コンピュータにイ

ンストールされている「発音検定」の自主練習やインターネットを利用した学習サイト「Open Voice」にアクセスし、発話練習をすることができた。平成 28 年度は、語学教育推進室の常勤スタッフが希望者からの要望に応じて、TOEIC L&R IP の模試を 3 回行った。TOEIC L&R IP の模試の利用者は、延べ 45 名となった（4/21～2/17）

(3) 多読用書籍利用

語学教育推進室を利用する多くの学生の目的は、多読用書籍を利用することである。多読用書籍は、使用する主要な単語が制限され、全体の量や文法事項も調整され、英語学習者が辞書なしで楽しめるように工夫された多読用の英語教材のことを指している。これらの多読用書籍は、学生の関心を惹きつけるものを常備するように、計画的に数を増やし、常に学生の需要に応えるものとなっている。

語学教育推進室が所有する多読用書籍は、現時点では 2,000 冊を超えている。必修の英語科目を履修しているすべての学生が持つ学習ログ（ポートフォリオ）には、学生が読んだ多読本の記録を残していく工夫がなされているが、語学教育推進室の常勤スタッフは、学生からの多読本の選書の相談にも応じ、学生の英語における総合的な学びを支えている。以下に月ごとの多読用書籍の貸出状況表を示す。数字は、貸し出し冊数を表す。

表. 多読書籍の貸し出し状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期計
保健福祉	517	513	581	791	18	81	2501
情報工	278	266	223	455	26	36	1284
デザイン	88	125	102	151	3	3	472
計	883	904	906	1397	47	120	4257

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	後期計	合計
保健福祉	314	289	196	406	29	0	1234	3735
情報工	169	177	91	170	14	0	621	1905
デザイン	41	44	28	44	10	0	167	639
計	524	510	315	620	53	0	2022	6279

(4) 語学教育推進室のTA指導数

語学教育推進室では、ティーチング・アシスタント（以下、TA）を月曜日から木曜日まで週に 4 日間配置し、個人あるいはグループに対して、学習方法について助言を与えたり、スピーキングの機会を与えたりしている。28 年度は、e-ラーニング教材を授業中に円滑に使うために、大学院生の TA を配置した。これらの学習支援事業に関する利用者総数は、下表に示すとおりである。数値は、対応人数を示す。内訳は、英語サポート、個人指導（TOEIC）、授業補助となる。その中でも、授業補助が圧倒的な対応人数を占めた。前期は、スピーキング教材の不具合に対応するためであった。後期は、新しい CALL システム CaLabo が導入されたため、授業中での TA の補助が必要となった。

表. 語学教育推進室のTA指導数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期計
保健福祉	280	31	184	194	1	345	1035
情報工	316	154	278	254	30	334	1366
デザイン	203	9	105	105	27	138	587
計	799	194	567	553	58	817	2988

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	後期計	合計
保健福祉	257	0	148	2	0	0	407	1442
情報工	406	186	151	6	45	0	794	2160
デザイン	216	70	95	1	29	0	411	998
計	879	256	394	9	74	0	1612	4600

(5) e-ラーニング教材の利用状況

オンライン自主学習システム ALC NetAcademy2 の利用者数は以下のとおりである。スタンダードコースに関しては、学部別のアクセス数を示す。学年度始めと教室内での 2 回目の ALC スタンダードテスト 2 回目が行われる 9 月の利用が多くなっている。本教材の使用は、1 年生と 2 年生両方を対象としている。TOEIC2000 コースの使用は、2 年生対象の TOEIC L&R IP の直前の 9 月の使用が多かった。

表. 28 年度 ALC NetAcademy2 の利用

	スタンダードコース				TOEIC2000 コース				合計
	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	計	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	計	
4月	438	264	208	910	16	52	11	79	989
5月	0	18	7	25	0	37	0	37	62
6月	1	12	1	14	1	9	1	11	25
7月	152	191	117	460	2	6	0	8	468
8月	292	253	111	656	315	57	75	447	1103
9月	984	913	586	2483	1095	467	398	1960	4443
10月	8	15	8	31	89	166	37	292	323
11月	0	7	0	7	30	2	3	35	42
12月	0	3	0	3	0	1	0	1	4
1月	0	16	0	16	0	2	0	2	18
2月	97	58	25	180	1	1	1	3	183
3月	430	270	124	824	3	3	0	6	830

中級英語 I (2 年生必修科目) の履修者 407 名に対して、e-ラーニング教材 English Central を準備した。試用期間は、前期 (4 月 19 日から 7 月 25 日) であった。この e-ラーニング教材は、スマートフォンにも対応しており、短いフィルム (ムービー) を観て、その短いフィルムを基にした問題に答えていくものである。学習者に発話をさせる産出能力育成型教材である。以下の表は、全学 2 年生の学習履歴を表す。

表. 28 年度 English Central の利用

観点別評価	期間合計の平均	週別の平均
動画視聴数	21	1
単語学習数	75	4
発話動画数	17	1
獲得発話ポイント数	995	59
発話セリフ数	72	4
EnglishCentral での学習時間	17	1

(6) TOEIC L&R IP(※)任意テスト受験 (※平成 28 年 8 月から TOEIC IP から名称変更)

就職活動や進学上の必要性から TOEIC の受験を希望する学生がいるため、TOEIC L&R IP を

学内で3回実施した。本年度は、受験者側からの希望にあわせて、7月に第2回目を実施した。その実施状況は以下のとおりである。1回目と2回目の平均点、最高点、最低点は前年度より高くなった。

表. TOEIC L&R IP 任意受験者の概要

通算回数	実施年月日	受験者数(人)	最高(点)	最低(点)	平均(点)
34	平成28年5月19日	26	690 (625)	240 (305)	423 (492)
35	平成28年7月22日	14	520	215	378
36	平成29年2月15日	12	765(750)	360 (255)	512 (459)

(7) TOEIC L&R IP の全員受験の実施

1年次履修の「ELP1」履修者417名を対象として、平成28年4月30日(5月2日追試実施)にTOEIC L&R IPを実施した。受験者414名、受験者平均点は366.4点、最高得点は745点であり、500点以上取得者は全学部合わせて38名であった(990点満点)。「ELP1」の履修クラスごとの平均点等は次の表のとおりである。

2年次履修の「中級英語II」履修者394名を対象として、平成28年10月29日(11月1日追試実施)にTOEIC L&R IPを実施した。受験者386名、受験者平均点は356.1点、最高得点は660点であり、500点以上取得者は全学部合わせて28名であった(990点満点)。「中級英語II」の履修クラスごとの平均点等は次の表のとおりである。

表. 28年度入学「ELP1」履修クラス別の結果

学部	学科	受験者数	平均点	最高点	500点以上
保健福祉	看護	43	405	570	7
	栄養	39	414	675	7
	保健福祉*	65	A 374	550	4
B 369			615	3	
情報工	情報通信*	58	A 375	620	3
			B 415	690	4
	情報システム*	59	A 376	530	3
			B 350	640	3
	人間情報	58	A 323	505	1
			B 335	495	0
デザイン	デザイン工学	42	344	745	2
	造形デザイン*	50	A 296	455	0
			B 349	515	1
全学科		414	366.4	745	38

註：保健福祉学科、情報通信工学科、情報システム工学科、人間情報工学科、造形デザイン学科は2クラスに分けて実施。

表. 27年度入学「中級英語II」履修学科別の結果

学部	学科	受験者数	平均点	最高点	500点以上	
保健福祉	看護	40	398 (378)	570 (675)	4 (2)	
	栄養	43	410 (443)	545 (815)	10 (8)	
	保健福祉*	60	367	A(407)	615 (570)	4 (12)
B(362)						
情報工	情報通信*	63	349	A(404)	525 (775)	5 (10)
				B(393)		

	情報システム*	49	338	A(412) B(365)	660 (650)	2 (5)
	人間情報 (スポーツシステム)	38	332 (334)		505 (550)	2 (2)
デザイン	デザイン工学	44	339 (339)		485 (530)	0 (2)
	造形デザイン*	49	328	A(329) B(301)	570 (525)	1 (1)
全学科		386	356.1 (375.1)		660 (815)	28 (42)

註：平成 28 年度から保健福祉学科, 情報通信工学科, 情報システム工学科, 造形デザイン学科は各学科別実施。() 内の数値は平成 27 年度の結果。

平成 28 年度から開始する English Language Program の教育効果を定量的に測るため, 平成 28 年度入学生から入学時と 2 年生秋の 2 回, TOEIC の全員受験を課すこととしたが, 29 年度での目標値 (平均値 390 点, 500 点以上取得者 50 名) を達成することを目指している。

(8) スピーカーズコーナー

毎年大学祭第 1 日目 (本年度は 11 月 5 日に開催), 本学の学生が外国語 (日本人学生は英語や韓国語, 留学生は日本語) を用い, 自身の経験に基づくスピーチを披露している。このコーナーは, 本学の学生が一人 5 分の持ち時間で外国語によるスピーチを行う場であり, 本年度は本学の学生 14 名が参加した。「Studying English in Australia」「日本と韓国の世界遺産」など, 多岐にわたったテーマでスピーチが行われた。

(9) 定期発行物 Newsletter WeLL+

4 月と 10 月に, 第 9 号と第 10 号を発行した。語学教育推進室のスタッフと学生とのコラボで作る新聞で, 全学部 1・2 年生と教職員に配布された。語学学習の方法や語学研修の体験記事, 語学教育推進室主催の行事や資格検定試験実施の案内などを掲載した。この Newsletter は, 各学部の学部生と大学院生及び語学教育推進室のスタッフが教員や学生からの投稿記事を基に編集作業を行っている。

(10) 映画鑑賞会 (国際交流センターとの共催)

国際交流センターとの共催で, 語学教育を目的とする映画鑑賞会を行った (5/26, 6/30, 10/13, 11/17, 12/21)。5 本の映画の内, 4 本は英語, 1 本は韓国語のものだった。

3-2-3 情報教育推進室

情報社会の進展に伴い, 情報通信機器及びデータの活用があらゆる分野で求められている。そのような中, 情報技術に関する知識を学ぶことによって情報社会に適応できる能力を養うことを目的として情報教育推進室が開設された。構成メンバーは室長, 副室長の他, 室員であり, 情報工学部の教員が 4 名, デザイン学部の教員が 1 名である。昨年度のカリキュラムの改編に伴い, 「自然科学」のカテゴリーの中のサブカテゴリー「情報・統計」においては「統計学の基礎 A」が新たに開講されるなど, 「情報・統計」に関連する科目数が増加している。担当科目は次の通りである。

- ・「情報リテラシー基礎」
- ・「統計学の基礎 A」
- ・「統計学の基礎 B」
- ・「コンピュータ演習 I」

- ・「コンピュータ演習 II」
- ・「情報技術の進展」
- ・「ヒューマンコミュニケーション」

また、これらの科目の担当教員は本推進室の構成メンバー（ただし、室長を除く）の他、非常勤講師で構成されている。

本年度の中期計画において、本推進室は「情報リテラシー基礎」を発展的に廃止し、新たに「コンピュータ演習 II」を開設し、情報リテラシーに関する講義、演習を行うとしている。実際、この計画通りに変更した。「コンピュータ演習 II」については受講者が当初見込みより大幅に増加したため、担当教員を1名補充することで教育の充実を図った。「情報・統計」の開講科目は卒業判定に関係する科目が少ないなどの理由により科目数自体は少ないが、多くの学生が情報技術の習得を望んでおり、さらなる情報技術教育の向上を目指す必要があると考えられる。

（演習室の開放）

学生の情報活用能力の向上を図り、情報教育演習や自主学習利用の目的のため、情報基盤活用推進センターにより、インターネットに接続された PC を備えた情報処理演習室を年間164日開放した。各月の延べ利用者数及び開放日数は下表のとおりである。平成28年度の延べ人数は11,377名であり、前年度比約16%の利用者減であったが、学内無線LANの学生向け開放や一昨年から運用している岡山モバイルスポットなどの利用が相当数あり、全体としての情報ネットワーク利用者数は減っていないと思われる。但し、これら無線LANアクセスについてはスマートフォンやタブレットが中心と思われ、PCリテラシーの向上という観点から課題があると思われる。情報処理演習室の利用者数を学部別でみると、保健福祉学部（保健福祉学研究科を含む）が全体の約78%、情報工学部（情報系工学研究科を含む）が約3%、デザイン学部（デザイン学研究科を含む）が約19%であった。保健福祉学部が突出している原因は、情報工学部及びデザイン学部はそれぞれ学部教育用の計算機演習室を整備しているが、保健福祉学部にはそれらに相当する演習室がないためと考えられる。

（ア）延べ利用者数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H27	1,835	1,368	1,713	2,550	2,264	1,126	1,145	1,144	468	13,613
H28	1,675	1,137	1,183	1,708	2,045	1,185	1,170	894	380	11,377

（イ）開放日数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H27	14	14	22	27	26	17	15	15	8	158
H28	15	19	22	26	25	19	15	15	8	164

3-2-4 健康・スポーツ教育推進室

健康・スポーツ教育推進室は、建学の理念の基礎となる健全な社会生活を送る上で必要な健康に関する教育を推進する目的で開設された。その他にも、学生の課外活動に使用する施設、機器等の維持管理、全学における学生及び教職員の健康の維持・推進のための施設利用に関する事項、全学のスポーツ施設の地域社会への提供に関する事項、地域における健康・スポーツ教育活動に関する事項など所掌事項は多岐にわたる。

構成メンバーは5名で、そのうち3名は共通教育部兼務教員、2名は健康科学カテゴリー科目を担当する学部教員である。平成27年度のカリキュラム改変に伴い、健康科学カテゴリー科目は、こころと身体、環境に関する講義、実技などで構成されている。今年度は、コア科目として「健康科学入門」を開講し、「生命倫理」「心理学入門」「スポーツ I」「スポーツ II」「脳と身体の科学」「食と健康」「健康と心理」「スポーツの科学」「運動と健康」「住環境と健康」の11科目を開講した。講義科目はいずれも准教授以上の専任教員が主担当となって

いる。実技科目については、より多くの学生の特性に対応可能な種目を取り入れること、他学科の授業が同一時間帯に開講されることなどから非常勤講師も含め開講している。実技科目では、前期に全履修生を対象に文部科学省の新体力テストを実施し、その後 8 種目の中から受講生に応じた種目を適宜選択し、7 月期にはプールを活用したアクアスポーツを実施した。後期には 8 種目の中から、前期の受講種目とも関連させ、発展的な内容を取り入れたり、新規の種目を選択したりするなどして実施した。

また、スポーツ I 及び II において活用している TA に協力してもらい、体育・スポーツ施設の点検、整備を行った。今年度は、体育館トレーニング場の有酸素運動機器を一部更新し、トレーニング場を活用した授業内容を安全かつ効率よく展開する基盤整備を行った。

3-2-5 社会連携教育推進室

共通教育におけるカテゴリー「社会連携」科目群には、「おかやまボランティア論」「おかやまを学ぶ」「地方自治論」「おかやまボランティア演習」「地域再生実践論」「地域協働演習」「地域インターンシップ」「企業と組織の活動」「起業の条件」がある。これらは全て副専攻・岡山創生学科目群でもある。このうち、「地域再生実践論」「地域協働演習」「地域インターンシップ」については次年度以降に開講が予定されている。

しかしながら、これら科目の企画、研究、評価等については、COC+教育改革ワーキンググループをはじめ、COC+事業関連組織において行われているのが現状である。そのため、本推進室の機能は全て、COC+事業関連組織、特に COC+教育改革ワーキンググループが担っている現状があり、今後、組織の統廃合、あるいは、組織再編等を行うことが求められる。

よって、本稿の内容は 4-3 及び 4-4 に譲る。

3-3 留学生・転学生

本学では、日本の生活に不慣れな留学生（韓国又松（ウソン）大学校からの転学生、短期留学生を含む）が、いち早く日本の生活・文化に慣れ、学習・研究活動に励むことができるようにするため、本学学生の中から学業や生活の相談相手を選定し、留学生のサポートを行うチューター制度を設けるなど学業・生活面の両面において支援を行っている。平成 28 年度は、留学生に対して、各学科における学習支援のほか、授業料減免制度や奨学金募集等の情報提供及び活用の支援などを行った。

なお、平成 28 年度の留学生数は、学部生 4 人、大学院生 5 人の計 9 人で、1 人の留学生に対しチューターを配置した。最近 5 年間における留学生数及びチューターを利用した留学生数は次のとおりである。

年 度	H24	H25	H26	H27	H28	合計
留学生数（学部生）	4	6	5	6	4	25
留学生数（大学院生）	6	6	5	4	5	26
合 計	10	12	10	10	9	51
（うちチューター利用）	(4)	(2)	(2)	(3)	(1)	(12)

3-4 大学コンソーシアム岡山

県内の 17 大学が参加する大学コンソーシアム岡山では、平成 21 年度に文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」事業の選定を受けた「岡山オルガノンの構築」（代表校：岡山理科大学）の 3 年間にわたる事業に対し、平成 23 年度に補助金交付が終了したことを受けて、その事業を平成 24 年度から継承してきた。平成 27 年度に設置

された将来構想委員会において事業運営を検討し、平成 28 年度はその方針に従って運営されている。

はじめに、平成 28 年度に実施された事業（単位互換、インターンシップ、吉備創生カレッジ、日ようび子ども大学、エコナイト、SD 研修会）に対する本学の参加状況を説明し、その後、平成 29 年度以降に対する対応を述べる。

〔本学の参加状況〕

(1) 単位互換

(他大学→本学)

年 度		H23	H24	H25	H26	H27	H28	合計
対面	履修学生数	0	1	0	1	1	1	4
	履修科目数	0	1	0	1	2	2	6
	本学提供科目数	6	6	10	10	8	4	44
双方向 ライブ	履修学生数	3	2	2	3	1	0	11
	履修科目数	1	1	1	1	1	0	5
	本学提供科目数	1	1	1	1	1	0	5
VOD	履修学生数	7	3	4	0	7		21
	履修科目数	1	1	1	0	1		4
	本学提供科目数	1	1	1	1	1		5
合計	履修学生数	10	6	6	4	9	1	36
	履修科目数	2	3	2	2	4	2	15
	本学提供科目数	8	8	12	12	10	4	54

(本学→他大学)

年 度		H23	H24	H25	H26	H27	H28	合計
対面	履修学生数	1	3	3	2	3	2	14
	履修科目数	2	8	3	2	2	3	20
双方向 ライブ	履修学生数	0	1	0	1	0	0	2
	履修科目数	0	1	0	1	0	0	2
VOD	履修学生数	4	3	1	1	1		10
	履修科目数	3	1	1	1	2		8
合計	履修学生数	5	6(※)	4	4	4	2	25
	履修科目数	5	10	4	4	4	3	30

(※) 双方向ライブと VOD を履修した同一学生の数を除く

(2) インターンシップ参加 (NPO 法人 WIL)

年 度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	合計
参加学生数	25	18	51	38	16	14	162

(3) 吉備創生カレッジ

No.	年度	開講期	科 目 名	講 師
1	H22	前期	俳句を楽しむ	柴田奈美 (デザイン学部教授)
2			くらしと微生物	中島伸佳 (保健福祉学部准教授)
3		後期	懐かしの洋食器世界	久保田厚子 (デザイン学部教授)
4			赤毛のアンの姉妹たち	桂宥子 (情報工学部教授) 星野裕子 (保健福祉学部教授) 杉村寛子 (保健福祉学部准教授)
5	H23	前期	景観デザインを考える	熊澤貴之 (デザイン学部講師)
6		後期	英米文学カフェ	杉村寛子 (保健福祉学部准教授)
7	H24	前期	地産地消と食文化	岸本妙子 (保健福祉学部教授)

8		後期	再生エネルギー発電	徳永義孝 (情報工学部准教授)
9	H25	前期	近代期の禁酒運動	二宮一枝 (保健福祉学部教授)
10			日本のデザイン文化	吉原直彦 (デザイン学部教授)
11			高齢者の健康維持と運動	犬飼義秀 (情報工学部教授)
12			後期	人とロボットの眼の不思議
13			いま, 子どもの育ちを考える	池田隆英 (保健福祉学部准教授)
14			続・日本のデザイン文化	吉原直彦 (デザイン学部教授)
15	H26	前期	広がるワイヤレスの世界	大久保賢祐 (情報工学部教授)
16			日本人の糖尿病	福島光夫 (保健福祉学部教授)
17		後期	韓国の身近な文化を知ろう	朴貞淑 (デザイン学部講師)
18	「嵐が丘」入門		杉村寛子 (保健福祉学部教授)	
19	情報とデザイン		尾崎洋 (デザイン学部講師)	
20	考えるコンピュータの考え方		但馬康宏 (情報工学部准教授)	
21	H27	前期	脳から解る認知症	澤田陽一 (保健福祉学部助教)
22			人間のダイナミクス	迫明仁 (情報工学部教授) 齋藤誠二 (情報工学部准教授) 大山剛史 (情報工学部助教)
23			メソアメリカデザイン	真世土マウ (デザイン学部准教授)
24		後期	生活習慣病予防のための食事	平松智子 (保健福祉学部准教授)
25	インターネットの仕組み		國島丈生 (情報工学部准教授)	
26	映画の表現技法		山下万吉 (デザイン学部講師)	
27	H28	前期	小石川療養所の建築	福濱嘉宏 (デザイン学部教授)
28			思春期の性に関する子育て	岡崎愉加 (保健福祉学部准教授)
29			再生可能エネルギー発電	徳永義孝 (情報工学部准教授)
30		後期	高齢社会と地域一日韓比較一	井上祐介 (保健福祉学部助教)
31	日本の工業デザイン史		益岡了 (デザイン学部准教授)	
32	人とロボットの類似点相違点		井上貴浩 (情報工学部准教授)	

(4) 日ようび子ども大学

岡山県生涯学習センターと協力し、「日ようび子ども大学in京山祭」を平成23年より開催している。県内の17大学, 5短期大学, 1高専の大学生が集まって子どもが体験できるブースを設置するなど, 親子で楽しんでいただく催しを開催している。平成28年度の実施状況及び本学の展示内容は次の通りである。

- ・開催日時：平成28年6月5日(日) 10:00~15:00
- ・会場：岡山県生涯学習センター
- ・参加者：2,579名(対象：一般, 学生, 大学教職員)
[内訳：大人992名, 子ども1,317名, 学生213名, 大学教職員57名]
- ・展示内容：「まっくらわーるどを探検しよう」

非日常的な空間で, 興味を持たせながら視覚の大切さや視覚以外の感覚の持つ能力に気づかせることを目的としている。光を遮断した空間を作り, 視覚がほとんど使えない状況で手足の触覚や聴覚を活用した日常生活動作の疑似体験を行った。参加者は受付で提示された数種類の「コップ」「キャラクター人形」「多角形や数字がレリーフ表示されたカード」「布製積み木」「果物野菜おもちゃ」の写真から好きなもの一つを選び, 暗い部屋から該当するものを持ち帰るという課題に, ひとりもしくは家族と一緒に取り組んだ。参加者は入り口から, ブラックライトで浮かび上がる壁の蛍光飾りを横に見ながら, 点字ブロックをたどり目的の場所へ移動し, 暗闇

の中,手探りで目当てのものを見つけて外にでる.実物と写真を照合した後,受付で写真とターゲットを返却し,参加賞として用意した触図カードを受け取った.参加者は一連の課題を通して,視覚から得られた情報と視覚を代行する手足の触覚から得られる質的に異なる情報を相互に確認するという普段あまり行わない作業に取り組み,視覚が十分に使えない状況下における対処法を体験した.

・担 当 者： 中村孝文教授（保健福祉学部）ほか教員 2 名及び学生 20 名

年度	開催日	会 場	参加大学数	参加者数
H23	6 月 26 日	岡山商科大学	8 大学	508 名
H24	6 月 24 日	岡山県生涯学習センター	11 大学	1,188 名
H25	6 月 2 日	岡山県生涯学習センター	13 大学・短大	1,500 名
H26	6 月 1 日	岡山県生涯学習センター	14 大学・短大	1,854 名
H27	6 月 7 日	岡山県生涯学習センター	16 大学・短大	2,428 名
H28	6 月 5 日	岡山県生涯学習センター	16 大学・短大	2,579 名

(5) エコナイト

県内の 17 大学, 5 短期大学, 1 高専が連携し, 地域貢献活動の一環として, 環境問題への啓発を目的として平成 23 年度より実施している. 具体的には, 岡山県, 岡山市等行政機関や企業と連携して, 学生間の交流活動推進と地域との連携強化を図りつつ, 学内消灯や自動車通勤の自粛, エコキャンドルの点灯, 一斉ライトダウンの呼びかけ, その他, 参加大学毎に独自のエコに関する環境教育の実践的活動を実施している. 平成 28 年度は, 統一活動として「岡山の大学からエコの輪を広げよう!」を合言葉に, エコロジーを考える活動を, 加盟校の 9 大学, 1 短期大学が岡山奉還町商店街で実施し, 本学からも学生が参加した. また, 本学独自の平成 28 年度の実施状況は次の通りである.

- ・テ ー マ： 七夕フェスティバル 2016
- ・開 催 日： 平成 28 年 7 月 7 日（木）
- ・会 場： 学生会館周辺
- ・参 加 者： 約 300 名
- ・開 催 内 容： 希望する学生による浴衣や甚平での授業出席. 昼の部では浴衣, 甚平で来た学生に無料でかき氷を提供し, くじ付きうちわの配布を行った. 夜の部では学友会が食べ物や飲み物の模擬店を出し, 部・サークルがライブを行った. エコを意識する企画としてエコアンケートに答えてもらい, お礼としてエコキャンドルを進呈した.
- ・成果と課題： 今年初めて行ったエコアンケートだが, 多くの人が回答してくれてエコについて少しでも考えてもらえたと思う. 今後もエコイベントとしての面での多彩な企画を考えていきたい.

年度	開催日	会 場	参加大学数	参加者数
H23	7 月 7 日	各大学及び NHK ひかりの広場	16 大学	約 1,500 名
H24	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 3,000 名
H25	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 4,600 名
H26	7 月 6 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学/4 短大/1 高専	約 3,300 名
H27	7 月 5 日他	各大学及び岡山市奉還町商店街	16 大学/3 短大	約 2,900 名
H28	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	17 大学/5 短大/1 高専	約 2,900 名

(6) SD 研修会

平成 28 年 4 月の障害者差別解消法施行を念頭に, 障がい学生の就労及び就労に向けた修

学上の支援について理解を深めることを目的とする研修会が開催されている。平成 28 年度の実施状況は次の通りである。

- ・開催日時：平成 28 年 8 月 23 日（火） 13:00～16:00
- ・会場：岡山大学津島キャンパス
- ・研修内容：基調講演 1 「発達障がい学生への合理的配慮」
講師 望月直人氏
(大阪大学キャンパスライフ支援センター 副センター長)

基調講演 2 「身体障がい学生への合理的配慮」
講師 土橋恵美子氏
(同志社大学学生支援センター障がい学生支援チーフコーディネーター)

年度	開催日	内 容	会 場
H22	8 月 24 日	大学職員のための実践メンタルヘルス講座	山陽新聞社（本社ビル）
H23	8 月 29 日	クレイマー対策	岡山大学（津島キャンパス）
H24	8 月 31 日	大学における運動部活動	山陽新聞社（本社ビル）
H25	8 月 26 日	障がい学生支援研修会	岡山大学（津島キャンパス）
H26	8 月 28 日	障がい学生支援研修会	岡山大学（津島キャンパス）
H27	9 月 28 日	障がい学生支援研修会	岡山大学（津島キャンパス）
H28	8 月 23 日	障がい学生支援研修会	岡山大学（津島キャンパス）

〔平成 29 年度以降〕

本学としては、大学コンソーシアム岡山の事業を平成 27 年度に採択された「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC プラス)」のために活用することを視野に入れ、これまで以上の貢献をすべきと考える。

3-5 まとめと課題

本学の共通教育科目の特徴は

- (1) 文部科学省あるいは経済産業省が提唱する「学士力」あるいは「社会基礎力」を見据えた上で、建学の理念及び大学の教育方針に基づくカテゴリーの再編
- (2) 各カテゴリーにおいて、本学卒業生として全学生が身に付けておくべき教養を育成し、あるいは技能を習得させるコア科目（導入科目）の設定

に集約される。

しかしながら、3-2-1 で述べたように、現在の教養教育カリキュラムは必ずしも本学の教育研究理念にふさわしいものとなっていない。そのため、平成 28 年度に共通教育部会で「新カリキュラム案」を作成しており、これを開講計画まで昇華させることが最優先課題である。また、平成 29 年度からクォーター制を実施するが、これまでのセメスター制と比較しつつ共通教育科目における成績分布の検証を継続し、必要に応じて教育内容の改善を図る。さらに、学修効果の向上のため、アクティブ・ラーニングを積極的に導入する必要がある。

英語教育においては、平成 28 年度導入した新カリキュラム English Language Program を継続する。とくに、経年変化を測る目的で導入した TOEIC をいかに有効活用するかが課題である。また、語学文化研修については、新規に導入する保健福祉学スタディツアーと合わせ、学生への周知方法や実施方法、評価方法などを継続して検討する。

社会連携科目については、「おかやまを学ぶ」、「おかやまボランティア論」、「おかやまボランティア演習」を開講したが、授業アンケート等を元に、点検と評価、改善を進める。また、平成 29 年度から開講する「地域再生実践論」と「地域協働演習」については、関連部署

との協働により、内容を早期に確定させる必要がある。大学コンソーシアム岡山の事業をCOC+のために活用することも視野に入れる。

4 専門教育における学生の学習支援

4-1 概要

本学の学士課程教育では、各学部・学科の何れも、実学を標榜する本学の教育理念及び学部・学科の教育目的に沿って策定されたカリキュラム・ポリシー（付録 2 参照）に基づいた学部教育が展開されている。保健福祉学部では、各学科で設定する国家資格取得のためのカリキュラムと併せてグローバル化や地域連携教育を加味した教育プログラムや授業方法を工夫している。

平成 25 年度に社会福祉学専攻（定員 40 名）と子ども学専攻（定員 20 名）の 2 専攻体制となった保健福祉学科では、各専攻の完成年次を迎えた。情報工学部では、多数の学生が博士前期課程進学をめざすこともあり、情報工学の基礎を修得させるほか、学士として社会進出する学生における実学教育も工夫している。なお、平成 27 年度入学生よりスポーツシステム工学科が人間情報工学科に名称変更され、授業内容の工夫改善に取り組んでいる。デザイン学部では、平成 25 年度入学生から 2 学科 4 領域制に移行しており、完成年次を迎えた。また文部科学省 GP 事業を継承し、産学連携教育等により企画提案力とマネジメント力を併せ持つ学生を育成するための教育を継続的に工夫している。

以上の実学教育により、各専門分野の知識とスキルを授けるべく工夫改善を継続しているが、もう 1 つの共通する特色は、少人数教育によるきめ細かな学習支援にある。

4-2 保健福祉学部

4-2-1 看護学科

4-2-1-1 改正カリキュラム

看護学科では改正カリキュラムの評価を行うため、看護学科全教員による学生の看護実践能力向上に向けたシステムづくりの準備として、経年的に卒業時看護技術到達度調査を行い、その結果を教員にフィードバックして教育改善に努めている。フレッシュマンセミナーについては専門性の理解を深めるためにモデル・コア・カリ及びキャリアパスを提示し、学生の関心に基づくグループワークを行い、最終レポートはルーブリックによって評価した。さらに、倫理的看護実践能力を培うために、改正カリキュラムにおいて新規科目として増設した看護倫理学及び看護アセスメント学の教育評価を行い、教員間で評価を共有し、次のカリキュラム改正への示唆を得た。また、ヒューマンケア行動及び社会人基礎力に関する測定ツールを用いて、各学年の成長を評価し、カリキュラムの改善に役立てた。

4-2-1-2 グローバル教育

グローバル人材育成に向けて、1 年次生の「国際保健看護論（2 月）」で香港理工大学老年看護学及び母性看護学の教員 2 名による講義を行い、英語によるスライドの事前学習を含め、国際的視点の共有を図った。また、香港理工大学での短期留学（9 月）に 3 年生 2 名及び大学院生 1 名が参加し、香港での医療及び文化的進展を深めた。平成 29 年 2 月にはトリブバン大学（ネパール）医学部教員 2 名による講義を学部生の有志が受講し、ネパールの医療の理解を深めた。

4-2-1-3 地域連携教育

COC+コミュニティパートナー育成事業により、有志がNPO笠岡しまづくり海社、笠岡市の協力のもと、岡山大学・ノートルダム清心女子大学・本学3学部（人間情報工学科・デザイン学科・看護学専攻）有志と共に、島の運動会や白石島宿泊研修を行い、栄養学・医学等、看護以外の専門領域をめざす学生と住民の方々と交流しながら、多角的な観点から看護の役割を考えることができた。この成果の一部は、学部3年生が院生1年生と共同で「離島における地域包括ケアシステムを考える～白石島に焦点を当てて～」と題して全国公立大学学生大会（LINK topos）でポスター発表し、全国の公立大学生・教員と意見交換し見聞を広げるにより、学生として地域貢献することの意義を理解し意欲が高まった。統合実習では、備中県民局『わが町で保健医療福祉の「人づくり、地域づくり応援隊」事業』を受託したNPOの人材育成コースに院生有志が参加し、統合実習のTAとして学部生と共に北木島の保健医療・看護の現状と課題について検討することができ効果的であった。統合実習全体報告会では4年生が主体的に運営した。3年生も演習成果をふまえて質問し、備中保健所・笠岡市・NPO関係者の講評により、島での宿泊体験を通して考えた看護の役割を深めて共有することができた。



LINK topos 平成28年10月8日～平成28年10月10日 北九州市立大学

4-2-1-4 アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは、看護学教育のあり方に関する検討会報告書（2002）において「看護実践能力ばかりではなく、専門知識に基づいた問題解決能力の育成」とされており、その中でも Problem Based Learning は問題解決を主目的として学習者主体で実践されるグループ学習や、具体的な学習課題をたてて、一人ないしチームでプロジェクトを遂行しながら行う学習である。



看護学科では、1年生の「基礎看護学」から技術演習を通して、アクティブ・ラーニングを取り入れている。特に3年次においては、「成人看護学Ⅱ」において、成人期にある対象の特性をふまえ、クリティカルな状態、周手術期における援助や治療・処置に応じた看護について、また急性期・周手術期の看護場面で必要とされる援助技術についても演習を通して学ぶことを目的にPBLを取り入れ、学生の学習意欲向上に効果が見られたことが実施後の調査より分かった。学生は、グループ学習・練習の後に他の学生に教えることによって、学習内容に関心や学びが深くなり、それらを活かして積極的に学習に取り組み、授業に参加した教員からの評価も良かった。

4-2-1-5 国家試験対策

国家試験対策として、業者による e-ラーニングシステムを導入し、学生の自己学習を支援した。また学生の自主的な運営による国家試験模試に対して、運営の支援を行うとともに、

学生からの要望の多い病態学に関する講義を行った。模試結果は教員も共有し個別指導等に活用した。

4-2-2 栄養学科

4-2-2-1 グローバル教育

隔年開講されている韓国食文化について、栄養学科2年生2名、1年生9名が履修し、韓国大田市の又松（ウソン）大学校に4日間滞在した。滞在中は、調理実習を主体とした食文化体験が行われた。又松（ウソン）大学校での調理実習担当教員は英語で指導を行い、レシピも英語であったため、語学学習も兼ねる内容となった。実習は韓国の伝統的な料理に加えて、他国の家庭料理についても行われ、様々な国の食文化を学ぶ機会となった。

平成28年度の南オーストラリア州アデレードでの保健福祉スタディーツアーの参加学生は15名（内栄養学科4名）であった。研修プログラムは、TAFE SAでの語学研修と専門研修、及び関連施設の高齢者福祉施設での研修、専門領域に関連のある市内マーケット等の視察や、教育機関（小学校・高等学校）での授業実践を含む交流活動を実施した。また、アデレード滞在中ホームステイを体験することにより、語学修得と異文化交流・異文化理解の機会とした。また次年度から香港大学や又松（ウソン）大学校で行われている他のツアーと統合し共通教育科目としての新規科目「保健福祉学スタディーツアー」開設にむけて教育目標や内容の検討も合わせて行われた。本プログラムによって、外国語の習得や専門分野に関連した施設見学、研修体験を通じて異文化への理解や多文化共存の重要性について学ぶとともに、修了後の専門職教育における学びのモチベーション向上につながる機会となった。

平成28年1月にドイツのベルリン自由大学薬学部から Herbert Kolodziej 教授を招聘し、” Resveratrol: Antileishmanial Activity, Cytotoxicity and Apoptotic Effects on A549 Cells” というタイトルで、英語による特別講演を行った。教員9名、博士後期課程学生4名、博士前期課程学生13名、学部学生7名が聴講し、講演後は意見交換の場を設け、外国語の習得、講演内容についての議論や研究交流を深めた。

4-2-2-2 地域連携教育

NPO 法人、農業後継者等他団体との協働事業において食育講座を企画運営することを通じて、行政栄養士及び栄養教諭の地域における食育コーディネーターとしての資質向上を目指し、栄養教諭課程履修者（4年次生と1年次生）を中心とした総社市における食農体験教室での食育講座を例年実施している。本年度は行政栄養士希望の4年生と栄養教諭課程履修者が協働で実施し、専門職として職域連携の視点の形成にも努めた。

平成26年度から栄養学科では、備前市で食の人財プロジェクト事業をきっかけに、備前市の食育活動に継続的にかかわっており、平成28年度は備前市食育推進会議に参加し、住民とグループワークにより地域の健康課題の明確化に取り組むとともに、解決に向けての生活習慣病予防の講話と地産地消の料理教室を企画運営した。

4-2-2-3 学生支援

栄養学科では、全1～3年次生を対象として、4月及び10月に年2回以上のアドバイザー教員との面談を行い、1～2年次生は6月の研修旅行時にもアドバイザーミーティングを行う等、オフィスアワー以外でも教員と学生とのコミュニケーションの機会を持った。また、授業習熟度の低い学生に対しては、学科長・教務担当教員・アドバイザー教員の3人体制で個人指導を行った。その成果として、平成28年度は退学者、休学者ともにいなかったことが挙げられる。

栄養教諭養成課程履修生については、履修カルテを作成し、各自の履修状況の把握とキャリア支援に役立っている。

4-2-2-4 国家試験対策

平成27年度管理栄養士国家試験の新卒合格者が100%であったのを受け、本年度も引き続き国家試験対策として、4年次生全員参加の校内・業者模試を4月初めから開始し、計6回実施した。これとは別に希望者のみ、さらに4回の業者模試の受験もできるようにした。また、全員参加の校内・業者模試の都度、受験生の自主学習の成果を分かりやすくするために模試成績の推移を本人に示し、全ゼミ教員にも知らせて個別指導を行った。また成績のクラス順位を貼り出す等、学生の学習意欲を高揚させ、早期から試験対策に取り組ませることができた。9月、1月、及び2月の校内・業者模試の成績が一定基準に達しない学生を対象に、勉強会方式による学習支援も行った。さらに10月には勉強会参加者を対象に国試対策担当教員による個人面談を行い、学習支援を深めた。

4-2-3 保健福祉学科

4-2-3-1 改正カリキュラム

保健福祉学科では、平成25年度より社会福祉学専攻（定員40名）と子ども学専攻（定員20名）の2専攻体制となり、4年目として改正されたカリキュラムを予定通り実施した。

学科全体としては、保健福祉学Ⅱを新設した。大学院担当教員13名が自らの研究内容について学生にわかりやすく紹介することで、研究への関心を促した。結果として、学部から3名の本学大学院受験者があり、全員合格した。

社会福祉学専攻科目については、ソーシャルワーク演習Ⅲを新設することにより、より就職を意識した「実践力」の強化を試みた。介護福祉士関連の科目では、介護総合演習Ⅲ及び介護福祉経営論の科目新設等により、生活の多面的な理解や介護経営の理解の促進が図られた。

社会福祉学専攻では、11月にカリキュラムの実施状況を点検した。学生の理解度と集中力の向上が見られた点は評価できる。しかし、社会福祉士と介護福祉士のダブルライセンスの取得を目指す学生は、科目選択の余地がなく、資格に関連しない選択科目の履修がほとんどできないことが課題である。そのため今後、介護福祉士関連科目の既存科目への統廃合を行う必要がある。

子ども学専攻では、5月と6月に学修成果と課題について点検し、次年度以降のカリキュラムを一部修正した（科目の追加と削除）。8月以降、学修成果と今後の方針について集中的に検討した。

子ども学専攻では、幼稚園教諭教職課程の完成年次となり、4年間の学修成果と課題について5月と6月に点検し、次年度以降のカリキュラムを一部修正した（科目の追加と削除）。8月以降、学修成果と今後の方針について集中的に検討した。学生の単位取得状況や成績、学外実習先評価、就職内定状況、学生自身の振り返りなどから、学修成果は高いと評価した。今後は一層の教育内容の充実のため学科としての独立も検討することとした。また、初めての「保育・教職実践演習」の授業を円滑に遂行した。学生は、4年間の学修成果を改めて実践と関連づけることができた。域学連携を深めるための取組を次年度以降に導入する予定とした。

子ども学専攻でも、11月にカリキュラムの実施状況を点検した。新カリキュラムの実施状況は順調である。しかし、教職課程の完成年次に向けた履修カルテの整備に課題が残った。また今後は、科目の改廃や時間割の見直しについて検討する必要がある。

その他、身体障害のある学生が入学したので、学科でも支援法について学びサポートに努めた。学生は順調に学業を継続している。

4-2-3-2 グローバル教育

グローバル教育を推進するため、平成29年1月21日に、韓国の漢陽大学（Konyang University）のPark Min Jeong氏による国際セミナー（講演題目はResearch Assistants as

local experts for global-health research) を開催した。保健福祉学科の学生66名が参加し、韓国の社会福祉の現状についての見識を深めた。まとめは本学科の井上祐介助教が行った。

2月20日から23日まで韓国又松(ウソン)大学校にて、3泊4日の保健福祉学スタディツアーを開催し、15名の学生が参加した。また、3月に、アデレードにおける多文化保健福祉研修プロジェクトを計画し、平成29年2月24日～3月6日に実施し、保健福祉学科からは5名の学生が参加した。

4-2-3-3 地域連携教育

社会福祉学科は、合計30名の学生が、4つの非営利団体と意見交換を行った。地域の福祉ニーズの発見・把握や学習意欲の向上に寄与した。介護福祉コースでも、学生19名が、非営利団体と地域の介護ニーズに関する意見交換会を行った。地域の介護ニーズの発見・把握や学習意欲の向上に寄与した。子ども学専攻では、地域ニーズの理解と実践力の向上を目的に、合計4名の学生が4つの非営利団体と意見交換を行った。また、チュッピー広場を活用した親子との交流事業や授業を行った。複数の授業で(9種類の講義、計25回実施)、地域の子育て関連施設の訪問や現場実務者による講義等を行った。地域の子ども・子育てニーズの発見・把握や学習意欲の向上に寄与した。

4-2-3-4 アクティブ・ラーニング

昨年度、新規重点事業予算で、e-ラーニングによる学習システムを構築した。本年度も継続して介護福祉実習Ⅲ等で実施した。その他、介護福祉コースの在籍者全員がe-ラーニングシステムに登録し、自己学習に活用した。これらの成果として参加した介護福祉コース在籍者に主体的に学修する態度が醸成されたことが事後アンケートでも示されている。

また、今年度も「チームガバナビリティ演習」を実施した。医療・福祉の多専門職の連携を学ぶ本演習では、プログラムは小グループ(学科横断の学生5～6名、ファシリテーターとしての教員1～2名)で作成される。グループごとに、糖尿病性腎症・脳血管疾患などの患者の臨床シナリオの検討、倫理題材の検討、現場実践者(認知症ケアチーム)との交流、透析患者との交流、病院の見学など行い、多職種連携の有効性とその実現のための知識・技術・態度について体験的・能動的に学習した。

4-2-3-5 国家試験対策

社会福祉士国家試験対策として、模擬試験を3回実施した(8月10日、10月29日、12月22日)。8月は4年生が35名、10月は4年生が32名、12月は4年生が35名、3年生が35名、2年生が1名参加した。その他教員が、学生主導の国家試験学習チームを支援した。基礎的知識と学習習慣の修得を目的に、3年生の春休みから新たな国家試験対策ドリルを導入した。また、教員が国家試験対策ドリルから小テスト問題を作成し、4年生を対象にテストを実施した。

介護福祉士国家試験対策として、介護福祉士の資格を取得したい2年生と3年生の学生を対象に、学内模擬試験を2回開催した(10月13日は41名が参加。1月12日は41名が参加)。その他、2年生から4年生までの53名が「介護福祉士国試対策e-learning」を活用するとともに、教員が学生の個別・グループ学習を支援した。

4-3 情報工学部

4-3-1 情報通信工学科

4-3-1-1 導入教育

情報通信工学科の導入教育は、推薦入試合格者に対しては、12月と2月に情報システム工学科及び人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる。一般入試合格者を含む新生に対しては、4月に1泊2日で実施する学外オリエンテーション及び1年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている。

推薦入試合格者懇談会では、学部で統一された数学の試験を2回実施し、入学までの学力維持を促進した。また、学科独自に合格者と個人面談を行い、数学及び物理で苦手な分野などを聴取することで入学後のリメディアル教育へのデータとした。

学外オリエンテーションでは、新生7～8名のアドバイザーグループに別れ、それぞれのグループに与えられたテーマについて議論を行い、グループとしての一定の結論を出すことを学んだ。

「フレッシュマンセミナー」では、コミュニケーション能力の開発、自らの主張を相手に受け入れて貰う能力の開発、プレゼンテーション指導などを目的として、平成28年度は、ディベートを行った。これは二つのグループで、あるテーマについて肯定側と否定側という立場で意見をまとめ、次の週の試合においてお互いの意見を戦わせる。一方、残りのグループは試合を観戦し、どちらのグループが理路整然と自らの主張を述べ相手を説得できたかを、クリッカーを利用して投票し勝敗を決める。これを数回繰り返すことにより、上記の能力の開発を試みた。成績評価ではルーブリックを活用し、アドバイザー教員間での公平性を担保するとともに、学生への可視化に努めた。また、学生とアドバイザー教員が毎週顔を合わせることで、入学直後の不安感、孤独感を和らげることにした。全学で実施されている授業評価アンケートとは別に、独自にアンケートを実施し、同級生との親睦に役立った80%以上、積極的な取組80%以上の結果を得た。次年度以降も継続して実施する予定である。

さらに、昨年より学科独自で実施してきた新生アンケートを学部を展開したところ、入試での学科選択理由では、情報システム工学科、人間情報工学科と比べ、偏差値あるいは倍率と回答した割合が一般入試で高く、今後の広報活動への課題が浮き彫りとなったため、高校訪問等を通じて学科の特徴をアピールするように努めた。

4-3-1-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムあるいは学科全教員が担当する科目の実施・評価方法などは、学科教務委員会を組織し、定期的に検討している。また、半期ごとに実験演習検討委員会を開催し、実験演習に関する問題点、反省点、主な改善点とその効果を実験演習担当者で議論している。特に、講義科目が大半を占める学部教育科目の中で、1年次から4年次まで演習科目、実験科目を必修として配置している。実験演習検討委員会では、実験・演習科目のPDCAサイクルを担当教員が科目横断的に議論している。

理工系の学科にとって実験演習は極めて重要な科目であるが、近年は実験に対するモチベーションが低い学生も散見されるため、今年は実験演習科目に対する学生のモチベーション向上を目的として、1年次のフレッシュマンセミナーにおいて情報通信工学科のカリキュラムポリシー、実験演習の目的、実験演習の内容、履修上の注意を伝える説明会を新たに導入した。一方、学生からの意見を吸い上げるために、学生が実験演習科目に対する意見・要望を述べるができる相談窓口も設けた。今年度は学生からの相談は2件であった。

また、実験演習では老朽化した実験用測定器（オシロスコープ、ファンクションジェネレータ、PC等）の刷新を行った。

4-3-1-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは、4年次において「卒業研究」のための研究室配属が決定されるまで継続され、学生は「フレッシュマンセミナー」活動でのアドバイザー教員に対して、学生生活上の相談を受けることができる。また、オフィスアワーあるいは授業の空き時間を利用して、全ての学科教員に自由に相談できるようにしている。

各学生の成績は、学科教務専門委員が管理している。成績不振者に対しては、教務専門委員あるいはアドバイザー教員との面談等を通して、注意・指導を行っている。しかしながら、毎年、一定数の成績不振者がおり、今後、どのように改善していくかを検討しなければならない。なお、「卒業研究」を行う研究室配属は、卒業研究有資格者に対し、希望をもとに成績を考慮して行う。なお、平成 26 年入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 98%であった。

また、10 年程前より、特異な行動が見られた学生の情報を、一定のフォーマットで学生相談室に報告している。学科長、教務専門委員、教育開発推進委員（学生支援）は、学生相談室のアドバイスの下、学生の行動に注意できる体制を引き続きとっている。

4-3-2 情報システム工学科

4-3-2-1 導入教育

情報システム工学科の導入教育は、推薦入試合格者に対しては、12 月と 2 月に情報通信工学科及び人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる。一般入試合格者を含む新入生に対しては、4 月に 1 泊 2 日で実施する学外オリエンテーション及び 1 年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている。

推薦入試合格者懇談会では、自主学習を促すため数学、物理、英語の課題を与えると共に、学部で統一された数学の試験を 2 回実施し、入学までの学力維持を促進した。

学外オリエンテーションでは、学科全体ミーティングで学生生活の過ごし方を学ぶと共に、アドバイザーグループ毎の班別ミーティングにおいてアドバイザー教員との顔合わせを通じて相談しやすい環境を整え、さらに学生同士の親睦を深めた。

「フレッシュマンセミナー」では、高校での数学及び物理についてリメディアル教育を実施した。各回の授業で学生に課題を与え、2～3 名の教員（学科全教員が分担）とティーチングアシスタント 3 名が採点と個別指導にあたった。リメディアル教育前の 4 月と教育後の 7 月にほぼ同難度のテストを行った結果、受講者 59 人中 53 人の得点が向上しており、リメディアル教育の効果が確認された。

4-3-2-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムは教育プログラム検討委員会を組織し、実験・演習科目は実験・演習検討委員会を組織し、点検と改善を行っている。

平成 29 年度から開始するクォーター制では、主として地域連携教育のために 2 年次第 2 クォーターと 3 年次第 4 クォーターに必修科目を配置しない時間割とする必要があり、カリキュラムの一部に変更を加えた。なお、クォーター制やカリキュラム変更が学習効果に及ぼす影響については、今後、継続的な調査が必要である。

本年度も従来通り、大部分の実験演習科目において、授業の円滑な実施と学生の理解向上のため大学院生を TA として雇った。TA を雇った授業科目は、フレッシュマンセミナー、機械物理学実験 A・B、ソフトウェア演習 I・II、CAD 演習、機械デザイン演習、回路デザイン演習、システム創造プロジェクト I・II、技術英語演習の合計 11 科目である。TA の人選に際しては、授業内容に関連のある分野の研究に携わっていることを重視した。

4-3-2-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは、4 年次において「卒業研究」のための研究室配属が決定されるまで継続され、学生はアドバイザー教員に対して、学生生活上の相談や履修指導を受けることができる。また、オフィスアワーや授業の空き時間を利用して、全ての学科教員に自由に相談できるようにしている。

各学生の成績は、学科教務専門委員が管理している。成績不振者に対しては、各学期のはじめに教務専門委員あるいはアドバイザー教員が面談し、成績不振の理由を聞き取ると共

に履修指導を行っている。そして面談でメンタルな問題が懸念された学生には、学生相談室への相談を勧めている。なお、平成 26 年度入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 90%であった。毎年、一定数の留年者があり、成績不振者への効果的な対応法についてさらなる検討が必要である。

4-3-3 スポーツシステム工学科・人間情報工学科

4-3-3-1 導入教育

スポーツシステム工学科・人間情報工学科では、推薦入試合格者を対象とした懇談会（12月と2月に情報システム工学科及び人間情報工学科と合同で開催）、全新入生を対象とした学外オリエンテーション（4月に1泊2日で実施）及び1年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を導入教育として位置付けている。

第1回の推薦入試合格者懇談会では、学部で統一された数学の試験を実施し、同懇談会終了時に採点結果を学生に周知することで、第2回までの学習方針を示すとともに、数学と物理に関する課題を与え、入学までの学力維持を促進した。第2回の同懇談会では、4名の教員が参加し、教員あたり3~4名の生徒を担当し、全ての課題ができるまで指導し、最後までやり遂げることで達成感を感じることの重要性を伝えることができたと思われる。

学外オリエンテーションでは、昨年度の反省のもとに、8名程度のグループに分けた上で、指導教員を1名つけ、ストローとセロハンテープのみを材料としたストローブリッジの製作を実施し、耐荷重及びデザインの両面でコンテストを行なった。本イベントに関するアンケート結果によれば、「ものづくりに対する意識が高まった」と回答した学生が45%であった。自由記述及び実施前のものづくりへの興味に関する回答に基づいて整理したところ、実施前に「興味がない」と回答した学生（37%）のうちの18%は実施後に「興味がある」に変わっており、イベントの効果はあったものと思われる。しかし、「高校時代に経験したことがある」等と回答した学生が22%であったことから、平成29年度に実施する場合には、テーマの検討が必要と思われる。

「フレッシュマンセミナー」は2部構成とし、前半では、力学に関するリメディアルを実施し、後半では、人間情報工学に関する課題を課した。力学に関するリメディアルでは、講義の後に70%を合格とした達成度評価を実施した。70%に達しなかった学生については、正規の時間以外に追加講義及び再評価を合格に達するまでに繰り返し実施した。その結果、全員が合格のレベルに到達した。また、この際、合格点に達していても自身の達成度に満足していない学生の自主参加が15名程度あったことは、昨年度と同様に特筆すべきことと言える。人間情報工学に関する課題については、学科教員から課題の例を挙げてもらい、工学的な課題とはどのようなものか、を学ぶところから始め、図書館での文献検索及びWEBを利用した情報収集の仕方も学んだ。そして、学生毎に独自の課題を設定し、その解決策を考え、レポートとして提出させた。レポートの評価については、2名の教員でチェックを実施し、個別に、評価できる点、改善を要する点を指摘し、各学生個々のレベルに合わせた指導を行った。しかし、本年度も実施方法の評価を行っておらず、効果を定量的に評価するために、平成29年度には実施する予定である。

4-3-3-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムを検討するために教育プログラム検討委員会を設けるとともに、実験演習科目に特化した検討を行う実験演習検討WGを設けている。

教育プログラム検討委員会では、本学科の授業科目を分野別に分類し、その最初に位置する授業科目を重点科目に設定し、科目によっては補助教員を配置することで、教育効果の向上を図った。この効果については、平成26年度以前の入学生との比較を行うなど、継続的に評価する必要がある。

実験演習検討WGにおいては、半期終了後、実験演習科目に関する問題点を洗い出し、改善

策を検討し、継続的な改善に努めている。本年度は、昨年度の検討結果に基づいて、実験演習科目で設定しているテーマと講義科目との関連性に関連性の低いテーマを変更した。授業アンケートの結果から、概ね好評であるが、その効果についての検討を継続して実施する必要がある。

工学系学科の集大成の授業科目として位置付けられる卒業研究について、本年度も継続して、専門分野の異なる2～3の研究室をグループとし、月に1～4回の合同ゼミを実施した。これにより、指導教員とは異なる視点からの指導を受けることで、より学際的な卒業研究の実施を推進できたものと思われる。さらに、卒業研究の計画的な遂行を促進するために、2月の発表会とは別に、9月に中間発表会を継続して実施した。教員から聴取した意見によれば、本年度も、テーマの決定の早期化、計画的な実施の促進、中だるみになりがちな夏季休暇の有効利用等の改善効果が見られた。

また、平成29年度からのクォーター制の導入にあたり、1年次開講の計算機工学入門を前々期に週2回試行的に実施し、問題点や効果の洗い出しを行った。また、実験演習科目の対応について実験演習検討WGで検討し、週2回の実施に対応した授業計画を策定した。

4-3-3-3 学生支援

本学科には、学生相談の担当教員が在籍しており、大学生活や私生活での相談について、積極的に利用することを勧めているとともに、該当教員以外の教員にも気軽に相談できる体制をとるように教員にも周知している。また、効果的な学生支援、負担の平滑化の観点から、アドバイザーグループの編成や役割を見直し、本年度から実施した。

4-3-3-2 に記した重点科目について、毎月定例学科会議で出席状況を報告することとしており、出席状況が不良の学生の情報を共有し、担当授業科目で見守る体制を整えている。また、欠席が目立つ学生については、教務専門委員が面談し、注意・指導を行っている。

学生の成績は、学科長と教務専門委員が連携して管理を行っている。成績不振者に対しては、指導を行っている。また、所属教員の担当科目の学習状況についても、組織的に管理・支援を行っている。

卒業研究における研究室配属は、卒業研究有資格者を対象に研究室紹介や研究室訪問の機会を設けて研究テーマの紹介を行い、本人の適性や興味・関心などを勘案して配属を行っている。なお平成26年入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は81%であった。

4-4 デザイン学部

4-4-1 デザイン工学科

4-4-1-1 カリキュラム

デザイン工学科では平成28年3月に、旧カリキュラムに沿うコース制の最後の学生を卒業という形で送り出し、留年生を除いて在籍者はすべて新カリキュラムに沿う領域制の学生となった。本学の大学機関別認証評価を契機に学科の3つのポリシーも改訂を行った。平成29年3月卒業の学生が領域制初の卒業生となるため、平成29年度において、卒業時アンケート、進学及び就職先を含めた相互的な検証を行い、領域制におけるカリキュラム変更での効果等についての検証を行うこととする。

4-4-1-2 人材育成

本学独自の取組である「教育力向上支援事業」の一環として、「デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発」、「ものづくり工房運営についての調査研究4」、「建築・デザイン海外研修による国際交流と建築・教養教育の充実3」等

のプログラムを実施し、平成28年度デザインパレントコンテストでは製品・情報デザイン領域3年次の学生が優秀賞（意匠登録出願支援対象）を受賞した。

4-4-1-3 地域連携教育

学科独自の地域連携としては、各デザイン領域のインターンシップ授業において、デザイン関連企業や地域（自治体）関連のデザインプロジェクトに取り組み、実社会におけるデザインワークの体験的な理解を深めることができた。初年次学生対象の「フレッシュマン就業力セミナー」において、外部講師として、OB・OGデザイナーだけでなく、インターンシップ受入先から講師を招いてプレ教育を実施した。今後同様の内容を維持しつつ「フレッシュマンセミナー」として継続することとした。また、「龍の仕事展」（県西部地域）及び「勝山街並み・体験クラフト市」（県北部地域）を地域インターンシップとして継続的に実施した。

4-4-1-4 IT化の推進

昨年度から、「新規事業枠」予算への申請を行い、「アクティブ・ラーニングシステム」の機器整備を進め、学修環境の利便性向上を図りつつ、また、デザイン学部棟内のWi-Fi環境の整備と利用の促進を図った。

4-4-1-5 キャリア支援

デザイン学部では、2学科共通の活動も多いため、キャリア支援に関しては、4-4-3 文部科学省補助事業にて詳述した。

4-4-1-6 国際交流推進

デザイン工学科では、平成28年7月8日～7月27日の3週間に渡って、メキシコ・モンテレイ工科大学より13名の学生を受け入れ、デザイン工学科製品・情報デザイン演習Ⅲaにて合同授業を実施した。演習課題「新しい和菓子のデザインの提案」においては、総社市の和菓子職人葛原氏（御菓子司 備菴店主）による和菓子制作に関する説明と実演等のワークショップを実施し、授業を通じての教員・学生間の国際交流を行い、本学部の国際交流推進に貢献した。本学の学生の参加は15名であった。

4-4-2 造形デザイン学科

4-4-2-1 カリキュラム

造形デザイン学科では、グローバル化、多様化する社会にて貢献できる能力を育成するため、社会との繋がりの中でデザインの専門性を活かし、キャリアデザインを創造的に作り出す力の育成を視野に入れたカリキュラムを提供している。今後の社会変化の動向を念頭に、職能としてのデザイン専門教育を充実するために、平成25年度にコース制から領域制に改め、今年度は完成年度に至った。その教育成果の分析等については次年度にて学部全体で取り組むことになる。

4-4-2-2 人材育成

「教育力向上支援事業」において、「ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム」など6つのプログラムにおいて、社会で活躍するデザイナーを招聘したレクチャーを課内外の授業にて実施し、学生が社会におけるデザインの新たな可能性を具体的に考える場を設けた。「造形デザイン領域論 IV」では、学生が将来の進路や適性そして社会での役割について熟考することを目的として、研究や作品等を纏めたポートフォリオを作成するべく指導をおこなった。また、企業から学外講師を招聘し「ポートフォリオセミナー」を開催し、プレゼンテーションを通して、コミュニケーションの重要性など社会が求める人材に必要な力について考えさせ、今後の学修に活かす場を設けた。さらに、各種コンペティシ

ンへの応募や作品発表を推奨し、授業内外において具体的な指導・支援をおこない、受賞数の増加に繋げた。

4-4-2-3 地域連携教育

卒業研究を含む多くの授業においては、地域連携に関わる課題を学生に提供することで、学生の地域との関わり意識を高める成果を上げている。そのいくつかは、実際に採用されるなど、具体的なデザインワークとして社会に受け入れられている。インターンシップでは、デザイン関連企業や地域（自治体や団体）のデザインプロジェクトに取り組み、社会におけるデザインの可能性を実践的に学び、地域連携の意義と理解を深めた。

4-4-2-4 領域制カリキュラム

国際化をはじめ多様化が進む今日では、全体を俯瞰し価値観を固定せず創造的な解決策を提案するデザイン能力が必要とされる。平成 25 年度に再編した領域制カリキュラムは、学部基礎教育科目・学科専門教育科目・領域専門教育科目のなかで広くそれらの能力の育成を図るものであり、今年度完成年度を迎えた。3 年次授業の基礎ゼミ受講を経て着手した卒業研究では、IT 技術、手作業や実材料による表現、ひとの価値観の組み合わせにより「ものづくり」から「ことづくり」への展開や、人の価値観を意識した研究へと発展させたものも多く見られ、領域制カリキュラムならではの成果と考える。一方で、デザイン専門分野における技術等の基礎力の修得においては幾分の不十分さもみられ、今後の課題である。

4-4-2-5 キャリア支援

デザイン学部では、2 学科共通の活動も多いため、キャリア支援に関しては、4-4-3 文部科学省補助事業にて詳述した。

4-4-2-6 国際交流推進

造形デザイン学科では、平成28年7月8日～7月27日の3週間に渡って、メキシコ・モンテレイ工科大学より13名の学生を受け入れ、造形デザイン学科色彩学・平面構成演習 I にて合同授業「バイオデザイン」を実施した。授業を通じての教員・学生間の国際交流を行い、本学部の国際交流推進に貢献した。

4-4-3 文部科学省補助事業

4-4-3-1 はじめに

平成 24～26 年度実施の文部科学省補助事業テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」及び、平成 26～27 年度実施の同テーマ B「大学教育再生加速プログラム（インターンシップ等を通じた教育強化）」について、事業終了後となる平成 28 年度においても教育力向上を目的に取組を継続している。

4-4-3-2 テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」（平成 26 年度終了）

平成 27 年度より、サブグループ 3 校（岡山理科大学、山口東京理科大学、岡山県立大学）は、3 大学連携の協定書を結び、連携会議による大学相互の授業見学等による教育力向上を目的にした取組を行っている。平成 28 年度は本学がまとめ校（年次計画作成、授業見学運用等）の担当であり、活動を牽引する姿勢が求められた。そこで本学教育力向上支援事業として取り組む体制とした。

(1) 3 大学連携会議（平成 28 年 8 月 26 日）

岡山理科大学にて開催された「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」第 2 回 3 大学連携会議（岡山県立大学・岡山理科大学・山口東京理科大学）において、

本年度の主な取組として授業見学、施設設備の共同利用、学生の相互交流を実施する計画となった。また岡山理科大学において、私立大学教育研究活性化設備整備事業の助成により、新たな共同利用設備（切削加工機等）を導入する計画であることが報告された。

(2) 施設の共同利用（平成 28 年 8 月 26 日、平成 29 年 3 月 27 日）

岡山理科大学の施設設備の共同利用を行った。

利用設備：レーザー加工機(C-180, SPIRIT, VENUS) , 3次元高精度形状測定システム(K2-310), ロボドリル, NC 円テーブル

(3) 連携大学による相互授業見学

各大学において平成 28 年度の見学可能授業をリストアップし、本学にて集約、3 大学のリストを公開した。（岡山県立大学：6 科目、岡山理科大学：11 科目、山口東京理科大学：10 科目）

①岡山理科大学教員の本学授業の見学

本学において実施された授業見学は 1 件であった。詳細は下記の通りである。

公開科目：インフォメーショングラフィックス（デザイン工学科 2 年次生）

実施日時：平成 28 年 9 月 20 日（火）12:40～14:10

教室：8211 情報処理演習室

担当者：小野教授, 上田助教

内容：この授業は、情報（データ）に形を与え（すなわち視覚化、「見える化」のための合理的な操作を施し）、理解・認識に資する、有効かつ具体的な方法を探るものである。その演習の様子を見学していただく。

見学者：クラ・エリス講師（岡山理科大学）

意見（抜粋）：分野の違いによるデータの表示法の変化について、情報系の学生や研究者などが深く理解することが必要だと分かりました。更に、教え方も参考になりました。

②デザイン学部及び情報工学部学生の岡山理科大学の授業見学と学生交流会

日時：平成 28 年 12 月 1 日（木）15:00～17:30

場所：岡山理科大学 20 号館 4 階工学プロジェクトコース講義室

授業名：プロジェクトⅡ及びプロジェクトⅣ

指導教員：松浦洋司, 茅原敏広*, 西村寿夫* *非常勤講師（企業での実務経験者）

見学授業の概要：学生の目標や興味に応じた具体的なものづくりのテーマを設定し、ゼロから完成までの実践をグループで行う。ものづくりの総合的な学習体験を通して、創造的思考力や P D C A サイクルの考え方を身につけるとともに、コミュニケーション力やリーダーシップ力、倫理観などの社会人基礎力を身につけることを目的としている。

連携校（岡山理科大学）の授業見学において、初めて学生の参加を実現した。また、教員、学生共に他学部（情報工学部）からの参加を得た。（デザイン学部・研究科学生 6 名、情報工学部・研究科学生 5 名、デザイン学部教員 2 名、情報工学部教員 1 名、計 14 名）本学の学生にとって他大学、異分野の取組見学と学生交流により、キャリア教育の観点から新たな視座や刺激を得る機会となった。



授業見学の様子



学生交流会の様子

(4) SPU 活動 1 件の実施 (8~3 月)

本年度共同研究「地域の特色を活かした知育的なスケッチブックのデザイン開発」(連携先: マルマン株式会社) 取組において, 学生チームによる企画提案活動をプログラムに採り入れ, SPU 活動として実施した。

参加学生: 造形デザイン学科ビジュアルデザイン領域 3 年生 6 名

活動概要: スケッチブックに地域の特色をイラストで表現することで, 子供たちの創造力をより高めると同時に, 魅力あるおみやげとして地域観光を支援する商品を開発する。具体的には, 子供向けにイラストが印刷された商品 SKETCH BOOK ONE DAY から派生したご当地 ONE DAY の岡山バージョンのデザイン開発を学生と共に取り組む。



学生チームによるディスカッション風景

(5) 産学連携授業 2 件の実施

① 渡辺小百合氏 (マルマン株式会社, 本学デザイン学研究科平成 24 年度修了生)

テーマ: 「デザイン企画・制作の現場」

日時: 平成 28 年 12 月 5 日 (月) 12:40~13:40

場所: デザイン学部棟 4 階 3414 教室

主対象: ビジュアルデザイン領域 3 年生

講義内容: 「デザイン企画・制作の現場」及び「デザイン業界への就業」をテーマに, 現場の視点, 卒業生の視点から講義頂いた。本講義は, 学生がデザインの仕事に対して理解を深めると共に, 自己のキャリアについて自発的に考える契機となるものである。

参加者: 学生 42 名, 教員 4 名, 計 46 名



② 杉野実氏 (M1_PROJECT デザインプロデューサー)

テーマ: 「地域と関わり, 地域に根ざしたデザイン活動」

日時: 平成 29 年 2 月 17 日 (金) 12:40~14:10

場所: デザイン学部 3 階 3309・3310 会議室

主対象: デザイン学部 学生・教員

講義内容: 地方都市名古屋のデザイン施策について, また地方都市ならではのデザインの仕事の進め方やデザイナーが行政や社会, 中小企業とどのように関わり, 活動を広げているのか? 名古屋や岐阜での具体的なデザイン活動事例を示し, 地域における

デザイナーの役割と活動についての講義を行った。参加者：学生 18 名, 教員 13 名, 計 31 名



4-4-3-3 テーマ B「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進」平成 27 年度終了)

本学における主な取組は, 1) フレッシュマン就業力セミナー (全学部), 2) 両学科毎のインターンシップ・プログラム, 3) 中国・四国圏域グループ会議及び組織運営委員会主催のシンポジウム (フォーラム等) への参加の 3 つである。

(1) フレッシュマン就業力セミナー (履修生: 95 名)

外部講師として, OB・OG デザイナーだけでなく, インターンシップ受入先から講師を招き, プレ教育として実施した。

日程	授業内容	担当講師
4/12	1. オリエンテーション; 就業力とデザイン力の接点	森下学部長・両学科長
4/19	2. デザイン工学分野学生の将来設計: 進学編 (大学院生: デザイン工学専攻)	吉田拓真
4/26	3. セルフマネジメントの要点 (～今日は未来の自分の始まり～自分と向き合いハッピーを手に入れる)	木蔵君子
5/10	4. 造形デザイン分野学生の将来設計: 進学編 (大学院生: 造形デザイン学専攻)	大木みゆき (IT)・児玉麻由 (テキ)
5/17	5. 造形デザイン分野学生の将来設計: 就職編 (卒業生: 造形デザイン)	湯川敢介 (グラ)・松本奈緒子 (セラ)
5/24	6. デザイン工学分野学生の将来設計: 就職編 (卒業生: グローリー)	木村直矢
5/31	7. キャリアプランニングのヒント: 地域編<企業> (エクスライフ)	三井勇樹
6/7	8. キャリアプランニングのヒント: 総合編 (クオリティ・オブ・ライフ)	原 正紀
6/14	9. キャリアプランニングのヒント: 地域<NPO>編 (龍の仕事展)	久保田正彦
6/21	10. キャリアプランニングのヒント: 地域<NPO>編 (勝山クラフト市)	北川 卓
6/28	11. キャリアプランニングのヒント: 地域<個人>編 (アイデア)	大月ヒロ子
7/5	12. キャリアプランニングのヒント: 製品・情報デザイン領域編 (アミティ)	光野雅明
7/12	13. キャリアプランニングのヒント: 造形デザイン領域編	泉田志穂
7/19	14. キャリアプランニングのヒント: 建築・都市デザ	仁科真弘

	イン領域編（建築士）	
7/26	15. キャリアプランニングのヒント：ビジュアルデザイン領域編	松下美実
8/2	16. サブノート提出	両学科長

(2) 両学科毎のインターンシップ・プログラム

・製品・情報デザインインターンシップ

履修生は、製品・情報デザイン領域 3 年生 22 名（複数参加あり）である。受入先は、岡山 6 名（倉敷 CTV, ダイヤ工業, 岡山 ESD プログラム）, 広島 3 名（マツダ財団）, その他として 12 名は, ADA2016（アジア学生国際ワークショップ）, スズキ, 内田洋行, ケイテック, シャープ, ソフトデバイス, デザイントランスメディアなどである。募集については, 授業の中で説明会を実施し, 終了後は学生による報告会を実施, 参加学生の評価の参考とするとともに, 下級生を含む学生・教員の情報共有に努めた。

・建築・都市デザインインターンシップ

履修生は、建築・都市デザイン領域 3 年生 11 名（複数参加あり 15 箇所）である。受入先は、岡山県 2 名, 広島県 2 名, 香川県 1 名, 愛媛県 1 名, その他 9 名は, 積水ハウス, 仁科建築設計事務所, UID 建築設計事務所, 一条工務店, 株式会社浦辺設計事務所, 桃李舎一級建築士事務所などである。建築・都市デザインインターンシップは, 学内講義と実習先での研修を織り交ぜた授業カリキュラムとして, 建築と社会とのつながりなどを理解した後, 建築設計事務所や建設会社設計部, 行政機関において, 建築物の設計, 工事監理, 建築確認等の実務を学び, インターンシップ実習を終了した後, 報告会を行った。

・造形デザインインターンシップ

履修生：造形デザイン学科 3 年生 38 名である。

受け入先：12 箇所（株式会社三浦印刷所 [パックロード製本], 広和印刷株式会社, 株式会社中野コロタイプ, ワシユウ印刷株式会社, サンコー印刷株式会社, 株式会社マック / 株式会社ウィルコミュニケーションデザイン事務所, 岡山県立美術館, 滋賀県立陶芸の森, 株式会社 OHK エンタープライズ, エクスライブ, 株式会社シファカ, 株式会社リペアル。

	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	その他	合計
製品・情報デザイン			6	3						12	21
建築・都市デザイン			2	2			1	1		9	15
造形デザイン			32							6	38

平成 28 年度インターンシップ参加者数（地域別インターンシップ先）

(3) 中国・四国圏域グループ会議及び組織運営委員会主催のシンポジウム（フォーラム等）への参加

- ・平成 28 年度第 1 回中国・四国地域大学グループ会議（3 名, テレビ会議出席）
平成 28 年 4 月 25 日（月）サテライトキャンパス広島
- ・平成 28 年度中国・四国圏域インターンシップフォーラム（2 名）
平成 28 年 10 月 24 日（月）岡山国際会議室
- ・中四国産学連合合宿授業（3 名）
平成 28 年 8 月 26 日（金）～28 日（日）マツダ本社, サテライトキャンパス広島
- ・平成 28 年度中国・四国地域人材育成連携協議会（1 名）
平成 29 年 3 月 9 日（木）サテライトキャンパス広島

4-4-3-4 今後の展望

島根大学を幹事校とする「中国・四国地域人材育成連携協議会」の 11 大学構成メンバーとして参加し, 平成 29 年度も継続して, 合同事業に参加を行う。主な事業は, 1) フォーラ

ム等の開催, 2) 中国・四国地域人材育成事業ポータルサイトでの情報共有, 3) 広域インターンシップへの参加, 4) 中四国産学連携合宿授業の4事業になる。また, 3大学連携会議(岡山理科大学, 山口東京理科大学, 岡山県立大学)についても, 引き続き, 施設の相互利用, 授業参観など大学間の連携を参加校としての教育力向上を目的に取組を行う。

4-5 まとめと課題

4-5-1 保健福祉学部

グローバル教育の充実に向け, 平成 29 年度から海外において看護・栄養・福祉等の保健福祉学分野の教育を経験することにより, これらの分野におけるグローバルな視点を養い, 異文化理解を深めるとともに, 外国語で異文化圏の人達と専門分野を含め広くコミュニケーションをはかる力を高めることを目的とする保健福祉学スタディーツアーの授業科目化を行った。学生の派遣先としては韓国又松(ウソン) 大学校, 香港理工大学ならびにオーストラリア TAFE SA が設定されているが, 学生の履修状況を見ながら今後検討していく必要がある。また, 副専攻制度として平成 28 年度からスタートした岡山創生学に, 学生の地域活動を展開する学部独自科目として保健・医療・福祉等の各専門職に期待される役割を遂行することにより, 地域創生に資することは何かを体験学修する地域保健福祉演習を新設し, 平成 30 年度から開講予定となった。副専攻の履修促進に向け, 平成 29 年度入学生からは再度のカリキュラム改訂も実施したが, 実際の履修状況を見ながら今後さらなる工夫が必要と思われる。

4-5-2 情報工学部

情報工学部においては, 基礎学力の補強を軸に学生支援をきめ細かく実施している点では一致しているといえる。教育方法については, 岡山県工学教育協議会主催の「岡山県工学教育協議会シンポジウム」に参加し, 近隣大学・高専等の最新の教育方法に関する情報を収集すると共に, 本学部の教育プログラムに関する発表を行い, 他大学教員からの意見を聴取している。

平成 27 年度に採択された COC+事業に関連して, 平成 28 年度入学生からはカリキュラムの一部に地域との協働による授業科目が設置されるが, これらの授業科目と学内で実施する授業科目とを上手く連動させ, 高い教育効果を上げることが今後の課題である。

4-5-3 デザイン学部

デザイン学部では, 文部科学省補助事業テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」及び同テーマ B「大学教育再生加速プログラム(インターンシップ等を通じた教育強化)」終了後も, 「中国・四国地域人材育成連携協議会」及び「3大学連携会議」の事業に積極的に参加し, 学部教育の質向上と改善に活かすことができた。しかしながら, 今年度より本学を中心とする COC+事業が具体的に稼働したことで, 教員・学生への負荷も増すことから, 連携大学間事業への参加に関して選択と集中が課題になる。

第2章 研究科の教育活動と成果

1 概要

本学大学院では、各研究科・専攻で設定するカリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーに基づき、より高度な専門性を備え、社会進出にあたって指導的な立場に立つことのできる人材や研究者の育成を目指している。以上を基本として、少子高齢化やグローバル化に対応して、専門分野の視点から課題解決を図ることのできる人材育成のため、各研究科において、教育プログラムや授業内容及び研究指導法の工夫改善に取り組んでいる。

なお、学士課程のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーの改訂にともない、平成29年度計画において、各研究科の各ポリシーについても改訂作業を実施する予定である。

2 入学者受入

2-1 概要

平成29年度入学者選抜は、大学院課程に関しては、募集対策に関する各研究科の工夫が挙げられる。

2-2 選抜方法

(1) 平成29年度入学者選抜の概要

(人)

研究科	課程	専攻	募集人員	選抜方法
保健福祉学研究科	博士前期課程	看護学専攻	7	一般入試：外国語(英語), 専門(口述試験), 面接, 書類審査 特別入試※1：同上 指定校からの外国人留学生特別入試：同上
		栄養学専攻	6	一般入試：外国語(英語), 専門(口述試験), 面接, 書類審査
		保健福祉学専攻	7	特別入試※1：外国語(英語)※2：面接, 書類審査 指定校からの外国人留学生特別入試：外国語(英語), 面接, 書類審査
	博士後期課程	保健福祉科学専攻	5	専門(筆記), 面接
情報系工学研究科	博士前期課程	システム工学専攻	52	夏季募集：外国語(英語), 数学, 面接, 書類審査 秋季募集：面接(英語, 数学, 専門の口頭試問も行う。書類審査を含む)
	博士後期課程	システム工学専攻	6 若干人	夏季募集：外国語(英語), 専門, 面接, 書類審査 冬季募集：同上 海外特別入試(夏・秋・冬季)：面接(英語, 専門, 修士論文, 研究計画書の口頭試問)
デザイン学研究科	修士課程	デザイン工学専攻	7	語学(一般入試は英語, 特別入試※1は日本語), 作品・ポートフォリオ, 面接, 書類審査
		造形デザイン学専攻	9	
計			99	

- ※1 保健福祉学研究科(博士前期課程)の特別入試：社会人, 外国人留学生
デザイン学研究科(修士課程)の特別入試：外国人留学生
- ※2 保健福祉学専攻の特別入試(社会人)は, 外国語(英語)に代えて, 専門(口述試験)により実施することがある。

(2) 入学者選抜の変更

平成 29 年度以降の大学院入学者選抜試験（情報系工学研究科・博士前期課程・夏季期募集）における TOEIC テストのスコア利用（平成 26 年 9 月 26 日公表）

情報系工学研究科（博士前期課程）では, アドミッション・ポリシーに掲げるグローバル人材の育成を一層推進するため, 次のとおり, 夏季募集において, 平成 29 年度入学者選抜試験（平成 28 年 8 月実施予定）から, 英語能力の評価を学力検査（外国語・英語）に代えて, TOEIC テストのスコアに基づき行うこととした。

（現行）

科目名等	配点
学力検査（数学）	150
学力検査（外国語・英語）	100
面接及び書類審査	100
配点合計	350

（変更後）

科目名等	配点
学力検査（数学）	150
TOEIC テストのスコア	100
面接及び書類審査	100
計	350

2-3 まとめと課題

大学院課程の入試に関しては, 保健福祉学研究科において募集対策の工夫改善により, 入学定員を充足することができたが（付録 1-A 参照）, デザイン学研究科（修士課程）及び情報系工学研究科（博士後期課程）では, 定員充足の結果を見ていないため, さらなる対応策について平成 29 年度計画に盛り込んだ。平成 29 年度情報系工学研究科（博士前期課程）の募集では, TOEIC テストのスコアに変える措置について予定通りこれを実施した。

最後に, 全国的に欠員状況が目立つ研究科の学生募集について, 本学研究科の魅力化を一層図るとともに, 留学生や社会人の入学について, 履修のしやすさや学費に関する優遇措置など, 多面的な観点から総合的に改善策を検討, 計画する必要がある。

3 大学院における教育活動

3-1 保健福祉学研究科

3-1-1 看護学専攻（博士前期課程）

3-1-1-1 グローバル教育

ネパールで院生 2 名が「国際保健看護論演習」を行い, トリブバン大学医学部看護学科学生と交流し, 付属病院, AMDA ダマック病院, カトマンズ地域での視察及び研修を行った。発展途上国での保健活動の意義を演習により学ぶことができた。学部科目の「国際保健看護論」を院生有志に開放し, 香港理工大学老年看護学及び母性看護学担当教員 2 名の講義を実施し, 大学院生有志が聴講した。講義の終了後は共同研究に向けて, ディスカッションの場を設定した。

3-1-1-2 地域連携教育

COC+コミュニティパートナー育成事業により, 院生有志が NPO 笠岡しまづくり海社, 笠岡市の協力のもと, 岡山大学・ノートルダム清心女子大学・本学学部生と共に, 島の運動

会や白石島宿泊研修をおこなった。この成果の一部は、学部 3 年生をリードして院生 1 年生が、全国公立大学学生大会（LINK topos）でポスター発表（「離島における地域包括ケアシステムを考える～白石島に焦点を当てて～」）した。

また、真庭保健所・真庭市保健師の協力のもと、真庭地域における愛育委員と保健師との協働の実際を学び、学ではイメージし難い、ヘルスプロモーション（住民主体の健康な地域づくり）やソーシャルキャピタルの理解につながった。備中県民局『わが町で保健医療福祉の「人づくり、地域づくり応援隊」事業』を受託したNPOの人材育成コースに参加し、統合実習のTAとして学部生と共に離島の保健医療・看護の現状と課題について検討することにより、地域を看ることの理解が深まった。さらに、保健福祉行政論演習・公衆衛生看護診断論演習では早島町保健師の協力のもと地域包括ケアシステムの現状と課題についてフィールドワークを行い、に提言した。さらに成果の一部は町保健師との共同研究「早島町の自主的な介護予防活動～体操の普及・継続に向けて～」を岡山県地域包括ケアシステム学会でポスター発表した。

行政保健師をめざす学生には、本年度からインターンシップを開始した岡山市保健師統括部署と連携をとり、4名が夏季休業を利用して参加できるようにした。また、備中保健所の協力のもと、感染症・難病対策・地区組織育成の実際活動に参加して学修を深めることができた。加えて、看護協会保健師職能委員会主催のデータヘルス研修や保健指導ミーティング（事例検討）を演習として活用し、県内各地の保健師と共に学修を深めることができた。

これらを通して、公衆衛生看護学実習前に「地域を看護する」公衆衛生看護の理解が深化した。

3-1-2 栄養学専攻（博士前期課程）

3-1-2-1 グローバル教育

平成 28 年 10 月 8 日に韓国の又松（ウソン）大学にて第 10 回東アジア栄養学会議が開催され、教員 5 名、大学院博士後期課程学生 2 名、大学院博士前期課程学生 4 名が発表した。研究成果を英語で発表し、外国語の習得や他国の研究者と交流を深める機会となった。平成 29 年度から中国・南昌大学よりスカイプを活用した海外特別入試に合格した学生 1 名が栄養学専攻に入学し、山下広美教授の指導のもとで研究を進める予定である。

平成 28 年 4 月 7 日にドイツのベルリン自由大学薬学部から Herbert Kolodziej 教授を招聘し、” Resveratrol: Antileishmanial Activity, Cytotoxicity and Apoptotic Effects on A549 Cells” というタイトルで、英語による特別講演を行った。教員 9 名、博士後期課程学生 4 名、博士前期課程学生 13 名、学部学生 7 名が聴講し、講演後は意見交換の場を設け、外国語の習得、講演内容についての議論や研究交流を深めた。

3-1-2-2 連携大学院教育

栄養学専攻では、岡山県内の大学や学術施設と連携協定を締結し、学外の研究者による研究指導を受けることができる体制を整えている。本年度は以下の連携大学院教育を行った。

- ・生命工学特論（岡山県生物科学総合研究所 畑中唯史研究員 他）：7 名受講
- ・食品微生物学特論（岡山県工業技術センター 三宅剛史研究員）：7 名受講

3-1-3 保健福祉学専攻（博士前期課程）

3-1-3-1 グローバル教育

グローバル教育を推進するため、平成 29 年 1 月 21 日に、韓国の漢陽大学（Konyang University）の Park Min Jeong 氏による国際セミナー（講演題目は Research Assistants as local experts for global-health research）を開催した。保健福祉学科の院生 4 名が

参加し、韓国の社会福祉の現状についての見識を深めた。

また、平成 28 年 9 月 12 日には、「健康生成モデル SOC」について、Bergen 大学（ノルウェー）のエバ・ランゲランド教授、笹原信一郎准教授（筑波大学）を招聘して、総社市内の養護老人ホーム（昭和地区）において、福祉関係者及び本学学部生、福祉関係者を対象に市民音楽ボランティアによる参加型コンサートとセミナーを開催した。約 50 名の参加者があり、本学からは学部生 4 名、大学院後期課程の学生 1 名が参加した。

3-1-3-2 地域連携教育

本年度は、以下の内容で他大学等の研究者と交流を行い、研究に対する知識や意欲を高めた。

- ・乳幼児期から児童期にかけての音楽教育勉強会に参加した。
- ・公益財団法人 福武教育文化振興財団、平成 28 年度 教育活動助成を受けた研究において、研究メンバーとして参加した。
- ・第 19 回認知神経心理学研究会（2016 年 8 月 28 日、広島）に参加させ、「加齢またはアルツハイマー病が語彙意味機能におよぼす影響－意味的プライミング課題と feature listing 課題を用いて－」の研究を報告した。
- ・川崎医療福祉大学医療技術学研究科感覚矯正学専攻の研究室を訪問し、同大学院生と交流した。

3-1-4 保健福祉科学専攻（博士後期課程）

3-1-4-1 看護学大講座

インドネシア・ハサヌディン大学看護学科学科長より、大学院後期課程への留学希望があったので、海外連携協定大学における学長推薦を受けた留学生に対して、入学金免除、授業料の最長 3 年間の免除、ならびに奨学金の最長 3 年間の給付を行う海外特別奨学生制度があることを具体的に伝えるとともに、意見交換の機会をもった。

3-1-4-2 栄養学大講座

栄養学大講座では、平成 28 年 1 月にインドネシア・ハサヌディン大学から特別研究員と受け入れた研究員が、平成 28 年度に海外特別奨学生（指導教員：伊東秀之教授）として博士後期課程に入学し、共同研究を進めている。また、海外特別入学試験に合格した中国・南昌大学からの留学生 1 名の栄養学大講座への受け入れ（指導教員：山下広美教授）が決定している。本学生は平成 28 年 9 月より研究生として受け入れており、平成 29 年度から海外特別奨学生として博士後期課程に入学し、共同研究を進める予定である。

平成 28 年 4 月 7 日にドイツのベルリン自由大学薬学部から Herbert Kolodziej 教授を招聘し、” Resveratrol: Antileishmanial Activity, Cytotoxicity and Apoptotic Effects on A549 Cells” というタイトルで、英語による特別講演を行った。教員 9 名、博士後期課程学生 4 名、博士前期課程学生 13 名、学部学生 7 名が聴講し、講演後は意見交換の場を設け、外国語の習得、講演内容についての議論や研究交流を深めた。

3-1-4-3 保健福祉学大講座

保健福祉学大講座では、グローバル教育を推進するため、平成 29 年 1 月 21 日に、韓国の漢陽大学（Konyang University）の Park Min Jeong 氏による国際セミナー（講演題目は Research Assistants as local experts for global-health research）を開催した。保健福祉学科の院生 1 名が参加し、韓国の社会福祉の現状についての見識を深めた。

また、平成 28 年 9 月 12 日には、「健康生成モデル SOC」について、Bergen 大学（ノルウェー）のエバ・ランゲランド教授、笹原信一郎准教授（筑波大学）を招聘して、総社市内の養護老人ホーム（昭和地区）において、福祉関係者及び本学学部生、福祉関係者を対象に市民音楽

ボランティアによる参加型コンサートとセミナーを開催した。約 50 名の参加者があり、本学からは学部生 4 名、大学院後期課程の学生 1 名が参加した。

3-2 情報系工学研究科

情報系工学研究科では、急速に発展する環境の変化に対応するために、既存の教育研究分野にとらわれず幅広い視野を持ち、それぞれの研究内容のみならず融合型研究を深化させるための取組を行っている。

3-2-1 学生指導体制

3-2-1-1 システム工学専攻（博士前期課程）

平成 25 年度に、情報工学部 3 学科に積み上げた 3 専攻（電子情報通信工学専攻、機械情報システム工学専攻、人間情報システム工学専攻）から 1 専攻に改組し、専攻内に 5 領域（情報工学領域、電子通信工学領域、ヒューマン・ロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域、人間情報工学領域）を設けた。平成 24 年度以前の 3 専攻体制では、学生が所属する専攻を超えた授業科目を履修することは、専攻共通に開講される授業科目以外では、ほとんど見られなかった。しかしながら、1 専攻化により、従前の専攻の枠を超えた授業科目の履修が、特に情報工学系の授業科目で活発になり、また、領域が細分化された関係で、多くの学生が領域を超えた授業科目を履修している。表 1 に、3 専攻最後となった平成 24 年度入学生に対する授業科目（選択科目）を平成 25 年度以降の 5 領域に対応するよう分類し、平成 24 年度入学生がどの領域の授業科目に対して単位を取得しているかに関する分布を示す。表 1 において、太字斜体で示される数値は、学生の所属領域外の授業科目で単位を取得していることを表している。同様に、平成 27 年度入学生に対する選択科目の単位取得分布を表 2 に示す。表 1 と表 2 を比較することにより、1 専攻化によって、学生は所属領域以外の授業科目を履修する行動をとっていることが顕著となっている。

表 1. 平成 24 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
(3 専攻の授業科目を平成 27 年度の 5 領域に分類)
(太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す)

学生の所属領域		取得単位数の分布(%)							合計	
		情報			電子	ヒュ	機械	人間		共通
		電子	機械	人間						
情報	電子	34.1			53.7				12.2	100.0
	機械		42.3		1.6	23.6	19.5		13.0	100.0
	人間									—
電子通信		22.5	2.0		66.5				9.0	100.0
ヒューマン・ロボ			30.1		2.7	31.5	19.2	4.1	12.3	100.0
機械・エネ			30.0		0.9	15.0	38.8	5.3	10.1	100.0
人間情報(注)			3.6		30.6	9.0	7.2	39.6	9.9	100.0

(注) 人間情報システム工学専攻学生 5 名中 2 名は情報通信工学科卒業生のため、電子情報通信工学専攻科目を数多く履修している。

表2. 平成27年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
(太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す)

学生の所属領域		取得単位数の分布(%)							合計	
		情報			電子	ヒュ	機械	人間		共通
		電子	機械	人間						
情報	電子	20.4	27.2		42.7	3.9			5.8	100.0
	機械	5.8	46.7	9.5	4.4	14.6	10.9	0.7	7.3	100.0
	人間		20.0	10.0	20.0	20.0		20.0	10.0	100.0
電子通信		11.0	15.0		67.8	0.5	2.8		3.0	100.0
ヒューマン・ロボ		2.9	24.6	4.3	1.4	33.3	13.0	17.4	2.9	100.0
機械・エネ			27.8	2.6	5.3	17.2	37.1		9.9	100.0
人間情報					9.2	8.1	8.1	70.5	4.0	100.0

しかしながら、情報工学部卒業生の約半数が、システム工学（博士前期課程）に進学しており、また、学外から本専攻に入学する学生が少ない現状において、学士課程教育との連続性を十分に考慮した教育プログラムとする必要がある。この観点において、情報工学系の授業科目が単一領域に集約された点は、学生の履修行動に柔軟性を与えたことになり評価することができる。一方で、情報システム工学科教員の所属領域が情報工学領域、ヒューマン・ロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域に3分割されている点、人間情報工学科所属教員の授業科目が人間情報工学領域以外の領域に配置されている点などにおいて、学士課程教育との連続性が、必ずしも明快ではなかった。このため、学生の履修行動などに基づいて、カリキュラム改善のPDCAサイクルを運用する際に、適切な評価をすることが困難となっていることは否めない。また、学生の研究指導、修士論文作成指導に際しても、領域内での議論を十分に尽くすことができない状況となっていることが散見されている。

これを改善するため、平成27年度において、博士前期課程における領域の再編を検討し、平成28年度入学生からは1専攻3領域（電子情報通信工学領域、機械情報システム工学領域、人間情報システム工学専攻）とすることとした。この再編により、各領域における教育体制が、情報工学部3学科の学士課程教育との連続性を担保すると同時に、1専攻の利点を生かしつつ、他領域の学問分野との交流（授業化網の履修、異なる視点からの研究指導）が従来以上に活発になるような学生指導体制を整備した。3領域に再編した直後の入学生となる平成28年度入学生の履修状況を表3に示す。表3では、各領域の所属学生及び授業科目を、「情報系」と「その他」に区別し、学生の単位履修状況分布が表されている。

表3. 平成28年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
(太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す)

学生の所属領域		取得単位数の分布(%)							合計
		電子情報		機械情報		人間情報		共通	
		情報系	その他	情報系	その他	情報系	その他		
電子情報	情報系	30.0	70.0						100.0
	その他	14.3	73.8	6.0	6.0				100.0
機械情報	情報系	11.3	10.0	35.0	22.5	12.5		8.8	100.0
	その他	1.8	6.1	28.9	51.3	5.3	1.2	5.3	100.0
人間情報	情報系				40.0	20.0	30.0	10.0	100.0
	その他		1.1	3.2	17.2	23.7	53.8	1.1	100.0
開講単位数		9.8	26.1	15.2	21.7	8.7	15.2	3.3	100.0

表1に示す3専攻最後となる平成24年度入学生では、専攻を越えた単位取得が非常に低調であった。しかし、表3に示す1専攻3領域となった平成28年度入学生では、機械情報システム工学領域の学生を筆頭に、領域を越えた単位取得が活発に行われている。また、表3より、学生は、所属領域の授業科目を中心として他領域への履修を行っていることもわかり、表2に示す1専攻5領域での漫然とした履修行動が解消されていることも明らかである。

さらに、大学教育開発センターが、9月20日(火)～23日(金)に3研究科共通講義として学内で開催した「プロジェクトマネジメント実践論」に16名の1年次生が参加し、他研究科の大学院生とのグループワーク等を通じて自己のキャリアアップにつなげることができた。

3-2-1-2 システム工学専攻（博士後期課程）

博士後期課程は、従来より1専攻として、電子情報通信工学大講座、機械情報システム大講座、人間情報システム工学大講座の3大講座での指導体制をとってきた。しかしながら、博士前期課程の1専攻化により、講座制から領域制への転換を図り、前述のとおり、領域制の利点を生かした柔軟な指導体制を整備したことを受け、博士後期課程においても大講座制から領域制への転換を平成27年度に検討し、平成28年度入学生より、3領域制による学生指導体制とした。併せて、情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推進するため、従来の主指導・副指導教員に加えて、主指導教員とは専門分野の異なる教員を指導体制に加えることができる研究アドバイザー制度を導入し、2名の大学院学生に対して研究アドバイザーを割り当てた。また、社会人が学びやすい環境を整えることを目指し、平成27年度には早期修了要件を明確に定め、平成28年度入学生より修了要件を12単位に引き下げた。さらに、留学生及び社会人を対象とした秋入学制度を導入した。

3-2-2 連携大学院

情報系工学研究科では、岡山県内の公共機関及び企業と連携協定を締結し、学外の研究者による研究指導を受けることができる体制を整えている。平成28年度は5名の大学院学生が岡山県工業技術センターで研究の一部を遂行した。

3-2-3 学外活動

従来より、学生に対しては、研究成果の学外口頭発表、論文投稿を奨励するのみでなく、他大学大学院生との交流、各種コンテストへの参加を推奨している。平成28年度は、以下のよう

- (1) 岡山大学で工学部・経済学部の合同授業科目として開講されている「ものづくり経営論」を2名の博士前期課程1年次生が受講し、ものづくり企業幹部からの実践的な知見を得るとともに、学生のキャリア形成に資することができた。
- (2) 情報工学部は、文部科学省「情報技術人材育成のための実践教育ネットワーク形成事業」に大阪大学を中心として選定された「分野・地域を越えた実践的情報教育協働ネットワーク(enPiT)」の組込みシステム分野(enPiT Emb：名古屋大学事業発展型OJL(On the Job Learning))及びビジネスアプリケーション分野(enPiT BizApp：愛媛大学PBL)に参加大学として参画しており、平成27年度に引き続き、博士前期課程学生計6名が参加し、名古屋大学、愛媛大学をはじめとする他大学大学院学生と組込みシステムに関するツール開発あるいは実証実験、GPSを利用したAndroidアプリケーション製作に携わった。

さらに、今年度からスタートした文部科学省「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成事業」(第二期enPiT)において、情報工学部は、組込みシステム分野に連携大学として、より本格的に参画することとしている。また、ビジネスシステムデザイン

分野では、グループ活動型学習の教育手法の開発を目的としたFD活動を、愛媛大学と共に実施し、7名の教員が愛媛大学で開催されたアイデアソンへ参加した。

各種の学外コンテストに博士前期課程学生が参加した。第11回コンピュータ大貧民大会では、1名が敢闘賞を受賞した。

3-3 デザイン学研究科

3-3-1 入試科目の変更

研究科入試において、学力を図る科目として「英語読解」から「日本語による小論文」に変更した。本学の指針の一つにあるグローバル化への対応は、進学後の英語教育が対応することとし、受験時の学生の思考力を測ることを重要視したためである。また、留学生への試験科目配点を別途設定するなど、公平性への配慮も行う一方で、入学後の研究と指導を考慮し、受験時における日本語能力レベルについて募集要項に記載した。取組については、応募者が少ないことから成果の検証まで至っていないが、海外、学外からの応募者もあったことから、想定された課題への対応は一応解決できたと考える。

3-3-2 キャリア支援

専門研究者としての意識を高めさせる目的で、昨年度から開始した研究科生の授業TA雇用は、学部生の学修モチベーションを向上させる効果もあることから、今年度は初年度教育授業「フレッシュマン就業力セミナー」以外の専門教育においても積極的に雇用し拡充を図った。また、授業課題として地域企業との協働によるプロジェクトに係らせることで、社会におけるデザインの専門性について考察する機会を与えた。

3-4 まとめと課題

3-4-1 保健福祉学研究科

大学院のグローバル教育の推進に関連して、海外特別奨学生として平成28年度のインドネシアハサヌディン大学から栄養学大講座への1名の受け入れ（指導教員：伊東秀之教授）に引き続き、平成29年度は中国南昌大学からの留学生1名の栄養学大講座への受け入れ（指導教員：山下広美教授）を行い、共同研究を進める予定となったが、これに加えて博士前期課程においても海外特別入試を活用して中国南昌大学より学生1名が栄養学専攻に入学し、山下広美教授の指導のもとで研究を進める予定となるなど、新制度を活用した留学生の増加は順調に進んでいる。一方で、平成29年度は栄養学専攻で入学者が定員を下回っており、今後は本学学生や社会人に本学教員の研究内容をわかりやすく伝えるなど、地道な広報活動を続けることも必要である。

3-4-2 情報系工学研究科

平成25年度の博士前期課程1専攻化により達成された幅広い視野を持ち融合型研究を深化させる特徴を維持しつつ、学部教育で実現された3学科の特色を大学院教育に引き継ぐため、平成28年度から博士前期課程を3領域（電子情報通信工学領域、機械情報システム工学領域、人間情報システム工学領域）に再編した。その結果、所属領域の授業科目を中心として他領域への履修を行うようになり、院生の履修行動の改善が確認された。

博士後期課程については、情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推し進めるため、平成 28 年度より、3 大講座を 3 領域に改め専門分野間の垣根を低くすると共に、専門分野以外の教員を指導体制に加える研究アドバイザー制度を導入した。平成 28 年度は、2 名の大学院学生に対して研究アドバイザーを配置し、異なる分野の観点から助言を行った。

3-4-3 デザイン学研究科

平成 27 年度に引き続き、学部生への大学院進学への魅力付けを促すために、学部生の教育場面において、大学院生と教育的接点を増やす試みを行っているが、研究科全体としては十分な成果を出し切れていない。そのため、次年度は TA が参加する対象科目数を増やし、重点的に取組を継続する計画である。また、海外、学外からの応募を増やすためにも、国際交流協定校からの留学生の受入体制の充実、学会を含めた学外発表への積極的な参加を促していくことが課題になる。

造形デザイン学専攻科では、平成 29 年度から 1 領域制への移行するため、科目名の見直しを含めたカリキュラムの大幅な変更を行ったが、成果についての検証は次年度以降になる

4 大学院における研究活動

4-1 概要

本学大学院では、研究科学生において社会進出する際に高度な専門性を備えた職業人あるいは研究者として活躍できるよう、教員による研究指導の過程において、関係する学会での研究発表や論文投稿及び作品発表を奨励している。その範囲は国内、国際を問わず多岐にわたっているが、学生募集とも絡む課題として学生のモチベーション高揚のための取組でもあることから、より一層周知が図られるべき活動であるといえる。

4-2 保健福祉学研究科

4-2-1 看護学専攻（博士前期課程）

4-2-1-1 学会発表

(1) 国内学会

1. 就学前発達障がい児支援事業施策化の過程（指導教員：二宮一枝）河田恵子，二宮一枝：日本公衆衛生学会，大阪（2016 年 10 月 26-28 日）
2. 療育機関の専門家に対する援助要請の実態；療育機関を利用する幼児の母親を対象として（指導教員：二宮一枝）藤田彩見，矢島祐樹，二宮一枝：日本公衆衛生学会，大阪（2016 年 10 月 26-28 日）
3. 早島町の自主的な介護予防活動 ～体操の普及・継続に向けて～（指導教員：二宮一枝）石井美帆，大内山清香，岡田優希，清水佑季子，田中千晶，玉木利矢子，萬木早苗，本山智，二宮一枝，福原弘子；第 1 回岡山県地域包括ケアシステム学会学術大会，岡山（平成 28 年 9 月 11 日）
4. 医療処置を必要とする高齢療養者の在宅療養継続に難する訪問看護師の実践知（指導教員：名越恵美）山形真由美，名越恵美，難波峰子；第 36 回日本看護科学学会学術集会，東京（2016 年 12 月 10-11 日）
5. Mastery 獲得に関する若年性脳梗塞患者の体験（指導教官：名越恵美）八木一江，名越恵美；日本看護研究学会第 42 回学術集会，つくば（2016 年 8 月 20-21 日）

(2) 国際学会

1. A cross-sectional survey of future support needs among pregnant women in Japan. (指導教員：井上幸子) Iwasa H, Takai M, Mishima H, Inoue S. ; The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong, China (March 9-10, 2017)
2. Measuring the ethical sensitivity of clinical nurses in Japan: using four clinical vignettes (指導教員：山口三重子) Misako Taguri, Mieko Yamaguchi, Sachiko Takahashi, Natsuyo Nishimura, Chieko Yamamoto ; The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong, China (March 9-10, 2017)
3. Literature Search Finding on association between postpartum depression and sleep disturbance (指導教員：池田理恵) Yuki Okada, Rie Ikeda : The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong, China (March 9-10, 2017)
4. What Master's Degree Nursing Students Learned about Ethical Sensitivity from Discussions on a Clinical Vignette. (指導教員：名越恵美) Yuka Terashita, Mika Okuda, Aiko Kabutoya, Naoka Koyama, Megumi Nagoshi, et al: The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong, China (March 9-10, 2017)

4-2-1-2 論文発表

(1) 国内誌

1. Characteristics of leaders managing community-based preventive long-term care services (指導教員：二宮一枝) Etuko HIRANO, Kiyomi OTA, Kazue NINOMIYA : Kawasaki Journal of Medical Welfare (in press)
2. がん患者のレジリエンスに関する研究の概観－国内文献からの検討－ (指導教員：名越恵美) 遠藤康恵, 名越恵美 ; インターナショナル Nursing Care Reseach 15 巻 4 号 (ページ未定) (2016)

4-2-2 栄養学専攻 (博士前期課程)

4-2-2-1 学会発表

(1) 国内学会

川上貴代教授が指導した博士前期課程の学生 1 名は、平成 28 年 6 月に開催された日本栄養改善学会中国支部大会においてポスター発表を行い、栄養・実践研究賞を受賞した。

1. 朝食の食事バランスと児童・保護者の食態度との関連, (指導教員：川上貴代) 次田実穂, 富谷圭子, 塩津敦子, 中桐規代, 金子幸江, 久保田恵, 川上貴代, 日本栄養改善学会中国支部大会, 岡山県立大学, 平成 28 年 6 月 26 日, ポスター発表
2. 瀬戸内海の 3 つの地域で養殖されたマガキ含有成分の季節変動及び養殖地域による違い, 磯野千晶, 近藤千尋, 柗岡, 吉村征浩, 花田恭孝, 伊東佳邦, 平澤久紀, 山下広美, (一社) 日本家政学会第 68 回大会, 金城学院大学, 2016 年 5 月 29 日, 口頭発表
3. 酢酸摂取が腸内細菌叢組成に与える影響に関する研究, 岩田三有紀, 丸田ひとみ, 吉村征浩, 田中晃一, 入江康至, 山下広美, 第 49 回日本栄養・食糧学会 中国・四国支部大会, 徳島大学, 2016 年 11 月 12 日, 口頭発表
4. ギャクロ葉に含まれる血糖値上昇抑制成分の探索研究 (指導教員：伊東秀之) 赤井衣里阿, 河辺聡子, 我如古菜月, 好村守生, 天倉吉章, 伊東秀之, おかやまバイオアクティブ研究会第 49 回シンポジウム, 平成 28 年 6 月 17 日, 川崎医科大学, 口頭, ポスター発表
5. ギャクロ葉の α -glucosidase 阻害成分の探索 (指導教員：伊東秀之) 赤井衣里阿, 河辺聡子, 我如古菜月, 好村守生, 天倉吉章, 伊東秀之, 日本生薬学会第 63 回年会, 平成 28 年 9 月 24 日～25 日, 富山, ポスター発表

6. ヒシに含まれる抗糖化成分, (指導教員: 伊東秀之) 伊東秀之, 加藤奈々, 河邊聡子, 我如古菜月, 上村知宏, OPU フォーラム 2016, 岡山県立大学, 平成 28 年 5 月 27 日, ポスター発表
 7. 慢性炎症性疾患治療への応用を目指した抗ロイコトリエン抗体に関する基礎研究 (指導教員: 高橋吉孝) 高橋吉孝, 大河内脩史, 森香子, 神崎圭太, 川上祐生, 山本登志子, 第 7 回川崎医科大学 学術集会, 川崎医科大学, 平成 28 年 8 月 6 日, ポスター発表
 8. 嚥下調整食開発に向けた自然薯低温乾燥粉末の物性と嚥下機能評価 (指導教員: 山本登志子) 田中充樹, 津嘉山泉, 目賀拓斗, 戸田圭祐, 中村孝文, 山本登志子, 第 48 回おかやまバイオアクティブ研究会シンポジウム第 14 回学生プレゼンテーション, 川崎医療福祉大学, 岡山, 平成 28 年 6 月 17 日, 口頭・ポスター発表
 9. 自然薯抽出物と含有成分ジオスゲニンのプロスタグランジン E2 合成系抑制効果 (指導教員: 山本登志子) 目賀拓斗, 津嘉山泉, 戸田圭祐, 伊東秀之, 川上祐生, 高橋吉孝, 荒川俊哉, 山本(鈴木)登志子, 第 89 回日本生化学会大会, 仙台国際センター/東北大学 川内北キャンパス, 宮城, 平成 28 年 9 月 25-27 日, ポスター発表
 10. ウシ生乳由来リポカリン型プロスタグランジン D 合成酵素の精製と酵素学的性質 (指導教員: 山本登志子) 川井恵梨佳, 田中充樹, 瀬来由衣, 戸田圭祐, 目賀拓斗, 川上祐生, 高橋吉孝, 木本眞順美, 山本圭, 村上誠, 山本登志子, 第 70 回日本栄養・食糧学会大会, 武庫川女子大, 兵庫, 平成 28 年 5 月 13-15 日, 口頭発表
 11. 自然薯のプロスタグランジン E2 合成系抑制と含有成分ジオスゲニンの効果 (指導教員: 山本登志子) 目賀拓斗, 戸田圭祐, 津嘉山泉, 伊東秀之, 川上祐生, 高橋吉孝, 木本眞順美, 荒川俊哉, 山本登志子, 日本農芸化学会 2016, 平成 28 年 3 月 27-30 日, 札幌, ポスター発表
 12. 嚥下調整食開発に向けた自然薯低温乾燥粉末の物性ならびに嚥下機能評価 (指導教員: 山本登志子) 田中充樹, 大野智子, 野村奈央, 津嘉山泉, 戸田圭祐, 目賀拓斗, 川井恵梨佳, 中村孝文, 木本眞順美, 山本登志子, 日本農芸化学会 2016, 平成 28 年 3 月 27-30 日, 札幌, ポスター発表
 13. イチゴ品種‘桃薫’のヒスチジン脱炭酸酵素の活性阻害 (指導教員: 新田陽子) 森美幸, 菊崎泰枝, 宇野雄一, 野口裕司, 小森博文, 植野洋志, 新田陽子, 日本生物高分子学会, 2016 年 9 月 9-10 日, 東邦大学 (千葉), 口頭発表
 14. ガロタンニン, エラジタンニンによるヒスチジン脱炭酸酵素の活性阻害の解析 (指導教員: 新田陽子) 森美幸, 菊崎泰枝, 植野洋志, 小森博文, 新田陽子, 日本ビタミン学会第 68 回大会, 2016 年 6 月 17-18 日, 富山国際会議場, 口頭発表
- (2) 国際学会
1. Seasonal variations and regional differences in major components of oyster from Seto Inland Sea (指導教員: 山下広美) Chiaki Isono, Sari Masaoka, Chihiro Kondo, Ryota Hishimo, Hitomi Maruta, Yukihiro Yoshimura, Yasutaka Hanada, Yoshikuni Ito, Hisanori Hirasawa, Hiromi Yamashita, The 10th Joint Conference on Nutrition between Nanchang, Okayama Prefectural, Sichuan and Woosong Universities, Oct 8, 2016, ポスター発表
 2. Effects of Acetic Acid on Composition of Gut Microbiota in Rat (指導教員: 山下広美), Miyuki Iwata, Hitomi Maruta, Yukihiro Yoshimura, Koichi Tanaka, Yasuyuki Irie, Yoshitaka Takahashi, Hiromi Yamashita, The 10th Joint Conference on Nutrition between Nanchang, Okayama Prefectural, Sichuan and Woosong Universities, Oct 8, 2016, ポスター発表
 3. Polyphenols from flowers of *Magnolia coco* and their anti-aging activities (指導教員: 伊東秀之) Nana Kato, Satoko Kawabe, Natsuki Ganeko, and Hideyuki Ito, The 10th Joint Conference on Nutrition and Food Science, 8 October, 2016, Daejeon, Korea, ポスター発表

4. Proanthocyanidin in skins of red-kerneled rice (指導教員：伊東秀之) Saki Watanabe, Natsuki Ganeko, and Hideyuki Ito, The 10th Joint Conference on Nutrition and Food Science, 8 October, 2016, Daejeon, Korea, ポスター発表
5. Simultaneous quantification of polyphenols in *Geranium thunbergii* by quantitative NMR method (指導教員：伊東秀之) Yurie Ito, Natsuki Ganeko, and Hideyuki Ito, The 10th Joint Conference on Nutrition and Food Science, 8 October, 2016, Daejeon, Korea, ポスター発表
6. Purification and characterization of bovine lipocalin-type prostaglandin D synthase from cow's raw milk (指導教員：山本登志子) Toshiko Suzuki-Yamamoto, Mitsuki Tanaka, Erika Kawai, Keisuke Toda, Takuto Mega, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Kei Yamamoto, Makoto Murakami. 57th International Conference on the Bioscience of Lipids, Chamonix-Mont-Blanc, France, Sep. 4-8, 2016, ポスター発表.
7. Effect of *Dioscorea japonica* extract and diosgenin on prostaglandin E2 synthetic pathway (指導教員：山本登志子) Takuto Mega, Izumi Tsukayama, Keisuke Toda, Hideyuki Ito, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Toshiya Arakawa, Toshiko Suzuki-Yamamoto. The 10th Joint Conference on Nutrition and Food Science, Woosong University, Korea, Oct. 8, 2016, 口頭発表.

4-2-2-2 論文発表

(1) 国内誌

1. 岡山県産自然薯の新規食品機能性の探索とその高機能性をいかした嚙下食の開発. (指導教員：山本登志子) 山本登志子, 津嘉山泉, 田中充樹, 戸田圭祐, 目賀拓斗, 中村孝文, 木本眞順美, 山陽技術雑誌, 63, 2016, 印刷中

(2) 国際誌

1. The Y54(L)W mutation of anti-leukotriene C4 single-chain antibody increases affinity to leukotriene E4 (指導教員：高橋吉孝) Yuki Kawakami, Mai Kinoshita, Yoshiko Mori, Shuji Okochi, Shiori Hirano, Ichika Shimoda, Keita Kanzaki, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Masumi Kimoto, Mitsuaki Sugahara, Tetsuya Hori, Hiromichi Saino, Masashi Miyano, Shozo Yamamoto, Yoshitaka Takahashi, The Journal of Biochemistry in press (2016).

4-2-3 保健福祉学専攻（博士前期課程）

4-2-3-1 学会発表

(1) 国内学会

1. 岡山県における地方改良運動に関する研究 (指導教員：井村圭壯) 片山貴夫, 中国四国社会福祉史学会研究大会, 岡山, 平成 28 年 10 月 22 日, 口頭発表.
2. 嚙下調整食開発に向けた自然薯低温乾燥粉末の物性と嚙下機能評価 (指導教員：中村孝文) 田中充樹・津嘉山泉・目賀拓斗・戸田圭祐・中村孝文・山本登志子, おかやまバイオアクティブ研究会シンポジウム, 岡山, 平成 28 年 10 月 6 日, 口頭発表.
3. 嚙下音及び筋電図を用いた嚙下調整食評価系の構築 (指導教員：中村孝文) 田中充樹・中村孝文・山本登志子, 第 39 回日本生体医工学学会中国四国支部大会, 徳島, 平成 28 年 10 月 15 日, 口頭発表.
4. 認知症の人とのかかわり状況からみた民生委員の類型化とその特徴 (指導教員：竹本与志人) 三上舞・杉山 京・中尾竜二・竹本与志人, 第 17 回日本認知症ケア学会大会, 兵庫, 平成 28 年 6 月 4/5 日, 口頭発表.

4-2-3-2 論文発表

(1) 国内誌

1. 介護福祉士の職場特性と個人要因とワーク・エンゲイジメントとの関連（指導教員：谷口敏代）時實亮, 厚生学の指標, 63 (12), 7-13, 2016.
2. 介護福祉職のワーク・エンゲイジメントに関する文献検討（指導教員：谷口敏代）時實亮, 介護福祉学, (印刷中).
3. 嚥下音及び筋電図を用いた嚥下調整食評価系の構築（指導教員：中村孝文）田中充樹・中村孝文・山本登志子, 第39回日本生体医工学会中国四国支部大会講演抄録(徳島), 22, 2016.

4-2-4 保健福祉科学専攻（博士後期課程）

4-2-4-1 看護学大講座

(1) 学会発表

1. ICU入室患者の妄想的記憶と退院後の生活についての調査（指導教員：高橋徹），藤田知幸, 高橋 徹, 第43回日本集中治療医学会学術集会, 神戸, 2016年2月11~14日
2. 感染対策チームメンバーのチームプロセスに関連する要因(指導教員：山口三重子), 山本智恵子, 矢嶋裕樹, 大月説子, 土井英子, 佐々木順造: 第36回日本看護科学学会学術集会, 東京, 2016. 12. 11.
3. 電子カルテ教育システムを活用した双方向性授業への取り組み～ロールプレイングによる技術演習の実際～(指導教員：山口三重子). 山本智恵子, 吉田美穂, 杉本幸枝, 宇野文夫, 上山和子, 土井英子：日本看護学教育学会第26回学術集会, 東京, 2016. 8. 23.

(2) 論文発表

1. 患者の看護介入評価を測定する尺度の信頼性・妥当性の検討(指導教員：荻野哲也)福武まゆみ, 木村麻紀, 實金栄, 住吉和子, 平松貴子, 太湯好子: 川崎福祉学会誌, 25 (2), 259-267, (2016)

4-2-4-2 栄養学大講座

(1) 学会発表

1. 骨格筋に及ぼす酢酸の継続的な摂取の影響についての検討, 丸田ひとみ, 阿部怜奈, 荒岡千尋, 吉村征浩, 木本眞順美, 高橋吉孝, 山下広美, 第70回日本栄養・食糧学会大会, 武庫川女子大学, 2016年(平成28年)5月14日, 口頭発表
2. Activation of AMP-activated Protein Kinase and Stimulation of Energy Metabolism by Acetic Acid in L6 Myotube Cells (指導教員：山下広美) Hitomi Maruta, Yukihiro Yoshimura, Aya Araki, Masumi Kimoto, Yoshitaka Takahashi, Hiromi Yamashita, The 10th Joint Conference on Nutrition between Nanchang, Okayama Prefectural, Sichuan and Woosong Universities, Oct 8, 2016, ポスター発表
3. 非アルコール性脂肪性肝炎モデルマウス肝における血小板型 12S-リポキシゲナーゼの発現上昇(指導教員：高橋吉孝) 森香子, 大槻朱美, 川上祐生, 神崎圭太, 山本登志子, 川上貴代, 木本眞順美, 山下広美, 高橋吉孝, 第89回日本生化学会大会, 仙台国際センター, 平成28年9月25日~9月27日, ポスター発表
4. 非アルコール性脂肪性肝炎モデルマウス肝臓における白血球型 12-リポキシゲナーゼの発現上昇(指導教員：高橋吉孝) 森香子, 新庄望良野, 川上祐生, 神崎圭太, 山本登志子, 川上貴代, 木本眞順美, 山下広美, 高橋吉孝, おかやまバイオアクティブ研究会, 第49回シンポジウム, 川崎医科大学, 平成28年6月17日, 口頭発表
5. 慢性炎症性疾患の新規治療法の開発を目指す基礎研究(指導教員：高橋吉孝) 高橋吉孝, 川上祐生, 森香子, 大河内脩史, OPUフォーラム2016, 岡山県立大学, 平成28年5月27日,

ポスター発表

6. 非アルコール性脂肪性肝炎進展における 12-リポキシゲナーゼの役割 (指導教員: 高橋吉孝) 森香子, 大槻朱美, 川上祐生, 神崎圭太, 山本登志子, 川上貴代, 木本眞順美, 山下広美, 辻英明, 高橋吉孝, 第 70 回日本栄養・食糧学会大会, 武庫川女子大学, 平成 28 年 5 月 13 日~5 月 15 日, 口頭発表
7. Identification of 12-lipoxygenase isozyme in NASH model mice (指導教員: 高橋吉孝) Yoshiko Mori, Keita Kanzaki, Yuki Kawakami, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Hiromi Yamashita, Yoshitaka Takahashi, The 10th Joint Conference on Nutrition between Nanchang, Okayama Prefectural, Sichuan and Woosong Universities, Deajeon, Korea, October 8, 2016, ポスター発表
8. 皮膚癌モデルマウスにおける自然薯の抗炎症・抗腫瘍効果 (指導教員: 山本登志子) 津嘉山泉, 武田泰典, 戸田圭祐, 目賀拓斗, 川上祐生, 高橋吉孝, 木本眞順美, 山本圭, 村上誠, 山本登志子. 日本農芸化学会 2016, 平成 28 年 3 月 27-30 日, 札幌. ポスター発表
9. Effect of *Dioscorea japonica* extract and diosgenin on prostaglandin E2 synthetic pathway (指導教員: 山本登志子) Izumi Tsukayama, Takuto Mega, Keisuke Toda, Hideyuki Ito, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Toshiya Arakawa, Toshiko Suzuki-Yamamoto. 57th International Conference on the Bioscience of Lipids, Chamonix-Mont-Blanc, France, Sep. 4-8, 2016. ポスター発表.

(2) 論文発表

1. Activation of AMP-activated Protein Kinase and Stimulation of Energy Metabolism by Acetic Acid in L6 Myotube Cells (指導教員: 山下広美) Hitomi Maruta, Yukihiko Yoshimura, Aya Araki, Masumi Kimoto, Yoshitaka Takahashi, Hiromi Yamashita, PLOS ONE, 11 (6) (2016).
2. Molecular Cloning of Rat *acss3* and Characterization of Mammalian Propionyl-CoA Synthetase in the Liver Mitochondrial Matrix, Yoshimura Y, Araki A, Maruta H, Takahashi Y and Yamashita H, The Journal of Biochemistry, 2016 in press
3. Changes in the 5' -AMP concentration of skeletal muscles on acetic acid treatment under fed or starved conditions in rats (指導教員: 山下広美) Araki A, Yoshimura Y, Maruta H, Kimoto M, Takahashi Y and Yamashita H, Annals of Obesity & Disorders, 1(3): 1013 (2016).
4. Effect of exercise training with intake of acetic acid on lipid metabolism and endurance performance (指導教員: 山下広美) Araki A, Yoshimura Y, Yamaguchi Y, Maruta H, Kimoto M, Takahashi Y and Yamashita H, 岡山県立大学保健福祉学部紀要印刷中 (2017) .
5. Ellagitannin Dimers from the Pericarps of *Trapa japonica* (指導教員: 伊東秀之) Satoko Kawabe, Natsuki Ganeko, and Hideyuki Ito, The Japanese Journal of Pharmacognosy, in press (2017).

4-2-4-3 保健福祉学大講座

(1) 学会発表

1. 認知機能による高齢者の認知症に関するスクリーニング検査の同時的妥当性の検討 (指導教員: 村社卓) 犬飼真歩, 石部茉里江, 中島望, 島村慶彦, 出井涼介, 中嶋和夫, 第 24 回日本介護福祉学会大会, 長野, 平成 28 年 9 月 3/4 日, 口頭発表.
2. 加齢またはアルツハイマー病が語彙意味機能におよぼす影響—Feature listing 課題による検証— (指導教員: 中村光) 津田哲也, 第 42 回日本コミュニケーション障害学会, 千葉, 平成 28 年 5 月 14/15 日, 口頭発表.
3. 加齢またはアルツハイマー病が語彙・意味機能に及ぼす影響—意味的プライミング法による検討— (指導教員: 中村光) 津田哲也, 第 17 回日本言語聴覚学会, 京都, 平成 28 年

6月10/11日,口頭発表.

4. 乳幼児期の親を対象とした育児ソーシャルサポート尺度の開発—子育て家庭における育児ソーシャルサポートの実態把握— (指導教員:佐藤和順) 柏まり,日本保育学会第69回大会,東京,平成28年5月7/8日,口頭発表.
5. 保育施設を拠点とした育児ソーシャルサポートの可能性 (指導教員:佐藤和順) 柏まり・佐藤和順,日本家庭教育学会第31回大会,東京,平成28年8月20日,口頭発表.
6. 外国籍の子どもの教育・保育の質を保障する支援体制構築に関する研究—0県内保育施設における就園状況を手がかりにして— (指導教員:佐藤和順) 柏まり・佐藤和順,中国四国教育学会第68回大会,徳島,平成28年11月5/6日,口頭発表.
7. 乳幼児期の子育て家庭を支える育児ソーシャルサポートに関する研究 (指導教員:佐藤和順) 柏まり・佐藤和順,日本乳幼児教育学会第26回大会,愛知,平成28年11月26/27日,口頭発表.
8. 幼児期における宗教的情操感育成のための海外研究 (指導教員:佐藤和順) 柏まり,日本仏教教育学会第25回学術大会,愛知,平成28年12月3日,口頭発表.
9. 地域包括支援センター専門職における認知症が疑われる高齢者への受診援助に関する研究—鑑別診断のための受診の実現に向けた援助に関する質的データの分析— (指導教員:竹本与志人) 杉山 京・広瀬美千代・神部智司・竹本与志人,第17回日本認知症ケア学会大会,兵庫,平成28年6月4/5日,口頭発表.
10. 認知症が疑われる高齢者に対する民生委員の受診援助に関する文献的検討 (指導教員:竹本与志人) 中尾竜二・杉山 京・三上舞・竹本与志人,第17回日本認知症ケア学会大会,兵庫,平成28年6月4/5日,口頭発表.

(2) 論文発表

1. Effects of hassles related to wheeled walking aid use on frequency of outings and quality of life among the elderly living at home (指導教員:村社卓) T. Mihara, M. Kirino, T. Murakoso, J. S. Park, T. Okuno, K. Nakajima, 日本保健科学学会誌, 18 (4), 210-222, 2016.
2. 在宅で高齢者を介護する家族のソーシャルサポートと介護負担感の関連性. (指導教員:村社卓) 桐野匡史, 栗田菜摘, 出井涼介, 松本啓子:社会医学研究, 33(2), 51-60, 2016.
3. Factors Related to Falling among the Elderly (指導教員:村社卓) Nakashima N, Inukai M, Ishibe M, Kodoi N, Dei R & Koyama Y, BULLETIN of RYOBI General Research Institute of Community Care. 2016;1:1-10.
4. Contemporary Validity of the Japanese Version of the AD8 (指導教員:村社卓) Nakajima K, Inukai M, Ishibe M, Dei R, Hayashi Y, Nakashima N, Souda A & Okabe K, BULLETIN of RYOBI General Research Institute of Community Care. 2016;1:19-29.
5. Examination of the Construct Validity by Factor Structure Model of the Dementia Assessment Sheet in the Community-based Integrated Care System (指導教員:村社卓) Okamoto T, Dei R, Nakashima N, Yamasaki H, Okabe K & Nakajima K, BULLETIN of RYOBI General Research Institute of Community Care. 2016;1:31-42.
6. Influence of Surplus Residential Space Environment in Region on Stress Cognition (指導教員:村社卓) Shimamura Y, Dei R, Kirino M, Koyama Y & Nakajima K, BULLETIN of RYOBI General Research Institute of Community Care. 2016;1:59-67.
7. 加齢またはアルツハイマー病が語彙意味機能におよぼす影響: feature listing 課題による検証 (指導教員:中村光) 津田哲也, コミュニケーション障害学, 33(1), 1-7, 2016.
8. Effects of aging and Alzheimer's disease on lexical-semantics: A semantic priming study (指導教員:中村光) 津田哲也, 岡山県立大学保健福祉学部紀要(英文), 2017. (発行予定).
9. 地域包括支援センター専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者への受診援助におけるかかりつけ医との連携実践状況の類型化 (指導教員:竹本与志人) 杉山 京・竹本

与志人, 日本在宅ケア学会誌, 20 (1), 日本在宅ケア学会, 39-46, 2016.

10. 地域包括支援センターが受診援助を行っている認知症の疑いのある高齢者の援助依頼者とその遠近構造 (指導教員: 竹本与志人) 中尾竜二・杉山 京・三上 舞・佐藤ゆかり・桐野匡史・神部智司・竹本与志人, 厚生の指標, 63 (11), 財団法人厚生統計協会, 39-45, 2016.

4-3 情報系工学研究科

博士前期課程では, システム工学専攻として3領域 (平成27年度以前入学生は5領域) のいずれかに, 博士後期課程では, システム工学専攻として3領域 (平成27年度以前入学生は3大講座) のいずれかに属しながら研究活動を展開している. 平成28年度の大学院博士前期課程学生による研究発表実績を表1に示す.

4-3-1 システム工学専攻 (博士前期課程)

表1 博士前期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H28年度)	件数 (H27年度)	件数 (H26年度)
査読付き学術論文	21	14	7
国際会議録	31	20	21
全国大会発表	97	77	88
支部大会発表	52	64	44
学術表彰・受賞	11	11	17

昨年度と比較すると, 支部大会発表は12件減少しているものの, 査読付き学術論文が7件, 国際会議録が11件, 全国大会発表が20件増加している. また受賞件数は昨年度と同じ11件であり, その主な内容は, The Thirteenth International Conference on Industrial Management Excellent Paper Award, 2016 International Conference on Analog VLSI Circuits Student Paper Award, 第11回コンピュータ大貧民大会敢闘賞, 第18回IEEE広島支部学生シンポジウム (HISS 18th) 優秀研究賞3件, 平成28年度電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞2件, 電子情報通信学会2016年総合大会電子情報通信学会2016年総合大会情報システムソサイエティ・学生ポスターセッション優秀ポスター賞, 軽金属学会中国四国支部優秀講演賞, 自動車技術会大学院研究奨励賞である.

4-3-2 システム工学専攻 (博士後期課程)

博士後期課程では, ほとんどが社会人学生であり, 本年度は業務多忙等による休学者が多く, 必ずしもその活動は活発ではないが, 査読付き学術論文2件, 国際会議録4件, 全国大会発表4件, 国際会議での受賞1件 (The Thirteenth International Conference on Industrial Management Excellent Paper Award) がある. また, 本年度は, 博士の学位を取得し, 研究者として1名の大学院生がそのスタートを切った.

今後は, 入学者数の増加及び休学者の減少も含め, 研究の活性化が必要である.

表2 博士後期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H28年度)	件数 (H27年度)	件数 (H26年度)
査読付き学術論文	2	1	2
国際会議録	4	0	3
全国大会発表	4	1	3
支部大会発表	0	0	0
学術表彰・受賞	1	0	1

4-4 デザイン学研究科

デザイン工学専攻では、学生数の減少に伴い、従来のような研究成果は挙げられなかったが、大学院在籍中に米国に語学留学を行った学生は、海外での留学体験を研究テーマに結び付けるなどグローバルな視点での教育成果が見られた。また、デザイン工学科より進学の学生が、学部での研究活動を、COC+事業（地域創生コモンズかさおか）で実現し、地域連携での教育成果に結びつけた。

造形デザイン学専攻では、修了要件である論文と作品において質の向上を目指し、研究指導の一環として学会発表等や学外との連携を効果的に用い、学生の研究への動機付けを図った。実績として、学会（中四国地域開催）における研究発表が4件、産学官連携プロジェクト4件があった。

4-5 まとめと課題

4-5-1 保健福祉学研究科

本年度も多くの研究成果を発表したが、今後は研究成果の国際誌への投稿ならびに海外国際学会での研究発表のさらなる促進を図るため、研究レベルをさらに高めていくとともに、発表の数のみでなく研究の質が評価されるような仕組みの整備が必要である。

4-5-2 情報系工学研究科

博士前期課程の研究活動は順調である。一方、博士後期課程については、休学者の多いことが大きな理由ではあるが、研究活動の活性化が望まれる。平成27年度には博士後期課程の早期修了要件を明確に定め、研究活動の活性化を図ると共に、既に研究業績を有する社会人の修学環境を整備した。また、休学者数の減少と入学者数の増加には社会人が学びやすい環境への改善が必要であり、平成28年度より、博士後期課程の修了要件を20単位から12単位に引き下げ、さらに、留学生及び社会人を対象とした秋期入学制度を整えた。これらの対策の結果、博士後期課程への入学者は、平成28年度は秋期入学者1名を含む2名となり、平成29年度4月には留学生1名を含む3名が入学予定であり、着実に成果を上げつつある。

4-5-3 デザイン学研究科

造形デザイン学専攻科では、産学連携や学外展示を中心にした活動を行い、従来並みの成果に結びつけてはいるものの、デザイン学研究科全体では、志願者数減少による定員割れ状

況が引き続き発生し、従来のような研究成果は挙げられなかった。第3期中期計画も直前に控えているため、研究科の専攻科構成や定員数の見直しなど抜本的な改革が課題となっている。

5 大学院における国際交流

5-1 概要

本学大学院では、各研究科のディプロマ・ポリシーにおいてグローバル人材の育成を掲げている。国際会議での研究発表等については前項に掲載しているが、本学の各研究科で推進した、大学院生の参加する授業プログラムやセミナー、共同研究ならびにワークショップ等について紹介する。特に学术交流協定を締結した大学との交流が、前年度に比べて増加しており、ディプロマ・ポリシーの十全な達成に向けて、今後さらに取組の拡充が期待される所である。

5-2 保健福祉学研究科

5-2-1 国際学术交流協定校教員による大学院講義

1. 国際保健看護学特論演習

日 程：2016年（平成28年）12月17日（土）

受講生：保健福祉学研究科博士前期課程国際保健看護学特論演習受講生2名

講義者：アシム・バイデェ医師

講義内容：ネパール伝統医療アーユルベータに関する講義

2. 母子保健看護学演習Ⅲ

日 程：2017年（平成29年）2月10日（金）

受講生：保健福祉学研究科博士前期課程母子保健看護学演習Ⅲ受講生6名、他

講義者：Justina Liu 助教授

Vivian Ngai 助教授

講義内容：Justina Liu 助教授 “The development of a pain management research programme for people with advanced dementia”

Vivian Ngai 助教授 “Postnatal depression”

この他、本学とトライアングル協定を結んでいる AMDA の職員による講義を下記の内容で受講した。

国際保健看護学特論（保健福祉学研究科博士前期課程看護学専攻授業科目）

日 程：2016年（平成28年）10月14日（金）・11月5日（土）

受講者：保健福祉学研究科博士前期課程国際保健看護学演習履修生2名、他2名

講義者：アルチャナ・シュレスタ・ジョシ（AMDA職員：10月14日、英語による講義）

ディワス・ラジュ・ボホラ（ネパール AMDA 内科医師、11月5日、英語による講義）

講義内容：「ネパールの保健・医療の現状と課題」「ネパール AMDA（ダマック）病院の概要、医療活動の紹介」

5-2-2 国際学術交流協定校との共同研究

栄養学大講座では、平成 28 年 1 月にインドネシア・ハサヌディン大学から特別研究員と受け入れた研究員が、平成 28 年度に海外特別奨学生として博士後期課程に入学し、共同研究を進めている。また、中国・南昌大学から 2 名の研究生を受け入れ、平成 29 年度からそれぞれ博士前期課程及び博士後期課程に入学し、研究指導を進める予定である。

5-3 情報系工学研究科

情報系工学研究科では国際会議での研究発表を推奨しており、平成 28 年度は第 2 章 2-3 で述べたように 35 件の実績を上げている。また、平成 28 年 9 月には中国四川大学の電気情報（情報）学院との国際交流ワークショップを本学で開催し、四川大学教員 6 名、本学教員 7 名が研究発表を行った。平成 28 年 11 月には中国上海交通大学で国際交流ワークショップを開催し、本学院生 7 名が研究発表を行った。平成 28 年 12 月には、同年 8 月に学術交流協定を締結した米国ポートランド州立大学を訪問し、今後の学術交流の進め方について打ち合わせを行った。平成 28 年 12 月には、タイ王国カセサート大学工学部と学術交流協定を締結した。平成 28 年 11 月 28 日～12 月 1 日には北京航空航天大学の計器科学及び光通信学工程学院の樊尚春教授ら 3 名が、平成 29 年 3 月 15 日～3 月 20 日には上海交通大学自動化工学科の蔡雲澤教授ら 4 名が本学において共同研究を行った。

5-4 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、大学院の定数割れ対策としての留学生確保を目的に、平成 27 年度大学間の学術交流協定を締結した 2 大学（台湾・国立雲林科技大学、メキシコ・モンテレイ工科大学）と平成 29 年度以降に学術交流協定を予定している 1 大学（フィンランド・ラハティ応用科学大学）との国際交流推進活動を 6 件実施した。また、新たに 8 月 31 日大学間の学術交流協定を締結した米国・ポートランド州立大学芸術学部との国際交流推進活動への準備を始めた。

具体的には、平成 28 年 9 月 9 日～10 月モンテレイ工科大学プエブラ校付属美術館で本学の教員・学生の作品展示会を実施した。また、本学の教員・学生はメキシコ滞在期間を利用して、モンテレイ工科大学の教員（3 名）・学生（5 名）との教育交流を行った。さらに 12 月 8～9 日には、モンテレイ工科大学デザイン学部より 2 名の教員が来校し、本学で特別講義を実施し、本学の教員・学生と交流を行った。

平成 29 年 3 月 14 日～3 月 18 日、本学教員（3 名）・学生（4 名）が雲林科技大学での教育研究交流を実施した。雲林科技大学からの参加学生は全員修士であった。

平成 28 年 5 月 9 日～5 月 15 日、本学教員（2 名）がラハティ応用科学大学に出張し、大学院を含めた教育環境やカリキュラムに関する調査を行った。また、2 月 9 日～2 月 10 日、3 月 15 日～3 月 17 日の 2 回に分けて、ラハティ応用科学大学の教授など関係者が来校し、本学でのワークショップを実施した。

平成 28 年 4 月 1 日～9 月 30 日、台湾国立雲林科技大学より、社会人学生（大学院博士後期課程在籍）を外国人客員研究員として受け入れた。受入期間内において、学部教育及び大学院中国留学生の修士研究での TA 指導を行い、本学学生の教育に指導面で尽力した。また、本学が所在する総社市との共同研究に参加し、地域発展にも貢献した。

5-5 まとめと課題

5-5-1 保健福祉学研究科

ネパール・トリブバン大学との交流各々に向け、H28年度は同大学医学部と本学保健福祉学部との間で新たに学部間学術交流協定を締結した。栄養学大講座では学術交流協定校であるインドネシア・ハサヌディン大学からの博士後期課程への留学生の受け入れに引き続き、平成29年度には学術交流協定校である中国・南昌大学から栄養学大講座と栄養学専攻にそれぞれ1名ずつ留学生を受け入れた。平成27年度に学部間学術交流協定を締結した香港理工大学看護学院は保健福祉学スタディーツアーの派遣先となり、平成29年度には本学での学生交流も計画されているなど、交流協定の実質化は着実に進行している。今後は交流のさらなる充実を目指し、国際的な共同研究ならびにグローバル教育への活用を進めていく必要がある。

5-5-2 情報系工学研究科

情報系工学研究科では、大学間協定校である中国・四川大学及び米国・ポートランド州立大学のみならず、独自に協定を締結した中国上海交通大学及びタイ王国・カセサート大学との学術交流も推進しており、これらを足掛かりに大学院生による国際交流のさらなる活性化を期待したい。

5-5-3 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、3大学（台湾・国立雲林科技大学、メキシコ・モンテレイ工科大学、米国・ポートランド州立大学）との学術交流協定を基盤に、大学院での留学生確保を目的に、平成28年度は、モンテレイ工科大学からの学部生（13名）の合同授業での受入、モンテレイ工科大学及び雲林科技大学への教員・学生の派遣を積極的に行った。また、雲林科技大学からの大学院博士後期課程在籍の社会人学生の受入を行うなど、大学院留学生確保に向けての基盤づくりの目標は達成した。さらに、米国・ポートランド州立大学については、平成29年度でのスタディーツアーにむけての具体的な検討を情報工学部と共同で実施した。今後は、英語による授業科目の新設、異なる学事期での入学制度（秋入学）見直し、単位付与制度を含めた交換留学制度など受入態勢の整備・検討が課題である。

第2部 教育研究開発機構

平成26年度10月に大学教育開発センター、国際交流センターの2センターが発足し、平成27年10月からはさらに学術研究推進センターがスタートし、1年が経過した。この間、平成27年度における「教育研究開発機構」への3センターの合流・再編があり、本学の全学的な教育研究活動に関する自己点検・評価活動のまとめについても、この新組織のもとで第2部として再構成し、その内容を3章構成で記述することとなった。

今年度は、各センターが年度計画のもとで所定の課題に取り組むとともに、その成果とさらなる課題を明確にして、関係委員会と連携した改善活動のサイクルを軌道に乗せる年度でもある。とりわけ大学教育開発センターは、大学改革支援・学位授与機構による大学機関別認証評価受審年度にあたり、その基準-観点に基づく本学教育の自己点検・評価において主導的な役割を果たすとともに、様々な課題のリスト化及び改善策の立案に取り組んだ。またCOC+教育改革WGにおける岡山創生学の開始年度であることから、その計画・運用にあたっての課題にも取り組んできた。

第2部の構成であるが、第1章はFDを始めとする大学教育開発センター活動と成果で6部会の活動、教育力向上支援事業及び地域連携教育(COC+教育改革WG)の順で記述した。

第2章は国際交流センターにおける、学長方針の一つであるグローバル化戦略に基づいた、国際交流締結(MOU)校を主対象とする教育研究交流活動の支援を柱に、第3章は学術研究推進センターにおける研究倫理に関する啓蒙活動や教員における研究支援に関する活動実績を柱にして、コンテンツをまとめ記述した。

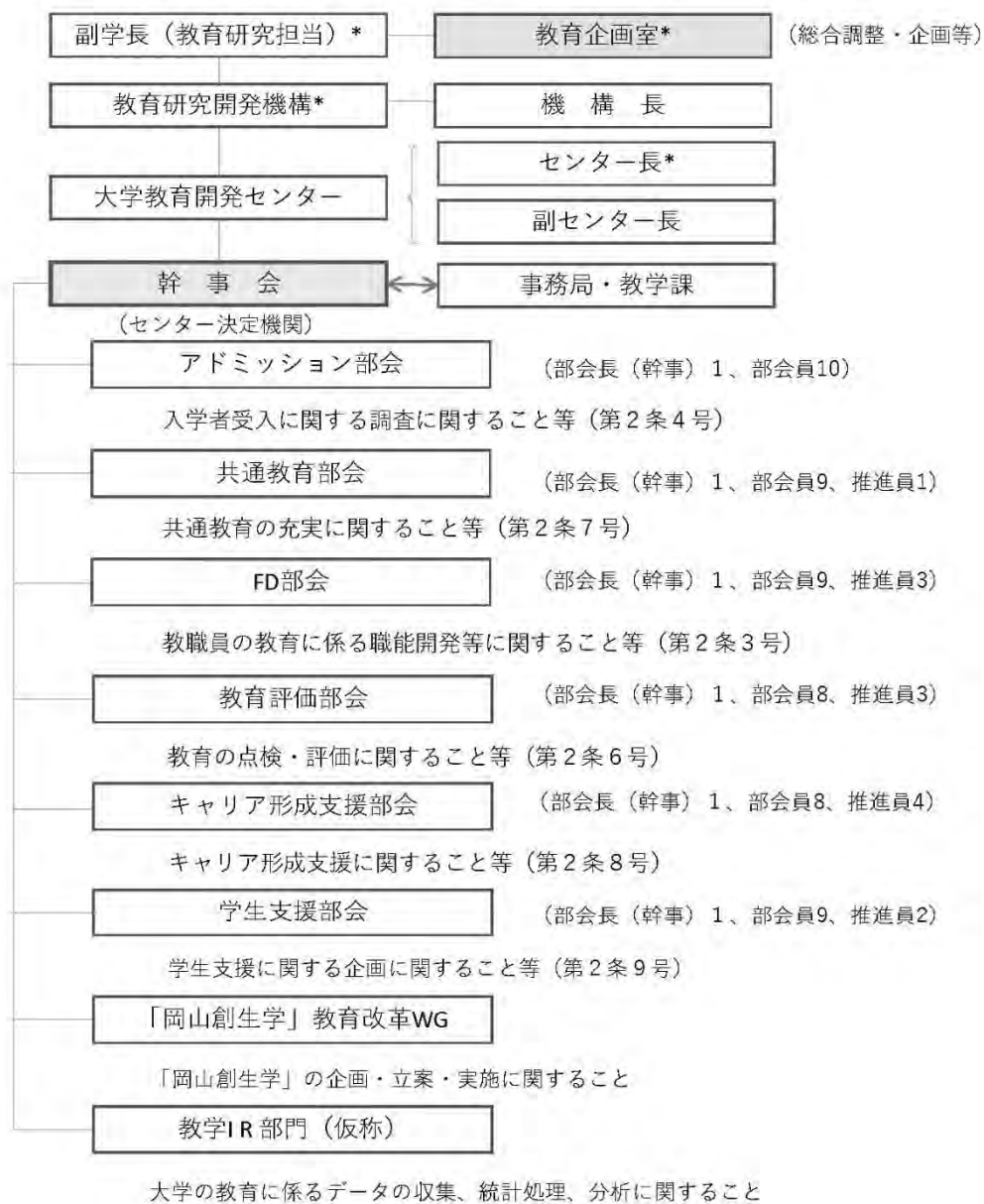
第1章 大学教育開発センターの活動と成果

1 概要

大学教育開発センター(以下、センター)は2014年4月から半年の準備室の期間を経て、同年10月に発足し活動を開始した。2015年4月にはメンバー(センター員、幹事)を充実して大略現在の構成となって二年間の任期で活動を開始した。平成29年3月で発足以来2年半を迎えるが、当初、「アドミッション部会」、「共通教育部会」、「FD部会」、「教育評価部会」、「キャリア形成支援部会」、「学生支援部会」の機能的6部会制でスタートし、各部会とセンター全体の取りまとめを行うための「教育企画室」も同時に発足させた。また、平成27年度に本学は文部科学省補助金事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に選定された。地域人材育成のために副専攻「岡山創生学」を立て、大学教育開発センターの所掌として「教育改革WG」として大学教育開発センターにおける地域連携教育部門として昨年度から6部会+1WG体制となっている。現在の大学教育開発センターの組織

図を下に掲げる（平成 28 年度末）

大学教育開発センターの組織と業務



（センターと学部・学科との連絡調整）

- ・ 幹事は、第3条第1項の規定に基づき設置した部会の長を兼ね部会の業務を総括するとともに、学部等との連絡調整を行う。（第4条6項）
- ・ 推進員は、幹事が行う学部との連絡調整を補佐する。（第4条8項）

2 各部会活動

2-1 概要

現在、大学教育開発センターは、教育企画室、6 部会（アドミッション部会、共通教育部会、FD 部会、教育評価部会、キャリア形成支援部会、学生支援部会）と平成 27 年度文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択されたのを機に設置された「教育改革ワーキンググループ(教育改革WG)」から成っている。現在、これらの部会では従来部会独自の業務として行っていたものを継承し発展させてゆくことと、複雑化してゆく教育改革に対応するために部会間連携事業を進めている。

大学教育開発センターのメンバー（センター員及び教育開発推進員）は従来の委員会等における学部、学科割り当て制ではなく、自薦、他薦で選ばれたメンバーによって構成されている。そのため、センター員は必ずしも全ての学科を網羅しているわけではない。しかし、情報の全学的疎通や、学科からの情報を得るに当たっては不便もあること等から、センター員がいない学科においては教育開発推進員（29 年度から推進員となる）を置くこととしている。大学教育開発センターは事業実施機関ではなく、教育改革に係る自発的な企画や提案、また学長、理事会等の諮問を受けて検討を行う機関である。そのため、企画提案を実態に即したものとするため、学部長は幹事として大学教育開発センターの部会や幹事会メンバーとして参加することを原則としている。

また、教育をはじめとする大学の運営は教・職のコラボレーションが絶対的に必要となる状況であることから、また事務局職員も教員と対等の立場で大学教育開発センターの全部会に参加している。課題は色々と存在するが、本学の教育改革における必須の組織として従来の委員会体制では実現が難しかった課題に取り組むことができ、その深化に貢献していると考えられる。課題としては、大学教育開発センターにおける様々な事業の遂行や企画提案において、教学データの定量化が不足であることが挙げられる。そのため、本学の教学データの収集、保存、蓄積、分析の専門職（IR 専門職）や企画立案の際に同様に必要となる外部データの収集や分析に従事するセンター職員の存在が今後必要と考えられる状況である。

2-2 教育企画室

2-2-1 概要

平成 28 年度、センターでは教育企画室、幹事会、アドミッション部会、共通教育部会、FD 部会、教育評価部会、キャリア形成支援部会、学生支援部会、教育改革WG（COC+「岡山創生学」）及び事務局を置く体制で運営を行った。幹事会は各部会の部会長をはじめとするメンバー構成になっていて、各部会の活動計画や活動結果について審議を行い、部会からの企画や提案を承認して大学教育開発センター提案とする役割を担っている、その一方で、内外のニーズに応じてセンターの活動全体を俯瞰し、センター業務を部会縦断的、横断的に連携させる役割として教育企画室を置いている。メンバーとしては教育研究担当理事（副学長）、大学教育開発センター長、教育研究開発機構長を核として構成されるもので、例えば平成 28 年

度実施に実施された大学機関別認証評価（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構）への対応、一昨年の公立大学政策・評価研究センターに依頼した大学評価ワークショップ（大学機関別認証評価準備）への対応などにおいてその設置意義を見出すことができる。また教育関連情報の収集や発信の中核的役割を担うために全学研修会の企画と実施等も所掌としている。以下の項に幾つかの実績を報告する。

2-2-2 FD・SD 研修会の実施

従来、教員の職能開発、すなわち教授力（教授技術）の向上がFD (Faculty Development) として盛んであったが、近年ではその定義も変わりつつあり、定量的、定性的な教育データに基づいてPDCAを回しながら教育効果を高めることや学生の学習を支援することも含まれるなど、FD概念の拡大がみられるようになってきた。一方、教育における大学職員の役割も非常に重要になってきている。それは従来SD (Staff Development) と称されることが多く、職員側からの教育への関りを見なされ、学生支援や教員と協力して教学データの収集、分析等が含まれていた。しかし、ここ数年、様相は大きく変わってきている。文部科学省においても平成28年3月には大学設置基準の一部を改正し、大学職員の能力開発等を教員、職員全てを含んだ新しい観点からのSD (Staff Development) を義務化するに至っている。そこでは、以下のような記述がなされている。

大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）の一部改正

大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修（第25条の3に規定するものを除く。）の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。こと。（第42条の3関係）

また、これには留意事項として、三点（2～4）挙げられている。

2 対象となる職員について

「職員」には、事務職員のほか、教授等の教員や学長等の大学執行部、技術職員等も含まれること。

3 「機会を設けること」について

(1) 今回の改正は、個々の職員全てに対して一律に研修の機会を設けることを義務付ける趣旨ではなく、SDの具体的な対象や内容、形態等については、各大学等において、その特性や実態を踏まえ、各職員のキャリアパスも見据えつつ、計画的・組織的に判断されるべきこと。

(2) SDの機会については、各大学等が自ら企画して設けるほか、関連団体等が実施する研修に職員が参加する機会を設けることなどが考えられること。

4 「その他必要な取組」について

SDを効果的・効率的に実施する観点から、各大学等において、その実情に応じ、例えば職

員の研修の実施方針・計画を全学的に策定するなどの取組を行うことが期待されること。

ここでは SD とは教員も事務職員も含まれる広範なものになっていることが分かる。また留意事項の 3~4 では大学が計画的に教職員のキャリアパスも見据えて研修の機会を考えて行かねばならないことが期待されている。現在は、SD の実施を推奨している段階であるが、早晚実施の有無が補助金事業応募の際に問われる要件となってくる可能性は高い。

このような、状況を鑑みると、大学教育開発センターにおいて設置当初から「教職協働」を掲げて、センター部会への職員の参加、教職員に向けた研修会の実施などは SD に対する要求に応えるものであったことが分かる。しかしながら、本学における「教職協働」は必ずしも軌道に乗っているとは未だ言えない状況と思われる。その理由の一つとして、教職が協働してプロジェクトを企画し、実施して成果を上げるというプロセスが十分に働いていないことが挙げられる。「教職協働」は、目的性を持った業務の適切な分担によって成立するのが望ましいが、目標を共有していないと業務の“投げ合い”になってしまう可能性があり、齟齬が生じてしまう可能性もある。そこで「教職協働」という言葉は残すとして、新しく「教職コラボレーション」という概念を創出し、それは具体的な目標が設定された挑戦的なプロジェクトに教員と事務職員が協働して成果を生み出し、教育の発展に資するものであることを指すことにしたい。今後、従来の FD の概念は概ね継続するが、SD は教職員を含んだ広範な集団の教育への関りであるということを明確にすることが望ましいと考えられる。

本学の研修会は、基本的に全て FD・SD 研修会と呼んでおり、対象を全教職員及び学生としてきた。外部講師の場合は、他大学の教職員、学生にも呼びかけを行っている。内容的には、教員の職能開発 (FD) と、職員の教育力開発を目的としてきたが、この度の大学設置基準の一部改正の要点を取り込むと、FD はそのままの形で継続することでよく、SD については職員を対象としてきたものが全ての大学教職員と拡大し、更に教育に関わる広範で多様な知識と技能とすることで良いのではないかと思われる。名称の変更は特に必要ないと考えられる。大学教育開発センターの FD・SD 研修会は現在 3 種類に分けられている。一つは「全学研修会」であり、年 2~3 回の開催を目標とし、全教職員の出席を原則とする研修会である。外部から講師を招聘し、最新の教育関連情報を得て全学的な教育改革に役立つ情報を得ることを目的にしている。また全学研修会では、その内容を教員、職員の両者にとって有用な研修の機会になるように配慮している。二つ目は「教育開発講座」であり、この研修会はセンターの 6 部会+1WG の主要業務と関連するテーマについて行うものであり、各部会が主催し、外部講師を招聘する、あるいは内部の講師を立てるなど部会の采配でテーマ、人選を自主的に行うものである。「教育開発講座」はセンター関係者の出席を原則としているが、それ以外の教職員の参加は任意としている。三つ目の研修会である「センターワークショップ」は主にセンター内での教育に関する研修の機会として設定したものであり、研修会への参加報告、部会等による調査・研究成果の発表を主眼として行う。「センターワークショップ」については「教育開発講座」と同様に、センター関係者の出席を原則としているが、それ以外の教職員の参加は任意としている。

平成 28 年度は、「全学研修会」を 2 回、「教育開発講座」を 2 回、「センターワークショップ」を 3 回実施した。また、その他としてセミナーを 1 回開催した。その概要を表 2 及び 3 に示す。

表 1 大学教育開発センターFD・SD 研修事業：H26～27 年度実施状況

【全学研修会】		
1	『地学/教職/学識一体の教育改革～地方小規模をメリットに転換する KYOAI GLOBAL PROJECT～』	大学教育開発センター
2	『大学における授業改善と FD の課題—遺産をかえりみつっ一歩一歩の出発を—』	大学教育開発センター
【教育開発講座】		
1	『岡山大学アドミッションセンターの広報活動について』	アドミッション部会
2	『e ポートフォリオシステムを用いた学修支援』	キャリア形成支援部会
【センターワークショップ】		
1	『共通教育における「アクティブ・ラーニング」について』	共通教育部会
2	『アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開（Ⅱ）』	FD 部会
3	『IR を活かした教育改善と大学経営』	教育評価部会
その他	3 研究科共通講義 『プロジェクト・マネジメント実践論』	大学教育開発センター

表 2 各研修会の参加者数

	講 演 タ イ ト ル	参加 教員	参加 職員	学生	学外
【全学研修会】					
1	『地学/教職/学識一体の教育改革～地方小規模をメリットに転換する KYOAI GLOBAL PROJECT～』	134	23	0	3
2	『大学における授業改善と FD の課題—遺産をかえりみつっ一歩一歩の出発を—』	89	14	7	1
【教育開発講座】					
1	『岡山大学アドミッションセンターの広報活動について』	37	7	0	0
2	『e ポートフォリオシステムを用いた学修支援』	72	6	2	5
【センターワークショップ】					
1	『共通教育における「アクティブ・ラーニング」について』	55	6	0	0
2	『アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開（Ⅱ）』	75	8	0	0
3	『IR を活かした教育改善と大学経営』	30	15	1	1
その他	3 研究科共通講義 『プロジェクト・マネジメント実践論』	0	2	30	0

2-2-3 まとめと課題

平成 28 年度は認証評価への対応, 全学情報システム教学系の導入で慌ただしい時期であったが乗り切ることができた。しかし, その過程で, 本学は教育 IR (Institutional Research) に関する問題を有することも明らかになった。平成 29 年度は大学ポリシーの改正, またそれらに基づく新しい大学入試システムへの対応等が続く。これらへの対応において, 本学の教学データの集約や保存, 処理分析, 解釈は必須となる。教育の質の保証の観点から, 次期認証評価サイクル, 第三期中期計画に向けて早急に対応する必要がある。

現在, 教育企画室は大学教育開発センター内に置いた形になっている。しかし, 規程上の位置づけはなされていない。平成 29 年度から教育企画室は, 教育研究担当理事 (副学長), 教育研究開発機構長, 大学教育開発センター長が担当することになり, 特に大学教育開発センター内に置くという位置づけではなくなるが, やはり大学教育開発センターと各種委員会等を繋ぐ役割を担う予定である。

2-3 アドミッション部会

2-3-1 概要

平成 32 年度入試から実施される大学入学者選抜改革の公表を目前に控え根拠データの収集に向け, 入試環境調査として入学時アンケート調査ならびに入試日程別成績追跡調査を全学的に実施した。入試広報活動としてはオープンキャンパスならびに高校訪問, 高大接続事業として高校生のための大学授業開放を, いずれも全学的に実施した。学内研修会としては, 教育開発講座を主催した。

2-3-2 大学入学者選抜改革

(1) アドミッションポリシーの見直し

高大接続システム改革会議最終報告を受け, 本年度は本学の 3 つのポリシーを一貫性のある形に見直す中で, 各学科アドミッションポリシーの一部見直しを行い入試日程別に入学者選抜の基本方針を示した。

(2) 高大接続作業部会

県内高等学校における高大接続改革並びに教育の実施状況と, 岡山県立大学における第 3 期中期計画を念頭に置いた入試及び教育改革の検討並びに準備状況について, 情報交換ならびに意見交換を実施する作業部会を設置し, 事前調査票を作成した。

2-3-3 入試環境調査

2-3-3-1 入学時アンケート結果

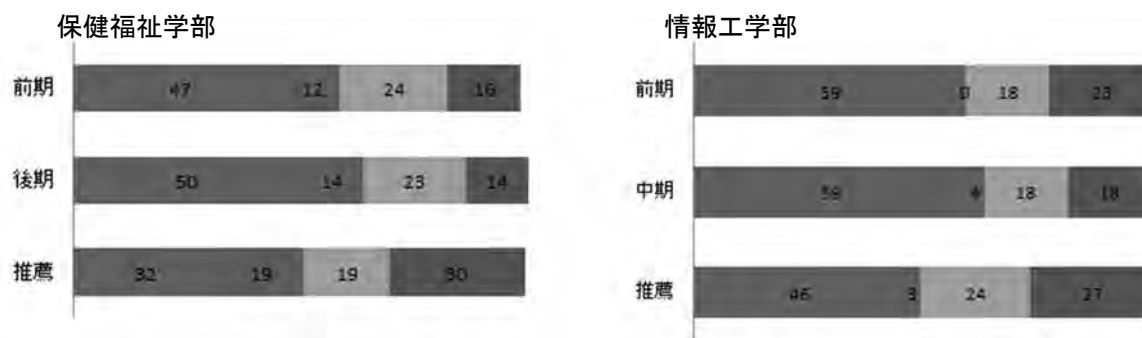
大学入学者選抜改革ならびに大学広報のための基礎情報を得ることを目的に、本年度は全学的に同一の様式で入学時アンケートを実施した。

志願者の傾向として、本学以外に志願した大学は同分野の私立あるいは公立大学が多く、大学入学者選抜改革を目前に控えこれらの大学の入試変更内容を注視する必要がある。また、本学の志望順位は総じて高く、情報工学部の中期日程も例外ではなかった一方で、入試日程別の入学時の学修に対するモチベーションについては、どの学部においても推薦入試による入学者が最も低かった（下図）。情報工学部においては大学院進学に対するモチベーションも推薦入試が最も低く、大学入学者選抜改革における検討材料と考えられる。

現行の入試科目のセンター試験と個別学力検査については、不満はない学生がほとんどであったが、大学入学者選抜改革において新たに導入する選抜方法として、すべての学部で共通して拒否感が高いものに、受験対策が難しい TOEIC や英検などの外部英語試験の活用が上がり、昨年度の保健福祉学部の入学時アンケート結果とも一致することから、導入には慎重を要すると考えられた。このほかに導入に抵抗感が強い選抜方法としてプレゼンテーションやディベート、集団討論等が上がった。

広報戦略に関連して、本学出願にあたり最も参考にしたものとしては高校の先生が突出しており、学部・学科 HP と大学案内がこれに続いたが、学部間でやや異なる傾向があり、保健福祉学部ではオープンキャンパスが最も参考にされていた。もっと知りたかった情報としてはカリキュラムや授業内容が高く、学生生活がこれに続いた。本学で学び始めるにあたり最も期待するものとしては専門教育が圧倒的に高いこと、本学志望動機としても教育内容が希望に近いことが高いことを考慮すると、高校訪問や高校の進路指導教員への説明、オープンキャンパスや各種広報媒体においては、本学の最大のアピールポイントでもある専門教育のカリキュラムや授業内容に関する情報の提供に力点をおくことが求められる。実際、本学の教育内容を高校生に公開する「高校生のための大学授業開放」は受講者の約 48% が本学を受験し、18% が本学に入学しており、オープンキャンパス参加者の 6% が本学に入学しているのと比較しても圧倒的に高い。「高校生のための大学授業開放」を知らなかった学生が入学者の 66% いることから、このような事業について今後の広報による十分な周知が望まれる。アドミッションポリシーに関しては入学者の半数以上の学生に参考にされていた。

主な項目の分析結果については、巻末の資料にある。以下は、学部・学科別分析結果の概要である。



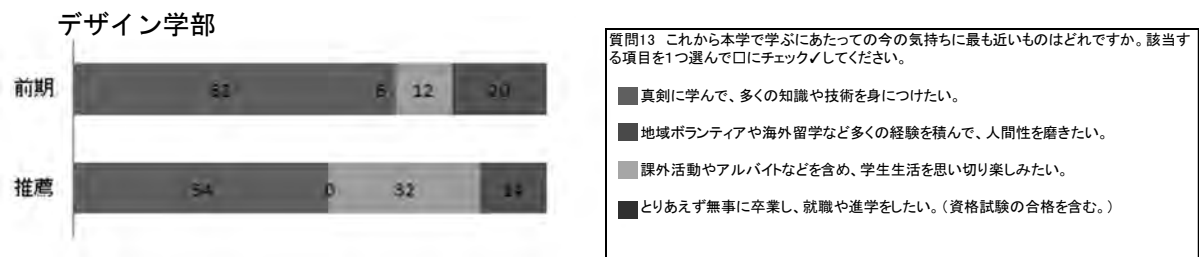


図 入試日程別入学者の学修へのモチベーション

(1) 保健福祉学部

①看護学科

出身校所在地について、推薦入試で入学した 11 名を除くと、前期入試では、岡山県 8 名 (36.4%)、兵庫県 5 名 (22.7%)、広島県 3 名 (13.6%)、島根 2 名 (9.1%)、後期入試では、岡山県 2 名 (25.0%)、兵庫県 2 名 (25.0%)と、近県の出身者が多い傾向にあった。

本学を第 1 志望で入学したものは、推薦入試 11 名 (100%)、前期入試 16 名 (76.2%) であった。後期入試で入学した 8 名は、第 1 志望 0 名、第 2 志望 5 名 (62.5%)、第 3 志望 3 名 (37.5%) であった。本学以外の志望順位 1 位は、推薦入試は、川崎医療短期大学看護学科、川崎医療福祉大学、吉備国際大学を挙げていたが、8 名は本学以外の出願をしていなかった。前期入試は、川崎医療福祉大学、兵庫医療大学、新見公立大学、広島大学や岡山済生会専門学校など近隣の国公立大学、私学、専門学校などに出願していた。後期入試は、岡山大学、愛媛大学など国立大学に出願した学生が多いが、中には神戸常磐大学、川崎医療福祉大学などの私学も見られた。前期入試では、本学が第 1 志望の受験生が多いが、後期入試では、国立大学の滑り止めに位置付けられているようである。

出願の参考にしたものは、推薦入試では、大学のホームページ、学科のホームページ、大学案内、学部学科のパンフレット、学科のアドミッションポリシーともに 11 名 (100%) 参考にしてきた。前期入試では、大学のホームページ、学科のホームページ、大学案内は 20 名 (90.9%) のものが、学部学科のパンフレット、学科のアドミッションポリシーは 17 名 (77.2%) のものは参考にしてきた。後期入試では、大学のホームページ、学科のホームページは 6 名 (75%)、大学案内 6 名 (75%)、学部学科のパンフレット 4 名 (50%)、学科のアドミッション 5 名 (62.5%) であり、学科に関する情報を参考にしないで受験する者の割合が高かった。さらに後期入試の受験者は、高校や本学で実施された進学ガイダンスに参加したことがないと回答したものが 8 名 (100%) であった。しかし、予備校が提供する情報を参考にしたものは 3 名 (37.5%)、高校の先生を参考にした者 8 名 (100%)、塾の教員を参考にしたもの 3 名 (37.5%)、家族や知人を参考にしたもの 6 名 (75%) であった。推薦入試と前期入試を希望する受験生には、大学及び学科のホームページをわかりやすく魅力的なものにすること、教育内容がわかりやすいパンフレットを作成することにより、受験生の確保に繋がることを期待できる。後期入試を希望する受験生には、まずは高校の先生、家族や知人、塾

の教員などを通じて、本学の魅力とこれまで優れた看護師を育成してきた実績を伝えることにより、本学を第1志望として考える受験生が増加するのではないかと考える。推薦、前期、後期入試共にもっと知りたかったことは、①カリキュラムや授業内容、②学生生活、③各学部・学科の特色であった。高校訪問を情報提供の場として充実させるとともに、在学学生や卒業生の学びの内容や学生生活についてホームページやパンフレットで発信することが有効であると考えられる。

入学試験については、小論文が受験しやすかったと回答したのは、後期入試8名(100%)、前期入試19名(86.7%)、推薦入試8名(72.7%)の順であった。面接が受験しやすかったと回答したのは、推薦入試10名(90.9%)、後期入試7名(87.5%)、前期入試19名(81.8%)で、集団面接での討論などは難しいと感じている者もあった。実施されていれば本学を受験しなかったと思う試験は、推薦入試では、①聴講型試験、②プレゼンテーション、③TOEIC等の外部試験、前期入試では、①TOEIC等の外部試験、②学力試験、③数学、後期入試では、①TOEIC等の外部試験、②聴講型試験の順で、TOEIC等の受験対策が難しい科目は敬遠される傾向がみられた。

高校生のための授業開放について、推薦入試で受講したものは6名(60%)、前期入試、後期入試は0%で、「知っていれば受講したと思いますか」の間に「はい」と回答したのは前期入試6名(27.3%)で、後期入試は全員が「いいえ」「わからない」と回答した。来年度からは早めに高校や塾に広報を行うことが望まれる。年に一度の授業開放では参加者が限られるため、年間を通して、大学の通常の授業を参観できる方法を検討することで広く活用できるのではないかとと思われる。

②栄養学科

入学者が出願に参考にしたものとして、全入試日程において、大学HP(97.4%)、学科HP(94.9%)、大学案内(94.9%)、高校の先生のアドバイス(92.3%)などが良く参考にされているが、これらの項目については、推薦で入学した学生では、全員参考にしていた。特に県内高校の進路指導教員との関係を良好に保つことが重要で、そのためにも高校訪問、高大接続事業やHPなど、積極的な広報活動を続ける必要があると思われる。

個別学力試験等として実施されていれば本学を受験しなかったと思うものについては、一般入試日程で入学した学生では、推薦入試で入学した学生と大きく異なり、小論文や面接などを実施していると受験しなかった割合が非常に高かった。推薦においても集団討論やディベートなど議論を必要とすることを敬遠する傾向がみられた。いずれもコミュニケーションスキルや他者と協調し共に行動する力が苦手と評価されたPROGテストの結果を反映する形となっており、今後の入試で必要とされる学力の3要素のうち、主体性、多様性、協働性など主体的に学習に取り組む態度の評価方法について工夫が必要と思われる。また、TOEIC等の外部試験も推薦、一般共に高く、受験対策が困難な科目は敬遠される傾向にあった。

入学後の本学に期待するものとして、国家試験対策や専門教育の割合が、推薦、一般共に高く、管理栄養士の資格を取得するためには当然の結果と思われる。これから身に付けたい

能力として、栄養学科1年生のPROGテスト結果から苦手と評価されていたコミュニケーションスキル(英語及び日本語)や他者と協調し共に行動する力(チームワーク)は、推薦、一般共80%以上と高く、大学で自分の短所の改善しようとする傾向が窺えた。

ほぼ全員が就職希望(84.6%)で、進学希望が一般の1名のみであった。フレッシュマンセミナーやアドバイザーミーティングなどで、入学時から大学院に関する情報提供を行い、さらに大学院オープンキャンパスなどで大学院生と交流する場を設けるなど、進学を積極的に勧める取組を行う必要があると考えられる。

大学授業開放の参加者は、推薦では8名(66.7%)、一般では1名(3.6%)で、推薦では高い割合で授業開放に参加していた。また、県外入学者が多い一般入試では、授業開放のことを知らなかった学生が22名であった。推薦入試では受講者が入学に繋がるケースが多くなっており、一般入試の受験生向けに県外においても積極的な広報が必要と思われる。

③保健福祉学科

入学生の多くは出願する際にAPを参考にしている。しかし、APの内容を理解している者は約半数となっており、わかり易く伝える工夫が必要である。出願の際にAPを参考にした者は、社会福祉学専攻で74.4%、子ども学専攻で57.1%。推薦では、社会福祉学専攻90.9%、子ども学専攻83.3%で他の入試区分よりも高い。しかし、APをよく理解できた者は、推薦では社会福祉学専攻44.4%、子ども学専攻53.3%、前期では社会福祉学専攻47.1%、子ども学専攻50.0%であった。

オープンキャンパスには推薦入学者の多くが参加し、出願の際にも参考にしている。しかし、前・後期の入学者は半数以上が参加していない。一方、授業開放は推薦、前・後期ともに参加率が低い。HP・高校訪問等を通して、オープンキャンパスや授業開放の広報を工夫する必要がある。出願の際にオープンキャンパスを参考にした者は、社会福祉学専攻52.5%、子ども学専攻52.4%であった。入試日程別では推薦が高く、社会福祉学専攻91.7%、子ども学専攻83.3%であった。それに対して、後期は社会福祉学専攻12.5%、子ども学専攻25.0%と低かった。オープンキャンパスに参加したことがない者は前期・後期で社会福祉学専攻55.0%・87.5%、子ども学専攻36.4%・50.0%と低調である。出願の際に授業開放を参考にした者は、社会福祉学専攻30.0%、子ども学専攻14.3%であった。参加したことがない者は社会福祉学専攻67.5%、子ども学専攻76.2%であった。参加したことがない者を入試日程で見ると、推薦は社会福祉学専攻50.0%、子ども学専攻は83.3%、前期は社会福祉学専攻70.0%、子ども学専攻72.7%、後期は社会福祉学専攻87.5%、子ども学専攻75.0%であった。

高校の先生のアドバイスを参考にしている者は、推薦、前・後期ともに高くなっており、高校訪問や高大連携について、一層の充実が望まれる。出願の際に高校の教員のアドバイスを参考にした者は、推薦と後期では社会福祉学専攻と子ども学専攻ともに100%であり、前期では社会福祉学専攻80.0%、子ども学専攻81.8%であった。

入学生は、カリキュラムや授業内容・学生生活に関する情報をもっと知りたいと考えているため、大学案内・大学HP・学科HPでの工夫、オープンキャンパスでの説明等の改善が必要である。社会福祉学専攻・子ども学専攻共、入試日程に関わらず、カリキュラムや授業内容、

学生生活に関する情報をもっと知りたいと考えている。社会福祉学専攻の後期の学生に関しては、取得できる資格と合格率、就職先と就職率、学費や奨学金制度、教育設備や周辺環境について推薦や前期の者より知りたいと考えている。

推薦入試・一般入試ともに、おおむね受験しやすい科目構成となっている。しかし、推薦と前期の者は個別の学力試験を嫌う傾向が、後期の者は集団討論やディベート、プレゼンを嫌う傾向がある（社会福祉学専攻のみ）。社会福祉学専攻・子ども学専攻共に、入試日程に関係なく全体的に、TOEIC や英語検定等の試験を嫌う傾向がある。

本学を志望した動機は、①教育内容が希望に近い、②希望する資格が得られる、というものであった。社会福祉学専攻に関しては、前期は①学費が安い、②通学に便利である、後期は①入試科目が受験しやすかった、②学力的にみて適当だった、となっている。教育内容の見える化と一層の充実を目指したい。

社会福祉学専攻に関し、全ての入試区分において本学に期待するものは、①充実した専門教育と②充実した国家試験対策である。高校生に向け、専門教育や国家試験の実績を、さらにわかり易く広報していくことが受験生獲得につながるのではないかと。

卒業後の進路として、入学時には、進学を希望している学生がいない（社会福祉学専攻 2.4%、子ども学専攻 0%）。進路選択の選択肢としての進学に目を向けることができるよう、進学相談会や大学院生との交流の機会等を入学後の早い時期から設けるとともに、学生にとって魅力ある大学院となるよう検討する必要がある。

(2) 情報工学部

出身高所在地については、県内が多いのは当然のこととして、岡山・広島・兵庫の三県出身者が約6割を占めている。県内出身者の割合は、推薦が100%、前期が33.3%、中期が12.1%で近年と同様の割合となっている。併願先については、情報通信工学科は電子系、情報システム工学科は機械系が多い傾向がある。人間情報工学科は多様な学科に併願している。情報通信工学科と情報システム工学科については、学科の特徴を理解している受験生が多いようである。本学志望順位については、第一、第二希望が約8割を占めている。約半数が中期日程入学者であるにもかかわらず、本学の志望順位は高い。入試日程別にみると、本学が第一志望である者の割合は、推薦が100%、前期が91.7%、中期が9.7%である。推薦と前期は当然の結果と考えられるが、中期にも関わらず1割弱の者が本学を第一志望としていることは特筆に値する。

出願する際に参考にしたものとしては、高校の先生の影響が強い。ホームページや大学案内はそれなりの効果が現れている。学部学科のパンフレットはそれほど効果が現れていないが、この原因として、配布先が限定されていること、研究内容を重視した構成になっていることがあげられる。「高校生のための授業開放」の認知度は低い。受講者の割合は、推薦が38.5%、前期と中期はともに0%である。前期は100%、中期は93.1%の者がその存在を知らない。前期は第一志望の者の割合が高いが、夏の時点では本学への関心が低かったようである。もっと知りたかったこととしては、学科の特色、授業、学生生活、資格・就職を選んだ者が多かった。研究を選んだ者が少ないが、他の質問項目の回答によると、研究への関心が薄いわけ

ではない。志望動機としては教育・研究への関心が高いが、入試日程・受験科目・自分の学力といった入試に関する動機も多い。希望の分野で、合格しそうなところを選んでいようである。

今の気持ちに最も近いものとして、「真剣に学ぶ」の割合は、推薦が 63.6%、前期が 80.0%、中期が 51.6%、「経験を積んで人間性を磨く」の割合は、推薦が 9.1%、前期が 0%、中期が 6.5%、「学生生活を楽しむ」の割合は、推薦が 27.3%、前期が 0%、中期が 16%、「無事に卒業」の割合は、推薦が 0%、前期が 20%、中期が 19.3%である。三番目を選んだ者の割合は推薦が最も高い。本学で学ぶ意欲に乏しい者が少なからず推薦を受けているようで、何らかの対策が必要である。

就職よりは進学希望が多いが、約 3 割（情報システム工学科は約 5 割）は未定である。工学部は進学が当たり前という感覚が浸透しているわけではないようである。進学希望者では、他大学の大学院を希望する者が多い。この時期の進学希望者には、本学が第二希望以下の者が多いのかもしれない。就職希望の割合は、推薦が 53.2%、前期が 33.3%、中期が 19.4%、進学希望の割合は、推薦が 23.1%、前期が 25%、中期が 54.8%、未定の割合は、推薦が 23.1%、前期が 41.7%、中期が 25.6%である。推薦と中期が逆の傾向を示している。入学直後なので、未定をそれほど問題にする必要はないと思われるが、技術者を志すのであれば進学を考えるよう折に触れて指導していく必要がある。

(3) デザイン学部

① デザイン工学科

出身校の所在地から判断すると、岡山県内出身の新入生の過半は推薦入試合格者であることが分かる。これは造形デザイン学科の新入生のおよそ半数が県内出身者であることと比較して、受験傾向の大きな相違に見える。なお全体の分布としては、我々の認識と大きな違いはなく「県内出身者が約 30%、中四国地区出身者が約 50%、近畿地方出身者が約 25%、その他約 25%」であるが、今年度の新入生に限れば、中部以東の出身者が若干多い様に感じる。また例年と同様の傾向だが、兵庫県（岡山隣県）出身者が多いことも注目出来る。

志望と併願について、一般入試が前期日程に限られることも有り、デザイン工学科が第一志望である新入生が約 70%であり、造形デザイン学科の約 80%と並んで、本学を第一志望とした受験生が多かったことが分かる。そのためにデザイン工学科では、併願校の多数が「デザイン系の学部・学科」あるいは「建築系の学部・学科」である。なおデザイン系ではないが表現・芸術系の併願校が若干見られたが、これはその他の学問系統の併願校とともに少数であった。大学受験時に参考とした情報では、旧来の受験生が参考にした「受験生向け雑誌」「赤本」「予備校」などの回答数は減らしており、大学のホームページ、学部・学科のホームページ（特に学部・学科のホームページ）を参考にした割合が目立つ。この結果、大学のホームページ、学部・学科のホームページの一層の改善が、最も効果的な学生募集手段として認識出来る。なお従来通り大学パンフレットは受験生向け情報媒体として有効である様に見える。アドミッションポリシーについては、将来的には受験生側からより重要視する可能性も高い（高大接続システム提言の影響）が、その理解などの現状を考慮すると、オープンキャ

ンパス程の効果は感じられない。オープンキャンパスや進学ガイダンスの効果が限定的に感じられるが、高校の先生や家族の指導を重視した割合が大きく、高校の先生や家族と直接コミュニケーション出来る機会としてオープンキャンパスや進学ガイダンスの重要性を再評価すべきであろう。

新入生が最も知りたかった情報は「学部・学科の特色」「カリキュラム・授業内容」についての情報であった。これは全学的な情報というよりも、より学部・学科の個別の内容であり、発信内容の機動性や構成の効率化を図る意味（学部ごとに、あるいはデザイン工学科と造形デザイン学科には求められる内容に相違がある）でも、各学科（専攻・領域別）の主体的な活動が想定出来る。しかしながら「教員の紹介（他学科・分野との共同研究実績のある先生も居られるため）」や「学生生活（とその支援）」「学費・授業料減免・奨学金制度」「周辺環境」などは大学全体で取り組むべき課題であろう。そして大学のパンフレットの内容量に上限が有る以上、現状以上の上記内容の充実は難しいため、一層の情報の充実については大学ホームページと学部・学科ホームページの掲載内容を吟味し、それぞれの改善によって発展させる方が、より効果的であると考えられる。高校生向けの大学開放事業については、新入生アンケート全体からは十分な効果が見られなかったが、大学開放参加者の多くが後に本学を受験している実績を考えれば、この結果に拘泥することなく、事業の継続と拡大を図るべきである。

入試科目について、新入生は全員合格者であるためにある程度の想像は必要だが、少なくともセンター入試の科目内容・実技・面接（推薦入試のみ）については、大きな課題が見当たらない。ただ、センター入試の改革や新学力三要件への対応等の大学入試全体に関わる入試制度の変更が、近い将来求められることを前提としなければならない。もし、個別学力として実施されたならば本学を受験しなかった試験内容については、特に高大接続システムとの関連もあり、注目すべき内容と考えられる。何故ならば新学力三要件の客観的な評価のために、準備すべき一般的な入試内容について「集団討論」「集団面接」「ディベート」「口頭試問」「聴講型試験」などが想定されているが、新入生のアンケートからはこれらの入試内容に対する強い忌避感が読み取れるからである。入学試験へのこれらの内容の導入検討の際には、この結果を軽視することを絶対に避けなければならない。また「総合問題」「学力試験」「TOEIC などの外部試験」の付与についても、受験生側の強い拒否感情が想定出来るため、これらの回避が希望者確保の観点から最優先だと結論出来る。なお、デザイン工学科で比較的導入に適した内容は「小論文」「個人面接」「集団面接」「実技」であり、「実技試験という名目の試験」について様々な可能性を追求することも考慮すべきであろう。

志望理由の中で最大は「教育内容」であり、そして「入学試験・センター試験の内容」が考えられる。これは一般的な受験生の傾向であり、大学側の希望として「教員の研究内容」「施設の充実」「アドミッションなどのポリシー」等を広報しても、受験生側の理解には限界があることを承知しておかねばならない。また造形デザイン学科では学費についての指摘が目立ったが、これは県内進学者の割合が大きい影響であり、逆にデザイン工学科では「学費・授業料減免・奨学金制度」「周辺環境」についての希望が多かったことから、県外進学者が多かった影響が類推出来

る。

本学の教育への期待が最も大きかったものが「専門教育」であった。これは「一般教養」「語学教育」を大きく引き離して圧倒的であり、「学内教育設備（殆どは専門教育と関連する）」よりも期待が少ない。つまりデザイン学部の学生にとっては、専門教育の深化に人的・資金的・時間的なリソースを振り分けることが、学生の期待に沿った教育の充実に直結する。本学の建学の理念として「学際色の濃い学術分野を専門領域とする大学」が掲げられており、その意味でも全学的な教養の知育よりも実学を重視し「問題発見能力と解決能力」を中核とする専門性に留意した教育体制が求められるだろう。少なくともデザイン工学科の新入生にとっては、一般教養教育や語学教育以上に学生支援活動や図書館の充実に期待が大きい点は明解である。これからの全学教育（語学教育）のあり方として、後述する身につけたい能力・力との関連、あるいは学生支援活動の一環としての全学教育内での様々な「導入教育やキャリア教育」の実現に留意すべきだと考える。このような学生からの生きた意見聴取の分析結果を、大学運営に活かすことが本学の競争力向上の良き指針となりえる。また新入生の過半が、「真剣に学び、知識や技能を身につけたい」と考えており、上記の専門教育の充実によって、より大きな教育効果が期待出来る。

これから身につけたいと考える能力について、アンケート結果からは全学教育改革の方向性が確認出来る。つまりコミュニケーション（日本語・英語）能力の獲得期待（重点教育目標）である。多くの大学で国際化が掲げられ、語学教員の不足が地方大学を中心に散見されるが、その対策として「英語教育への重点（第二外国語の廃止）」「TOEIC 対策としての会話学習」への移行（専任の日本人教員確保が困難なために、多数の外国人非常勤講師で対応）が聞かれる。本学と同規模の大学の語学教育の実情を見れば、第二外国語授業を複数準備している大学がそれ程多く無いことが分かる（なお規模が大きい千葉大学では殆どの学部が英語以外の外国語履修最低単位が0であり、筑波大学では第二外国語の単位は自由選択科目として扱われている）。先記した様に全学教育に対する学生の期待が大きくない以上、その教育体制の充実は実質的に何かを軽視することで、何かを重視する施策であらねばならない。この様なトレンドに留意しつつ、本学のコミュニケーション（語学）教育の充実が期待される。また本学の理念として挙げられた「問題発見能力と解決能力の獲得」については「論理的思考」「グローバルに考える力」「問題解決能力」が多く回答された。

これ以外には「自己管理能力」や「チームワーク」が回答されたが、これらは全学教育よりも、デザイン工学科の専門教育の中で教育する方がより実践的であると考えられる。受験生の多様化が一層求められる以上、新入生の学術能力は一層多様化するが、その対策として大学教育として求められる様々な学術スキルを初年度教育で知育する体制作りが求められる。現在では多くの大学で導入教育が実施されるようになったが、その導入によって学生の学習能力・態度にも好影響があったことが知られている（自習の必要性の徹底等）。教員の現状や非常勤講師の確保など限界もあるが、もし本学が同志社大学と同様の導入教育を実施出来れば、学生の学習効率全体の向上や「論理的思考」「情報の収集・分析・発信力」「問題解決能力」獲得に益すると考えられる。あるいは高校生から大学教育への助走にもなり得ることから、学生支援活動としての意味合いも想定出来る。また、就職先や就職率への注目

がある以上、ある程度の履歴書の書き方、面接の受け方、社会一般のマナー等の他大学では「キャリア支援授業」として行われている科目の必要性を痛感する（通常のアルバイトでもこれらの能力は問われるだろうし、三学部の学生にとっても共通の必須スキル）。現状として「TOEIC 受験」「SPI 対策試験」等が実施されており、他の学生の就職支援事業も学生生活支援班を中心に行われているが、これらをまず授業（単位）化し、全学教育の一部として機能させることで、一層の実学重視の姿勢を表明することが出来る。本学の全学教育のあり方として「コミュニケーション科目の充実」「導入教育」「キャリア支援」の制度化を提言する（留学生向けに別途、外国人向けの導入教育やキャリア支援を設けた大学も目立つ）。

先記した導入教育が実現出来れば、ここで回答された重点項目「課題発見能力」「発信力」は初年度の教育課題として対応出来る。またデザイン工学科の教育の方向性として「社会・地域・技術的な課題を発見し、それらを解決するためにデザイン（造形・設計）する能力の涵養」があり、「主体性（自ら課題をやり遂げる個々の学生の力）」「実行力（造形能力）」「課題発見能力（デザイン分析力）」「発信力（プレゼンテーション能力）」「創造力（デザインそのもの）」は専門教育の充実によって、その期待に応えた教育の実現が図れる。

就職・進路等については、就職志望者が大半であり、進学希望者は少数である。また県内よりも県外への就職希望が多いのも課題として挙げられる（県内出身者数よりも県内就職希望者が少ない）。また、進学希望者の多くが、他大学の大学院への進学を希望している。本学の発信するデザイン学部の情報の中で「教員に関するもの（特に研究内容に関するもの）」が少ない影響もあるが、そもそも新入生の知りたかった情報として教員や研究に関わる希望は少数である。デザイン学部では大学院の定員充足が求められているが、新入生の中で大学院進学希望者が少数であることを前提に対策を講じることが、現実的と考えられる。

② 造形デザイン学科

現在実施している個別学力試験が受験しやすかったと回答している学生は、推薦入試では実技 83.3%、面接 91.7%、一般入試では実技 89.2%、また、大学入試センター試験の教科・科目と配点も 83.8%であることから、推薦入試・一般入試ともに受験しやすい構成になっていると思われる。個別学力試験で実施されていれば受験しなかった試験としては、推薦入試・一般入試ともに TOEIC や英語検定のような外部試験の導入に抵抗感を示す学生が 40%以上と多く、他にも集団討論やディベートに抵抗感を持つ学生が多かった。一般入試のみの傾向としては、学力試験（数学）に抵抗感を持つことが明らかとなった。出願の参考にした情報としては、大学・学科のホームページや大学案内が 90%以上の高い割合を示し、次に高校や塾の先生の割合が高かった。とくに塾の先生の割合は推薦入試・一般入試ともに 80%以上と高く、現在実施している高校訪問に塾を加え訪問先の拡大を検討することが望まれる。本学が提供する情報のうち、もっと知りたかった情報としては、カリキュラムや授業内容としている学生が推薦入試では 75.0%、一般入試では 56.8%であった。また、一般入試の併願校に彫刻や日本画などのデザインとは異なる学部学科を受験した学生が 10%以上含まれていることから、学科の特色やカリキュラム・授業内容を十分に提供できていない可能性が考えられる。本学に期待することとしては、専門教育が推薦入試では 75.0%、一般入試では

62.2%と、ともに2位以下に大きな差をつけてトップに挙げた。本学を志望した動機についても、教育内容が推薦入試・一般入試ともにトップに挙げられており、専門教育の重要性を改めて認識すると同時に、入学生のほとんどが参考としているホームページや大学案内においては、提供する情報のうち、もっと知りたかった情報として特に回答数の多かった専門教育におけるカリキュラムや授業内容の更なる充実が求められる。また、オープンキャンパスを参考にした学生は、推薦入試では83.3%、一般入試では45.9%と、広報活動としての一定の効果が認められた。一方、高校生のための大学授業開放を参考にした学生は、推薦入試では41.7%、一般入試では21.6%にとどまっているものの、2つの事業への参加者総数と入学者数との比較からは、高校生のための大学授業開放が高大接続のための事業であるのと同時に、非常に効果的な広報の役割も果たしていると考えられる。

2-3-3-2 入試日程別成績追跡調査

(1) 保健福祉学部

①看護学科

看護学科の平成25年度から平成28年度入学生を対象に、推薦入試、一般入試の入試区分により入学後の成績（Grade Point Average（以後GPAと記す））に差がみられるか否かについて、一元分散分析を用いて分析した。その結果、25年度から28年度すべての学年で、入試区分による入学後の成績の累積得点に有意な差はみられなかった。

入試区分	入学後の成績(GPA累積得点)の平均点±標準偏差			
	H25年度入学	H26年度入学	H27年度入学	H28年度入学
推薦入試	2.53±0.31	2.51±0.40	2.87±0.33	2.87±0.33
一般入試（前期日程）	2.73±0.31	2.62±0.40	2.72±0.38	2.71±0.38
一般入試（後期日程）	2.65±0.31	2.73±0.27	2.53±0.86	2.52±0.86
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入学試験の成績（小論文、面接試験、センター合計点）と入学後の成績を入試区分ごとに相関分析を用いて分析した。平成26年度の後期入試の面接の得点と入学後の成績に負の相関がみられたが（ $r=-0.798$, $p=0.01$ ）、そのほかには入学試験の成績と入学後の成績に有意な相関はみられなかった。

入学試験の成績をみると、平成27年度前期入試で、センター試験の合計得点と小論文の間に中程度の負の相関が認められた（ $r=-0.585$, $P=0.004$ ）。また全体では、センター試験の合計得点と小論文の間に中程度の負の相関が（ $r=-0.461$, $p=0.000$ ）、小論文と面接の得点の間に弱い相関が認められた（ $r=0.243$, $p=0.002$ ）。

入試区分による入学試験の結果と入学後の成績には統計的に有意な関係はみられなかった。しかし、センター試験と小論文の得点に負の相関がみられたことから、センター試験で測定できる能力とは別の能力を小論文や面接で確認していると思われる。今後は、入試区分により、本学が求めている学生の能力をより明確に測定できるよう、入学試験のあり方を検討していく必要がある。

②栄養学科

平成 25 年度入学生から平成 28 年度入学生までを対象として、入試日程別（推薦入試、前期日程、後期日程）と入学後の専門科目の GPA について相関分析を行った。平成 28 年度を除いて入学後の成績の GPA には有意な差はみられなかった。

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.70±0.39	2.56±0.32	2.79±0.50	2.79±0.41
一般入試（前期日程）	2.55±0.28	2.86±0.42	3.06±0.35	3.08±0.25
一般入試（後期日程）	2.59±0.63	3.01±0.40	2.78±0.55	3.17±0.00
統計学的有意差	なし	なし	なし	推薦入試と一般入試（前期日程）の間で有意差あり

入試科目別の入試得点と入学後成績との相関について、推薦入試では小論文得点と面接得点を、前期日程及び後期課程ではセンター試験の合計得点、センター試験の英語の得点及び理科の合計得点、さらに前期日程では、個別入試科目の化学と生物の得点及び理科の合計得点について、それぞれ入学後の成績との相関分析を行った。その結果、小論文では有意ではないが、面接得点では平成 27 年度のみではあるが入学後の成績と有意な正の相関が見られた。後期日程では母数は少ないが、平成 25 年度と平成 26 年度の英語と平成 26 年度のセンター試験合計で有意な正の相関がみられた。

以上の結果から、推薦入試においては面接を重視するなど、配点や内容も含めて今後の検討が望まれる。また、センター試験の配点等も再考してもよいと考えられ、さらに個別入試科目の化学と生物についても年度によっては有意な正の相関がみられ、出題内容あるいはセンター試験との配点割合などの検討が望まれる。

③保健福祉学科

保健福祉学科（社会福祉学専攻と子ども学専攻）の平成 25 年度から平成 28 年度入学生を対象に、入試成績（推薦入試、一般入試前期、一般入試後期）の合計得点と入学後の Grade Point Average (GPA) のデータを用いて分析を行った。

まず、入学年度別・入試日程別に入試成績と GPA の相関分析を行った結果、一部において入試成績と GPA の間に、中程度あるいは強い相関関係がみられた（有意水準 $p>0.05$ ）。中程度の相関関係がみられたのは、①社会福祉学専攻・平成 25 年度一般前期入試の入試成績と 2 年生前期までの累積 GPA ($r=.53$)、3 年生前期までの累積 GPA ($r=.58$)、4 年生前期までの累積 GPA ($r=.55$)、②社会福祉学専攻・平成 26 年度一般前期入試の入試成績と 1 年生前期の GPA ($r=.50$)、③社会福祉学専攻・平成 26 年度一般後期入試の入試成績と 2 年生前期までの累積 GPA ($r=.64$) であった。強い相関がみられたのは、①子ども学専攻・平成 28 年度一般前期入試の入試成績と 1 年生前期 GPA ($r=.73$)、②子ども学専攻・平成 28 年度一般後期入試の入試成績と 1 年生前期 GPA ($r=.98$) であった。

その他の特徴として、社会福祉学専攻と子ども学専攻ともに、平成 25 年度から平成 27 年度入学生の入試日程の多くにおいて、1 年生前期 GPA と、2 年生前期までの累積 GPA、3 年生前期までの累積 GPA、あるいは 4 年生前期までの累積 GPA との間に中程度から強い相関関係がみられた。この

結果は、平成 28 年に東京理科大学が 6 学部 33 学科の学生 3,900 人を対象に分析した結果「大学卒業時の成績は 1 年終了時の成績とほぼ一致し、入学試験の結果とは相関関係がみられない」とほぼ同じ傾向であるといえる（毎日新聞、平成 28 年 6 月 3 日）。

次に、入試日程別に GPA に差があるかをみるため、一元配置分散分析を行った。入学年度別・入試区分別に分析すると、群によっては分析対象数が少なくなるもの（4 以下）が出てくるため、平成 25 年度から平成 28 年度までの入学生を専攻別、入試日程別に 1 つにまとめて分析を行った。分析に用いた GPA は、1 年生前期の GPA である。分析した結果、群間に有意差はみられなかった（有意水準 $p > 0.05$ ）。

専攻	入試区分	度数	1 年前期 GPA 平均値	標準偏差	有意確率
社会福祉学専攻	推薦	49	2.93	0.38	0.414
	一般前期	79	2.89	0.45	
	一般後期	38	2.99	0.30	
子ども学専攻	推薦	26	2.94	0.30	0.961
	一般前期	42	2.91	0.39	
	一般後期	16	2.93	0.36	

(2) 情報工学部

平成 25～28 年度入学生を対象として、入学年度ごとに、推薦入試、前期日程、中期日程の三つのグループにおいて累積 GPA の平均値を調査した。グループ間で平均値に差が認められるか否かについて、有意水準 5% で t 検定を行った。また、入試区分ごとに、入試成績と累積 GPA との相関を調査した。

①情報通信工学科

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.29±0.49	2.33±0.37	1.78±0.29	2.38±0.35
一般入試（前期日程）	2.35±0.56	2.37±0.45	1.85±0.53	2.36±0.39
一般入試（中期日程）	2.33±0.58	2.47±0.67	2.37±0.64	2.61±0.60
統計学的有意差	なし	なし	あり	なし

平成 27 年度入学生の推薦と前期が中期よりも低い。その他の入学年度においては有意な差は認められなかった。さらに平成 26 年度以降の入学生について授業科目のカテゴリーごとに累積 GPA を算出し、入試区分による違いを調査した。平成 26 年度入学生ではカテゴリー「人間と文化の理解」で推薦が前期よりも高く、「科学技術と環境」では中期が他よりも低い。一方、カテゴリー「学科共通」では推薦が他よりも低く、「情報工学基礎」では推薦が中期よりも低い傾向にある。平成 27 年度入学生はカテゴリー「自然科学」で推薦と前期が中期よりも低く、「学科共通」では中期が他よりも高く、「実験・演習」では推薦が中期よりも低い。また、「語学国際」では前期が中期よりも低い傾向にあり、「情報工学基礎」では中期が他よりも高い傾向にある。平成 28 年度入学生はカテゴリー「自然科学」と「情報工学基礎」

で推薦が中期よりも低く、「情報工学基礎」では前期が中期よりも低い傾向にある。

入試科目で累積 GPA との相関係数が目立ったものは、平成 25 年度前期の入試総合点が -0.52 、平成 26 年度推薦が 0.71 、平成 26 年前期のセンター試験数学Ⅱ・B が -0.54 、平成 27 年度中期のセンター試験物理以外の理科が 0.63 、平成 28 年度前期のセンター試験物理以外の理科が 0.59 であった。入学年度により傾向が異なり、総体的にみて、入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない。入試科目でカテゴリー別の累積 GPA との相関係数が特に目立ったものは、平成 26 年度推薦とカテゴリー「情報電子工学」が 0.74 、平成 28 年度前期のセンター試験の数学合計点とカテゴリー「人文・社会科学」が 0.74 、同じくセンター試験の物理以外の理科とカテゴリー「自然科学」が 0.74 であった。入学年度により傾向が異なり、総体的にみて相関は認められない。また、累積 GPA と入学年度の GPA との相関係数は入試区分にかかわらず概ね 0.9 前後であり、例外的なものは平成 26 年度推薦の 0.72 と前期の 0.81 のみであった。

②情報システム工学科

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.03 ± 0.47	1.90 ± 0.45	2.10 ± 0.45	2.31 ± 0.43
一般入試（前期日程）	2.30 ± 0.42	2.16 ± 0.41	2.19 ± 0.71	2.64 ± 0.49
一般入試（中期日程）	2.12 ± 0.43	2.28 ± 0.71	2.44 ± 0.52	2.45 ± 0.47
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

いずれの入学年度においても有意な差は認められないものの、t 値の確率を見ると、平成 26 年度の推薦と中期で 0.069 、平成 27 年度の推薦と中期で 0.063 、平成 28 年度の推薦と前期で 0.075 であった。有意差はないが、推薦の平均点が低い傾向にあると考えられる。さらに授業科目のカテゴリーごとに累積 GPA を算出し、入試区分による違いを調査した。平成 25 年度入学生ではカテゴリー「知的インタフェース」において前期が中期よりも高い。また、カテゴリー「学部教育への準備」、「情報工学基礎」、「知的インタフェース」において推薦が低い傾向にある。平成 26 年度入学生ではカテゴリー「大学でどう学ぶか」、「学部教育への準備」、「情報工学基礎」において推薦が低い。他の四つのカテゴリーにおいても推薦が低い傾向にある。平成 27 年度入学生ではカテゴリー「修学基礎」において前期が他よりも低く、カテゴリー「自然科学」、「ソフトウェアシステム」において推薦が中期よりも低い。学部教育科目全体でも推薦が中期よりも低い。また、カテゴリー「社会連携」では前期が他よりも低い傾向にあり、カテゴリー「工学基礎」では推薦が中期よりも低い傾向にある。平成 28 年度入学生ではカテゴリー「自然科学」において推薦が前期よりも低い。開講済みの学部教育科目は 1 科目のみであるが、それについては推薦が他よりも低くなっている。

入試科目で累積 GPA との相関係数が目立ったものは、平成 26 年度前期のセンター試験合計点が 0.67 、平成 28 年度推薦が 0.57 であった。入学年度により傾向が異なり、総体的にみて、入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない。入試科目でカテゴリー別の累積 GPA との相関係数が特に目立ったものは、平成 25 年度推薦とカテゴリー「健康の維持・増進」が

—0.72, 平成 26 年度前期のセンター試験における数学とカテゴリー「情報工学基礎」及び「ソフトウェアシステム」がそれぞれ 0.77 と 0.70 であった。入学年度により傾向が異なっており、総体的にみて相関は認められない。また、累積 GPA と入学年度の GPA との相関係数は入試区分にかかわらず概ね 0.9 前後であり、例外的なものは平成 25 年度推薦の 0.79 と中期の 0.70, 平成 26 年度推薦の 0.69 のみであった。

③人間情報工学科

平成 26 年度入学生までは、前身のスポーツシステム工学科である。

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	1.90±0.32	1.80±0.27	1.87±0.38	2.12±0.47
一般入試（前期日程）	2.54±0.49	2.06±0.46	2.04±0.57	2.46±0.64
一般入試（中期日程）	2.45±0.45	2.09±0.60	2.46±0.45	2.27±0.86
統計学的有意差	あり	なし	あり	なし

平成 25 年度入学生は前期と中期が共に推薦よりも高い。平成 27 年度入学生では推薦が中期よりも低い。また平成 27 年度の前期と中期については、t 検定の確率が 0.058 であるから、中期が前期よりも高い傾向にあると考えられる。その他の年度では有意差は認められない。さらに平成 26 年度以降の入学生について授業科目のカテゴリーごとに累積 GPA を算出し、入試区分による違いを調査した。平成 26 年度入学生ではカテゴリー「大学でどう学ぶか」と「学部教育への準備」で推薦が中期よりも低く、全学教育全体でみても推薦が中期よりも低い。カテゴリー「機器の設計」において推薦が前期よりも低く、中期よりも低い傾向にある。平成 27 年度入学生は共通教育全体でみると中期が推薦よりも高く、学部教育全体でみると中期が他よりも高い。カテゴリー別にみると、カテゴリー「修学基礎」において中期が他よりも高く、カテゴリー「自然科学」、「数学系」、「機器設計系」において推薦が中期よりも低い。またカテゴリー「数学系」、「生体機能系」、「機器設計系」において前期が中期よりも低い傾向にある。カテゴリー「実験・演習」では推薦が中期よりも低い傾向にある。平成 28 年度入学生はカテゴリー「自然科学」において推薦が前期よりも低い。また、「修学基礎」において推薦が中期よりも低い傾向にある。

入試科目で累積 GPA との相関係数が目立ったものは、平成 25 年度前期の入試総合点が 0.69, 平成 26 年度の総合点及びセンター試験合計点が 0.60, 平成 27 年度中期の入試総合点が 0.65, 平成 28 年度推薦が 0.66, 平成 28 年度前期のセンター試験物理が -0.54 であった。入学年度により傾向が異なり、総体的にみて、入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない。入試科目でカテゴリー別の累積 GPA との相関係数が特に目立ったものは、平成 26 年度推薦の面接とカテゴリー「人間と文化の理解」が 0.93, 平成 26 年度前期のセンター試験物理とカテゴリー「実験・演習」が -0.78, 平成 27 年度中期の入試総合点と共通教育全体及びカテゴリー「数学系」がそれぞれ 0.76 及び 0.79, また、個別試験と「数学系」が 0.82, センター試験数学合計とカテゴリー「実験・演習」が 0.71 であった。入学年度により傾向が異なっており、総体的にみて相関は認められない。また、累積 GPA と入学年度の GPA との相関

係数は入試区分にかかわらず概ね 0.9 前後であり、例外的なものは平成 25 年度推薦の 0.69 のみであった。

④情報工学部まとめ

一部を除いて、入試区分ごとの平均点に有意な差は認められないものの、推薦入試の平均点が総じて低い。推薦入試では意欲や基礎学力がある学生が取れていない可能性がある。また、総体的にみて、入試の成績と入学後の成績に相関は認められない。入学年度の GPA とその後の GPA との相関が極めて強いので、初年度教育が重要であると考えられる。

(3) デザイン学部

①デザイン工学科

デザイン工学科では、平成 25 年度入学生から平成 28 年度入学生について、入試日程別に平成 28 年度前期分までの GPA を用いて比較した。同一入試内の比較において一部 GPA 値に離散が認められたが、すべての年度において入試の違いによる成績の傾向は近似しており有意な差は確認できなかった。

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.0±1.0	2.2±0.6	2.3±0.5	2.5±0.5
一般入試（前期日程）	2.0±0.9	2.1±0.8	2.2±1.1	2.4±0.7
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入試科目別にみた入試得点と入学後の成績との関係については、一部の年度の推薦入試の実技には中程度の負の相関が確認できたが、説明変数の係数や定数項の確からしさが小さく ($t < 1 \cdot p > 0.05$)、統計的に無意味と判断できた。一般入試においてデザイン工学科では平成 27 年度入試から大幅な変更があり、その前後の比較は完全ではないが、概ね実技試験と成績には相関が見られなかった。センター入試については平成 27 年度入学生において、中程度の相関が見られた。特にセンター入試外国語（英語・リスニングを含む）とその他の二教科の合計点ともに中程度の相関が確認できた。

一方、平成 28 年度入学生にはセンター入試の得点と成績には弱い相関しか見られない。これは平成 27 年入学生と平成 28 年度入学生の間に入試科目の選択に大きな違いがあること（平成 27 年度入学生は数学 I・A の選択者が比較的多い）の影響も考えられる。これはセンター入試の科目別難易度の傾向との兼ね合いもあることから、今後も入試得点と入学後成績との関係に注視しながら追跡調査を継続する必要が認められた。センター試験利用科目や実技試験のありかた、面接の内容も含めて、検討と必要な改善が望まれる。

②造形デザイン学科

造形デザイン学科では、平成 25 年度入学生から平成 28 年度入学生について、入試日程別に平成 28 年度前期分までの GPA を用いて比較したが、すべての年度において有意な差は確認できなかった。

入試区分	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.1±0.6	2.3±0.5	2.7±0.2	2.4±0.3
一般入試（前期日程）	2.3±0.5	2.2±0.5	2.4±0.5	2.6±0.4
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入試科目別にみた入試得点と入学後の成績との関係については、推薦入試の実技には、いずれの年度にも有意な相関は確認できなかったが、平成 26 年度入学生の面接においては 4 年次前期までの GPA との比較において有意な中程度の正の相関 ($r=0.63, p=0.03$) が確認できた。一般入試においては、実技において平成 26 年度入学生の 3 年次前期までの GPA との間には有意な中程度の正の相関 ($r=0.48, p=0.01$) が確認できた。センター試験においては、外国語、地歴・公民、理科、数学に有意な相関は確認できなかったが、平成 28 年度入学生の 1 年次前期の GPA との比較において国語に有意な中程度の正の相関 ($r=0.43, p=0.01$) が確認できた。

推薦入試の面接、一般入試の実技、国語において有意な中程度の正の相関が確認できたが、推薦入試の平成 27 年度の面接、平成 28 年度の実技、一般入試の平成 26 年度の国語の入試得点には、有意ではないものの負の相関傾向がみられたことや、平成 27 年度入試からはセンター試験での利用科目と配点の変更されていることから、今後も入試得点と入学後成績との関係に注視しながら追跡調査を継続するとともに、センター試験利用科目や実技試験のありかた、面接の内容も含めて、検討と必要な改善が望まれる。

2-3-4 研修会等の実施

平成 28 年度の研修会として以下の教育開発講座を担当した。

講師：田原 誠氏（岡山大学アドミッションセンター長）

題目：岡山大学アドミッションセンターの広報活動について

日時：平成 28 年 7 月 15 日（金）16：00～17：30

会場：学部共通棟（東）8904 講義室

対象：全教職員、大学教員を志す大学院生

講演概要：

岡山大学アドミッションセンターは、教育研究、学習環境、入試情報等について広報を行い、各学部・学科と連携して入学試験業務を円滑に実施することにより、岡山大学のアドミッションポリシーに適合した入学者を受け入れることを目指している。オープンキャンパス、岡山大学入試対策セミナー、高校教員や保護者を対象とした入試と学部、コースの説明会等の広報の年間行事について説明された。さらに、岡山大学は多面的・総合的な評価・判定を導入する入試改革プロジェクト「文部科学省大学教育再生加速プログラム」に採択され、その内容についても紹介された。

2-3-5 入試広報活動

本年度はオープンキャンパス, 大学院オープンキャンパス, 県大祭における進学相談に加えて, 高校訪問を全学的に実施した.

2-3-5-1 オープンキャンパス 2016

平成 28 年 7 月 23 日(土)に情報工学部とデザイン学部, 7 月 24 日(日)に保健福祉学部がオープンキャンパスを開催した. 参加人数は, 保健福祉学部 1,680 名(前年比 11%減), 情報工学部 220 名(同 31%減), デザイン学部 580 名(同 9%増)で, 全体では 2,480 名(同 9%減)であった. 一昨年度, 昨年度の参加者増加率は, それぞれ前年比 27%, 8%であった. 参加者にアンケートの協力を依頼し, 保健福祉学部 451 名, 情報工学部 55 名, デザイン学部 68 名, 計 574 名から回答を得た. 以下に質問項目と集計結果を示す.

設 問	回 答	割合 (%)
説明会・体験講義などの内容はどうでしたか?	とても分かり易い	52.6
	分かり易い	43.5
	少し難しい	3.2
	とても難しい	0.2
	その他	0.5
知りたい情報は得られましたか?	十分得られた	48.9
	ある程度得られた	49.7
	あまり得られなかった	1.4
	ほとんど得られなかった	0.0
もっと説明が必要な情報は何か? (複数可)	学部の特色	32.6
	学費	32.4
	学生生活	28.2
	教育内容	20.4
	入試方法	19.5
	卒業後の進路	17.6
	その他	1.2
本学に興味を持った理由は何ですか? (5つまで)	地元の大学	57.8
	大学で学べること	39.4
	学費負担が少ない	33.6
	資格を取得できる	29.3
	就職率・資格合格率	27.0

	将来就ける仕事	26.0
	大学の印象	24.0
大学選びに参考とするものは何ですか？ (複数可)	オープンキャンパス	77.3
	大学パンフレット	53.2
	先生・親の意見	35.9
	ホームページ	32.4
	進学ガイダンス	12.9
	受験情報誌	2.1
入学したいと思いましたか？	とても強く思った	37.3
	強く思った	26.4
	少し思った	26.4
	そう思わなかった	0.7
	入学を考えていない	2.3
	わからない	7.0

説明や体験講義の内容も分かり易く、多くの参加者が知りたい情報が得られたと感じたようである。大学教員としては研究や施設面の説明に力を入れがちであるが、高校生にとっては学部の特色や学費、学生生活などが気になるようである。自由記述欄では、教員や在学生が親切で対応がよかったとの意見が多かった一方、道がわかりにくく、学内で迷った学生も多かったようであり、案内の強化は次年度以降改善すべき必須の課題である。

2-3-5-2 大学院オープンキャンパス

保健福祉学研究科の大学院オープンキャンパスは本年度で3回目となる。昨年と同様、全体説明会では大学院の概要説明に加え、奨学金制度の説明や過去入試問題の閲覧を行った。専攻別説明会では、各専攻の教員ならびに院生による研究紹介などを行った。

日時：平成28年5月21日（土）

全体説明会：10：00～10：30

専攻別説明会：10：45～

会場：学部共通棟東、保健福祉学部棟

参加者数：86名（看護学専攻・大講座17名、栄養学専攻・大講座11名、保健福祉学専攻・大講座58名）

86名の参加者の中で学外者の割合は依然として少なく、広報に改善が必要かと思われる。心配事は学生では学費の負担がトップで、ここが進学のネックになっていることは明らかである。一方、社会人は講義・演習への出席が可能かがトップであり、長期履修者への柔軟な対応が望まれる。昨年度のアンケートの自由記述の中に「長期履修の変更ができる」といふとあったことに対応し、本年度より長期履修期間の短縮を在学中一回に限り可能とする制度を設けたが、社会人の受験者増に影響するかは今後の調査が必要である。なお、大学選び

の際に最も重視されているのは、全体として教員の研究内容がトップであることから、本年度より全専攻において、各教員の研究内容を紹介するチラシを配布するとともに各教員の研究内容を紹介する時間を設定した。全体として参考になったと回答している学生が多い中で、進学する意思が全くない学生の参加者もあり、改善が必要である。

なお、保健福祉学研究科では平成 21 年度以来、いずれかの専攻において定員割れを起こす状況が続いていたが、以下の表に示すとおり、本事業実施開始 2 年後の平成 28 年度入試ではすべての専攻で定員が充足され、一定の効果はあったものと推察される。この原因として、本事業により学生の大学院への理解が深まったと同時に、教員の大学院教育の重要性への意識改革もあったものと思われる。

保健福祉学研究科の入学者数の年次推移

	博士前期課程			博士後期課程
	看護学専攻 (定員7名)	栄養学専攻 (定員6名)	保健福祉学専攻 (定員7名)	保健福祉科学専攻 (定員5名)
平成25年度	5	6	6	4
平成26年度	3	6	4	6
平成27年度	10	7	5	7
平成28年度	11	6	8	6
平成29年度	11	3	7	8

情報系工学研究科では、主として社会人学生の獲得を目的として、OPU フォーラムにおいて、パネル展示及びパンフレット・チラシを配布するとともに進学についての相談を受け付けた。

OPUフォーラム2016

日時：平成28年5月27日(金) 14:00～17:00

会場：岡山県立大学体育館

相談件数は 7 件で、いずれも社会人であった。OPU フォーラムの来場者であるため、必ずしも相談者が進学を希望しているわけではないが、社会人が学びやすい環境を整えていること、学部卒や高卒でも条件を満たせば入学可能なことを説明し、適任者の紹介を依頼した。特に博士後期課程で定員割れが続いている状況なので、OPU フォーラムのみならず各種イベント等での本学教員による一層の広報活動が望まれる。

デザイン学研究科では、OPU フォーラム及び県大祭における学内開放において大学院オープンキャンパスのコーナーを設け、説明パネルや研究作品の展示により教育・研究内容を紹介するとともに進学についての相談を受け付けた。

OPUフォーラム2016

日時：平成28年5月27日(金) 14:00～17:00

会場：岡山県立大学体育館

○各デザイン学領域の説明パネルの展示

OPU フォーラム体育館会場入口付近において、デザイン工学専攻 製品・情報デザイン学領域、建築・都市デザイン学領域、造形デザイン学専攻 造形デザイン学領域の3領域の説明パネルを展示した。

○研究科進学相談コーナー

学部生が研究科の理解を深めるために、研究科の入試説明コーナーを設けた。体育館出入口付近にテーブル、椅子を設け、図録、入試情報、梗概集、論文、研究内容説明、授業料、奨学金等の資料を用意して進学相談を行なった。相談者数は、4年次生5名、3年次生2名、1年次生1名の計8名であった。

各デザイン学領域の内容を集約した展示を行なうことにより、デザイン研究科の全体像が見渡せる展示内容となったが、秋の県大祭の学内開放では、参加者数の増加を目標に、各領域の研究作品の展示企画を立てることとした。



各デザイン学領域の説明パネルの展示



研究科進学相談コーナー

県大祭における学内開放

日時：平成28年11月5日(土)13:30～16:00(県大祭初日)

会場：デザイン学部棟1階 展示ホール

○各デザイン学領域の説明パネル、研究成果作品等の展示

デザイン学部棟1階 展示ホールと屋外スペースに、デザイン工学専攻 製品・情報デザイン学領域、建築・都市デザイン学領域、造形デザイン学専攻 造形デザイン学領域の3領域の紹介パネルや研究成果作品を展示した。

○研究科進学相談コーナー

デザイン学部棟1階 出入口・廊下付近にテーブル、椅子を設け、保護者及び学生への研究科説明コーナーを設け、図録、入試情報、梗概集、論文等の資料を用意して進学相談を行なった。

来場者数は227名で、そのうち相談者数は保護者10名を含み30名であった。在学生のとくに低年次生から大学院での研究内容についての質問があったことから、学部入学後の1～2年次生に対して大学院についての情報を示す必要性があると感じられた。



説明パネル, 研究成果作品等の展示



研究科進学相談コーナー

2-3-5-3 高校訪問

複数の学科が同一の日時に同一高校を訪問することにより高校側に本学の情報を効率的に提供することを目的として, 全学的に実施した。

(1) 保健福祉学部

① 看護学科

大学側から以下のような説明を行った。

- ・クォーター制の導入, 副専攻としての岡山創生学, 海外留学, ボランティア, 地域コモンズなどについて
- ・出身学生の様子
- ・就職状況について
- ・看護学科で学ぶべき内容, 大学院での保健師教育課程について
- ・学部での取得資格 (看護師国家試験受験資格・助産師国家試験受験資格), 大学院での取得資格 (保健師国家試験受験資格) について
- ・卒業生の進路 (看護師・助産師・進学) について

高等学校の進路指導教諭からの質問や意見としては以下のようなものがあった。

- ・県内進学を考える学生の増加。
- ・看護は人気が高くなっている。
- ・オープンキャンパスなどには2年次から参加するよう勧めている。
- ・地域を活性化するために, 情報工学部で学び起業できる学生が出ることを期待している。
農学, 医学を専攻する生徒は生物を選択するが, できるだけ物理を選択する様に説明している。
- ・看護の特定看護師などのキャリアアップについて, 生徒に紹介したいので, ぜひ説明をお願いしたい。
- ・自宅から通学できる大学を希望する学生が多い。
- ・助産師を希望する学生が多い, テレビの影響かも。

- ・毎年看護学科を希望する学生が多い。
- ・中学生時の職業体験などキャリア教育が進んでいる。
- ・4年後の入試の情報が知りたい。
- ・推薦の時の小論文, 面接の配点, どこで差がついているのか。
- ・調書はどの程度評価しているのか。
- ・推薦入試の対策をかなりしている。
- ・全体として, 推薦入試の校内評定をどのように取り扱っているか。
- ・看護学科に対しては, 推薦入試の校内枠をなくして欲しい。
- ・理系大学は学費が高いのでできるだけ国公立をと考える傾向はある。
- ・進路指導として面接の練習をしているのだが, それについての大学側からの印象はどうかという質問があり, 何かを暗記して話すことより, 自分の意見・考えが言えることが大切と説明。
- ・6年一貫教育となって進路指導が手探り状態である。
- ・笠岡とのCOC+関連はどのようなことをしているのか, また, 大学と一緒に土日などを利用して, 高校生が地元で参加できるようなイベント・プログラムも考えてほしい。
- ・各学科ごとの授業開放のチラシに対し, 学生に周知したいと考えているが, 教室の掲示できるスペースには限りがある。掲示しやすいように大学単位でまとめたポスターなどにしてほしい。(東大, 京大, 北海道など全国の大学からのポスターが多数掲示されている)

② 栄養学科

平成28年度は, 県内及び県外それぞれ10校, 計20校の高校を訪問した。あらかじめ訪問マニュアルを作成し, 管理栄養士資格, 国家試験の合格状況, 就職率及び進学も含めて就職先, カリキュラム, 入試について順次説明し, 最後に授業開放やオープンキャンパスの案内を行った。説明に当たっては, 高校出身者が本学で活躍している様子を, 大学案内の掲載ページを紹介するなどして説明し, 優秀な学生を送っていただいていることの感謝を述べてから, 学科の案内を進めた。

本学での卒業生の活躍などを述べると, 印象もよく, その後の会話もスムーズになる傾向があったので, 今回看護学科で実施されていたように卒業生が出身高校の後輩などに宛てたメッセージをあらかじめ準備し, 訪問時に渡す方法は非常に効果的と思われる。

高校側からは, 文系では受験できないか, 栄養教諭の資格希望状況, 推薦入試の県外枠の希望などの意見が目立った。

今年度は新規開拓も期待して県外高校への訪問に重点を置いたが, あまり興味や関心を示さなかった高校もあったので, 今後, 費用対効果も考慮して訪問先を決定してもよいと思われる。

③ 保健福祉学科

大学案内2017ならびに保健福祉学専攻と子ども学専攻各々独自に作成しているチラシを持参し, 以下のような内容の説明を行った。

- ・社会福祉学専攻の教育の特徴として, 学部から博士課程まで開設し, 高度な専門的知識を

一貫して学ぶことができる。社会福祉士国家試験合格率は 50 名以上受験した大学では全国 1 位であり、就職率は 100%である。前期入試定員が 20 名から 24 名、後期入試定員が 8 名から 4 名に変更となる。子ども学専攻は、幼稚園教諭と保育士の資格を取得可能である（卒業生はまだいない）。両専攻共に少人数制で指導している。

- ・平成 29 年度よりクォーター制を導入。副専攻としての岡山創生学、海外留学、ボランティアなど。

高等学校の進路指導教諭の意見としては以下のようなものがあった。

- ・大半が国立大学受験を希望しており、福祉系の大学に進学を希望する者はいない。
- ・人間科学系を志望する生徒は京都大学か神戸大学を志望し、幼稚園教諭を希望する場合は神戸大学を希望する。
- ・福祉に興味を有している生徒は一定数いる。地元志向の生徒が多いが、センター試験等の結果で進学先を全国的に選んでいる。国公立に進学を希望する学生が多い。
- ・理系の学生が情報工学部の中期日程を多く受験している。保健福祉学科については文系の学生が希望するとの認識であった。
- ・本学の対抗大学として兵庫県から通学圏にある大阪府立大学をあげられる。オープンキャンパス・オープンスクールへの参加を学生に勧めるが、オープンキャンパスは 8 月の方が参加しやすい。
- ・福祉を目指す学生はあまりいない、減少傾向にある。
- ・地元に進学をするというよりも、国公立大学への合格を目指している学生が多い。
- ・保護者には「地元で通える大学」「地元で就職できる大学」というニーズが高い。
- ・文系志願の生徒が増えているが、私学の頑張りや広島の公立に比較し、岡山は国公立の文系の選択肢が少ない。
- ・福祉は就職後の待遇などのことがあり、重要性は理解しているが生徒の希望者は少ない。
- ・オープンキャンパスなどには 2 年次から参加するよう勧めている。
- ・保健福祉学科は社会福祉士の国家試験の合格率が高いことが印象にあり、今年度推薦入試で受験したい学生がいる。子ども学専攻の推薦入試定員を増加してほしい。
- ・生徒は少しでも自分と接触の機会があった大学を選択する。福祉のイメージが福祉職＝高齢者介護職＝待遇の悪い職場（給料が安いの意味）というイメージが染みついている（保護者も）。通学に不便で敬遠されがちである。
- ・保育や福祉に関心のある生徒もいるが、学力に不安があり、県大を勧めることができない。

(2) 情報工学部

昨年度までは、人間情報工学科が単独で訪問していた。今年度から全学的に共同訪問することになり、情報工学部からは、県内 25 校、県外 1 校の計 26 校をリストアップしたが、他学部と重複していた 23 校を訪問した。それら以外の高校については、学部単独で訪問した。

大学からは、学部学科の教育や研究の概要、主な就職先、オープンキャンパス・大学授業開放・COC+事業の宣伝、訪問先高校出身者の近況について説明した。訪問先高校出身者の近況を伝えると、以降スムーズに話が進むので、出身高校ごとに在学生の近況を把握しておくこ

との重要性を痛感した。今後は、各学科で組織的に取り組んでいきたい。

高校側からの質問として最も多かったのは入試に関する事、これに続くのが卒業後の進路に関する事、これら二点に尽きるといってもよい。大学へ送り出す立場からすると仕方がないことかもしれないが、受け入れる側としては、目的を持って入学することと大学での過ごし方の重要性を強調していきたい。

(3) デザイン学部

昨年度まで、デザイン学部単独で約 30 校を訪問していたが、企画運営委員会の方針により、訪問する高校の数を絞り込んだ。高校の選定にあたっては、各学科に 2 名以上の卒業生が在籍する約 10 校をピックアップし、訪問担当教員は学生の所属するゼミや領域の教員をあてることとした。

これまでは、訪問した教員から高校側の対応が良くないとの意見が度々聞かれたが、今回は大学主導による複数教員の訪問による本格的な大学紹介となったことや、高校卒業生の本学入学後の学びの状況を丁寧に報告できたことから、概ね好意的な対応であったとの報告が多く見られた。ほとんどの高校では進路指導教諭による対応であったが、一部の高校では美術担当教諭の同席もあり、デザイン学部に関しては美術担当教諭の応対の方が望ましい場合もあるのではないかと、この報告もあった。また、デザイン学部では実技（デッサン）を課していることから、多くの受験生は高校の美術教諭からだけではなく、画塾・研究所で実技や進路に関する指導を受けている。このことから、デザイン学部独自の来年度の訪問先として画塾・研究所を加えることが効果的なのではないかと考える。

高校からの質問としては、多い順に卒業後の進路、入学者の学びの状況、入試、カリキュラムに関するものであった。また、県外卒の推薦入試を実施してほしいとの要望があった。

2-3-6 高大接続事業

2-3-6-1 高校生のための大学授業開放

本事業は高校生向けにアレンジした本学の授業を提供することによって、高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ、高校での学習に、受験対策としてではなく、大学で学ぶために必要な基礎学力の修得のために取り組むきっかけとさせることを目的とした事業であり、高校での学習の目的を明確に定めさせることにより、高校と大学での学習効果の向上への反映が期待されるだけでなく、意欲の高い学生の入学にもつながることが期待される事業であるため、広報を目的としたオープンキャンパスとはベクトルが反対に近い事業である。

(1) 実施日

平成 28 年 8 月 20 日（土）

10：00～（保健福祉学部）

10：20～（情報工学部）

13：30～（デザイン学部）

(2) 授業内容

① 保健福祉学部看護学科

- 10 : 10～11 : 40 高校生のための在宅看護学入門（講義）
- 13 : 00～14 : 30 高校生のための基礎看護学演習（演習）
- 13 : 00～14 : 30 高校生のためのリラクゼーションを促す看護演習（演習）

② 保健福祉学部栄養学科

- 10 : 10～11 : 40 高校生のための栄養学入門（講義）
- 10 : 10～11 : 40 高校生のための公衆栄養学入門（講義）
- 13 : 00～16 : 00 高校生のための遺伝子工学実験（実験）
- 13 : 00～16 : 00 高校生のための臨床調理（実験）

③ 保健福祉学部保健福祉学科

- 10 : 10～12 : 00 高校生のための国際福祉論・高校生のための介護原論・高校生のための保育内容総論（講義）
- 12 : 50～13 : 40 13 : 50～14 : 40 高校生のためのソーシャルワーク演習（演習）
- 12 : 50～13 : 40 13 : 50～14 : 40 高校生のための認知症ケア論（演習）
- 12 : 50～13 : 40 13 : 50～14 : 40 高校生のための保育内容（演習）

④ 情報工学部

- 10 : 20～11 : 50 高校生のための情報ネットワーク入門（講義）
- 10 : 20～11 : 50 高校生のためのプログラミング言語入門（講義）
- 10 : 20～11 : 50 身体の機能を学ぶ（講義）
- 13 : 30～15 : 00 高校生のための情報ネットワーク入門（演習）
- 13 : 30～15 : 00 高校生のための3次元CAD入門（演習）
- 13 : 30～15 : 00 身体の機能に関する実験（演習）

⑤ デザイン学部

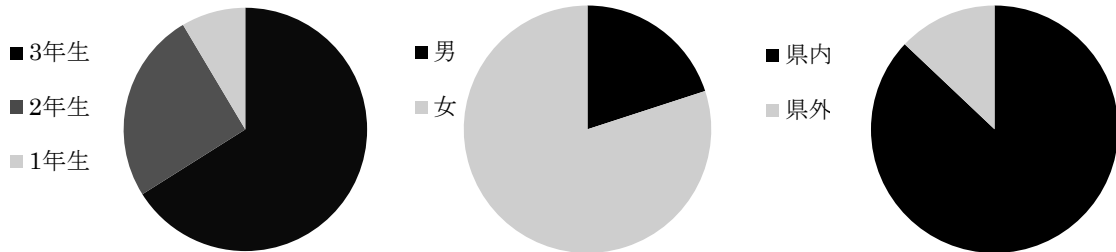
- 14 : 00～14 : 50 岡山県の国宝建築（講義）
- 14 : 00～14 : 50 つかいやすいをデザインする（講義）
- 14 : 00～14 : 50 絵本の色を読む（講義）
- 14 : 00～14 : 50 シンボルマーク・ロゴタイプデザインの実際（講義）
- 14 : 00～16 : 00 屋外ギャラリー空間を考える（実技）
- 14 : 00～16 : 00 生活器を考える・作る（実技）
- 14 : 00～16 : 00 プレゼンテーションの見せ方と伝え方（実技）
- 14 : 00～16 : 00 カラフルてぬぐい！染色体験（実技）

(3) 実施状況

① 参加者数（アンケート回収数）

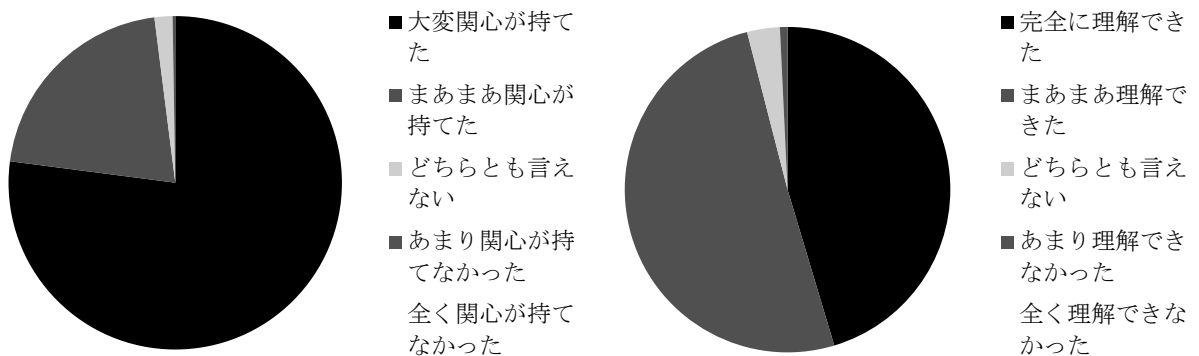
全体：387名（保健福祉学部243名（看護62, 栄養78, 保福103）, 情報工学部58名, デザイン学部86名）

参加者数内訳：



参加者数は昨年度（285名）と比較して100名ほど増加した。内訳は1年生が9%（昨年度7%）、2年生が25%（昨年度16%）といずれも昨年度より増加しており、低学年の参加者の増加は、高大接続の観点からも、また、高校での学習のモチベーションの向上や進路決定への影響の観点からも意義があると考えられる。また、東は福井県や和歌山県、西は鹿児島県からの参加者もあり、県外からの参加者数は13%と昨年（9%）より若干増加したが、今後さらに増やすための広報面での工夫は依然として課題である。学部別ではデザイン学部の県外参加者の割合が28%と最も多く、栄養学科（10%）と保健福祉学科（10%）が続いた。

② 授業内容の理解度・関心度



事業の性質上ややハイレベルに設定した授業も多かったが、昨年同様に、大変関心がもてた（77%）とまあまあ関心がもてた（21%）と回答した参加者がほとんどを占め、理解度に関しても完全に理解できた（45%）とまあまあ理解できた（51%）が大部分であった。昨年度と比較し完全に理解できたと答えた学生の割合が若干増加した（昨年度31%）。昨年同様、すべての学科で講義形式と演習・実験形式の授業の両者を用意したが、大変関心がもてたと答えたのは講義形式が72%、演習・実験形式が85%、また、完全に理解できたと答えたのは講義形式が38%、演習・実験形式が57%であり、学生参加型授業の方が関心度も理解度も高かった。今回は一部の講義でグループワークによるアクティブ・ラーニング形式を取り入れたが、大変関心がもてたと答えた参加者（77%）、完全に理解できたと答えた参加者（42%）のいずれも講義全体の平均を上回った。自由記述欄における「学校で習っている生物のこと

をもっと知れて楽しかったです」、「高校で習ったことをふまえた内容で、とてもわかりやすかったです」などの記載から、本事業の第一の目的であるところの、「大学の授業を理解するために、高校での学習がいかに重要であるかを理解してもらう」という高大接続事業としての役割については概ね達成されていると思われた。さらに、「在宅看護がどういうものかわかりました」、「保育内容（表現）の授業を受けてみて、とても楽しく学びたいことが学べそうで、参加してよかったです」、「実際に授業を受けてみて興味が持てました」、「デザインには造形能力が必要であり、それが重要であることがわかった」など、本学で学ぶ意義や楽しさを伝えることで、本学に適性のある受験生の確保につながるという事業の目標も達成されていると思われるとともに、FD 活動など本学教員の努力により達成されている、本学の丁寧でわかりやすい授業の広報にも役立ったと思われる。

今年度は各学部・学科のオリエンテーションもしくは最初の授業の中で各学科アドミッションポリシーの説明を取り入れたが、これについても、完全に理解できた（34%）とまあまあ理解できた（59%）で大部分を占め、授業の中で高校生にアドミッションポリシーを伝えることにも概ね成功していると思われる。

(4) 事業の広報

本事業を何で知ったか（複数回答可）に対しては、本学の HP（47%）、オープンキャンパス（31%）、高校の先生（30%）が多かった。また、「その他」（6%）の中では「保護者説明会に行った親から聞いた」、「チラシやポスターを見た」との回答が多かったことから、これらの広報はいずれも効果があると考えられる。なお、事業に参加した理由（複数回答可）としては、授業の雰囲気を知りたい（87%）、が圧倒的に多く、教員の雰囲気を知りたい（42%）が続いたが、設備を知りたい（18%）やキャンパスや学内に入ってみたい（16%）が少なかったことから、オープンキャンパスとの趣旨の違いについては参加者に十分伝わっていたと思われる。

なお、入学時アンケートの結果から、入学者の中で2015年度の本事業に参加した学生が55名おり、参加者全体の18%を占めていた。オープンキャンパス参加者については、本学入学者数は参加者全体の6%に過ぎず、本事業が高大接続事業であるとともに、本学の受験者獲得に向けてオープンキャンパスを上回る効率で効果をもたらしているとも考えられる。

(5) 今後の課題

入学時アンケートの結果から、本事業を本学出願の参考にした学生は80%にとどまり、オープンキャンパスとほぼ同等の割合であった。この数値は学科によって異なり、栄養学科と造形デザイン学科は100%であり、情報通信工学科（90%）とデザイン工学科（88%）が続いた。高大接続事業として、本事業が高校生にとって進路の参考となることは必須の課題であり、この調査は今後も続ける必要がある。本年度は3学部の同時開催となったが、各学部の授業の開始時刻については再考の余地がある。また、開催時期については、補習授業や2学期の開始時期に重ならないよう、昨年度より1週間程度早い時期の土曜開催としたことが参加者の増加につながった可能性がある。なお、出前講義の依頼が一件もなかったことについては、各学科に高校から直接依頼が来る授業との住み分けを含めて、あり方そのものを検討す

る必要がある。また、今回も熱中症の発症者はいなかったが、オープンキャンパスでは3名の発症が出たことから、発症予防に向けて大学としての十分な対策が必要である。



カラフルてぬぐい！染色体験



高校生のための遺伝子工学実験

(6) その他の高大連携事業

本学に高校生が来校し、講義等を受ける形での連携事業としては次の2件であった。

実施日：平成28年9月20日(火)

来学者：岡山県立総社南高等学校普通科理数系2年生79名、引率教員4名

実験テーマと受講者数：直流電圧と交流電圧の時間波形の測定 25名、ヤング率の測定 12名、半導体特性の測定 11名、筋電信号の測定 10名、エネルギー代謝の測定 10名、感覚量の測定 11名

担当教員：尾崎学部長（学部説明）、福嶋准教授・綾部准教授・齋藤准教授・横川准教授・天寄助教・島崎助教（実験）、佐藤教授（取りまとめ）

実施日：平成28年11月22日（火）・12月7日（水）

内容：食品の機能性を測定する実験方法の指導

受講者：ノートルダム清心女子高等学校「物理科学課題研究」選択者 2年生16名

担当教員：栄養学科 伊東教授

2-3-7 まとめと課題

平成28年3月の高大接続システム改革会議「最終報告」を受け、平成28年度は3ポリシーの一体性・整合性の直しの中で各学科のアドミッションポリシーの見直しを実施した。平成32年度入試からの大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入を控え、平成30年度初頭に公表予定の入試内容の決定が差し迫った課題であるが、これまでに収集した入学者成績追跡調査ならびに入学時アンケートの分析結果に加えて、次年度からは県内高校との作業部会が発足される。これらの情報を最大限に活用し、他大学との連携も試みながら、学力の3要素の醸成に向けた高大接続の充実を図ることが次年度の最大の課題と考えられる。

2-4 共通教育部会

2-4-1 概要

共通教育部会は、大学教育開発センター規程第2条第1項第7号に示される「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために設置された部会である。共通教育科目に対するカリキュラムの企画・立案を行うとともに、教養教育の体系化、教養教育に対する評価基準の作成と実施、共通教育におけるアクティブ・ラーニング授業の企画と実施などが具体的な業務である。

今年度は(1)クォーター制における共通教育科目の時間割作成、(2)教養科目における新カリキュラム作成案の作成、(3)アクティブ・ラーニングに対応可能な教室の検討と改修案の提案、を行った。これらの取組について、概要は以下の通りである。

- (1) 共通教育科目の時間割は、科目の特性を鑑みてクォーター制と Semester 制を共存させることとした。平成 29 年度から本時間割に基づいて教育を行う。
- (2) 新カリキュラム案については、3-2-1 で述べたように、現行カリキュラムの問題点を明確にするとともに、本学にふさわしい教養カリキュラムを提案した。平成 30 年度の開講を目指す。
- (3) アクティブ・ラーニングに対応可能な教室については、現在の教室におけるハード面の問題点を抽出し、さらにその結果を踏まえ、「学修効果向上を目指したアクティブ・ラーニング教室の整備」の事業名で、大学教育開発センターと連名で新規重点事業として提案した。

さらに共通教育部会では、平成 28 年度大学教育開発センター「第 1 回センター・ワークショップ」を担当した。以下にその概要を述べる。

研修会名：共通教育における「アクティブ・ラーニング」について

主催：共通教育部会

日 時：平成 28 年 9 月 8 日 (木)

講演・質疑 12:40 ～ 13:30

ワークショップ 13:30 ～ 14:10

会 場：岡山県立大学 学部共通棟東 8902 講義室

講 師：柴田奈美 教授 (岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科)

樋笠勝士 教授 (同上)

風早由佳 講師 (同上)

<概要>

このワークショップは、本学の共通教育科目のアクティブ・ラーニングに関する研修会である。前半では、アクティブ・ラーニングの簡単な説明を行い、共通教育科目担当の 3 名の教員がアクティブ・ラーニングを活用した授業の報告を行った。後半では、共通教育科目の担当教員に行ったアクティブ・ラーニングに関するアンケート結果を資料とし、その分析・検討を小グループで行い、それぞれ報告した。



<参加者> : 61名 (教員 : 55名, 職員 : 6名, その他 : 0名)

<アンケート結果> 回答者 : 40名 (教員 : 39名, 職員 : 1名, その他 : 0名)

◎研修会全体への満足度

(教員) とても満足 : 16% 満足 : 52% 計 68%

(職員) とても満足 : 0% 満足 : 100% 計 100%

◎自分の活動での活用

(教員) 是非活用したい : 14% できれば活用したい : 48% 計 62%

(職員) 是非活用したい : 100% できれば活用したい : 0% 計 100%

最後に共通教育部会の今後の課題について、短期的なものや長期的なものに分けて述べる。

(1) 短期的課題 (平成 29 年度に検討し, 平成 30 年度からの実施を目指す)

(ア) 教養カリキュラム案の開講計画への昇華

(イ) クォーター制の実施状況の把握と必要に応じた改善

(ウ) 共通教育科目における成績分布の検証と必要に応じた教育内容の改善

(エ) 個々の授業におけるアクティブ・ラーニングの検討

(2) 長期的課題 (平成 30 年度までに検討し, 平成 31 年度からの実施を目指す)

(ア) TOEIC やオープンボイス等の有効活用による英語教育の評価と必要に応じた改善

(イ) 副専攻「岡山創生学」への提供科目の評価と必要に応じた改善

2-5 FD 部会

2-5-1 概要

FD 部会では、「教育の質の改善」を目的に、主として、1) 相互授業参観、2) 授業評価アンケート、3) FD 研修会について取り組んだ。FD 研修会の企画に際しては、平成 29 年度より導入予定のクォーター制では原則週 2 回の授業が実施され、これを契機にアクティブ・ラーニングを導入した授業が拡充されるであろうことを考慮した。また、相互授業参観結果を授業の実践に活かすための授業改善意見交換会を企画すると共に、教員への支援に関する取組を行った。以下、各取組についての詳細を報告する。

2-5-2 相互授業参観

2-5-2-1 相互授業参観の概要

(1) 平成 28 年度授業参観の方針

平成 17 年度の講演会、平成 18 年度のモデル授業参観の実績を踏まえ、平成 19 年度より授業の工夫や改善のための研鑽機会を設けるといった目的のもと、全専任教員を対象とした相互授業参観を継続実施してきた。本年度は、観点 6 項目の改訂を除き昨年度取組を踏襲、参観実施時期についても昨年度同様、後期とした。

(2) 平成 28 年度授業参観の実施内容

1) 目的

具体的な授業の進め方や指導技術について学び、自己の授業環境で活かすことのできる指導方法を模索することにより、よりよい授業づくりを推進する。

2) 実施方法

① 公開授業の開示

すべての専任教員（助手を除く）は、授業科目 1 コマ（授業形態は問わない）を選び、公開授業科目名、演習／実習／講義の別、当日の授業概要（200 字以内）、月日、時限、教室名を相互授業参観 web システムより入力する。

② 参観授業の選択

参観教員は、相互授業参観 web システムの公開授業一覧より参観希望授業を選択する（他学部教員の公開授業を参観してもよい）。

③ 実施期間

平成 28 年 10 月 27 日（木）～ 11 月 21 日（月）の 3 週間。

3) 授業参観レポート

授業参観終了後、参観教員は下記項目について相互授業参観 web システムより入力する。

① 観点別 6 項目の意見・助言（意見・助言の記述及び、特に参考になった項目へのチェック）

項目 1 授業の準備・導入

(例) 環境づくり, 出欠確認の仕方, 前回授業内容のふりかえり, 学習目標の確認 等

項目 2 授業の構成

(例) 形式・構成, 時間配分, アクティブ・ラーニングの活用 等

項目 3 授業の展開技術

(例) 重要ポイントの強調, 話し方, 板書の仕方 等

項目 4 教材の内容・活用

(例) (適切な) 内容・形態, 視聴覚機材等の適切な選択と使い方, 教材提示のタイミング 等

項目 5 学生への関わり

(例) 学生とのコミュニケーションの仕方, 学生の意欲や理解を高める関わり方, 理解力の異なる学生への配慮 等

項目 6 授業のまとめ

(例) 授業内容のふりかえり, 予復習など自己学習の促進 等

②その他, 授業全体を通して参考となった点・工夫が見られた点・助言等 (自由記述形式)

③今後, 自身の授業改善において具体的に採り入れたい点 (自由記述形式)

公開教員は相互授業参観 web システムにてレポート内容を確認後, 同システムの授業公開教員コメント欄に入力する.

4) 授業改善意見交換会

相互授業参観活動を基に, 具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有し, 今後の授業改善に役立てることを目的に, 平成 29 年 2 月 17 日 (金) に授業改善意見交換会を開催した (詳細は後述) .

2-5-2-2 相互授業参観の結果

相互授業参観後に提出された授業参観レポート 69 枚を分析した結果は次に示す内容であった.

(1) 参観報告者と授業公開者の集計表

授業公開者	学科教員数についてはH28年12月1日現在、n (%)								計 (全教員166名)
	看護学科 (教員23名)	栄養学科 (教員19名)	保健福祉 学科 (教員28名)	情報通信 工学科 (教員21名)	情報システム 工学科 (教員21名)	人間情報 工学科 (教員15名)	デザイン 工学科 (教員17名)	造形デザイン 学科 (教員22名)	
授業参観者									
看護学科	3	2	1	0	0	1	0	0	7(30.4)
栄養学科	2	3	1	0	0	0	0	0	6(31.6)
保健福祉学科	4	0	12	0	0	0	1	0	17(60.7)
情報通信工学科	0	0	0	4	1	1	0	2	8(38.1)
情報システム工学科	0	0	0	3	3	2	0	1	9(42.9)
人間情報工学科	0	0	1	0	2	1	0	0	4(26.7)
デザイン工学科	0	0	1	0	0	0	2	2	5(29.4)
造形デザイン学科	0	1	0	1	0	0	2	9	13(59.1)
計	9	6	16	8	6	5	5	14	69(41.6)

(2) 6つの観点別の意見・助言の結果

授業の準備・導入では、43件の意見があった。「短時間のなかで前回までの授業内容をふりかえる」「毎回の小テスト」「本時の学習のねらい（テーマ）が明確に示される」「主体的に取り組む視点を持つ」「前回までの授業の要点の復習をおこなうとともに今回授業への導入が行われる」など、効果的な授業導入に関する肯定的な意見があった。また、否定的な意見として、広すぎる教室の使用方法として、何列目までに学生を座らせるなど欠点をカバーするような意見もあった。

授業の構成では、46件の意見があった。「授業の構成や時間配分も適切」「生の感想や意見を資料にまとめ、様々な意見を拾い上げるように構成」「学生同士で技術のポイントを確認することで自らやってみる、他の学習者の行動をみて自分の気づきにつなげる」「学生同士でチェックし合ったり、話し合ったりする機会と、書き取りなど個人で取り組む機会とがバランスよく配置している」など、授業の構成に対する肯定的な意見があった。また、「グループにより実験を終了する時間にばらつきがある」場合などの対応として、時間の利用方法を提示するとか時間指定をするなどの意見があった。

授業の展開技術では、48件の意見があった。「板書をノートに写す時間も十分に確保」「重要なポイントについては、ゆっくり話す」「説明や解説にはパワーポイントのスライドが使われており、板書に比べて情報量を多くできるメリットが活かされている」「各学生に対して対話的に行っており、各人の理解度を詳細に把握している」など、授業の展開の技術に関して、肯定的な意見があった。しかし、授業の構成と同様に、「確認が終わった学生はやることが無く、手持ち無沙汰となる時間がある」など、学生の授業参加に対するきめ細かい指摘もあった。

教材の内容・活用では47件の意見があった。「学生が主体となって創意工夫できるように教材が準備されていた」「教材のみに頼ることなく、教材の内容を題材として学生の主体的参加を促すための授業づくりが行われていた」「プリント配布のタイミングが適切」「確認テストの答え合わせを自分でやるので、効率的かつ自分の間違いを把握しやすい」など、教材の内容のみならず、配布のタイミングにも知識の習得に効果的なことが述べられていた。学生の授業に向かう姿勢では、「小さめの文字が見づらいスライドがあったので、全体にもう少し前に着席するよう促す」など、授業参加に関する意見があった。

学生への関わりでは、53件の意見があった。「学生が授業参加できるための工夫として発言の機会を均等に設けている」「学生とコミュニケーションを取ることに配慮している」「一方的な説明や授業進行が全くなく、常に学生と会話をする」「あえて授業中に正解を示すのではなく、正解例を通じて学生側の努力や成果を認めるなど、学生の授業に対する参加意欲に配慮した取組」など、教授時の学生への関わり方が取り上げられていた。教員が注意を要することとして、「後方の席で携帯電話を触っている学生がいた」「学生の感想や、内容に対する解釈は、指名して学生本人に発言させた方が、より授業への参加を演出できる」など、後方の学生に注意を向けることや関わり方の工夫などの意見があった。

授業のまとめでは、37件の意見があった。「学生の動機づけを高め、しっかり予習復習しな

いといけない、しようという気にさせるものであった」「次回授業までにやっておくことを確認していたが、優先順位を明確にして伝えているのがよい」「学生同士の議論と次回の授業内容の連続性の意識付けがなされていた」など、次回の授業へ繋げる工夫が肯定的な意見として挙げられていた。逆に、「次回の橋渡しのためのキーワードをいくつかプロジェクトーに出しておく、よりはっきりする」「制作経験を生かして、自主制作につなげるような方向性を示すアドバイスが、もっと学生に伝わるようにしても良かった」など提示した課題への説明不足についての意見もあった。

授業全体を通して参考となった点や工夫が見られた点では、49 件の意見があった。「板書の構成も工夫している」「体験談や事例の紹介、学生が使用する機器の紹介」などが学生を興味深く聞き入れさせること、学生がどこに興味を示すのかが良くわかったこと、また「学生とのコミュニケーションをとりながら（学生に語り掛けながら）、授業を進めているので、ほとんどの学生が授業に集中していた」との報告もあり、学生を授業に引き付ける授業のあり方の示唆が得られていた。

今後、ご自身の授業改善において具体的に採り入れたい点では、44 件の意見があった。「アクティブ・ラーニングの重要性は理解していても、講義系科目では思った以上に導入するためのハードルが高く、断念してきた部分があったが学生の主体性や考える力を培うためにも必要性を再確認できた」と授業の参観をして、実感したことや、「パワーポイントで説明する際に、最初は重点項目を穴あきにしておいて講義の際に埋めていく手法」「課題の進み方が遅い学生に対するヒントの与え方」など、今後採り入れたい多くの改善点が報告されていた。

2-5-3 授業評価アンケート

本学では、FD 活動の一環として、平成 16 年度より定期的（毎学期末）に授業評価アンケートを行っている。授業科目ごとの集計結果は各授業担当者にフィードバックし授業改善に活用してもらうとともに、これらのデータに基づいた評価尺度の妥当性・信頼性の検討、評価得点の経年変化の吟味など統計的分析も随時行っている。また、組織的（学部・学科・コース・カテゴリー 別授業科目単位等）な教育改善の資料として用いられてもいる。ここでは、前年度の報告（教育年報 2015）以降の平成 27 年度後期及び平成 28 年度前期の授業評価アンケート結果の概要を述べる。

(1) 授業評価アンケートの実施方法・活用方法

平成 27 年度後期については、原則として全授業科目（非常勤講師担当科目を含む）を評価対象とするが、学外実習をとまなう科目や履修者が 4 人未満の科目などは、本学統一様式によるアンケート対象からは除いた。全授業科目で共通に行う 6 項目及び学部・学科及び共通教育部独自の項目が設定されている。平成 28 年度前期についても、原則として全授業科目を対象とすること等は同じである。ここでは共通 6 項目のみを扱うこととする。アンケートは授

業科目ごとに全受講生を対象として無記名・自記式（5段階評価，マークシート方式）で学期末に実施した。回収されたアンケートは大学教育開発センターが集計し，後日，統計処理した資料を授業担当者に送付している。学部・学科・コース・授業科目によっては，これらの資料に基づいた授業改善策などの検討が行われている。

(2) アンケート集計結果の概要と課題

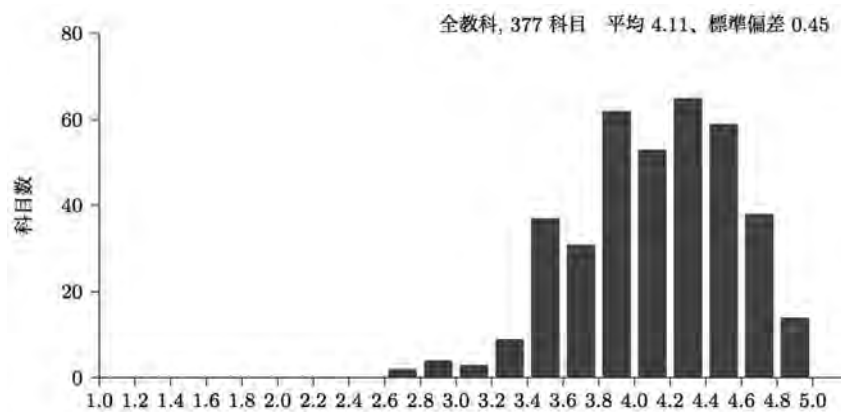
平成 27 年度後期の実施科目数は 377 科目（実施率 97.2%，延べ実施教員数 171 人，延べ受講生数 12,538 人），平成 28 年度前期の実施科目数は 392 科目（実施率 96.4%，延べ実施教員数 179 人，延べ受講生数 15,625 人）であった。なお，実施教員数は授業担当代表教員でカウントしている。

平成 27 年度後期及び平成 28 年度前期に実施した授業評価アンケートの平均評価点の分布をヒストグラムにて示す。前回報告した平成 26 年度後期の共通 6 項目，及び平成 27 年度前期の共通 6 項目の全科目平均得点はそれぞれ 4.16 (SD=0.40)，4.13 (SD=0.45) であったが，今回の得点はそれらとほぼ同じといえる。また，平成 27 年度後期及び平成 28 年度前期の平均評価点における分布上の相違はほとんどないといえる。

授業評価アンケート共通 6 科目

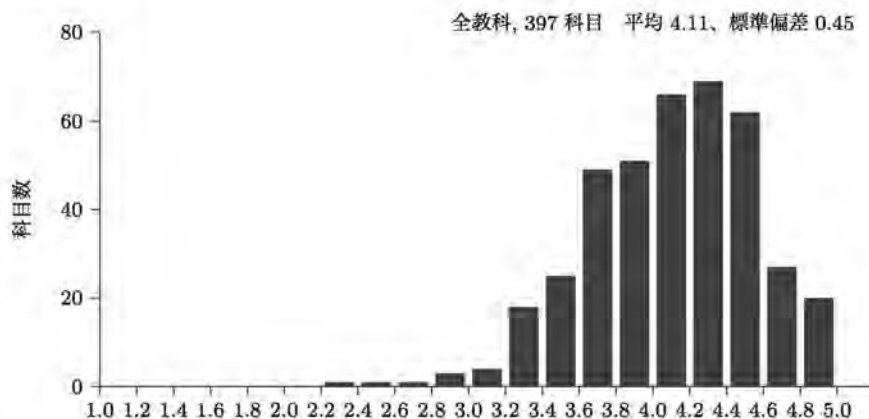
- 問 1 受講して知的刺激を受けましたか
 - 問 2 真剣に受講しましたか
 - 問 3 教員の熱意が感じられましたか
 - 問 4 学生の理解度に注意していましたか
 - 問 5 授業の進め方は丁寧でしたか
 - 問 6 総合的に判断して満足しましたか
-

対象科目数：388 科目	実施科目数：377 科目	(実施率 97.2 %)
登録学生数：14,882 名	実施学生数：12,538 名	(実施率 84.2 %)
対象教員数：176 名	実施教員数：171 名	(実施率 97.2 %)
(うち，本学対象教員数 126 名)	実施教員数 125 名)	



H27 後期共通 6 項目平均評価点

対象科目数 : 412 科目	実施科目数 : 397 科目	(実施率 96.4 %)
登録学生数 : 17,800 名	実施学生数 : 15,625 名	(実施率 87.8 %)
対象教員数 : 187 名	実施教員数 : 179 名	(実施率 95.7 %)
(うち, 本学対象教員数 132 名)	実施教員数 131 名)	



H28 前期共通 6 項目平均評価点

2-5-4 FD 研修会

平成 28 年度は、アクティブ・ラーニングに関する研修会を企画すると共に、相互授業参観結果を授業の実践に活かすため、授業改善意見交換会を企画した。また、岡山大学で開催された FD・SD 研修「第 19 回桃太郎フォーラム」(2016 年 9 月 1 日開催。テーマ:「共育力」を高める～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～), 及び岡山県工学教育協議会主催の「教育シンポジウム～実践的 ICT 教育について～」(2017 年 1 月 7 日開催)に参加

し、先進事例の調査を行った。

2-5-4-1 大学教育開発センター第2回ワークショップ、「アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開（Ⅱ）」

(1) **開催概要** 本ワークショップでは、保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部から各1件のアクティブ・ラーニング事例を紹介し、意見交換を行うことにより蓄積された授業法のノウハウを大学全体で共有し、アクティブ・ラーニング授業法のさらなる向上と、アクティブ・ラーニング導入授業科目の拡大を目指した。

開催日時	平成28年9月14日（水）13：00～14：30
開催場所	岡山県立大学 学部共通棟（北）8105 講義室
講師①	岡山県立大学保健福祉学部 名越恵美准教授 PBLを活用した急性期成人看護学演習の実践
講師②	岡山県立大学情報工学部 山崎大河准教授 情報システム工学科におけるPBL教育の実践—自律型ロボット製作実験
講師③	岡山県立大学デザイン学部 北山由紀雄准教授 SAKURA Projectの活動—倉敷フォトミュラルfの実施を通じて

(2) **参加者** 参加者数は83名と、昨年の41名から倍増した。その内訳は、教員が75名、職員が8名であった。

(3) **アンケート結果** 参加者には用意したアンケートの回答を要請した。回収した回答は55通（教員50名、職員4名、所属未記入1名）であった。研修会の満足度や講師についての満足度は以下の通りであった。

設問	教員・職員の別	とても満足	満足	どちらとも いえない	不満	とても不満
研修会の満足度	教員	23%	57%	14%	6%	0%
	職員	33%	67%	0%	0%	0%
	所属未記入	0%	100%	0%	0%	0%
講師についての満足度	教員	35%	51%	8%	0%	6%
	職員	50%	50%	0%	0%	0%
	所属未記入	0%	100%	0%	0%	0%

自由記述の中から、(A)今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見、(B)今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて、(C)今回のワークショップ（講演、実施方法等）に対する感想・意見、(D)今後のワークショップに希望するテーマ、の四つについて分類したものを以下に示す。

(A) 今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に行われている内容なので参考になった。(保健福祉学部教員) ・他学部の先生方の演習の概要を知ることができてよかった。(保健福祉学部教員) ・各学科の特徴ある演習内容を知ることができてよかった。(保健福祉学部教員) ・アクティブ・ラーニングといっても専門が違くと方法がかなり違うのだと気がついた。(保健福祉学部教員) ・普段接する機会の少ないテーマを学ぶことができた。(保健福祉学部教員) ・各学科の特徴ある演習内容を知ることができてよかった。授業方法の参考となる。(保健福祉学部教員) ・講師の先生方には日々の授業を分かりやすく丁寧に紹介いただき大変参考になった。(保健福祉学部教員) ・目的をしっかりとってぶれないで実施することが大切だと再認識した。ただし、主体性と知識の伝達のバランスが難しいと思った。(保健福祉学部教員) ・他学部のアクティブ・ラーニング事例について知ることができ、よい刺激となった。(デザイン学部教員) ・学部毎の(つまり学問スタイル毎の)アクティブ・ラーニングの違いがわかってよかった。(デザイン学部教員) ・それぞれの先生が工夫をされて授業をしておられることがわかりよかった。(デザイン学部教員) ・普段それぞれの学部でどんなことをされて、何に力を入れているのか詳しく知る機会がないのでとてもよかった。(職員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・実習、実験だけでなく講義の事例もとりあげてもらいたい。(情報工学部教員) ・評価法の体系において、どのような方法がどのような有効性をもつのか、詰めていく必要を考じた。(デザイン学部教員)

(B) 今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・担当する実験・実習に取り入れていける部分は試みていきたい。(保健福祉学部教員) ・授業方法の参考となる。(保健福祉学部教員) ・自分の授業に取り入れられる。(保健福祉学部教員) ・発表はわかりやすく方法論は活用できると思った。(保健福祉学部教員) ・評価の方法など参考になった。(保健福祉学部教員) ・自分の担当授業にも参考になった。(デザイン学部教員) ・PBLの専門分野への生かし方について、新たな知識を得た。保健福祉→複数の課題で構成されるPBLにおいて、演習グループと課題グループの編成をシステムティックに考えているところ。また、準備について基本的な点を繰り返し学習する前提で学生の主体性を引き出していること、学生のピア評価を実施しているところ。情報→発展段階に応じ

	<p>た細かなステップを刻んでいるところ, 要所要所にプレゼンを組み込んでいるところ. デザイン→課外の自主プロジェクトであるが, 学年を超えた分担・協力(含む教育)体制をとっているところ。(デザイン学部教員)</p> <p>・「演習」はアクティブ・ラーニングが当たり前だと思っていたが, 消極的な学生を動かすためには, 工夫が必要だと思った。(デザイン学部教員)</p>
意見	<p>・評価法はやはり難しいと感じた。(情報工学部教員)</p> <p>・担当科目には活用できない。(情報工学部教員)</p>

(C) 今回のワークショップ(講演, 実施方法等)に対する感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な実施例を知ることができた。(保健福祉学部教員) ・動画が入ると雰囲気がよく伝わる。(保健福祉学部教員) ・90分はちょうどよい。(保健福祉学部教員) ・具体例が聞けた。(情報工学部教員) ・現実のアクティブ・ラーニングの理解につながったと思う。(デザイン学部教員) ・大変理解しやすい内容であった。(デザイン学部) ・分量, 質ともに十分な内容であった。(デザイン学部) ・他学部の取組を聞くことができた。(デザイン学部教員) ・学部ごとのそれぞれの良さがああり, とても分かりやすかった。(職員) ・午後がつぶれず, 研修会の後業務に戻れるのがよかった。(職員) ・各方面での活動を紹介することは何回やってもよろしいと思う。(職員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容の紹介が含まれているので, 一人の持ち時間が少なかった。(保健福祉学部教員) ・具体的な内容であったため, 汎用性には欠けていたと思う。(情報工学部教員) ・現在は「学内レベル」の開催だが, より機動的な運営を考慮して, 「学科レベル」「学部レベル」の研究会実施の可能性はあるように考える。(デザイン学部教員)

(D) 今後のワークに希望するテーマ

<ul style="list-style-type: none"> ・評価の方法。(保健福祉学部教員) ・①チーム編成, ②評価, ③相互作用づくり等に発表テーマを限定してはどうか。(保健福祉学部教員) ・能力や動機の異なる学生のチーム編成の工夫についても話を聞きたい。(保健福祉学部教員) ・学内でも評価の高い授業, 工夫の多い教員の実例を紹介いただきたい。(デザイン学部教員) ・教室の施設・設備の新たな活用法の導入など, 事例や提案が欲しい。(デザイン学部教員) ・実施済のものは, 点検・評価まで聞きたい。(デザイン学部教員) ・シラバス上で, アクティブ・ラーニングがどう表現されて, シラバスをアクティブ・ラーニングでどう活用しているかについて, 次年度は発表を聞きたい。(デザイン学部教員)
--

2-5-4-2 授業改善意見交換会

(1)実施概要

相互授業参観活動を基に、具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有し、今後の授業改善に役立てることを目的に、授業改善意見交換会を開催した。

開催日時：平成 29 年 2 月 17 日（金）16:00～17:30

開催場所：岡山県立大学本部棟 2 階大会議室

プログラム：

- 1 開会（尾崎 FD 部会長）
- 2 相互授業参観の実施結果報告（山口、磯崎）
- 3 グループディスカッション（野宮）

テーマ：「よりよい授業づくりの方法とは」

相互参観授業レポートの観点 6 項目より最大 3 項目を選び、「よりよい授業づくりの方法」をテーマにディスカッションする。

- ・ディスカッションし、内容、結果を模造紙、まとめシートにまとめる
- ・各班の代表者にて発表する

- 4 まとめ（田内大学教育開発センター長）
- 5 閉会（尾崎 FD 部会長）

(2) 参加者

参加者数は 46 名、その内訳は教員が 43 名（保健福祉学部 13 名、情報工学部 21 名、デザイン学部 9 名）、職員が 3 名であった。

(3) グループディスカッションについて

所属混成による 8 班（各班 6～7 名）をグルーピングし、「よりよい授業づくりの方法」をテーマに班別のディスカッション（約 40 分間）を行った。次に各班の代表者により、ディスカッションの結果を発表した（各班約 3 分）。なお、本年度はディスカッションの時間を昨年度より 10 分間長く設定した。



写真 1（ディスカッション風景）



写真 2（発表風景）

各班において選択された項目とディスカッションの内容（抜粋）は下記の通りであった。

【1 班】

〈項目 1 授業の準備、導入〉

・出席確認に時間を取る（目でコンタクトし名前を読み上げる）ことで、授業への注目を促すことができる。

〈項目 2 授業の構成〉

- ・様々な形で教授する工夫がアクティブ・ラーニングにつながるのではないか。
- ・メリハリのある構成が必要。

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・1年生と2年生合同でオリエンテーションをさせ、学生間の交流を図る。

【2 班】

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・意欲のさせ方について以下の方法が効果的である。
 - ①次回授業に積極的に臨もうと思わせるように、次回授業で学ぶ内容を課題として出す。
 - ②抜き打ちテストを行う。
 - ③今まで学んだことを質問し、その知識が定着しているかどうかを各自で確認させる。
 - ④事例をあらかじめ示し、その後原理や法則などの説明をする。
 - ⑤常に授業公開をし、学生に刺激を与える。

【3 班】

〈項目 2 授業の構成〉

- ・講義で90分継続して話を聞くことに対し集中力が続かない。
- ・一方的に教員が話すだけでなく、学生同士で話し合う等の活動を入れてはどうか。
- ・情報工学系の科目でアクティブ・ラーニングを採り入れたいが、それをすると学習内容をカバーできなくなる恐れがある。
- ・授業外学習は成績評価に含む等の条件を付ける場合は別だが、学生は余り取り組まない傾向。
- ・授業科目によっては学生同士のディスカッションが有効でないものもある（間違った情報が学生間に伝わる場合がある）。

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・教員からの問いかけに反応しない、発言する雰囲気がない傾向である。

【4 班】

〈項目 1 授業の準備, 導入〉

- ・振り返りの小テストにより、重要なポイントがどこかを理解させる。

〈項目 2 授業の構成〉

- ・2～3分の映像教材を入れ込むと学習効果が上がる。
- ・90分のうち、60分を講義、30分をアクティブ形式にするとよい。

〈項目 3 授業の展開技術〉

- ・学生の理解度を知ることが難しい。
- ・学生に質問する等により、学生ごとの理解度、技術習得度を把握する必要がある。

【5 班】

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・学生の意欲を高めるために以下の方法が考えられる。

- ①出口（卒業後の進路）を明確にする.
- ②カリキュラムのしくみを学科や講座で共有する.
- ③シラバス、履修マップの見せ方を工夫する（イラスト、動画等）.

【6 班】

〈項目 1 授業の準備, 導入〉

- ・出欠を兼ねた小テストで、全回授業を振り返らせる.
- ・机、椅子が固定のためアクティブ・ラーニングに対応できない.
- ・学部共通棟の PC 演習室が不足している.

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・一般にモチベーションや関心が低い傾向で、シラバスに沿った指導が困難.

〈項目 6 授業のまとめ〉

- ・他の関連科目と連携して予習復習を進める方法もある.

【7 班】

〈項目 1 授業の準備, 導入〉

- ・クォーター制では、ミニツペーパーを活用することで予習復習を促進できるのではない
か.
- ・小テストにより、出欠確認に兼ねて、毎回学生に前回授業の振り返りを行うことができる.

〈項目 2 授業の構成〉

- ・クォーター制では、2回セットで1つの授業とする考え方がある.
- ・勉強ができる学生は授業内で課題を終わらせる傾向にあるが、ペースを持たせコツコツ学
習する習慣づけをさせたい.

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・クォーター制になるとついて来れない学生が多く出る可能性があるため、授業時間外も含
めて学生へのフォローが必要.

【8 班】

〈項目 2 授業の構成〉

- ・答えが一つでない場合はアクティブ・ラーニングが有効だが、反動で座学において学生の
関心が急激に下がる恐れがある.
- ・講義形式の授業をどのようにアクティブ・ラーニングに展開すればよいのか、90 分間で予
習、講義、ディスカッションを入れることは困難なので、週毎に分けると良い.
- ・答えが一つの場合は、プレゼンテーション、ディスカッションをさせてもグループ間で変
化が見られない.

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・時間に関係なく Line のメッセージが来る. Line の使い方について学生への指導が必要.
なお、ディスカッションのテーマとして選択された項目の総数は下記の通りであった.

項目 5 学生への関わり・・・7

項目 2 授業の構成・・・5

項目 1 授業の準備, 導入・・・4

項目 3 授業の展開技術及び, 項目 6 授業のまとめ・・・1

(4) アンケート結果

参加者には用意したアンケートの回答を要請した。回収した回答は 37 通（教員 34 名, 職員 1 名, 所属未記入 2 名）であった。意見交換会の満足度等は以下の通りであった。

意見交換会について	とても満足 27%	満足 62%	どちらともいえない 10%
実施方法について	とても満足 13%	満足 56%	どちらともいえない 21%
講師の発表について	とても満足 10%	割合満足 37%	どちらともいえない 21%
会の長さについて	とても長い 0%	やや長い 0.5%	ちょうどよい 64%
必要な知識・方法は学べたか	かなりできた 13%	できた 54%	どちらともいえない 10%
得た知識・方法を活用しますか	是非活用したい 0.5%	できれば活用 62%	どちらともいえない 10%

自由記述の中から, (A) 今回の意見交換会は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見, (B) 今後, 自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて, (C) 今回の意見交換会（実施方法等）に対する感想・意見, (D) 今後の同会に希望すること, の四つについて分類したものを以下に示す。

(A) 今回の意見交換会は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none">・他学部, 他学科の先生方のお話を聞いてとても参考になりました。 (保健福祉学部教員)・カリキュラムの異なる他学科の先生の取組を知ることができた。 (情報工学部教員)・学部学科が異なる教員と意見交換ができたこと。(情報工学部教員)・他学部の先生との意見交換の機会はほとんどないため, 貴重な時間でした。 (情報工学部教員)・コメントの数が多く参考になった。(情報工学部教員)・他学部の状況について聞いて興味深かった。(情報工学部教員)・他の学部教員の授業の様子が分かった。(デザイン学部教員)
意見	<ul style="list-style-type: none">・違う学部の人同士より同じ学部の方が話がまとまりやすいと思う。(情報工学部教員)・いつも困ってしまいます。(情報工学部教員)

(B) 今後, 自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none">・講義科目におけるアクティブ・ラーニングの活用方法, 学生の意欲を高める方法など。 (保健福祉学部教員)・講義の中にアクティブ・ラーニングを取り入れたいと思います。(保健福祉学部教員)・ミニッツペーパー等の工夫はとり入れてみたい。(保健福祉学部教員)・導入方法など参考になった。(情報工学部教員)

	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の出欠席のとり方が参考になった。(情報工学部教員) ・前回授業のふりかえりの方法。(情報工学部教員) ・アクティブ・ラーニングの導入の参考になった。(情報工学部教員) ・他学科での工夫が具体的に知ることができたと、自分が見出すことができた。(デザイン学部教員) ・抜き打ちテストなど学生への刺激の与え方。(情報工学部教員) ・振り返りに小テストを活用していきたい。隣同士でコミュニケーションではなく、あえて席の離れた学生同志で話し合えるようにする。(デザイン学部教員) ・LINEによる学生とのコミュニケーション連絡とスケジュール確認用としての使用。(デザイン学部教員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・参考になる部分もあるが、学部間の違いが大きすぎる。(情報工学部教員) ・授業の内容が違うため他人の事が全て反映できるものではない。(デザイン学部教員)

(C) 今回の意見交換会（実施方法等）に対する感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ構成がよかったです。(いろいろな学部, 学科が混ざってあったところ)(保健福祉学部教員) ・ディスカッションの時間を多くとり FD 委員の先生が進行して下さったので、話し易かった。(情報工学部教員) ・グループの人数も丁度よく、時間が適当であった。(情報工学部教員) ・学科対抗の方がおもしろいのでは？(情報工学部教員) ・前は各グループに進行役がおらず、議論の進みが悪かったが改善された。(情報工学部教員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・話が発散する恐れがあるので、最初からテーマを具体的に細かく決めておいた方がよいと思った。(情報工学部教員) ・どうしても時間が短い。今日のような会合を短期間で2回くらい続けて行くとよいのでは？(情報工学部教員) ・もう少し工夫があっても良い。(デザイン学部教員) ・全体でのディスカッションがあってもよかった。(情報工学部教員) ・もう少し長くても良かったかもしれないが、長くすると参加者の負担を感じるかもしれない。(情報工学部教員) ・資料を読んでいるだけで時間がなくなる。話し合っている時間がない。資料はあらかじめ配布しておいて読んできてもらうほうがいいのかも。(情報工学部教員) ・これ以上長いと集中力が続かないと思う。(情報工学部教員) ・グループディスカッションがやや短い。(情報工学部教員) ・配布資料(担当授業参観のコメント)の文字が小さく読めない。(デザイン学部教員) ・準備不足がうかがえた。(デザイン学部教員)

(D) 今後の同会に希望すること

- ・ 同学部, 同学科の教員のみで同じことをやる回があってもよいかも. (情報工学部教員)
- ・ 意見交換の時間を長くしてほしい. (保健福祉学部教員)
- ・ 集合せず, ネットの掲示板のようなシステムを使うとか. (情報工学部教員)
- ・ 学生, 院生の声を聞きながら (学生参加型 FD) 意見交換する. (情報工学部教員)
- ・ 大学全体の意見交換会なので, 大学の大きなテーマ設定からどのようにその方向性を共有するかなどの議論があっても良いのかなと思いました. (情報工学部教員)
- ・ どうしても少々マンネリ化してしまいます. 参加者を教員まんべんなく割り当てると良いと思います. (情報工学部教員)
- ・ ”よりよい” 授業とは具体的に何を指しているのか? (情報工学部教員)
- ・ 常時授業参考可能な授業を募り, 予約せずとも教員の参加が可能にしても良い. (所属不明)

2-5-5 教員への支援に関する取組

新任教員のための研修会等で配布するテキスト「新任教員のための教育手引き」の作成を行った. 内容は以下の6章, 1. シラバスの作成, 2. 講義室・演習室の下見, 3. 履修者について, 4. 授業までの準備, 5. 定期試験と成績登録, 6. その他とチェック項目で構成される.

教員からの教育設備への要望に対して大学として組織的に対応するため, 大学教育開発センターへの教育設備相談室の設置と, そのために必要な申し合わせ事項について提案した.

2-5-6 まとめと課題

平成 28 年度の FD 部会活動を総括する. 相互授業参観と授業改善意見交換会を開催することにより, 他者の授業からヒントを得るだけでなく, 異なる学部にも所属する教員同士の意見交換を通じて多くの新しい気づきが生じており, 良好な結果が得られた. FD 研修会では, アクティブ・ラーニングを題材に取り上げたが, アンケート結果からも継続を望む意見が多い. 従って, 以上の取組については, 今後も継続することが望ましいと考えられる. 授業評価アンケートに関しては, 評価結果が高止まり傾向に有ったため, 教育評価部会と合同で平成 28 年度後期実施以降のアンケート質問項目を検討した. また, 教員への支援に関して, 新任教員用テキストの作成を行うと共に, 教育設備相談室の設置準備を行った. 以上に述べた以外にも, 教育優秀教員の表彰について継続的に検討を行っており, その早期実現が課題である.

2-6 教育評価部会

平成 27 年度の教育評価部会活動の内, 以下の 4 項目について紹介する.

- 1) 平成 29 年度実施に向けたシラバスの改正
- 2) 学生授業評価アンケートの設計と実施

- 3) 科目ナンバリング
- 4) 研修会の実施

2-6-1 平成 29 年度実施に向けたシラバスの改正

文部科学省はシラバスについて、「全授業科目において授業計画（シラバス）が作成され、かつその内容として科目の到達目標、授業形態、事前・事後学修の内容、成績評価の方法・基準が示されていること」とし、種々の補助金事業等申請における基礎要件の一つとしているところである。また大学認証評価においては、「教育の質の保証」に関わる要件として扱われ、シラバスの書式や記載内容の重要度は急速に増している現状である。

各科目のシラバスは大学における教育改革においてもその基本をなすものであり、科目から科目群へ、また科目群からカリキュラムへと、教育の目的性を明確にしたカリキュラム構成（科目ナンバリング等）を実現する最少要素である。現在、大学のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに掲げる教育の目標を実際のカリキュラムやシラバスにまで反映させることが求められており、立てた教育・学習目標の実施とその効果を PDCA の観点から具体的に計測することが問われることになる流れが予測される。当部会では、その流れを先取りして検討を行ってきたが、従来の本学のテキスト表示方式の電子システムでは限界があって実現が不可能であった。

しかし、本学でも平成 29 年度から教学系システムの電子化を行うことが決定し、この機会に従来から構想してきたシラバスフォーマットの改正に部会として取り組んだ。平成 28 年度に本学が作成した大学機関別認証評価評価報告書に記載されているところであるが、調査の結果、本学シラバスは、学生が授業科目を履修する際に活用しており、平成 27 年度の学生アンケートで、82.1%の学生が何らかの形でシラバスを利用しているという結果となっている。満足度については「よく役に立っている」、「まあまあ役に立っている」、「普通」と答えた学生が 80.4%であった。しかし、「ほぼ全ての履修科目をほぼ毎回」と答えた学生は 6.6%と少なく、また、よく見る項目のうち「評価」が 37.5%であるのに対して、「授業スケジュール」が 25.0%、「授業科目の到達目標」が 9.6%と相対的に低い結果であった。シラバスの活用を促進するためには、①教員が授業の到達目標を明確に示すこと、②授業の到達目標がどのような学修効果を得るために掲げられたかを示すこと、③授業の到達目標を達成するための授業行程を示し、④更に円滑にその行程が進行するための授業と時間外学習の関係を示すこと、⑤評価は、到達目標に沿って行われること等、特に授業の到達目標、行程、評価の関連を、教員と学生がより意識できるような形にすることが望ましいと考えられた。この中で、③は従来の Web を用いた電子システムでも可能ではあったが、実施率は低い状況であった。

今回のシラバス改正の大きな目標として以下のような点を掲げた。

- 1) 授業の到達目標の設定と各目標の観点の表示
- 2) 授業の到達目標を達成するための授業行程の表示

- 3) 授業行程の表示と時間外学習（予習, 復習）の関係の明確化
- 4) 成績評価が各授業で掲げる到達目標に沿って行われることの表示

これをシラバスフォーマットとして具体化した例を下に掲げる。構成は、「授業概要」、「授業計画」、「授業評価詳細登録」の三つに大きく分かれる。「授業概要」について、基本は従来のシラバスを踏襲したものとなっている。その中の授業概要情報には科目ナンバリングを導入する予定であるが、その実現は平成 29 年の準備期間を経て 30 年のシラバスからになる予定である。「授業概要」は今年度の Web システムにおいても各学部・学科に授業行程の記載を依頼していたが、各回や各単元のタイトルは記されている場合が少なくないがその内容についてまで記載されている例は少なかった。そのため、新シラバスにおいては、単元概要を記載するための枠を設けた。更に時間外学習、配布資料についてもそれらの指示や通知を明示するための枠組みを設けている。ここでは上記 4 項目の内の 2 と 3 を実現する。「授業評価詳細登録」は上記 4 項目中の、1 と 4 を実現するために設けている。授業の到達目標はシラバスの中でも最重要の項目と見なされ、これに沿って授業の行程が生まれ、また評価についても目標の達成度が問われることとなる。到達目標については、そのそれぞれに、知識・理解、技能・表現、思考・判断、伝達・コミュニケーション、協働、任意項目の各観点から該当するものを選択できるようにした。また評価についても、各到達目標について問うことができるように設計した。

授業概要 / Course description
授業基本情報 / Course base information 科目名 (和文) / Course 科目名 (英文) / Course 時間割コード / Registration Code 学部 (研究科) / Faculty 学科 (専攻) / Department 担当教員名 (○ : 代表教員) / Principle Instructor (○) and Instructors オフィスアワー / Office Hour 開講年度 / Year of the Course 開講学期 / Term 対象学生 / Eligible Students 単位数 / Credit(s)
授業概要情報 / Course description 更新状況 / Status 承認依頼 / Request approval 科目ナンバリング / Course Numbering 使用言語 / Language of Instruction (※) オムニバス / Omnibus (※) 授業概略と目的 / Course Description and Objectives

履修に必要な知識・能力・キーワード／Prerequisites and Keywords
履修上の注意／Notes
教科書／Textbook(s)
参考文献等／References
自主学習ガイド／Expected Study Guide Outside Coursework／Self-Directed Learning Other Than Coursework
資格等に関する事項／Attention Relating to Professional License
備考／Notes

授業計画／Course schedule
単元（授業回数）／Unit (Lesson Number)
単元タイトル／Unit Title
単元概要／Unit Description
時間外学習／Preparation and Review
配布資料／Handouts

授業評価詳細登録／Course Evaluation
到達目標／Learning Goal < 観点 > 知識・理解／Knowledge & Understanding 技能・表現／Skills & Expressions 思考・判断／Thoughts & Decisions 伝達・コミュニケーション／Communication 協働／Cooperative Attitude 任意項目（観点）／Instructor's Choice
到達目標／Learning Goal and Evaluation 定期試験／Exam. 任意項目（評価方法）／Instructor's Choice
ルーブリック／Rubric

新シラバスは平成 29 年度から実施されるが、検討期間が限られていたため期待通りに完成していない部分も少なくない。平成 29 年度中には、それらを解決して、より内容の深化を進めることが望まれる。技術上の問題として挙げられている問題のある例として、上の表に掲げたシラバスの各項目が一連のシートに印刷できないということがある。本学ではシラバスは冊子としては配布されていないため、Web 上で見やすくすること、教員が担当科目のシ

ラバスを印刷して学生に配布して説明することなどが望まれるが容易でない状況であり、砂丘に改善を図る必要がある。

今回のシラバスでは、成績評価の方向付けを行ったが十分とは言えないので、ルーブリックを用いた評価の視点を学生に示すことができるような仕組みにしている。今回はその機能は余り利用されないことが想定されるが、今後利用を促進する方策を実施することが必要と考えられる。科目のナンバリングは平成 30 年度のシラバスで実現する予定であるが、そうすることによって、各科目のカリキュラムの中における位置づけも明確になり、科目シラバスーカリキュラム（カリキュラムマップ、履修モデル）との関連が今まで以上に明確になることが期待される。

2-6-2 学生授業評価アンケートの設計と実施

平成 29 年度からの Web を用いた教学システム導入を機会に学生による授業評価アンケートを刷新することが計画された。そのために、部会では平成 28 年度当初から見直し作業を行い、教育研究活動委員会等に諮ってきた。最初のレポートは、平成 28 年 5 月に出された「学生授業評価アンケート改正に向けて」であり、その項目は以下のようになっている。

- ・岡山県立大学における学生授業評価アンケートの変遷
- ・従来の学生授業評価アンケートを振り返って（本学）
- ・学生授業評価アンケートの作成と利用及びフィードバックの概念の変化
- ・2004~2016 以降に向けて
- ・学生授業評価アンケートの作成コンセプト
- ・実施に向けた学生授業評価関連 SAMPLE

そこでは、従来の 6 項目のアンケートでは、具体的な項目を概念化した設問となっており、教員がフィードバック結果を得ても、それを実際の授業改善に結びつけることが難しいという欠点がある可能性を指摘した。この問題を改善し、得られたアンケート結果が授業改善に有効に利用されること念頭にアンケート設計を行った。

具体的な設問に戻すと設問数が増加することは止むを得ないがその上限を制限された回答時間の中で行うためには 20~25 問の設問数が適当と考えられた。従来は授業時間の中でマークシートに記入させていたが、平成 29 年度から Web アンケートになる予定であり、授業時間内で行うか、時間外で自由に記入させるかの判断が必要となった。他大学の先例から、Web アンケートを学生に自由に入力させる方式を取ると、回収率が極端に低下することが明らかになっているため、本学では従来通り、高い回収率を維持することが望ましい。実際に、学生に試行する等のプロセスを経て、20 問程度であれば教員による説明を加えても 10 分以内に終了させられることが明らかになったため、Web アンケートになった場合でも、授業時間を使って実施することに決定した。学生のスマートフォンやタブレットの保有率は最近非常に高くなっているので大部分の学生が対応可能と考えられた。若干名は授業中の

回答ができない可能性が考えられるが、そのような学生は把握しておき、授業時間外に回答するように仕向けることを担当教員に依頼することとした。

新アンケートは平成 28 年度後期から実施することとした。しかし、設問は平成 29 年度実施を想定したものとするが、回答は Web ではなく、従来のマークシートを援用して行うこととした。新アンケートにおいては下に示すように、20 問の設問を 4 つの項目（Ⅰ～Ⅳ）に分けて聞く形式とした。

また、教員へのフィードバックはこれら 20 設問の内、予習・復習に使用した時間数及び出席の程度を聞くⅠ-問 4、Ⅰ-問 4 を除外した 17 問を用い、5 つの categories に分けて平均点数を表示することとした。各設問の categories については最右列に示す通りとした。また、各 categories の名称は以下に示す通りである。

category 1（授業に対する学生の取組）

category 2（授業の資料や進め方）

category 3（シラバスと授業の関係）

category 4（授業の実施状況）

category 5（授業に対する受け止め）

ただし、category 4 については、今回は教員フィードバックに記載しなかった。その理由には、授業が未だ十分インタラクティブに行われていないこと、課題等の評価を学生に示していないことが想定されたためである。これからの授業においては両者とも実施が強くが望まれる項目であるため、近い将来にフィードバック情報に記載して返却することを予告している。

本アンケートは平成 29 年度に実施し、1 年間かけて更に適切なものにしてゆく予定である。

設問番号	設問	カテゴリー
Ⅰ	あなたはこの授業への取り組みはhowでしたか	
Ⅰ-問 1	真剣に受講した	1
Ⅰ-問 2	この授業を理解するために努力した	1
Ⅰ-問 3	予習や復習に使った授業 1 回当たりの時間を教えてください(課題を含む)	-
Ⅰ-問 4	あなたのおよその出席率を教えてください	-
Ⅱ	この授業の進め方はhowでしたか	
Ⅱ-問 1	授業は計画的に行われていた	2
Ⅱ-問 2	授業では考える機会や時間が与えられた	2
Ⅱ-問 3	授業で用いた教科書や資料は適切だった	2
Ⅱ-問 4	授業は学生の理解度を確認しながら進められた	2
Ⅱ-問 5	授業では教員に熱意があった	5
Ⅱ-問 6	教員は学生の質問に対して丁寧に対応した（課外含む）	④

II-問7	授業は丁寧に進められた	4
II-問8	提出物(レポート等)は内容をよく評価していた	④
III	シラバスやシラバスと授業との関連はどうでしたか	
III-問1	シラバスの内容はよく理解できた	3
III-問2	授業内容はシラバスにある目標に合っていた	3
III-問3	シラバスの説明がガイダンスや授業の節目で行われた	3
IV	この授業を受け、総合的にみてあなたはどのように受け止めましたか	
IV-問1	授業は難しかった	-
IV-問2	教員の説明はわかりやすかった	5
IV-問3	受講して内容に興味や関心が湧いた	5
IV-問4	授業に満足できた	5
IV-問5	この授業を受けて力がついた	5

2-6-3 科目ナンバリング

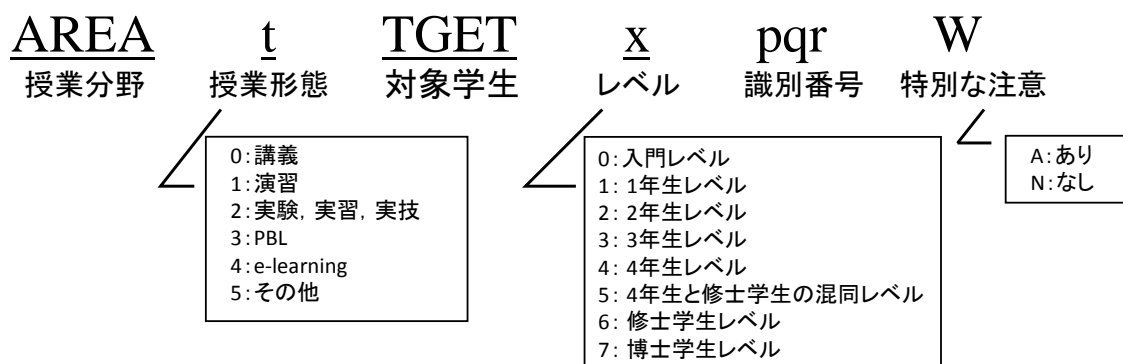
文部科学省が平成24年6月5日に提唱した「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」¹⁾や、中央教育審議会大学分科会が平成24年8月28日に公表した答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」²⁾への対応が国公立私大で行われている。

本学では平成30年度からの導入を目指し、本部会は他大学で実施されている「科目ナンバリング」の現状について、平成27年度から調査・議論を行っている。平成27年度発行の「教育年報2015」³⁾では、2つのパターンについて議論した。

本報は、岡山大学の事例⁴⁾を示す。なお、岡山大学の全開講科目数は9917件である。

【岡山大学】

ナンバリングコードは下に示すように5エリアに分けている。



岡山大学のナンバリングコード

上図の記号の意味, 説明

名称	意味	説明	例
AREA	授業分野	その授業科目の分野 (英字 4 文字)	KAAA, LBAA, …
T	授業形態	その授業科目の授業形態	0～5
TGET	対象学生	履修メインターゲット	LAFZ, FXXX, …
X	レベル	授業のレベルを表します.	0～7
Pqr	識別番号	連番 (数字 3 桁)	001～999
W	特別な注意	その授業科目を履修する際の注意点があるか	指定の科目を履修済みであること 等

AREA：授業分野について：4つの英字は次のコードを示す.

A：「系」コード

例：総合系は「K」, 人文社会系は「L」, 理工系は「M」

R：「分野」コード

例：総合人文学は「A」, 人文学は「B」, 社会科学は「C」

E：「分科」コード

例：哲学は「A」, 芸術学は「B」, 文学は「C」

A：「細目」コード

例：哲学・倫理学は「A」, 中国哲学・印度哲学・仏教学は「B」, 宗教学は「C」, 思想史は「D」

・ 科研費細目表の分類. 必ずしも授業科目名と一致するものではない.

・ コードはアルファベット順に割り当てられている.

具体例 思想史の場合, AREA は「LBAD」と表記される.

TGET：対象学生について

T, G：「学部等」コード

例：文学部は「LE (Faculty of Letters)」, 経済学部は「EC (Faculty of Economics)」,
工学部は「EN (Faculty of Engineering)」

E：「学科・課程等」コード

例：人文学科は「H (Department of Humanities)」, 情報系学科は「I (Department of Information Technology)」

T：「コース名等」コード

例：哲学芸術学専修コースは「P (Philosophy & Art Studies)」, 歴史文化学専修コースは「H (History)」

具体例 文学部人文学科歴史文化学専修コースの場合, TGET は「LEHH」と表記される.

2015, 2016 年度の教育年報で 3 つのモデルを示してきたが, これらを参考に本学の教育課程の体系的な編成や教育課程の可視化を目指すために, 本学に最適な科目ナンバリング方法について検討していく.

[引用・参考文献]

- 1) 文部科学省, 「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」, 平成 24 年 6 月 5 日, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/1321798.htm
- 2) 中央教育審議会大学分科会, 「新新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 3) 岡山県立大学, 「教育年報 2015」, 平成 28 年 3 月発行
- 4) 岡山大学, 「科目ナンバリングとは」, http://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/gakumu/numbering/numbering2016.pdf

2-6-4 研修会の実施

第 3 回大学教育開発センターセンターワークショップ

「IR を活かした教育改善と大学経営」

(1)開催概要

IR (Institutional Research) とは, ①教育研究・経営・財務情報など大学の諸活動に関する情報の収集・蓄積, ②特に学生の学習成果など教育機能についての調査分析, ③大学経営の基礎となる情報の分析を行い, またそれらの分析結果の提供を通じて, 大学の自己評価, 意思決定に寄与する活動を指す. IR が生まれた米国を始めとする世界の多くの大学で, IR 専門機関が組織され大学運営に利用されている. 学内で IR 情報を活かした改善の取組や意思決定が行われることによって IR 導入の効果が発揮できる. そこで, 今回は教学 IR に関心のある本学の教職員, 学生及び学外の大学教職員, 学生等) を対象に, IR の基本的な仕組みについての概説, 更に教育改善と大学経営への活用における具体的な事例紹介を通じて IR の全容を学ぶ機会とした. 公演後, 講演者と参加者が, IR の様々な側面について活発なディスカッションを行い, 本学にとって大変有意義な機会となった.

開催日時	平成 28 年 12 月 9 日 (金) 講演 10:30～12:00, ワークショップ; 12:00～13:00
開催場所	岡山県立大学・学部共通棟北 8102 講義室
講師	茨城大学全学教育機構 畷田敏行准教授

(2)参加者 47 名 (教員 30 名, 職員 15 名, 学生 1 名, 学外参加者 1 名)

(3)アンケート結果 参加者には用意したアンケートの回答を要請した. 回収した回答は 31

通（教員 22 名, 職員 8 名, 学生 1 名）であった。満足度は以下であった。

設問	教員・職員の別	とても満足	満足
テーマ・内容について	教員	50%	36%
	職員	50%	50%
講師の説明について	教員	41%	50%
	職員	25%	75%
必要な知識等を学ぶことができたか	教員	18%	50%
	職員	13%	63%
研修会全体を通して有用だったか	教員	36%	50%
	職員	38%	63%
今回得た知識や方法を活用するか	教員	23%	41%
	職員	13%	63%

自由記述の中から、(A) 今回の研修会のテーマ・内容について、(B) 今回の研修会全体を通して有用だったでしょうか、(C) 今後、今回得た知識や方法をご自分の活動で活用するお考えはありますか、の三つについて分類したものを以下に示す。

(A) 今回の研修会のテーマ・内容について

- ・ 時勢にあった為になる研修会でした。
- ・ IRのことを Investor Relationだと思っていたので、テーマが当初の期待とは違ったが、今日の話も重要だと言われていることであり、知っておくと役立つと思いました。
- ・ IRについてよく分かっていなかたからよい話が聞けた。
- ・ 必要と思っていた内容で大変興味深かった。
- ・ 茨城大学の実データがあり、実感が湧いた。
- ・ データが豊富でわかりやすかった。
- ・ タイムリーなテーマ設定で参加者の関心が高い。
- ・ 事例を活用しながら分かりやすく説明いただいた。
- ・ 新しい知見が得られました。
- ・ 全く知らなかった「IR」について教養を深めることができた。

(B) 今回の研修会全体を通して有用だったでしょうか

- ・ アメリカの事情を含む現代の IR のことが分かった。
- ・ 上層部の方向けの内容に思えました。が、途中各教員ができることの紹介もありよかったです。
- ・ IR 担当者の業務内容が明確になった。
- ・ DP 等と関係付けて、アセスメント・ポリシー設計から始める必要性を感じた。
- ・ 部署別の役割に関する説明があり、有用であった。

- ・ IR の役割が理解できた。

(C) 今後、今回得た知識や方法をご自分の活動で活用するお考えはありますか。

- ・ 授業コマ数等, 教育実施状況の可視化をすればよいと思う。
- ・ データをとり評価するという考えは, 自分の小さなプロジェクトでも応用ができるので, 活用したいと思います。やりっぱなしにならないよう評価することをしていきたいと思いました。
- ・ 今回例示されたデータ, グラフが入手できれば良い。
- ・ IR 機能導入検討する上で参考になった。
- ・ 何かの形で活用したいです。

2-6-5 まとめと課題

本年度, 教育評価部会では平成 29 年度用新シラバスの設計, 授業評価アンケートとの設計と試行, 科目ナンバリングの実施準備, シラバス, カリキュラムマップ, 教育評価アンケート及び研修会等について検討を行った。

新シラバスは年度末に問題点を修正しつつ全授業について入力することができたが, 混乱を免れることはできなかった。そのため, 入力に困難を覚える例も少なくなかった。シラバスそのものの問題ではないが, 今回は確認事項が多く, かつ一定の厳密さが要求されるものであったため, 従来とほぼ同じ態勢で行ったシラバス承認において承認者への負荷が大きかったことが挙げられる。今後, シラバスの本体と共に承認過程についても改善を図ってゆく必要があると見なされた。また新シラバスにおいては, 教員が独自にルーブリックを使用して評価を行うことを想定した設計となっている。ルーブリックを用いた評価は本学での使用は未だ限られているが, 今後研修会等で啓発を行い, 使用促進を図ってゆきたい。

学生による授業評価アンケートは概ね固めることができたが, 教員の改善要望等も聞き取って, 特にフィードバック情報のあり方について検討する必要がある。また, 学生への有効なフィードバックのあり方についても検討を要する。アンケートの実施タイミングであるが, 授業期間中にアンケートを実施して, 得られフィードバックを即反映させてゆくことも将来的には考えて行きたい。これは, 学生, 教員の双方にとって有用な情報になると考えられる。

科目ナンバリングについては概ね方針が決定された。大学は科目の独立性が強いのが従来の傾向であり, 系統性を考慮したカリキュラムであっても, 科目間の有機的な連携性については検討されていないのが一般的と言える状況である。本学では, カリキュラムマップを発展させ, 平成 29 年度から専門職を考慮した履修モデルを各学科で作成することとした。これを実質化させるためには科目ナンバリングの導入が必須と考えられるので, 次年度は科目ナンバリングを考慮した履修モデルの検討を実施する予定である。

現在, やや遅れがあるが, 入学から卒業時までの過程における学修状況をモニターするた

めのアンケート実施が望まれる状況である。平成 29 年度は本部会のみならず他の幾つかの部会と横断的に連携して本学のアンケートを統合的に考え、従来のアンケート及び新設のアンケートにより、より深くまた継続的に教育評価を実施し、教育の質の保証を確保する方策を確立する必要がある。

2-7 キャリア形成支援部会

2-7-1 概要

キャリア形成支援部会では、学部学科横断的な全学的取組として昨年度に引き続き、学生支援班を中心に就職支援活動とインターンシップの取組を行うと共に、学生のキャリア形成意識の向上を目指した「県大吉備塾」の事業を行った。また学生のキャリア形成支援において今後本学でも重要なツールとなりうるキャリアポートフォリオについての教育開発講座を企画し実施した。以下に本年度の活動概要を記す。

2-7-2 就職支援活動とインターンシップ

2-7-2-1 就職支援活動と実績

全学部を対象として、就職活動の時期に合わせ就職ガイダンスや自己分析検査、各種模擬テストを実施するとともに、大規模な合同企業説明会へ就職活動バスを運行するなどの支援を行った。また、専門のキャリアカウンセラーによる就職相談を週 3 日（休業期間等を除く）実施し、学生への個別指導等を行った。（詳細は付録 1 C を参照のこと）

各学科においても、就職担当教員が中心となり、学科の特性に応じた就職指導やセミナー、企業説明会等を開催し、学生を細やかに支援した。

2-7-2-2 インターンシップ

本学では、学生のキャリア形成を支援するため、自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うため、NPO 法人 WIL や総社市、真庭市、病院や民間企業等との連携を図り、インターンシップ参加希望学生への支援を行った。なお、情報工学部とデザイン学部においては授業科目として取り組んでいるほか、保健福祉学部においては、特定の資格取得を目的に各種実習として取り組んでいるが、本報告には含まれていない。

平成 28 年度の NPO 法人 WIL、総社市及び真庭市におけるインターンシップの実施状況は次のとおりである。

(1) NPO 法人 WIL との連携

本学では、厚生労働省が行っていたインターンシップ事業（平成 14～21 年度）を引き継いだ NPO 法人 WIL のインターンシップ支援サイトを利用してインターンシップを実施した。平

成 28 年度の WIL のインターンシップ事業への参加学生は 14 人で、実習先は県内 11 企業(団体)であった。

[厚生労働省及び NPO 法人 WIL の行うインターンシップ実績]

単位：社、人

年 度	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	累計
受 入 企業社数	7	11	9	12	11	13	19	10	34	29	15	11	181
参 加 学 生 数	13	15	12	17	15	25	25	18	51	38	16	14	259

[平成 28 年度実習先]

実 習 先 企 業 ・ 団 体
倉敷市立自然博物館, 瀬戸内エンジニアリング(株), ダイヤ工業(株), 丸五ゴム工業(株), 石川工業(株), (株)両備システムズ, マックエンジニアリング(株), (株)トヨタカローラ岡山, (株)ファジアーノ岡山スポーツクラブ, (株)BtoBホールディングス, (有)アグリ元気岡山

(2) 総社市との連携

総社市のインターンシップは、本学と総社市の連携協力に関する協定の一環として平成 21 年度から実施しているもので、平成 28 年度は、秘書室、市民課、政策調整課、環境課、農林課、総社市図書館、総社市消防本部など多部署にわたり、19 名が参加した。また、インターンシップで体験した結果をもとに、学生が市に政策提言することを義務づけ、市はその提言の中から独創性や実現可能性などを評価して、3 名の学生を選び表彰した。

[総社市インターンシップ参加者]

年 度	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	累計
人 数	11	19	23	21	15	12	19	19	139

(3) 真庭市との連携

真庭市のインターンシップは、本学と真庭市の連携協力に関する協定の一環として平成 27 年度から実施している。平成 28 年度は、地域振興課、都市住宅課、建設課などの部署にわたり、3 名が参加した。

[真庭市インターンシップ参加者]

年 度	H27	H28	累計
人 数	1	3	4

2-7-3 教育開発講座の実施

キャリア形成支援部会では平成 28 年度 大学教育開発センター研修会として、第 2 回教育開発講座を以下のとおり実施した。

- 講師：小川 賀代 先生（日本女子大学理学部教授）
- 題目：「e ポートフォリオシステムを用いた学修支援」
- 実施日時：平成 28 年 11 月 4 日（金）13:30～16:00

○会場：学部共通棟（東）8206 講義室

○参加人数と構成：教員 72 名, 職員 6 名, その他（大学院生及び学外者）：7 名, 計 85 名

○スケジュール：13:30～14:30 講演

14:30～15:00 質疑応答

15:00～16:00 ディスカッション

（１）講演概要

ポートフォリオを用いた学修支援について, e ポートフォリオの定義・分類から学習と省察及びショーケースと説明責任という二面性のバランスなどについて俯瞰しながら分かりやすく説明され, その意義や効果について解説いただいた。また小川先生の先駆的な取組である日本女子大学でのロールモデルに基づく学生自身による学修支援, キャリア形成支援についてご講演いただいた。

（２）ディスカッション概要

システムの運用体制を含めて本学での適用可能性の観点から議論し, 講師の知見を教授いただきながら本学におけるポートフォリオシステムのあり方について意見交換を行った。

（３）アンケート調査

回収率は 55%(47 名)であった。

以下, 研修会全体についての問い（アンケート設問 3）に対する回答を挙げる。

今回の研修会全体を通して有用だったでしょうか：実数（カテゴリ毎の割合・％）

	1. とても不満	2. 不満	3. どちらともいえない	4. 満足	5. とても満足	6. 無回答
教員	0	1 (2)	6 (14)	25 (58)	10 (23)	1 (2)
職員	0	0	0	1 (100)	0	0
学生	0	0	0	0	0	0
学外参加	0	0	0	0	2 (100)	0
所属不明	0	0	1(100)	0	0	0

この結果に代表されるように, 全てのアンケート設問に関して 5. とても満足, 4. 満足が主たる回答であり参加者の満足度は概ね高かった。今回の教育開発講座では, 学生自身が日頃の成果・実績を蓄積し, またその成果を基に自己を振り返り, 学修支援を行うことができるポートフォリオに焦点を当てた。現在学生に期待される指標として用いられる学士力あるいは社会人基礎力など, 総合的な能力を評価する取組が行われていることから, 関心の高い参加者も多かったように見受けられた。しかし学内でもまだポートフォリオに対する理解が十分でないところもあり, 今回の教育開発講座がポートフォリオについての俯瞰的な解説を含んでいたことから参考になったとの意見が多く寄せられた。一方で, アンケートの自由記述欄において, 実際の導入を想定した際の運用面に関する様々な問題点が指摘されており, キャリア支援の観点からのみで導入を検討することは難しく, 大学教育全体として今後さらに検討が進められるべき事案といえる。

2-7-4 県大吉備塾の開催

県大吉備塾は教育力向上支援事業の一環として平成 27 年度より取り組んでいる事業で、卒業生を特別講師として招聘し、講演会やワークショップ・ディスカッション等を開催し、学科学部を超えた教職協働の視点から在学生へのキャリア形成支援を目的として展開・構築しようとするものである。以下に平成 28 年度初回の第 7 回県大吉備塾から第 12 回までの開催概要を記す。いずれの回においても参加した学生及び教員によるアンケート結果は、吉備塾の内容が意義のあるものであったとの回答が多かった。

第 7 回県大吉備塾

○学外講師

- ・医療法人社団新風会玉島中央病院 医療技術部 栄養課 相田明香氏（2013 年卒業）
- ・哲多町介護老人保健施設すずらん 栄養相談室 倉光正貴氏（2013 年卒業）
- ・一光化学株式会社 開発部 佐藤加奈氏（2014 年卒業）
- ・岡山市立第二藤田小学校 栄養教諭 黒川穂奈実氏（2013 年卒業）

○実施日時：平成 28 年 7 月 16 日（土）13:00～16:00

○会場：東棟 8901 教室

○企画運営：平松智子, 田淵真愉美, 山下広美

○参加人数と構成：学生 63 名/教員 2 名/計 65 名

県内外の多部門で活躍する岡山県立大学栄養関係の卒業生を招き、大学時代に学んだことが勤務先でどのような場面で生かされているか、また就職活動はどのようにしたか、などの情報交換をワークショップ形式で行った。高齢者福祉施設、病院、企業及び小学校に勤務の 4 名の卒業生から、大学での学びが業務のどのようなところに生かされているか、現在の仕事内容、進路を決めた時期、就職活動などについて話を聴いた。意見交換会では、具体的な話を聴くことができ参加者の満足度も高かった。

第 8 回県大吉備塾

○学外講師

- ・徳島県中央こども女性相談センター 四宮樹里氏（2013 年卒業）
- ・一般財団法人操風会 岡山旭東病院 早見真生氏（2014 年卒業）
- ・社会福祉法人幸風会 シルバーセンター後楽 田中幸恵氏（2015 年卒業）

○テーマ：「福祉の仕事のやりがいと学生時代の過ごし方」

○実施日時：平成 28 年 11 月 10 日（木）14:20～15:50

○会場：学部共通棟（東）8901 講義室

○企画運営：桐野匡史

○参加人数と構成：学生 47 名/教員 4 名/計 51 名

それぞれのパネラー（卒業生）から、福祉の仕事のやりがいや学生時代の過ごし方（各業種の仕事の内容や福祉職を目指すものとしての心構えなど）について、体験談などを交えながら話していただいた。とくに四宮氏からは、「譲れないもの」を軸にした進路選択や就職活動の方法、行政職として働くことの

意義などについてお話しいただいた。また、早見氏からは、「医療ソーシャルワーカーは、クライアントの人生に誠意をもって踏み込む仕事である」としたうえで、業務内容や専門性について、事例を交えながら、お話しいただいた。最後に、田中氏からは、介護福祉士としての仕事のやりがいや一人ひとりの人生に寄り添うケアの大切さについて、映像を交えながらお話しいただいた。講演後のアンケートでは、多くの学生から、大学で今何を学び、これから何をすべきかがイメージすることができるようになったなど、大学での過ごし方や学生が自分を見つめなおす良いきっかけになった様子であった。

第9回県大吉備塾

○学外講師

- ・淳風会 健康管理センター 保健師 西村理沙氏 (2006年卒業)
- ・重井医学研究所附属病院 看護師 常森友也氏 (2007年卒業)
- ・岡山協立病院 看護師 中田久美子氏 (2008年卒業)
- ・芳形奈美氏 (2012年卒業)
- ・心臓病センター榊原病院 看護師 松本典子氏 (2013年卒業)

○テーマ：「看護師・保健師のアセスメントと学生時代の体験」

○実施日時：平成28年11月28日(月) 12:40~15:50

○会場：保健福祉学部棟 6413 講義室

○企画運営：名越恵美

○参加人数と構成：学生37名/教員8名/計45名

4月に行われた就職ガイダンスとの差別化のため、200床前後の中規模病院に就職した卒業生を対象とした。講師は、4施設5名であった。また、看護師・保健師としてのアセスメントの視点と学生時代の就職活動に関する内容さらに新人時代の苦労について語ってもらった。聴講した学生からの意見は概ね好評であり、「将来のことを考えるきっかけになった」「実習病院以外の中規模病院を知ることができた」「保健師の活動がわかってよかった」といった意見があった。今後の課題としては、4施設5名の講義は内容が盛りだくさんであり、じっくり話を聞くためにも3名程度に抑える、または、回数を増やして実施するなどの工夫が必要である。また、今年度は、時間調整が難しかったため他の学年は参加できなかった。来年度は全学年が参加できるように調整する必要がある。学生は、様々な職種に関心があるため、看護師・保健師・助産師・養護教諭から職種を選んで依頼する必要性を感じた。

第10回県大吉備塾

○学外講師

- ・ミサワホーム株式会社 定方真貴子氏 (2010年卒業)
- ・株式会社ゼンリン 岩淵遥氏 (2011年卒業)
- ・スズキ株式会社 西村麻里氏 (2015年卒業)

○テーマ：「デザインの仕事と周辺」

○実施日時：平成28年12月1日(木) 14:20~17:30

○会場：デザイン学部棟 3312 講義室

○企画運営：三原鉄平

○参加人数と構成：学生 22 名／教員 6 名／計 28 名

デザインに関係する仕事は、デザイナーや建築家といったイメージしやすい肩書きの仕事だけでなく、実際には幅広い仕事や職種が存在していることから、様々な立場でデザインに関わっている卒業生を選出することで、実社会で取り組まれている横断的な業務をイメージできるよう企画した。今回は、建築デザインコース OG（ミサワホーム株式会社）、情報デザインコース OG（株式会社ゼンリン）、プロダクトデザインコース OG（スズキ株式会社）の 3 名の異なる業種に従事する卒業生を招き、現在の職場での仕事のやりがいや、就職活動時の体験談などについてお話しいただいた。受講生は、デザイナーとしての業務をイメージすることや現在学んでいることが社会でどのように必要とされているのかが理解でき、就職活動はもちろん今後の学生生活にも役立てることできる有意義な会であった。

第 11 回県大吉備塾

○学外講師

- ・ダイハツディーゼル株式会社 守山第一工場 生産技術部 大矢哲士氏（2013 年修了）
- ・神鋼造機株式会社 技術本部 産業機器技術部 時枝和平氏（2014 年修了）

○テーマ：「情報系出身者から見たものづくり現場」

○実施日時：平成 29 年 1 月 20 日（金）14：30～16：00

○会場：情報工学部棟 2202 講義室

○企画運営：石井裕

○参加人数と構成：学生 19 名／教員 4 名／計 23 名

テーマは「情報系出身者から見たものづくり現場」で、情報系工学研究科機械情報システム工学専攻出身でダイハツディーゼル株式会社の大矢哲士氏（平成 25 年 3 月修了）、人間情報システム工学専攻出身で神鋼造機株式会社の時枝和平氏（平成 26 年 3 月修了）にご講演いただいた。まず大矢氏から、「エンジンの生産現場」と題してディーゼルエンジンの製造工場における CAD を用いた設計資料や作業工程、また、連携企業での視察情報など、現場ならではの資料を用いて仕事内容の紹介があった。プレゼン力を身につけることで相手に理解されることも多く、学生時代の経験が役に立っているとお話があった。検討している企業のインターンシップにはできるだけ参加すべきとお話で、面接でも覚えられているため活用して欲しいとのことであった。

また、時枝氏からは、「製造業における情報系の強み」と題して、CAD を用いた試験装置の設計開発についてなど紹介があった。また、製造業において、情報系のスキルは必ず役に立つもので、就職先の選択肢として大いに検討して欲しいと説明があった。終了後も学生と業務内容や学生時代の過ごし方について意見交換が行われるなど、普段聞くことのできない製造現場の実際の雰囲気などについて感じ取ることができていた。

第 12 回県大吉備塾

○学外講師

- ・映像装飾小道具 中島明日香氏（2008 年卒業）
- ・竹政製陶有限会社 酒井愛子氏（2012 年修了）

・株式会社京都アニメーション 石井葉月氏（2014年卒業）

○テーマ：「デザイン学部で学んだことと現在の仕事」

○実施日時：平成29年2月9日（木）14：20～17：30

○会場：デザイン学部棟 3414 講義室

○企画運営：難波久美子, 齋藤美絵子, 作元朋子

○参加人数と構成：学生34名／教員9名／計43名

講義内容は、①現在の業務内容や業界の事例紹介、②現職に就くまでの活動（就職活動、他）、③学生時代に取り組んだ専門性への道のり（専門知識や技術の修得）、という流れで、現在から大学時代までを遡りながらお話しいただいた。学生時代をどのように経て現在の職業に至ったのか、学業や経験がどのように繋がり役立っているのか等のお話から受講生は在学中にやるべきことや身に付けるべきことを具体的にイメージすることができた。

参加教員からは、異なる業界やフィールドの卒業生を講師として迎えることで、共通点及び異なる点について総合的に理解・吸収しやすい回であったとの感想を得た。多くの受講生から、今後の学生生活を過ごすうえで、また、今後の就職活動に役立つとの感想を得ることができ、講義内容だけでなく、講師のプレゼンについても刺激を受けていた。プログラム後半の講師とのフリートークに積極的に参加する学生が多くなかったことは今後の課題といえる。

2-7-5 まとめと課題

キャリア形成支援部会は、学部学科横断的な全学的取組として調査研究・企画立案業務を掲げ、学生支援班と協働して本学学生のキャリア形成を支援することを目的とした部会である。卒業生の活躍を在学生の就職支援やキャリア形成支援に結びつける目的で実施した県大吉備塾においては出席した在学学生や卒業生講師によるアンケートの結果より、本取組に対する満足度や期待度の高さが把握できたが、より充実した開催のための課題として、学年ごとの要求内容及びレベルの若干の相違が挙げられたことから、高学年における就職活動を目的とした講演内容、または主に在学時のキャリア形成を念頭にした取組に関する講演内容などを整理して吉備塾を企画していく方向性を探る必要があると考えられた。教育開発講座の取組としてeポートフォリオに関する専門家を外部講師として招いての講演、及び情報交換によりポートフォリオに関する理解を深め、本学でのポートフォリオの取組をどのように進めるか考える機会を得ることができた。今年度得られたこれらの情報を基に今後はアンケート結果のフィードバックの方法を探ると共に、来年度以降には新システムにおけるポートフォリオの構築、卒業生の組織化（同窓会との連動）や卒業生の支援体制についても検討していくことが課題である。

2-8 学生支援部会

2-8-1 概要

学生支援部会は、学部学科横断の全学的取組として、1) 学生生活支援、2) 障がい学生支援、3) 学内バリアフリー・ユニバーサルデザイン、4) TA、アルバイト計画と実施の業務を所掌するが、部門として学生支援室・学生相談室・保健室を擁し、学生における心身の健康や主体性の涵養に資する広汎な調査研究・立案・実施の活動を行っている。

2-8-2 学生支援室 Student Activity Station (SAS) の開設

学生にとってのボランティア活動は、地域貢献のみならず地域の教育力のなかで豊かな人間形成や幅広いキャリア形成につながる有意義な活動である。しかし、昨年度実施した学生アンケートの結果からも明らかとなったように本学の地域社会における活動の実績は一部の学生に限られているのが現状である。その要因として、ボランティア活動などの正課外活動の情報が学内で整理されておらず、学生が情報を得られにくい状況であることがあげられた（H27 年度学生アンケート結果より）。また、学外からの要請に対して活動する、つまり、受動的な意識・活動になり活発な広がりを見せなかった。また、課外の時間における自習環境について学生の 75%が満足しておらず、利用時間帯の変更や施設設備の充実を望んでいることが学生アンケートから明らかとなった。正課外における学生同士の様々な活動は人間形成、キャリア形成、コミュニケーション能力の向上など有意義な活動と言える。従って、これら学生の活動環境の整備が求められていた。

これを受けて学生支援部会の一部門である学生支援室では、学生が主体となり、学生相互の学習活動や助け合い活動及び学内外でのボランティア活動を企画、調整、情報発信・受信する、つまり正課外活動の拠点となる学生支援室 Student Activity Station (SAS) を平成 28 年度新規重点事業として平成 28 年 12 月 1 日に開設した。

学生支援室 Student Activity Station は大きく 2 つのスペースがあり、一つがインフォメーションスペース、もう一つがラーニングスペースである。インフォメーションスペースでは、これまで学内のあらゆる掲示板に掲示されていたボランティア情報を取りまとめ掲示するとともに、ボランティア情報を電子化して検索できるように作業を進めている。また、SAS 登録学生制度をつくり、自分が活動したい分野のボランティア活動を登録しておき、それに合致した要請を直接メールで受け取れるシステムを構築中である。ラーニングスペースには、可動式の机を 10 台、可動式の椅子を 30 脚、可動式のホワイトボード兼スクリーンを 10 台、プロジェクターを 5 台、無線 LAN を備えており、学生のグループ学習や正課外活動に関するミーティングなど、学生の活動ニーズに合った形態で学修できるよう整備した。基本的に、学生支援室 Student Activity Station を利用する場合は、学生支援班への届出を必要としているが、学生が自由に利用できるように平日のほとんどの時間帯の管理を学生支援団体 PZL の学生スタッフに委託しており、PZL が管理する時間帯については、届出不要で利用できるような体制にしている。



学生支援室（SAS）オープニングセレモニー



学生支援室（SAS）の様子

2-8-3 学生支援室における障がい学生への支援

（1）障がい学生支援体制の整備

平成 28 年 4 月に施行された障害者差別解消法により、本学でも「障害を理由とする差別の解消の推進に関する公立大学法人岡山県立大学教職員対応要領」が定められた。この第 8 条に基づいて学生支援部会では、障がい学生支援のための相談体制や手順を示した教職員向けのマニュアル「対応マニュアル」を作成した。同時に、支援を希望する学生向けに「合理的配慮を希望する学生へ」「支援申請書」「授業時における支援申請書」「定期試験時における特別措置申請書」を作成し、平成 28 年 3 月より実際に適用し、合理的配慮の合意形成と遂行上の成果や課題を確認した。

（2）障がい学生支援の事例

1) 平成 28 年度に入学した車椅子利用の学生について、入学手続きの確認後、「対応マニュアル」に従って、支援希望の確認、環境アセスメントを含む入学前面談を実施し、「支援申請書」の作成を支援した。「支援申請書」の提出を受けて「支援・配慮一次検討会議」、「支援・配慮二次会議」を実施し、支援方法の具体化と配慮要請（案）の作成を行った。多くの関係教職員が入学前面談により本人とコミュニケーションができ、本人の状態を把握することができたため、合理的配慮について円滑に本人との合意形成を行うことができた。本事例における合理的配慮の遂行に当たっては、入学当初は入学式、健康診断、学外オリエンテーションなどの行事が多く関係部署・機関と連携した早急な対応が必要であった。人的支援としては、排泄介助のために事務局に支援員（兼務）が配置された。物理的支援としては、トイレ、教室について多くの改修が必要となり利用する優先順位に従って随時改修した。しかしながら移動経路等についての課題は残されたままである。

2) 平成 29 年度に入学予定の車いす利用学生についても、入学手続きの確認後、「対応マニュアル」に従って、支援希望の確認、環境アセスメントを含む入学前面談を実施し、「支援申請書」の作成を支援した。本事例についても、トイレの改修、建物間の移動の問題が指摘された。また、本事例の場合は鉄道利用による通学の問題が明らかになり、本人・家族を支援す

る立場として、大学からも学長による鉄道会社への合理的配慮の申し入れを行うことが決定された。

以上、平成 28 年度に支援希望のあった学生については、合理的配慮の合意形成と配慮計画の遂行は概ね円滑に進んでおり、障がい学生支援のための相談体制は順調に機能していると考えられた。しかしながら、本学の物理的環境のバリアフリー化については課題が多く、短期、中期、長期の計画を作成し継続的に取り組むこととされた。

(3) 障がい学生支援に関する研修会の実施及び学外研修会等の参加

1) 研修会名：保健福祉学科サポート勉強会

日 時：平成 28 年 4 月 28 日（木）16:25～16:55

場 所：8210 講義室

講 師：原野かおり（保健福祉学科准教授）、
松田実樹（保健福祉学科助教）

参 加 者：保健福祉学科教員の希望者 16 名

概 要：車椅子利用学生の入学前から入学当初までの支援の状況について学生支援部会委員より報告を行った後、排泄介助の方法（尿器利用の場合）について、講師より人体モデルを用いた排泄介助方法のデモンストレーションと説明がなされた。当該学生の排泄介助は通常支援員が行っているが、時間外や行事、緊急時等の対応が必要になった場合に備えて、学科教員の意識も高く活発な質疑が行われた。



保健福祉学科サポート勉強会の様子

2) 障害学生支援に関する学外研修会等の周知・参加

・「平成 28 年度障がい学生支援研修会」（大学コンソーシアム岡山障がい学生委員会主催）（8/23、岡山大学）を、学生支援部会として本学教職員に推薦した。内容は、「発達障がい学生への合理的配慮－大阪大学の障がい学生支援システムを通して考える－」（講師：望月直人氏）、「身体障がい学生への合理的配慮－同志社大学における難事例を中心に－」（講師：土橋恵美子氏）であった。

・「平成 28 年度第 8 回障がい学生支援委員会（大学コンソーシアム岡山）」（5/17、就実大学）

・「平成 28 年度第 9 回障がい学生支援委員会（大学コンソーシアム岡山）」（10/24、就実大学）

・「平成 28 年度第 10 回障がい学生支援委員会（大学コンソーシアム岡山）」（2/28, 就実大学）

2-8-4 学生支援団体 PZL（パズル）の設置

本学にはこれまで学生支援の活動の中に学生の自主的建設的な意見等を反映させる目的でキャンパス・マネージャー（学生生活企画提言委員）制度を設け、学内点検や改善要求、提言などを行い、学内環境の整備などを進めてきた。しかし、強い意志をもち自主的にキャンパス・マネージャーになる学生が少なくなり、半強制的にキャンパス・マネージャーになる学生も少なくないため、制度や活動が形骸化していく状況にあった。一方で、キャンパス・マネージャーがもつ役割の一部は、学生・教員・職員が三位一体となって大学をより良いものにしていこうという活動「学生 FD 活動」にも通じるものがあり、近年は多くの大学でその活動が認められ活発になってきている。また、障がいをもつ学生に対する「合理的配慮の提供」を義務と定めた障害者差別解消法が本年度に施行され、学生相互の支援体制（ピア・サポート）やアクセシビリティの改善・支援がより一層求められてきた。さらに、ボランティア活動など正課外の主体的な活動をしている学生が少ない本学において、組織的に正課外活動を活性化させ、活動を通して市民的責任、社会的な役割を感じさせるだけでなく、職業について考えさせ、現実社会で必要な資質・能力を高めさせる環境づくりが求められてきた。

そこで、学生の自治組織であり、学生の正課外活動の核となる「学生による学生のための組織」学生支援団体 PZL を設置した。（PZL（パズル）の名称は、「熱意（Zeal）をもって相手（Partner）を導きます（Lead）」の頭文字から学生自らが名付けた。）

具体的には以下の活動を学生自らが企画、支援、調整など進めていく。

- ・学修環境及び学生生活環境に関する提言又は企画（学生 FD 活動）
- ・学生支援室 Student Activity Station（SAS）の運営
- ・正課外活動の企画及び運営
- ・学内及び学外におけるボランティア活動の企画及び運営
- ・ボランティア情報の収集及び提供
- ・障がい学生の支援（ピア・サポート）及び留学生の支援
- ・その他学生が主体的に企画し学生支援室長が必要と認める事項
- ・キャンパス・マネージャーの活動に関すること

今年度は主に組織の体制整備や周知のためのポスター作成など整備・広報活動を主な活動としながら、以下の活動を行った。

◆第 1 回学生 FD 活動（We can change!!～学生会館～）の開催 [学生 FD 活動]

この FD 活動は、準備、企画、広報、当日の進行等の全てを学生が行うという本学初の試みであり、大学教育開発センターのセンターワークショップの枠組みのなかで、平成 29 年 1 月 30 日に開催された。教員 18 名、事務職員 6 名、学生 18 名の合計 42 名の参加があり、5 グループに分かれて、テーマである学生会館について意見交換・討論を行った。各グループで活発な意見交換が行われ、学生会館の改善に向けた様々な建設的な意見・アイデアがだされた。ここでの意見・アイデアは平成 28 年度末から平成 29 年度初めに実

施する学生会館アンケートの結果と合わせて、学生会館の改善に向けた足がかりとする。また、本活動は学生、教職員が三位一体となって取り組む学生 FD 活動の第一歩として、今後も定期的に様々なテーマを用意して開催する。

- ◆岡山大学主催学生 FD 活動 (i*See2016) への参加 [学生 FD 活動]
- ◆広島経済大学興動館主催学生 FD 活動 (宮島交流会～繋ぐ学生 FD の輪) への参加 [学生 FD 活動]
- ◆「学生 FD サミット 2017 春 山口大学」への参加 [学生 FD 活動]
- ◆全学情報システム愛称ロゴ募集、選考及びロゴデザイン作成 [学生 FD 活動]
- ◆授業評価アンケートの見直しのための意見交換会への参加 [学生 FD 活動]
- ◆学生会館改善のためのアンケート作成及び実施 [学生 FD 活動]
- ◆第 1 回しゃべり場 (学部間交流会) 開催 [学生 FD 活動]
- ◆社祭り神輿担ぎ手 (真庭市社地区) への参加 [ボランティア・地域貢献]
- ◆笑顔が素敵健康かつやま 21 大会 (真庭市勝山地区) での健康測定への参加 [ボランティア・地域貢献]
- ◆真庭市久世まち歩きイベントへの参加 [ボランティア・地域貢献]
- ◆その他, ボランティア・地域貢献活動



第 1 回学生 FD 活動 (We can change!!～学生会館～) の様子



広島経済大学興動館主催学生 FD 活動
(宮島交流会～繋ぐ学生 FD の輪) の様子



社祭りでの様子

2-8-5 ボランティア活動支援

・東日本大震災復興支援ボランティア派遣事業（AMDA との連携）

本学では、平成 23 年度から大学コンソーシアム岡山の枠組みのなかで、岡山経済同友会主催の東日本大震災復興支援ボランティアに数名の学生が参加して活動を行ってきた。しかし、大学コンソーシアム岡山に参加する機関（大学）に派遣人数の割り当てがあったため、支援活動への参加を希望しても全員が参加できない状況であった。この現状において、平成 25 年度に本学と AMDA、総社市との連携協定が発足したことを受け、AMDA の協力の下で地域貢献とキャリア形成を目的とした本学独自の東日本大震災復興支援ボランティア活動を平成 27 年度から実施することになった。

第 2 回目となった本年度は、8 名の学生が移動日も含めて 8 月 19 日から 8 月 23 日までの 5 日間の日程で実質 3 日間の活動を実施した。

8 月 19 日（金）

14:00 出発式

14:20 出発

8 月 20 日（土）

午前 宮城県南三陸町ポータルセンター到着

語り部による学びのプログラム [講和&町内視察（防災対策庁舎, 戸倉中学校）]

午後 宮城県気仙沼市 南町紫市場到着

気仙沼復興商店街にて講和（商店街の現状と今後について）

イベント会場の設営（テーブル・椅子の設営など, イベント参加）

イベント会場の撤去

仮設住宅集会所での出し物の練習

* 宿泊場所：紫会館（避難所）, 商店街集会所（仮設商店街内）

8 月 21 日（日）

午前 紫会館清掃（会館内清掃, 周辺草抜き）

リアスアーク美術館 [学芸員による講和（被災直後の写真, 被災物の展示）]

午後 岩手県陸前高田市 奇跡の一本松 視察

岩手県大槌町視察（旧大槌町役場, ひょうたん島）

研修：大槌町で活動する 3 組織の方との交流

[Tsubomi：大槌町で子育て支援, 女性の雇用創出・支援, 若者の活躍の場の創出, ボランティア・インターンシップの受け入れなどを行う団体]

[三陸ブレーメン企画合同会社：大槌町内外の中間支援組織, 仮設集会所や災害公営住宅集会所などでイベント開催, 町外からの団体のコーディネートなどを行う会社]

[おおつちコミュニティプレイス事務局：行政・支援団体・地域等が連携を深め, 円滑に活動できるよう支援する中間支援組織]

仮設住宅集会所での出し物の練習

* 宿泊場所：波板地区交流センター

8月22日（月）

午前 波板地区交流センター内の清掃

大槌町視察（城山公園から）

大槌町吉里吉里地区の仮設住宅集会所にて住民と交流〔学生全員によるダンスを披露, お茶っこ（お茶会）に参加〕*参加住民5名

午後 大槌町出発 岡山へ

8月23日（火）

午前 岡山県立大学 到着

今回のプログラムは、いわゆるボランティアとしての活動は少なく、視察中心の内容であったが、その分、住民との触れ合いや交流の時間が多くとれ、学生にとっては色々と考えさせられる内容であったようだ。特に、これまであまり入ることのできなかった仮設住宅の集会所で、自分たちが考え、練習したダンスを披露したり、お茶をいただいたりしながら住民の方と交流したことは大変有意義であった。住民の方にも大変喜んでいただき、学生たちも感動していた。また、語り部さんや商店街の代表の方のお話を聞き、行政の復興事業と住民の希望に多くの隔りがあることも知ることができた。

学生たちは岡山に戻り、自分たちが見聞きしたこと、体験したことを他の学生にも知らせたいと、8枚のポスターを完成させ、大学祭で展示した。また、その後は学生会館にて常設展示している。



三陸町視察（旧防災対策庁舎）



大槌町視察（旧大槌町役場）



仮設住宅集会所にて住民と交流（大槌町吉里吉里地区）



活動報告ポスターの展示

2-8-6 学生会館等アンケートの実施

学生及び教職員の健康の維持・増進, 人間関係やコミュニケーションの形成, 豊かな人間性の育成における学生会館の役割は大きい. 一方で, 他大学に比べても本学の学生会館の環境は, 必ずしもその役割を果たしているとは言えない状況である. 平成 27 年度に実施した学生アンケートから, 学生の多くが学生会館の食堂及び喫茶に対して不満をもっていることが明らかになった. また, キャンパス・マネージャーとの意見交換会においても食堂, 喫茶及び売店の営業時間の改善, メニューの改善, 衛生面の改善などの要求が出された. これを受け, 学生会館に対する学生の意見を集約し, 環境改善に向けた根拠及び改善計画の手がかりとすることを目的として, 利用者の満足度等に関するアンケート調査を実施した. 調査は食堂, 喫茶及び売店を利用した学生に対して実施し, 有効回答数は, 食堂が 126 人, 喫茶が 106 人, 売店が 124 人であった. 結果の概要を以下にまとめる.

表 1 食堂, 喫茶及び売店に対する満足度等

	食堂	喫茶	売店
好きである	74%	87%	64%
美味しい	62%	86%	—
適当な値段	71%	64%	—
清潔である	70%	91%	—
適当な営業時間	55%	58%	46%
食品の品ぞろえが十分	—	—	36%
食品以外の品ぞろえが十分	—	—	57%

表 1 から食堂, 喫茶及び売店を利用している学生は, 概ね好意的にそれぞれを捉えていることが明らかになった. しかし, 営業時間や品ぞろえについては不満をもっている学生が多いことも明らかとなった. 自由記述からも「営業時間を延長して欲しい」「メニューを増やして欲しい」「価格が高い」などの意見が多数出された. 従って, 食堂, 喫茶及び売店を充実させるためには, 営業時間, メニュー, 価格の改善を中心に実施していくことが必要であると言える.

一方で, 平成 27 年度の学生アンケートから食堂及び喫茶を「週に 4 回以上」利用している学生は 45%程度であり, 半数以上は「週に 1~2 回程度」や「月に 2~3 回程度」の利用及び「利用しない」者である. また, 売店についても「週に 4 回以上」利用している学生は 47%程度であり, 半数以上は「週に 1~2 回程度」や「月に 2~3 回程度」の利用及び「利用しない」者である. つまり, 今回実施したアンケートは頻繁に利用している学生の利用者アンケートであり, 学生の半数以上を占める「日頃からあまり利用しない学生」の意見は反映されていない. そこで今後は, 学生会館に学生支援室 Student Activity Station が新設され, 学修環境も整備されつつあるなかで, 学生会館を福利厚生, 学修及び正課外活動の拠点とした活発な利用が進むよう, 学生支援団体 PZL を中心として教職員も含めた全学的な調査を実施

する。さらに、学生支援団体 PZL を中心として学生 FD 活動の一環として学生会館の改善に取り組む計画である。

2-8-7 学生相談室の活動

(1) 相談体制

学生相談室は平成 6 年 5 月に開設された。開設当初は本部棟 1 階事務室横にあったが、平成 8 年からは図書館 2 階個人閲覧室の一室、平成 24 年度からは学部共通棟（西）へ移動し、さらに、平成 26 年度からは学生相談室の認知度向上を図る観点から環境を整備し、より入りやすくより安心して相談できる環境づくりを目指している。

相談室のスタッフは平成 6～9 年度は学内カウンセラー 2 名（臨床心理士）により週 2 日、平成 10 年度からは臨床心理を専門とする学内カウンセラー 1 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1 名が新たに配置され、4 名体制で週 4 日開室していた。平成 11～12 年度は学内カウンセラー 2 名と学外嘱託カウンセラー 1 名の週 3 日、平成 13～16 年度は学内カウンセラー（臨床心理士、心理学専門）3 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1 名の 4 名で週 4 日開室していた。平成 17 年度からは学内カウンセラー（臨床心理士、心理学専門）3 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）3 名の計 6 名体制となり、月～金曜日まで毎日開室できる体制となった（ただし、休業期間中を除く）。平成 27 年度の開室時間は週 24～26 時間である。

[平成 28 年度 開室時間と運営スタッフ]

曜日	時間	氏名	備考
	相談室長	吉原 直彦	学生部長
	学校医（精神科）	中田 謙二	精神科医
月	10:30～12:30	谷口 敏代	保健福祉学部教授
	16:30～18:30	京林 由季子	保健福祉学部准教授
火	10:00～14:00	津川 美智子	学外カウンセラー
	16:00～18:00*	迫 明仁	情報工学部教授
水	9:30～13:30	斉藤 弘美	学外カウンセラー
	13:30～18:30	疋田 基道	学外カウンセラー
木	9:00～12:00	疋田 基道	学外カウンセラー
金	12:00～16:00	津川 美智子	学外カウンセラー

* 第 1 週、第 2 週のみ

平成 20 年度から、精神科医である中田謙二医師が学校医として加わり、学生への面談や相談室カウンセラーへのコンサルテーションを行っており、学生相談室長（学生部長）を含め、計 8 名のスタッフで構成され、この他に保健室及び学生支援班と連携を図りながら運営している。

(2) 相談室の取組

月～金曜日の開室時間内のカウンセリング以外に様々な取組を行っている。

入学式当日には、学生相談室（愛称：ほっとルーム）のパンフレットを配布し、カウンセラーの自己紹介や学生相談室のPRを行い、気軽に来室できる雰囲気作りを行っている。同時に、誰でも予約なしで学生相談室を来訪、見学できる「ちらっとほっとルームキャンペーン」を実施した。また、相談室会議やカンファレンスを年3回開催した。

さらに、平成26年度より教育力向上支援事業に鑑み、デザイン学部の協力を得てパンフレットを刷新、より入りやすい雰囲気にするため外壁を装飾するなど、誰もが親しみを感じられるような明るく暖かい雰囲気の相談室にするための作業が始まっている。

〔学生相談室の取組〕

前期	概要
4月	入学オリエンテーション (ほっとルームパンフレット配布及び掲示) こころの健康調査 (UPI) (ほっとルームカード配布) ちらっとほっとルームキャンペーン
6月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
後期	概要
11月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
2月	学生相談室会議・ケースカンファレンス

また、各学部教員から要請があった場合やカウンセラーが重要ケースと判断した場合、相談室長や複数のカウンセラー、関係する学部長や教員で対応について協議することとし、学生への緊急対応及び危機介入時には岡山県精神保健福祉センターに相談・協力を得ることにしている。

平成23年度からは、平成22年度に構築した「こころの健康管理システム」(別図参照)を活用し、「こころの健康調査 (UPI: University Personality Inventory)」の結果や学生指導における事例等の情報管理を行い、学生個々のニーズに応じた効果的な相談を行っている。

(3) 学生相談内容及び相談件数

学生相談室は来談者との秘密保持の遵守が必要である。相談の内容は、①対人関係(友人・親・教職員・アルバイト等の上司や同僚等)、②修学や進路に関する事、③情緒的な問題、④教員へのコンサルテーション等である。件数は少ないが保護者からの相談もある。相談内容は多岐にわたり、中には病理水準域の学生も来室する。

来室のきっかけは、①学生の自発来談、②保健室からの紹介、③学生友人からの紹介、④教職員からの紹介に分類される。電話やメールでの相談対応は原則として行わないが、学生の状況によっては電話によるカウンセリングを行うこともある。

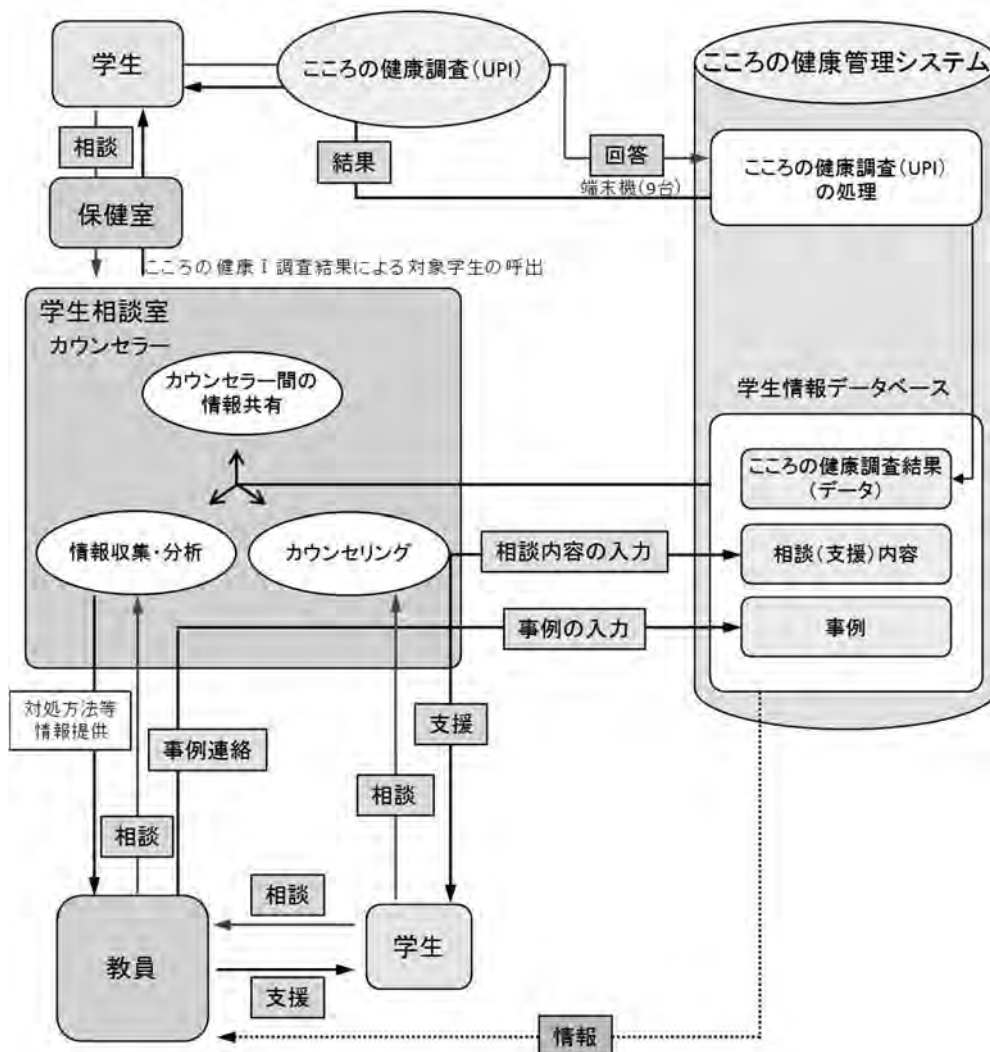
相談の基本的なスタンスは、学生に個別に会い、ゆったりと時間をとり、学生が語る内容を聴いて、心理臨床の専門家として必要な支援を行い、また、学生が自己を語り、自己を理解し、自己をまとめていく過程を大切に、個々の学生の発達や成長という視点から心理教育的な関わりを行っている。危機介入が必要な場面を除いては学生本人が自ら解決できるように支援をしていきたいと考えている。

来談者の平成 27 年度及び平成 28 年度の月別人数は、下表のとおりである。

〔月別延来談者数〕

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	うち学生 来談者数		
	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月		うち 実数	延 数	実 数
28 年度	49	55	83	121	8	47	90	44	33	33	35	10	608	69	570	55
27 年度	32	99	137	81	14	32	45	24	39	22	15	5	545	66	466	58

こころの健康管理システム



2-8-8 保健室の活動

(1) 保健室業務

保健室は、開学時より本部棟 1 階にある。主に学生の健康診断、健康相談、健康診断証明書等の発行、けがや急病の手当等、学生の心身の健康に関わる業務を行っている。

保健室のスタッフは、常勤職員は養護教諭 1 名のみであるが、平成 27 年度より医師免許を持つ教員 2 名が保健室主任を、学生部長が保健室長を兼務している。

本学では、開学当初より平成 26 年度まで森下病院の森下和郎先生、平成 27 年度より済生会総合病院の塩出純二先生に学校医を委嘱しており、学生の健康や感染症予防対策、その他保健活動に関する相談をしている。

(2) 具体的内容

保健室で行う主な取組は次のとおりである。

- ・ 学生定期健康診断
- ・ 学生の心身の相談
- ・ オープンキャンパスや大学祭等における救護業務
- ・ 健康診断証明書、検査結果証明書等の証明書発行
- ・ 「保健だより」による健康に関する情報発信
- ・ インフルエンザ流行時期等の感染症予防対策
- ・ けがや病気の手当及び緊急時の救急搬送依頼
- ・ 学生相談室の予約等

(3) 平成 28 年度保健室利用状況

(H29. 3. 31 現在) (人)

	内科	外科	その他疾病	検査等	相談等	証明書	その他
H27 年度	124	97	87	527	280	682	25
H28 年度	118	97	10	673	765	611	5

2-8-9 まとめと課題

これまで報告してきたように、当部会が所掌する学生支援に関する活動は多岐にわたっているが、その目的は概ね以下の 3 点に集約される。

- (1) 心身の健康と安全をベースにおく学生生活への適応に向けた支援
- (2) 人間的成長に向けたキャリア形成のために課外の主体的学修を促すための支援
- (3) 多様な活動を保証するために必要な利便性の確保に向けた支援

(1) に関して、昨年度は障害者差別解消法の施行に伴い、体制を含めた本学の環境整備を喫緊の課題として挙げていた。それに対して、昨年度末から学生相談室及び保健室の構成員を含めた学生支援室構成員で対応マニュアルの作成に取り掛かり体制を整備してきた。また、車椅子利用学生の支援要請に対して、関係教職員と連携しながら、いくつかのハード

及びソフト面の環境改善にあたった。来年度入学生も含めこれまで2名の学生に対応してきたが、支援体制や相談体制などのソフト面は順調に機能しているが移動経路のバリアなど物理的環境のバリアフリー化については中・長期的な計画及び実現も含めて、継続的に取り組むべき課題である。さらに、本年度設置した学生支援団体 PZL のメンバーを中心とした人的支援体制（ピア・サポート体制）の整備も進めていく必要がある。（2）に関しては、学生主体のプロジェクトの推進、そのための体制整備を課題としていた。それに対して、今年度は前述の学生支援団体 PZL を立ち上げ、正課外活動の拠点としての学生支援室（SAS）を整備した。学生 FD の実施や地域貢献活動の実施など PZL を中心とした活動は順調に走り出しているが、その他の学生や教職員への認知が進んでおらず、活動の広がりが乏しいため、情報発信体制の整備、フォロワーの育成等が今後の課題である。（3）に関しては、学習活動環境の利便性の確保を課題としてあげていた。それに対して今年度は学生の福利厚生施設である学生会館に、グループワークのできる学生支援室を設置した。また、学生会館の食堂、喫茶、売店に関するアンケート調査を実施した。豊かな人間形成、キャリア形成のためにも学習環境、食環境の整備は重要であり、学生会館の改善に向けた取組は引き続き実施していく。さらに、PZL 及びキャンパス・マネージャーの活動のなかで、学生会館以外の学修環境の整備にも取り組んでいく。一方、様々な情報収集の利便性は全学情報システム（学務系）「はっとりん」や大学ホームページの更新により高まることが期待される。ただし、ホームページに関しては、学生支援関係のアクセシビリティ向上には至っていない。今後、運用及び利用状況を確認しながら利便性を高める取組が必要である。学生支援部会での活動は、本部会のみにとどまらないため、今後も関係部会等及び学生と連携して課題解決に取り組んでいく。

2-9 教育改革WG（「岡山創生学」）

2-9-1 概要

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に本学を代表校となって応募した「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」(以下、本 COC+ 事業)が、平成 27 年度に選定されたことを受け、今年度入学生より、副専攻「岡山創生学」が開設された。すなわち、今年度は副専攻「岡山創生学」の初年度であり、1 年次生を対象とする 3 科目「おかやまボランティア論」、「おかやまボランティア演習」、「おかやまを学ぶ」が開講された。いずれの科目も、平成 27 年度より設定されている共通教育科目の社会連携カテゴリーに属している。副専攻「岡山創生学」授業科目は、4-3 項で述べるように、共通教育科目に加え、各学部の学部教育科目で構成されており、年次進行で副専攻「岡山創生学」科目として開講していく。なお、共通教育科目の社会連携カテゴリーに、現在、配置されている授業科目は、副専攻「岡山創生学」完成時には、全て副専攻を構成する科目となる。このため、今年度の社会連携カテゴリー授業科目は、上記 3 科目は副専攻「岡山創生学」科目として開講

され、他は従前の取り扱いで開講された。

ここで、本 COC+事業は、岡山県の「晴れの国おかやま生き生きプラン」(平成 26 年度から 3 年間) 及び「おかやま創生総合戦略」(平成 27 年 10 月) とも方向を一にしており、また、県内の事業協働自治体の政策課題も取り込みながら、学長の強力なリーダーシップの下、これまで本学が取り組んできた教育改革、域学連携、産学連携活動を、表 1 に示す県内自治体、大学、企業、団体等と協働して発展させ、地域志向事業として推進することによって、事業協働地域内への若者の定着率を向上させることを目的としている。そのために、岡山県をはじめ、各事業協働自治体の地域戦略を反映した下記 3 つの目標を設定し、本事業期間内(平成 27 年度～平成 31 年度の 5 年間)を通して、「教育改革」、「域学連携」及び「産学連携」活動を相互に連携・実施しながら、若者の地域定着を進める産・学・官・民協働の体制を整備し、地域で学び、地域を志向し、“生き生きおかやま”を創生する人材を育成する(図 1 を参照)。

なお、文部科学省より本 COC+事業に対して助成されるのは平成 31 年度までとされているが、本学の地域連携教育は、「人間・社会・自然の関係性を重視する実学を創造し、地域に貢献する」という教育研究の理念に基づいて、平成 32 年度以降も継続・発展される。

[目標Ⅰ (教育改革)]

地域を志向し、地域の未来を切り拓く知識と高度な専門性を身につけた実践力のある人材の育成

[目標Ⅱ (域学連携)]

子育て・教育支援、高齢者・障害者支援、防災・減災支援等により、安心して生活することのできる魅力ある地域づくり

[目標Ⅲ (産学連携)]

岡山県内の市町村の共通課題である健康寿命の延伸、中小企業・小規模事業者の技術支援、観光振興などの分野の研究開発を通じた雇用創出

表 1. 「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」協働機関

参加大学	岡山大学, 岡山理科大学, ノートルダム清心女子大学, 就実大学, 山陽学園大学, 倉敷芸術科学大学 (COC 既採択校), くらしき作陽大学 (COC 既採択校), 吉備国際大学 (COC 既採択校)
参加自治体	岡山県, 岡山市, 倉敷市, 笠岡市, 総社市, 備前市, 真庭市, 高梁市
参加企業等	岡山県経済団体連絡協議会, 岡山県商工会議所連合会, 岡山県経営者協会, 一般社団法人岡山経済同友会, 岡山県中小企業団体中央会, 岡山県商工会連合会, 岡山県産業振興財団, 中国銀行, トマト銀行, 岡山経済研究所, 山陽新聞社, 岡山 NPO センター



図 1. COC+事業の概要

2-9-2 教育の仕組み

副専攻「岡山創生学」は、学長の掲げる3つの運営方針の一つ「地域貢献について戦略的に取り組む」を、教育面で具現化したものである。副専攻「岡山創生学」では、共通教育科目内カテゴリー「社会連携」をさらに強化するとともに、各学部の学部教育科目とも連携しつつ地域連携教育を構築していく。

本COC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」は、若者の地元定着率の10%向上を目的として、教育改革、域学連携及び産学連携により地域を志向する人材の輩出とその受け皿づくりを行う。教育改革では、「岡山創生学」を副専攻として新設し、実践的な専門性と高い地域志向を有する人材の育成を図る。そのため、平成29年度より全学的な導入が決定しているクォーター制を活用し、長期インターンシップ、ボランティア等を実施する。域学連携では、自治体、NPO等と協働で子育て、高齢者・障害者支援等を実践し、住みやすく、安心安全で魅力ある地域づくりに貢献する。そして、協働機関との連携の場として「地域創生コモンズ」を設置・運営し、教育改革における地域演習科目実施を支援する。産学連携では、地場産業の支援による産業活性化を推進し、魅力的な雇用創出に努めるとともに、雇用マッチングシステムを開発することで雇用開拓と若者の地域への就業機会を拡

大し、学生の県内定着を促進する。

本 COC+事業は、表 1 に示す事業協働機関との連携の下、図 1 に示す実施体制により組織される。

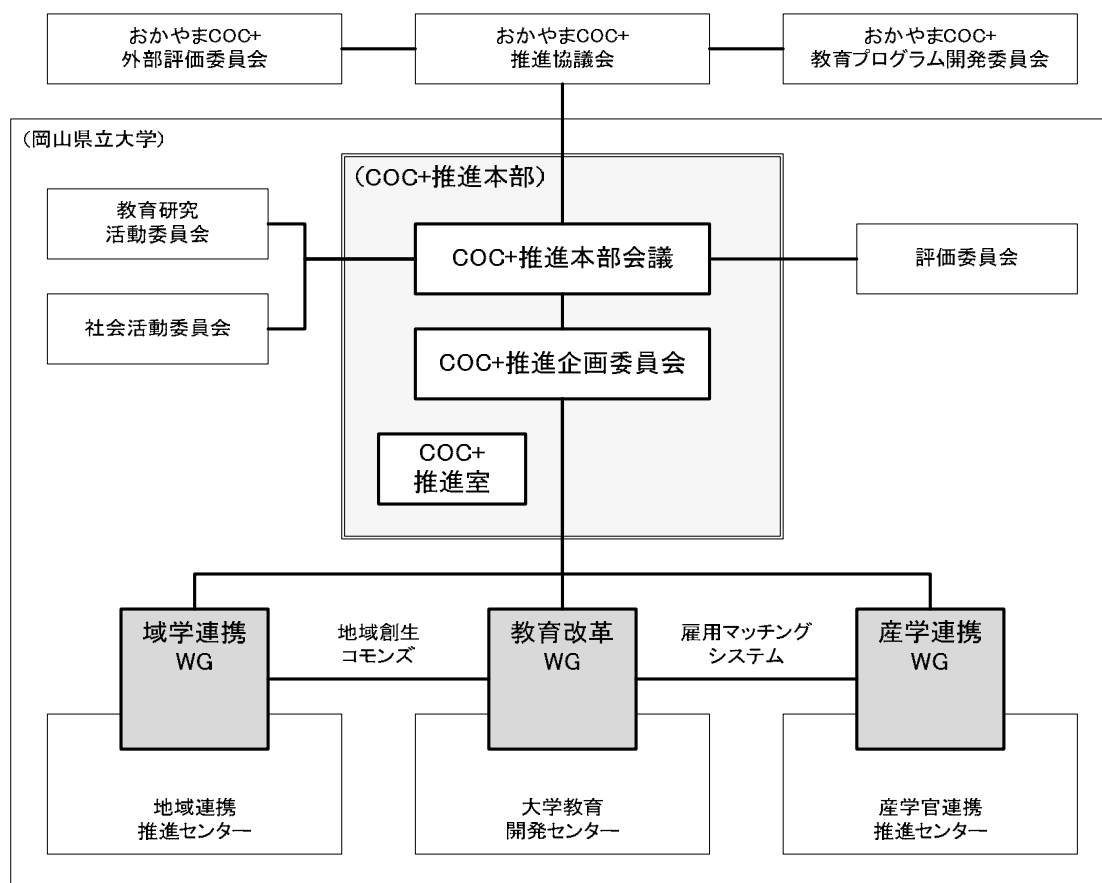


図 2. COC+実施体制

本 COC+事業における教育改革の概要は、次のとおりである。

a. 「岡山創生学」科目群の開設

本学では、地域を志向する教育プログラムとして、「岡山創生学」科目群を新設する。本科目群は基礎と実践に大別され、基礎科目では、地域を知るために、社会連携に繋がる基礎知識や岡山県の地域政策等を学ぶ。実践科目では、地域学習の場である「地域創生コモンズ」を拠点とし、アクション・ラーニングを通して学ぶ。

b. クォーター制を活用した長期インターンシップシステムの開発

本学が平成 29 年度に導入するクォーター制を活用し、自治体、企業等に向けた、実施方法や評価方法、事前・最中・事後の学生指導をシステム化した「長期インターンシップ」(1 ヶ月以上)を高年次に開設する。

c. 「岡山創生学」科目群を実効性あるものにするための方策

「岡山創生学」科目群の学びを副専攻と位置付ける。また、学生一人一人の学修過程を教

員が指導できるように「学生ポートフォリオ」を導入する。

これらの教育改革は、COC+推進本部（COC+推進企画委員会）の下に設置された教育改革 WG を主体として企画立案され、共通教育部及び各学部において実施される。教育改革 WG の所掌業務は、

- 本学が進める副専攻「岡山創生学」の開発に関すること
- 本学が進める学生ポートフォリオの開発等のキャリア形成支援に関すること

と定められている。教育改革 WG は、大学教育開発センターと直結し、

- 大学教育開発センター・副センター長（WG 長）
- 大学教育開発センター・共通教育部会長（副 WG 長）
- 大学教育開発センター・キャリア形成支援部会長
- 共通教育部・社会連携教育推進室長
- 本学教員
- COC+推進室副室長
- COC+推進室員

を構成員としている。なお、平成 29 年度からは、本 COC+事業で設置された 3 つの WG の機能と連携を強化するため、各センターのセンター長が WG 長の任に当たるよう規約の改正が行われた。

2-9-3 授業の構築

今年度において、共通教育科目内のカテゴリー「社会連携」として、必修科目である「おokayama ボランティア論」（従来の「地域ボランティア論」を名称変更し、内容を強化）及び「おokayama を学ぶ」（従来の「少子高齢社会論」を名称変更し、内容を強化）、選択科目である「おokayama ボランティア演習」、「企業の組織と活動」、「起業の条件」、「地方自治論」について開講した。前述の通り、「おokayama ボランティア論」、「おokayama ボランティア演習」及び「おokayama を学ぶ」は副専攻「岡山創生学」授業科目としての開講となる。

2-9-4 育成する人材像と修得すべき能力

副専攻「岡山創生学」では、学びの中で地域の魅力に触れ、コミュニケーションや協働の中で地域課題を認識し、ともにその解決までのプロセスを体験することで地域への愛着の形成や共感力を高め、それを基盤として専門性を存分に発揮して地域の持続的発展のために貢献することができ、社会の変化に対して高い適応能力をもつ人材を育てるものである。このような人材になるために修得すべき能力を次のように設定する。

- (1) 地域「おokayama」の実態を体験的に学び、「おokayama」の魅力を発信する力
- (2) 実践的学習の中からアクション・ラーニングのプロセスを通じて課題を認識する力
- (3) 地域で人とコミュニケーションを取りながら協働して課題解決に取り組む力

- (4) 学部・学科の専門性を活かし、自立的に課題解決法を考える応用力
- (5) 持続可能な地域「おかやま」の未来を展望し、一市民としてまた専門家として社会に参画する力

2-9-5 教育プログラムの内容

副専攻「岡山創生学」では、低年次に「おかやま」の魅力と課題を学ぶ地域志向基礎科目、高年次に地元就職を意識させる地域志向実践科目を配置して、事業協働地域への定着を図っている。本副専攻の教育プログラムを岡山県の代表農産物である“もも”の育成に模して、1年次に地域志向の動機を「知る（植え付け）」、2年次に各学部・学科の専門性を加味して「学ぶ（受粉）」、高年次により専門的な視点から「実践（摘果）」の3段階に分け、卒業時に「収穫・出荷」できるようなイメージで設計している。

1. 1年次では、地域「おかやま」を知り、地域と協働するための準備をする授業科目を配置している。岡山を中心とした地域の現状とグローバル化の中にある岡山の位置付けを知識として学び、地域に住む様々な人と接するために、現代社会で求められるボランティアなどを通して、また、大学生と社会の接点の現状やありかたについての学びを通して、地域志向を植え付ける。
2. 2年次では、地域「おかやま」の課題を、学外における協働を通して発見し、解決に向けた取組を実践する授業科目を配置している。学部・学科の専門性にとらわれることなく地域社会を見つめる冷静な観察眼を習得するだけでなく、入学後に学んだ専門性を受粉させ、専門の学びが、どのように地域課題の解決に役立てられるかを自立的に考える。
3. 3年次では、より専門的な視点から地域「おかやま」の課題を見つめ直し、自己のキャリア形成を支援する授業科目を配置している。地方自治や企業活動の仕組み、地域社会における自己の役割認識を涵養する学びの後、長期インターンシップを通して、より実践的な地域協働を体験することで、専門性による摘果を行う。
4. 教育課程は共通教育科目と学部教育科目から厳選された授業科目から構成され、また、講義科目での学びの後に演習科目を配置することで、実学としての地域協働を涵養する。

前述した「修得すべき能力」を学修させるために、「岡山創生学」科目群は、平成27年度入学生から全学科必修科目として開設している共通教育科目「地域ボランティア論」、「少子高齢社会論」の内容を強化し、新設する5科目を加えた計12科目で教育プログラムを構築している。各科目の開講計画を表2に、各授業科目の相互関係を示すカリキュラムマップを図2に示す。このうち、「おかやまボランティア論」は今年度より開設した「地域ボランティア論」を名称変更及び内容見直しをしたものであり、同様に、「おかやまを学ぶ」は「少子高齢社会論」の後継科目である。副専攻「岡山創生学」としては、共通教育科目として「おかやまボランティア演習」、「地域再生実践論」、「地域協働演習」を、情報工学部の学部教育科目として「エンジニアリング演習」を新設する。

なお,当初より,学部教育科目あるいはCOC+参加大学製作の授業コンテンツを今後,順次追加していく予定としていることであるが,今年度入学生以降,保健福祉学部で既に開講されている「統合実習」,「公衆栄養学実習Ⅰ」,「公衆栄養学実習Ⅱ」,「ソーシャルワーク実習」及び「保育実習ⅠB」の中から2単位以上を取得すれば,副専攻「岡山創生学」の学部教育科目として2単位を修得したものとすることになった(表2欄外※印部分が今年度以降入学生に追記される)。また,平成29年度入学生より,保健福祉学部の学部教育科目として「地域保健福祉演習」(演習1単位)が追加されることとなっている。

表2.「岡山創生学」授業科目表(平成28年度入学生)

区分	授業科目名	授業の方法	開講時間数	開講単位数	開講年次				必要単位数
					1	2	3	4	
共通教育	おかやまボランティア論	講義	15	1	◎				6単位
	おかやまボランティア演習	演習	30	1	◎				
	おかやまを学ぶ	講義	15	1	◎				
	地域再生実践論	講義	15	1		◎			
	地域協働演習	演習	60	2		◎			
	地方自治論	講義	30	2			○		4単位
	地域インターンシップ	演習	120	4			○◆		
	企業の組織と活動	講義	15	1			○		
	起業の条件	講義	15	1			○		
学部教育	チームガバナビリティ演習	演習	30	1			○◆		
	エンジニアリング演習	演習	120	4			○◆		
	デザインプロジェクト演習	演習	120	4			○◆		

【注】 ◆印で示される授業科目を1科目以上修得すること。

※ 保健福祉学部で既に開講されている「統合実習」,「公衆栄養学実習Ⅰ」,「公衆栄養学実習Ⅱ」,「ソーシャルワーク実習」及び「保育実習ⅠB」の中から2単位以上を取得すれば,必要単位数の中から2単位を修得したものとすること。

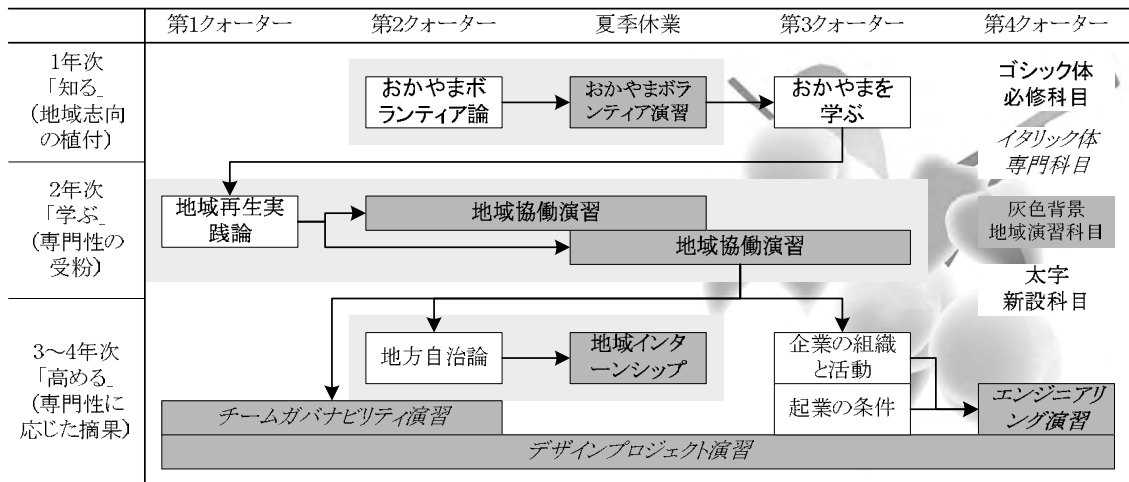


図 3. 「岡山創生学」カリキュラムマップ

2-9-6 実施状況

今年度は、副専攻「岡山創生学」科目として3科目（「おかやまボランティア論」，「おかやまボランティア演習」，「おかやまを学ぶ」），従来の社会連携カテゴリ科目として3科目（「企業の組織と活動」，「起業の条件」，「地方自治論」）を開講した。なお、後者3科目は、平成30年度からは副専攻「岡山創生学」科目としての開講となる。

①「おかやまボランティア論」前後期・全学1年次生・1単位（必修）

平成27年度に開講された「地域ボランティア論」（1年次生・1単位必修科目）の名称変更と内容強化を行うようデザインした授業科目である。今年度は副専攻「岡山創生学」の最初の授業科目として開講したことから、本COC+事業との関連性、ボランティア活動の意義安堵を、初回講義において丁寧に説明した。2回目以降の講義では、本学3学部の特長も踏まえ、主に県内の様々なボランティア活動者及びNPO法人で活躍している活動者をゲストスピーカーとして招聘し、各々の活動内容の説明を聞いた後、COC+推進室コーディネーターの協力の下、学生の質疑を受けながら担当教員との対談を行うものであった。特に、今年度は、②で述べる「おかやまボランティア演習」における活動先に関連する内容を中心とするテーマとした。学生個々にとっては、興味が湧く内容と、必ずしもそうでない内容があったように見受けられるが、全体的には、それぞれのゲストスピーカーから多くのことを学びとれたことが、講義ごとのコメントシートから伺い知ることができた。

今年度のゲストスピーカーと各講義でのテーマは以下の通りである（登壇順）。

- (1) 総社市福祉協議会「総社市内における住民活動」
- (2) NPO法人・KUKKA「倉敷市における居場所活動」
- (3) 認定NPO法人・子ども劇場笠岡センター「子供の遊び支援」
- (4) NPO法人・音楽の砦「音楽と社会貢献」

(5) 認定 NPO 法人・おかもやまエネルギーの未来を考える会「おかもやまのエネルギーのミライ ト NPO 活動」

(6) NPO 法人・ハートアートリンク「アートと地域の活性化（笠岡諸島での取組）」

②「おかもやまボランティア演習」通年（主に夏季休業中）・全学 1 年次生・1 単位（選択）

副専攻「岡山創生学」科目として今年度から新設された演習科目である。前後期に必修科目として開講された「おかもやまボランティア論」における学びを、フィールドワークにより学生自身が確認し、体験することを目的としている。学生は最大で 5 名のグループに分かれ、7 月 30 日（土）の事前学習（グループの顔合わせと活動目標の設定）の後、協定を締結している 4 市（総社市、笠岡市、備前市、真庭市）及び岡山市、倉敷市、早島町において、8 月～10 月初旬の期間内で各活動先、グループごとに 3 日間のフィールドワークを実施した。各活動先における活動概要と受入実績数を表 3 に示す。今年度は、1 年次生 102 名に加え、過年次生 17 名の総勢 119 名の学生が、フィールドワークに取り組んだ。そして、活動報告を含む事後学習が 10 月 8 日（土）に開催された。

表 3. 「おかもやまボランティア演習」活動受入先と実績

主な活動場所	活動先	活動概要	参加者数
総社市	NPO 法人 総社商店街筋の古民家を活用する会	小中学生の学習支援	21
真庭市	NPO 法人 勝山・町並み委員会	クラフト市の手伝い	9
笠岡市	認定 NPO 法人 子ども劇場笠岡センター	子ども、お年寄り支援	15
倉敷市	NPO 法人 KUKKA	不登校児の居場所支援	6
岡山市	NPO 法人 岡山子どもセンター	子どもの遊び支援	17
岡山市	NPO 法人 岡山 NPO センター	NPO 支援	4
岡山市	認定 NPO 法人 おかもやまエネルギーの未来を考える会	エネルギーを考える	4
総社市	総社市服部地区社会福祉協議会	服部地区での活動	11
備前市	備前市片上地区支え合いの会	片上地区住民との交流	12
笠岡市	笠岡市社会福祉協議会	福祉活動	12
早島町	早島町社会福祉協議会	地区活動	8
		合計	119



事前学習では、活動グループの顔合わせと活動目標の設定を行った。



活動の様子

③「おかやまを学ぶ」後前期・全学1年次生・1単位（必修）

本科目は、前後期の「おかやまボランティア論」と同様に、平成27年度に開講された「少子高齢社会論」（1年次生・1単位必修科目）の名称変更と、副専攻「岡山創生学」に即した内容強化を行った授業科目である。少子高齢化に代表される県内課題が地域経済、社会福祉に与える影響を行政担当者及び本学教員から学び、地域の魅力を知り、地域志向への意識を持てるための学習を行った。特に、今年度は、

- (1) 連携自治体（総社市・備前市・笠岡市・真庭市）の地理、産業、政策等の取組について理

解する。

- (2) 岡山の福祉・医療・教育を歴史的背景から理解を深める。
- (3) 自分達の住んでいる地域や課題に関心を持ち、地域社会の活性化について、多角的な視点で考察できる。

ことを目的とし、表 4 に示すテーマで開講した。

表 4. 講義の概要

回	担当	テーマ
1	本学教員	統計学的観点から見た世界・日本・岡山県の人口動態と小子高齢化
2	本学教員	岡山の福祉医療の歴史
3	総社市	働くことってどんなこと
4	備前市	備前焼, その歴史から学ぶもの
5	真庭市	地域資源を生かした元気なまちづくり
6	笠岡市	海と生きる～島と大地と兜蟹と
7	閑谷学校	閑谷学校の歴史に学ぶ
8	本学教員	おかやまを元気にするための提案

④「企業の組織と活動」前期・1単位（選択）

企業とはどういうものか、その組織と活動から働くことの意味等、役員クラスの 3 名のオムニバス方式で講義を進めた。講義の感想レポートと出席で評価している。学生からは、琴線にふれる内容で感動した旨の感想も多い。

⑤「起業の条件」前期・1単位（選択）

講義内容については、起業のために必要な知識（ベンチャー立上げとその持続及び知的財産）の修得を目的としており、その目的に沿った内容になっている。授業アンケートを通じた評価は高く、有意義な講義を実施していると判断される。授業担当者として、実務経験者 2 名を非常勤講師としている。これは本授業の目的から、実務経験者が最適であり、今後も非常勤雇用の継続が望ましいと考える。履修学生は、デザイン学部と情報工学部の学生である。将来、起業の可能性がある学生は、極めて熱心に受講している。

⑥「地方自治論」後期・2単位（選択）

平成 30 年度から副専攻「岡山創生学」科目となることを見据え、今年度は、地方自治体における喫緊の課題である地方創生について、岡山県の状況を中心に考察する機会としてとらえ、行政サービスを提供する側、受ける側の観点から、それぞれの責任と役割を考える契機となるようにした。講義では、住民に最も身近な行政主体であり、住民の社会・経済生活に対し、重要な役割を担っている地方自治の仕組みや制度、地方自治体の活動、住民の役割等について理解を深め、地方自治の現状と課題、あるべき姿などについて考察することを目標とした。

2-9-7 副専攻「岡山創生学」授業終了後アンケート結果

4-3-3 項で説明した副専攻「岡山創生学」3 科目（「おかやまボランティア論」, 「おかや

まボランティア演習」,「おかやまを学ぶ」)では,副専攻「岡山創生学」が育成目標として
 いる「修得すべき能力」5項目(4-3-1項を参照)に関連した設問に対し,記名式アンケート
 を通じて,学生自身がどの程度の認識,理解をすることができたかを自己評価させた.4-3-1
 項に示す5項目(1)~(5)に対応して,次の[A]~[E]の問いを設けた.

[A] (3科目共通)

地域社会には,様々な問題が潜んでいることについて視野を広げることができました
 か?

[B] (「おかやまボランティア論」,「おかやまボランティア演習」)

ボランティア活動,NPO活動に対する知識を得たり,その意義について理解を深めるこ
 とができましたか?

[B] (「おかやまを学ぶ」)

県内自治体の地理,歴史,産業,政策などの取組について知識を得たり,その意義につい
 て理解を深めることができましたか?

[C] (「おかやまボランティア論」,「おかやまを学ぶ」)

課題解決に向けて,様々な人とコミュニケーションを取りながら協働することの重要
 性を確認することができましたか?

[C] (「おかやまボランティア演習」)

課題解決に向けて,様々な人とコミュニケーションを取りながら共に活動することが
 できましたか?

[D] (3科目共通)

地域社会の身近な問題に対し,課題解決法を自ら考えたり,支援しようという意識は生
 まれましたか?

[E] (3科目共通)

社会の一員として社会活動に参画する必要性を認識できましたか?

各設問5段階(1を否定的,5を肯定的として回答)による自己評価の結果(平均値±標準偏
 差)を次に示す.

授業科目	ボランティア論	ボランティア演習
データ数	403	107
[A] 地域課題への視野の広がり	4.16±0.69	4.49±0.59
[B] 地域やボランティアへの知識,理解	4.26±0.67	4.59±0.53
[C] 問題解決への協働の意識	4.30±0.84	4.63±0.69
[D] 地域課題への自助支援	4.00±0.84	4.41±0.61
[E] 社会参画への必要性	4.24±0.78	4.52±0.57

授業科目	おかやまを学ぶ		
	(全体)	(ボラ演履修)	(ボラ演未履修)
データ数	392	98	294
[A] 地域課題への視野の広がり	4.21±0.74	4.19±0.67	4.21±0.50
[B] 地域やボランティアへの知識, 理解	4.16±0.74	4.25±0.55	4.13±0.55
[C] 問題解決への協働の意識	4.14±0.82	4.22±0.62	4.11±0.70
[D] 地域課題への自助支援	4.04±0.86	3.97±0.87	4.07±0.69
[E] 社会参画への必要性	4.26±0.76	4.28±0.51	4.25±0.59

「おかやまボランティア演習」(8月～10月に実施)の結果は、これに先立つ前後期に開講された「おかやまボランティア論」の結果より、全設問において上昇している。これは、「おかやまボランティア演習」が選択科目であり、元来、ボランティア意識や地域志向が高い学生が履修していると考えられるとともに、フィールドワークを通じて、座学では学ぶことのできない深い学びを実践することができたためと考えている。

一方、「おかやまボランティア演習」の後、後前期に開講された「おかやまを学ぶ」の結果では、設問[A], [D]に対して「おかやまボランティア演習」履修者のほうが低い結果となっている。これは、フィールドワークの実践を通して、座学では得ることのできない地域課題を発見し、その複雑さを体験したことにより、自己の持つ地域課題へのイメージが不十分であったことへの自己反省によるものと捉えられる。他の設問[B], [C], [E]に対しては、「おかやまボランティア演習」履修者のほうが高い結果となっており、フィールドワークによる効果が出ているものと思われる。

なお、3科目のうち、「おかやまボランティア演習」の結果が最も高くなっており、地域志向に向けたフィールドワークの重要性を、あらためて認識できるものとなった。

2-9-8 まとめと課題

今年度は、前年度に選定されたCOC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」に基づいて設置された副専攻「岡山創生学」の初年度であった。平成27年度入学生から1年次生必修科目として開講された「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」を、副専攻「岡山創生学」の理念に沿うように強化して、それぞれ「おかやまボランティア論」及び「おかやまを学ぶ」として開講した。また、フィールドワークを伴う「おかやまボランティア演習」を新規開講し、「おかやまボランティア論」の学びを確認、実践することで、学生の地域創生に向けた学びをより強固なものとした。今年度における副専攻「岡山創生学」の学修成果として、2月に開催された「おかやまCOC+シンポジウム2017」、あるいは、3月に開催された「地域創生コモンズかさおか」開所イベントにおいて、1年次生がパネリストとして登壇、発表をするまでに成長できた。

また、6月には、ジェネリックスキル(リテラシー及びコンピテンシー)を定量的に評価す

る PROG テストを全 1 年次生（平成 28 年度入学生）が受験した。2 年後の平成 30 年度に再び PROG テストを平成 28 年度入学生全員が受験できる機会を設け、副専攻「岡山創生学」による学修効果を測定することとしている。

今年度の成果を踏まえ、平成 29 年度に向けた課題として、例えば、以下のものが挙げられる。

- (1) 1 年次対象科目「おかやまボランティア論」、「おかやまボランティア演習」、「おかやまを学ぶ」の連携を強め、副専攻「岡山創生学」の教育方針により即した授業内容を検討する。
- (2) 2 年次生対象の「地域再生実践論」、「地域協働演習」の学修成果を分析し、共通教育科目としての副専攻「岡山創生学」にける位置付けを、より明確にする。
- (3) 3 年次生対象として平成 30 年度に開講される「地域インターンシップ」など、自治体、県内企業における長期インターンシップを含む授業科目を適切に設計するためには、域学連携 WG、産学連携 WG との協働が必須であり、今まで以上に密な連携が求められる。
- (4) 各授業科目及び副専攻「岡山創生学」を通じた評価方法を確立させる必要がある。
- (5) 副専攻「岡山創生学」授業科目及び正課外活動を通じた学生のキャリア形成、社会人基礎力・学士力を涵養する学内教育システムを構築しなければならない。



「おかやま COC+シンポジウム 2017」にて登壇



「地域創生コモンズかさおか」開所イベントにて発表

2-10 まとめと課題

本年度のセンター活動の部会担当部分は、昨年同様、特に制約をかけずに各部会それぞれ比較的自由に記述が行われた。大学教育開発センターの部会の幾つかは、もう少し規模の大きな大学であれば単独のセンターとして運営されていることも少なくなく、特性の異なる各部会の記述を単一のフォーマットに収められるかどうかは未だ検討の余地がある。また、一方では各部会の記述量のバランスもあり、その制限によって部会の書き込みや解析結果の紹介が意を尽くせていないケースもあるように見受けられる。

来年度から現在の部会データの幾つかはファクトブックに移行する可能性がある。そのため、新フォーマットでの導入が予測される中で、本年敢えてフォーマットを統一することは非効率になる可能性があるため、本年度は従前の通りとした。

部会の業務も平成29年度からの全学情報システムの導入によって、今より更に定量的になること、また部会間の連携作業も新たに生じてくると考えられる。より見やすく分かりやすい形を目指して検討を続けたい

3 教育力向上支援事業

3-1 目的

本学の教育力向上支援事業は大学全体や学部・学科等の人材養成の目的, 学生に身につけさせるべき学修成果を明確にし, 教育活動の成果として, 本学が学生に保証する基本的な資質を身に付けた人材を輩出し, 社会の信頼に応えるため, 教育の充実・質の向上及び教員の教育力の向上に直接結びつく調査並びに実践活動に助成費を交付する事業である。

平成 28 年度事業における支援対象は共通(教養)教育の改革推進, 学部教育及び大学院教育の改革推進, 高大接続・入学者選抜の方法及びキャリア形成支援, ならびに教員の教育力向上・開発に関するものとした。申請書の審査にあたっては, 前年度に引き続き学生部長・各学部長・共通教育部長・大学教育開発センター長ならびに教学課の協働による体制とし, 採択に向けた作業を行った(21 件・採択は平成 27 年度)。平成 29 年度事業についても平成 28 年 11 月に, 同様の体制で審査を行ったが, 一部取扱要綱の修正があった。

3-2 本年度実施事業及び来年度実施予定事業

(1) 平成 28 年度教育力向上支援事業一覧

平成 28 年度において採択・実施された教育力向上支援事業は以下のとおり。

平成 28 年度 教育力向上支援事業 採択事業一覧 (全 21 事業)

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額 (千円)
保健福祉学部 看護学科	高橋 幸子	e-ラーニングを使った授業内・授業外の英語学習の構築	310
デザイン学部 デザイン工学科	朴 貞淑	キャリアアップにつながる実践的韓国語学習支援	250
保健福祉学部 栄養学科	新田 陽子	韓国食文化を通じたグローバル化教育の推進と教育力向上・開発	550
デザイン学部 デザイン工学科	岩本 弘光	建築・デザイン海外研修による国際交流と建築・教養教育の充実 3	1300
保健福祉学部 栄養学科	岸本 妙子	共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる管理栄養士養成プログラムの開発	300
情報工学部 情報システム工学科	石井 裕	ビブリオバトルによる読書推進とコミュニケーション能力向上プログラム開発	100

情報工学部 人間情報工学科	高戸 仁郎	地域資源を活用したスポーツ授業の 開発と効果検証	300
保健福祉学部 保健福祉学科	中村 光	岡山県立大学に適合した保健・医療・ 福祉の多専門職連携教育プログラムの 開発	740
情報工学部 人間情報工学科	井上 貴浩	実用的課題の実験科目への導入とメ カトロ教育への実践	720
情報工学部 人間情報工学科	瀬島 吉裕	機械系科目の接続を考慮した学習教 材の開発	480
デザイン学部 デザイン工学科	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用 した実践型創造力創出教育プログラ ムの開発	400
デザイン学部 デザイン工学科	金丸 敏彦	ものづくり工房運営についての調査 研究 4	450
デザイン学部 造形デザイン学科	齋藤 美絵子	情報工学部・デザイン学部 合同によ る協働教育プログラムの実践	400
大学教育開発センター アドミッション部会	高橋 吉孝	高校生のための大学授業開放	970
大学教育開発センター キャリア形成支援部会	山下 広美	キャリア形成支援を目的とする教育 体制整備に関する調査研究	750
デザイン学部 造形デザイン学科	野宮 謙吾	大学間連携によるキャリア教育プロ グラムの実践	300
保健福祉学部 保健福祉学科	佐藤 和順	リアリティショックを克服し就業継 続できる力量を有した保育者養成の プログラム開発	400
デザイン学部 造形デザイン学科	樫尾 聡美	学外文化施設との連携によるキャリ ア形成への取り組み	500
デザイン学部 造形デザイン学科	島田 清徳	ワークショップを活用した学生のキ ャリア形成プログラム	250
デザイン学部 造形デザイン学科	山下 万吉	キャリア形成支援のためのポートフ ォリオセミナー及び企画提案力向上 を目的とした教育プログラムの実施	300
情報工学部 人間情報工学科 (学生相談室)	迫 明仁	学生相談室業務の機能向上と情報発 信のための環境整備	500
		計 (千円)	10,270

(2) 平成 28 年度教育力向上支援事業の概要と成果

ア 共通（教養）教育の改革推進に関わる取組

共通教育【語学教育】新規

事業名	e-ラーニングを使った授業内・授業外の英語学習の構築
代表者	氏名 高橋幸子（看護学科）
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聴く」「読む」「書く」「話す」の4技能の強化に焦点を当て、カリキュラムの体系化を促進する。 ・学仕様の英語プログラムをより効率的かつ効果的に運用し、学習の質を担保できるように改善する。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師が教室において実施する授業内活動に加えて、学習者が自主的に行う e-ラーニング教材を使った授業外活動を展開した。 ・申請の代表者、杉村教授、南津講師、風早講師の専任教員を中心として、語学教育推進室のスタッフと英語担当教員が総力を挙げて、事業に取り組んだ。 ・末岡教授は語学教育推進室長として、本プログラムに関する適切な助言と管理を行った。 ・授業展開に加えて、学年度初めと終わりに学習者に対する意識調査を行った。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・「英会話の抜本的な改革と体系化」を継続し、さらに発展させることによって、学生は、授業内での教師との相互活動に加え、授業外での e-ラーニングによって学習を継続することができた。（教育年報・語学教育推進室報告参照） ・英語関連の学会の全国大会で、成果の一部を発表した。 高橋幸子・宮永千恵子 From EAP to ESP: Cases at two public universities. 9月3日, The JACET 55th (2016) International Convention. 於：北星学園大学 ・大学教育研究センター発行の紀要において、全学平成 28 年度入学生を対象とした学習者ビリーフを調査した報告書を発表した（予定）。 ・英語カリキュラムにおける学習者ビリーフの変化を測るため、上記の結果に加えて、平成 28 年度末の調査も行い、2017 OPU フォーラムにて結果発表予定である。
課題等	<p>総括：</p> <p>e-ラーニング教材を使った授業内・授業外での英語学習は次年度も継続していく。時代の変化に対応していく必要があるため、今後も、岡山県立大学に入学してくる学生の英語学習に対する意識調査をする必要性がある。</p>

共通教育【語学教育】継続

事業名	キャリアアップにつながる実践的韓国語学習支援
代表者	朴 貞淑 (デザイン工学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <p>国際化の進展と共に日韓両国間ではヒトやモノ, 情報の流れが広がり続けており韓国語を駆使できる人材が求められている. 使える役に立つ実践的な韓国語を目指して, 日韓の架け橋となるコミュニケーション能力を身に付ける学生のスキルアップを図るとともにグローバル人材を育成する.</p> <p>(概要)</p> <p>学生らが韓国語のコミュニケーション能力を身に付ける基礎力やモチベーションの向上を図り, 学生のキャリアアップによりグローバル人材を育成する. 学生のレベルに応じた段階的学習を導入し, 韓国語能力試験 (TOPIK) の合格に向けたコミュニケーション能力を向上させる.</p> <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2016 年度は, 韓国語能力試験 (TOPIK) 2 級に向けた集中的な語学研修を行った. (2 級は日常生活に必要な言語や公式的・非公式的な状況かの言語を区分し, 使用できるレベルである.) ・ 2016 年度より, 韓国語スピーチ部門を設け, 韓国語の発表を行った. (語学教育推進室主催のスピーカーズ・コーナー ; 11 月 5 日実施) ・ 国際交流センターの「韓国語村」と連携して, 毎週木曜日に, 韓国語の基礎力やモチベーションの向上, コミュニケーション能力の向上を図る場を設けている.
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 韓国語能力試験 (TOPIK) 2 級に, 2 名が合格した. なお, 1 人はリスニング満点であった. ・ 初めて韓国語スピーチ部門が設けられ, 学生 2 名が発表を行った. ・ 「韓国語村」と連携して毎週木曜日, 韓国語及び韓国文化の交流の場を設け, 多くの学生が参加した. ・ 2015 年度卒業生の 1 名が, 企業の韓国語担当部門へ就職(2016 年 10 月より)が決まり, 現在, 韓国語担当者として活躍していることから, 在学生へ韓国語を学ぶ動機付けとなった.
課題等	<p>今までの成果をふまえて, 学生のキャリアアップにつながる実践韓国語を身につける学習支援を続ける. 特に, 既存の韓国語教育の現状と動向, 改善点などを抽出し, 分野横断的な韓国語のプログラムを再構築することで, 多くの成果がさらに期待できる.</p>

共通教育【グローバル教育】新規

事業名	韓国食文化を通じたグローバル化教育の推進と教育力向上・開発
代表者	新田陽子（栄養学科）
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・韓国の又松（ウソン）大学校に出向き、学生とともに韓国の伝統料理等を調理実習で学ぶ。 ・韓国での実習により、グローバル化教育の推進と教員の教育力向上を目指す。
	<p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソウル市内を観光し、南大門や市場を見学 ・ソウル市内での韓国冷麺などの食体験 ・又松（ウソン）大学校調理室での4種類のキムチづくり ・又松（ウソン）大学校調理室での韓国伝統料理の英語での実習 ・又松（ウソン）大学校調理室での多国籍料理の英語での実習
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国の食文化を現地で体験学習できた。 ・韓国の伝統料理を現地のシェフから英語で学習できた。 ・韓国以外の国の家庭料理も現地のシェフから英語で学習できた。 ・本学での調理実習Ⅰに、学んだ料理を元にした韓国料理の回を設けることができた。 ・学生は韓国食文化を学ぶと同時に、英語でのコミュニケーションスキルを高めることができた。 ・今回の説明は韓国語ではなく英語であったが、英語は徐々に理解できたという学生が多く、今後も英語での講義が望ましいと考える。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・次回も今回と同じ形式（英語で韓国料理を学ぶ）が望ましく、又松（ウソン）大学校の都合に合わせて夏休み時期に集中して実習を行うとよい。 ・募集人数は、実習室や講師の確保の観点から学生12名を上限にするのがよい。 ・本学での調理実習Ⅰに韓国料理の回を定着させていけば、グローバル化教育の推進にもつながると考える。

共通・専門教育【グローバル教育】継続

事業名	建築・デザイン海外研修による国際交流と建築・教養教育の充実3
代表者	岩本弘光（デザイン工学科）

<p>目的及び 活動概要</p>	<p>(目的) 本事業は本学の基本方針である、「国際交流推進」と「建築・教養教育の充実」にむけた効果的な教育プログラムの継続と実践を目的とする。これには本校学徒の局地的な意識世界を広げ、国際交流推進の障害である「心のバリアー」を取り除き、次いで、建築・デザインを自律的に学ぼうとする「モチベーション」の向上を成果目標としている。</p> <p>(活動概要) 事業を研修前, 研修中, 研修後に分けて計画準備した後にプログラムを実行した。</p> <p>I. 研修前：訪問地デンマーク, スウェーデン, フィンランドの「建築・都市」について研修前講義を実施した。安全管理のため教職一体で安全講習会を実施した。「資料集」を学生が自主制作した。</p> <p>II. 研修中：平成 28 年 9 月 2 日から同年 9 月 11 日まで 10 日間の日程で, 学生 16 名 (男性 2 名・女性 14 名), 常勤教員 1 名, 非常勤教員 1 名の合計 18 名が参加した。参加学生 16 名中 7 名は海外旅行初体験であったが, 次第に異文化に慣れ親しみ自由に行動できた。</p> <p>自由研修日はグループ行動により国際交流を推進した。</p> <p>III. 研修後：「研修記」を学生が自主制作した。また, 学生アンケートを実施して, 自己評価と次年度研修の参考資料とした。</p>
<p>成果</p>	<p>第 3 回目ヨーロッパ海外研修をプログラムとした本事業では, デンマーク, スウェーデン, フィンランドにおける 10 日間の研修を通じて, 学生が未知の異文化体験や異なる言語への不安を払拭しながら, 徐々に異文化への理解と寛容を育成していった様子が明らかであった。また, 海外の優れた建築が学生の根源的な知的好奇心を揺りおこし, 自律的な向学意欲を涵養できた。帰国後の講義における学生の多くの成果物には, 国際的な視点に立脚した学習成果の萌芽が顕著に現れており, 本事業の成功を確認できた。</p>
<p>課題等</p>	<p>デザイン教育, 特に建築教育にとって本プログラムの継続が必須である。学外, 異国での実体験に基づく, 帰国後の学習効果とモチベーションの顕著な向上は, 他の教育プログラムで得ることは困難である。</p> <p>こうした効果的な教育プログラムはカリキュラムに組み込んで, 単位化することが妥当であると思料する。</p>

共通・専門教育【グローバル教育】継続

<p>事業名</p>	<p>共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる管理栄養士養成プログラムの開発</p>
------------	--

代 表 者	岸本妙子 (栄養学科)
目的及び 活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル社会に対応できる異文化理解の進んだ管理栄養士を養成するための教育プログラムを開発する. ・共通教育科目での異文化理解についての学びと, 学部教育における調理関連の専門科目とを連携させることによる効果を検証する. <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハラール食に関する食育教材とその中で使用する2種類の献立を改良し, 栄養学科2年次生(43名)対象の「調理学実習Ⅱ」においてグループワークによる食育授業(1コマ, 90分)を実施した. ・共通教育科目「食糧を考える」において外部講師による「日本の地方社会のムスリム食事情とハラール食品ビジネスの二極化」と題した特別授業(90分)を実施した. ・イスラム教徒対応を想定して, インドネシアのハサヌディン大学においてハラール食対応に関する調理法及び食品保管等についての聞き取り調査を実施した.
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・共通教育科目「食糧を考える」での特別授業に受講生48名及び栄養学科生20名が聴講し, ハラール食品への理解を深めることができた. ・専門科目「調理学実習Ⅱ」では, 食材よりも調味料に不正解が多かった. また, 作成した食育教材の内容理解度を図るための授業後アンケートでは, 正解率が食材については90%以上だったものの, 醤油・味噌・酢・味醂については84%, ハラール食品を取り扱う際の調理行動については67%であった. ・ハラール食について認知度が高くなることは示されたが, 特別授業の受講の有無で食育教材の内容理解度に有意差は見られなかった.
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養学科生が1年次に「食生活論」や「食糧を考える」を履修して異文化理解を深め, 2年次に「調理学実習Ⅱ」で献立毎にハラール食対応を自ら考えて, 次に, 3年次でのハラール対応食による喫食経験を経て, 異文化や宗教上の違いへの理解を深めて互いの文化を尊重する姿勢を養い, 4年間に年次ごとの食育プログラムを実践することで有効な成果が見込まれることがこれまでの取組で示された. ・ハラール食品に関する特別授業を一度受けても, 食育教材の内容理解度の向上には必ずしも結びつかず, 適切な間隔を設けて継続的な複数回の食育を実施していくことが必要であることが示された.

共通教育【教養教育】新規

事業名	ビブリオバトルによる読書推進とコミュニケーション能力向上プログラム開発
代表者	石井 裕 (情報システム工学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力の向上のために、教養教育の場としてのビブリオバトル（書籍の紹介）を教育プログラムへ応用する。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学図書館での公開型ビブリオバトル実施 (4/26 新歓ビブリオ, 11/5 学祭ビブリオ) ・ビブリオバトル首都決戦・岡山地区予選会実施 (9/27), 地区決戦の共同実施 (11/19 就実大学, 環太平洋大学) ・教員間・学生間交流のための非公開型ビブリオバトル実施 (6/21) ・本と出会ってビブリオバトル (2/17) ・ラジオ FM ぐらしき 本紹介 (4/9, 5/14, 6/11, 7/9, 8/13, 9/10, 10/1, 1/28)
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業に関する企画のほとんどは任意団体 Okayama Bookworms (代表: 田本佳織理) の学生が主体となって実施されており, 学生の主体性の確立, 社会への参与の準備などの教育効果が得られていることを確信する. とくに首都決戦地区決戦では就実大学, 環太平洋大学との共同実施によって教員・学生間の交流があり, また, スポーツシステム工学科 3 年生長谷川大地君を中心とした FM ぐらしきでの本紹介では, 地域とのつながりが継続的に生まれている。 ・総社市インターンシップでの政策提言として, 情報システム工学科 3 年生の岡田龍人君が中高生向けビブリオバトルを提案し, 表彰された。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・首都決戦では, 従来本学から中国地区代表が選出されていたが, 本年度は残念ながら本学から選出されなかった. 中国地区代表は過去の首都決戦でも決勝に残れない状況であり, 更なるプレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力の向上へ期待がかかる。 ・今年度は地域の方とのビブリオバトルが開催できなかった. 今後, イベントなどの機会を使って, 早めに計画実施を検討したい。

共通教育【スポーツ教育】継続

事業名	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証
代表者	高戸仁郎 (人間情報工学科)

目的及び活動概要	(目的) <ul style="list-style-type: none"> ・学外の地域資源を活用した非日常的な空間での教育効果の高い授業計画を策定し, 実施, 評価までのプロセスを通して安全で効果的な教育プログラムを開発する.
	(活動概要) <ul style="list-style-type: none"> ・笠岡市白石島での教育プログラムを検討し, 海洋プログラム以外のアウトドアスポーツの候補として, オリエンテーリングを題材に指導案を作成した. ・集中授業が実施可能な活動場所の検討に加え, 宿泊等の受け入れ施設を選定するため, 笠岡市北木島町の北木島宿泊研修所にて受け入れ態勢, 教育プログラム等の調査を行った. ・本学の授業プログラム策定に資するため, 他大学の野外実習担当者にヒアリング調査を行い, 共通する事項を整理した.
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・白石島はオリエンテーリング協会公認のパーマネントコースを有しており, 一般向け大会に使用する初級から中級, 上級者まで対応するコース設定を確認した. スポーツ授業に必要な運動強度を十分に担保できるだけでなく, スポーツを通じた産業振興に関して学ぶ発展性を鑑み, 同種目を授業プログラムに取り入れることとした. ・北木島宿泊研修所は受け入れ可能人数には制限があるものの, 本事業で検討している集中授業の実施拠点として必要な機能を備えていた. 生活スペースは利用者共同で使用するため, 集団行動が苦手な学生に対する合理的な配慮が課題であることを確認した. ・研修所周辺に整備された歩道を有する散策コースもあり, グループ学習による活用の可能性を確認した. ・他大学の授業との共通事項として海洋スポーツにおける安全面での配慮と, 荒天時の代替プログラム案を確認した.
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の教育プログラムについては, 北木島-白石島間を移動しなければならず, 移動手段や時間について精査する必要がある. ・今後は現地 NPO 職員等と講義内容について協議を進め, 主体的な学習活動を促すとともに, スポーツ授業全体への共通した教育効果の評価法導入の可能性を明らかにする.

イ 学部教育の改革推進に関わる取組

学部教育【学科横断教育】継続

事業名	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発
代表者	中村 光 (保健福祉学部 保健福祉学科)

<p>目的及び活動概要</p>	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日の複雑化・高度化した医療・福祉の現場において不可欠な保健・医療・福祉に関わる多専門職の連携（interprofessional working: IPW）を実践的に教育するプログラムを開発する。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> 保健福祉学部 3 学科の 3 年次生を対象にした、「チームガバナビリティ演習」（選択, 1 単位）を開講した。 授業は、「IPW に関する講義」「IPW のためのチームビルディング演習」「クライアントとの交流」「病院実習」「成果報告会」から構成した。 プログラムの成果と課題について, OPU フォーラム及び国際会議 All Together Better Health-8 で報告した。
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> 16 名の学生（看護学科 3, 栄養学科 7, 保健福祉学科 6）が受講した。 学生の授業満足度は極めて高かった。例えば, 独自の授業評価アンケートへの回答は, 「この経験は自分にとって役立つものとなった＝平均 6.1 点」, 「この経験を通じて周囲の人から価値あるものを得た＝平均 6.0」, 「この経験は自分が属する専門職だけの学習に比べより良いものである＝平均 6.2」（いずれも最大値 7）であった。 国際会議等で本プログラムに関する情報発信と情報収集を行うことが出来た。
<p>課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 4 年間の取組期間中に大きな成果を上げたと総括している。 主な根拠として, 独自の授業評価アンケートに対する学生の回答がある。連携への意識に関する質問に対する回答は平均 4.9-5.6（最大値 6）であり, 連携へのポジティブな意識を涵養できた。授業への満足度に関する質問に対する回答は平均 5.8-6.4（最大値 7）であった。 ただし, 連携スキルの自己評価に関する回答からは, 自ら積極的に自身の意見を述べたり, チームをマネジメントすることに対する自己評価が低く, これらを促す取組が今後の課題である。 平成 30 年度からは副専攻「岡山創生学」の授業科目となるので, そのためのプログラムの改良と発展も課題である。

学部教育【学科基礎教育】継続

<p>事業名</p>	<p>実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践</p>
<p>代表者</p>	<p>井上貴浩（人間情報工学科）</p>

目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 27 年度に新学科名称となった人間情報工学科の教育プログラムを変更改善し, 学部 4 年間に於いて工学者としての基本的技術スキルや素養を身につけること 技術系や製造業をはじめ情報工学系企業における即戦力となる高度人材を輩出できる教育プログラムの基盤作り メカトロニクス関連課題の新規追加を含んだ教育プログラムの改善による教員の知識拡大 創造設計実験 I・II においてより実践的な新規課題を導入
	<p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> モータを駆動するためのドライバ回路の製作課題を導入した 自動機械(工業製品)の制御手法(モータ制御)を習得できる課題を導入 2 リンクロボットの手先軌道制御の実用的制御手法の習得 MATLAB/Simulink による制御系設計に関する課題の導入 ロボットの制御(PID, 限界感度法, 極配置法)のシミュレーション課題の導入
成果	<ul style="list-style-type: none"> C 言語プログラミングに対して興味を持つ学生が増えた 人間情報工学科での人材育成像が伝わったと同時に, 工学者マインドを持つ学生がわずかに増えた(技術系企業希望). ものづくりの基礎と応用において設計のみならず機械を動かす技術(制御)が一貫して不可欠であることを学んだ.
課題等	<p>実験授業であるためアクティブ・ラーニングを行うには適した授業であると言えるが, 新規課題の導入に注力したため設計や製作にかかわる学生の自由な発想を汲み取ることができなかった. 学生同士の活発な議論に加えて教員と学生間のコミュニケーションの場を設け, 課題に組み込むことが急務と考えられる.</p>

学部教育【学科基礎教育】新規

事業名	機械系科目の接続を考慮した学習教材の開発
代表者	瀬島 吉裕 (人間情報工学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> 人間中心の設計能力育成を目標として, 人間の周囲環境を構成するハードウェア(機械)設計を充実化 平成 29 年度の開講科目「設計製図演習 I」「設計製図演習 II」への拡充に対応

	<p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報系の学生にモノづくり（ハードウェア）に対する興味関心を促す取組として、視聴覚教材（DVD）による講義だけでなく、実際の機械加工（ボール盤加工や旋盤加工）を取り入れた。 ・自分で加工した穴を測定装置を用いて測定させ、モノづくりに必要な知識及び技能を体験的に学習させた。 ・日常生活に関連する素材（例えば、タオル掛けや自転車の車軸等）を設計題材として、強度計算に対する講義を実施した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・実機を用いた機械加工を取り入れることで、加工法や加工手順に関する知識が深まるとともに、加工手順を考慮した製図法への理解向上に寄与することができた。 ・日常生活に関連する素材にすることで、関連する機械系科目（とくに材料力学）の内容を、教科書の問題演習としてではなく、実問題としての設計に発展させることができた。 ・独自アンケートによるモノづくりや機械系科目に関する学生の意識調査を実施し、次年度以降の設計題材として反映させることができた。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のモノづくりでは、理論設計（シミュレーション）から試験的にモノを製作し、それを評価するというPDCAサイクルを回している。しかし、現状の学習教材では、設計仕様（基準）に基づく理論設計、いわゆる上流工程に留まっている。人間中心の設計思想を育成するには、上流から下流まで俯瞰的に捉える能力を養う必要がある。そこで、実際に設計したものを造形し、強度等を評価する仕組みを考案する等、作成した教材を実学的に発展させていく予定である。また、学習能力の評価法として、実際の技能試験問題を取り入れる予定である。

学部教育【学部知財教育】継続

事業名	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発
代表者	森下 眞行（デザイン工学科）
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <p>文部科学省が主催する「デザインパテントコンテスト」を活用した問題解決型教育（PBL）により、学生の知的財産権に対するマインドを向上し、地域社会や産業界に貢献できるデザイナーの育成を目的としている。成果目標は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. デザインパテントコンテスト参加による知的財産権マインド向上 2. 具体的なニーズに基づく実践的な課題設定力とアイデア創造力向上

	3. 産学連携による問題解決型授業による自発的な授業参画意識向上 (活動概要) 1. 平成 28 年度デザインパテントコンテスト応募 弁理士による事前講義とコンテスト応募の説明を行った。 2. 産官学連携授業 特別講義「地場をデザインする」 デザインを活用した地域振興プロデュースを全国で展開するハーズ 実験デザイン研究所代表の村田智明氏による特別講義を実施した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・「製品・情報デザイン演習Ⅲa」履修対象者 16 名の内 13 名が事前セミナーを受講, 2 名が応募し 1 名が優秀賞 (登録出願支援対象創作) に選ばれた. 山陽新聞 1 月 30 日版に本事業の成果が取り上げられた. ・村田氏の近年の具体事例を中心に紹介いただくことで, 学生がニーズに基づく課題設定力とアイデア創造力の実践的な向上に向けた意識醸成への取組を行うことができた.
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・コンテスト応募者が極端に少なかった. 理由としては, 夏季期間に, インターンシップ, 海外研修等に参加したため, 十分な時間が取れなかった. 夏季休暇期間中の大学の国際交流活動や地域貢献活動 (COC+) 活動が増加したため, 学生の応募に向けた準備時間の確保が課題になる. ・産学連携授業を通じた知財マインド向上と成果のバランス.

学部教育【学部工房教育】継続

事業名	ものづくり工房運営についての調査研究 4
代表者	金丸敏彦 (デザイン工学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アトリエ棟に所有している資産を有効に活用するための方法として施設紹介冊子の制作及び動画によるウェブアーカイブスを構築する. ・施設紹介冊子・ウェブアーカイブス資料等を使って, 学生のデザイン教育及びワークショップを行い, ものづくり工房の活用方法を探る. <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アトリエ棟にある機器の操作マニュアル冊子制作及び何処からもアクセス可能なウェブアーカイブの構築を行った. ・アトリエ棟設備を活用したワークショップを年間に通じて行なった. 成果を学外のコンペティションへ参加させる.

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・アトリエ棟施設紹介冊子制作を学生中心に行い, まだ, 作業等が分からない人たちに使いやすい構成とした. (資料 URL) https://drive.google.com/file/d/0B_HKm9rmMPVFcnLxbnLyVGHlMTA/view?usp=drive_web ・アトリエ棟設備を活用したワークショップにおいて制作した作品をコンペティションに出品し大学2年生が銀賞を受賞した. さらに, 受賞作品の商品化への準備を行っている. (ワークショップ成果: CERAMIC LIFE DESIGN AWARD 銀賞, デザイン工学科2年生松宮佳汰「ゆれるあかり, 香り」)
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・アトリエ棟工房を安全且つ有効活用するためには opu マイスター制度 (技能資格認定制度) を構築しなくてはならないと考える. 専門知識や技術を習得する認定制度を設け単位化する. 修了した学生は, マイスターとしてアトリエ棟の運営に関わることで, より良い作業環境を構築する. (年一度の更新制度とする) その制度により認定されたマイスターは, プライドを持ち授業補助やワークショップ等の指導にあたり, それによる報酬を受け取ることが出来るようにする. ・FabLab opu として, 定期的に小中学校, 高等学校及び一般の人々にワークショップを開催することにより地域貢献とする. 有料会員制度とすることが望ましい.

学部教育【学部横断教育】継続

事業名	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践
代表者	齋藤 美絵子 (造形デザイン学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイデアソンによる発想力の向上: 専攻の異なる学生が混在するチームで目的・目標を共有し課題に取り組むことで発想を豊かにし, その能力を向上させること. ・外部講師による応用力の強化: 実社会において公開されている事例を中心に, 実際の開発者から「企画」や「開発プロセス」などを解説いただき, 学生達が普段学んでいる専門基礎が応用展開するまでのつながりについて学ぶこと.

	<p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション：実施内容の説明. 外部講師紹介. 使用アプリケーション説明. 学部混合チーム分け. ・学外講師レクチャー&2days ワークショップ：講師による自身の作品解説及びデータ可視化についての講義. Processing チュートリアルに取り組む. チーム別練習課題制作と発表. ・1day ワークショップ：Processing によるデータ可視化の企画アイデアソン. 実装のための制作プロセス検討. ・チーム別作品制作（約1ヶ月半） ・成果発表会：学外講師及び参加者相互の合評.
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・チームによる企画及び制作において, 他分野の学生による相互の刺激があり, それぞれの特性についても理解することができた. ・協働プログラムを, 前年度までの企画中心のアイデアソンから, プログラミングを伴う作品制作（実装）へ拡大したことにより, 他者との意見交換の意義や各々の基礎力・技術力向上のモチベーションに繋がることが確認された.
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・実施後の参加学生アンケートでは, いずれのプロセスにおいても有意義であったという感想が数多く確認されたが, 作品制作（実装）において“協働”に至らず“分業”に留まってしまったという反省も一部確認された. 企画・制作いずれにおいても専攻の異なる学生が相互の能力を活かしながら協働できるよう, プログラム修正及び教員のサポートについて検討したい.

ウ 高大接続・入学者選抜の方法及びキャリア形成支援に関わる取組

高大接続【高校生教育】継続

事業名	高校生のための大学授業開放
代表者	高橋吉孝（大学教育開発センターアドミッション部会）
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させること ・高校での学習を受験対策としてではなく, 大学で学ぶために必要な基礎知識の修得を目的として取り組むきっかけとさせること <p>(活動概要)</p> <p>平成27年8月20日（土）10:00～（保健福祉学部）, 10:20～（情報工学部）, 13:30～（デザイン学部）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生向けにアレンジした大学の授業をすべての学部・学科で計画し, 本学において県内外の高校生に公開した.

	<ul style="list-style-type: none"> ・授業はすべての学部・学科で、講義形式のものと演習・実習形式のものを準備した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者数はアンケート回収数にして 387 名と、昨年より 100 名ほど増加した。 ・大変関心もてた (77%) とまあまあ関心もてた (21%) と回答した参加者がほとんどを占め、理解度に関しても完全に理解できた (45%) とまあまあ理解できた (51%) が大部分であった。 ・事業後のアンケートでは、授業は楽しく興味深いものであり、理解するためには高校での学びが大切であることを実感したとの記載が多く、2つの目的はいずれも概ね達成されたと考えられる。 ・アドミッションポリシーの説明を取り入れたが、これについても、完全に理解できた (34%) とまあまあ理解できた (59%) で大部分を占めた。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 27 年度受講者の 50%が本学を受験し、18%が本学に入学していること、推薦入試に限れば受験者の 48%が受講者であり、合格者の 42%が本事業参加者であることから、本学の質の高い授業の広報事業としての役割を見直す必要がある。 ・入学者の 66%が本事業を知らず、本事業自体の広報の充実が望まれる。

キャリア形成支援【全学キャリア教育】継続

事業名	キャリア形成支援を目的とする教育体制整備に関する調査研究
代表者	山下広美 (大学教育開発センター キャリア形成支援部会)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在学生へのキャリア形成支援を目的として、卒業生を特別講師として招聘し、講演会やワークショップ・ディスカッション等を開催する。 ・学生のキャリア形成意識の向上を目的とし、社会で活躍する卒業生の体験による知見を学生と共有し交流する。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 7 回吉備塾：7 月 16 日 13:00～16:00 開催, 保健福祉学部栄養学科主催, 学生 63 名/教員 2 名/計 65 名参加 ・第 8 回吉備塾：11 月 10 日 (木) 14:20～15:50 開催, 保健福祉学部保健福祉学科主催, 学生 47 名/教員 4 名/計 51 名参加 ・第 9 回吉備塾：11 月 28 日 (月) 12:40～15:50 開催, 保健福祉学部看護学科主催, 学生 37 名/教員 8 名/計 45 名参加 ・第 10 回吉備塾：12 月 1 日 (木) 14:20～17:30 開催, ザイン学部デザイン工学科主催, 学生 22 名/教員 6 名/計 28 名参加

	<ul style="list-style-type: none"> ・第11回吉備塾：1月20日（金）14：30～16：00開催，情報工学部情報システム工学科主催，学生19名／教員4名／計23名参加 ・第12回吉備塾：2月9日（木）14：20～17：30開催，デザイン学部造形デザイン工学科主催，学生34名／教員9名／計43名参加
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・大学での学びが業務のどのようなところに生かされているか，現在の仕事内容，進路を決めた時期，就職活動などについて講演を聴いた．意見交換会では，具体的な話を伺うことができ参加者の満足度も高かった． ・何れの回においても参加した学生及び教員によるアンケート結果は，吉備塾の内容が意義のあるものであったとの回答が多かった．
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・より充実した開催のための課題として，アンケートにおいて学年ごとの要求内容及びレベルの若干の相違が挙げられたことから，高学年における就職活動を目的とした講演内容，または主に在学時のキャリア形成を念頭にした取組に関する講演内容などを整理して吉備塾を企画していく方向性を探る必要があると考えられた．

キャリア形成支援【学部キャリア教育】継続

事業名	大学間連携によるキャリア教育プログラムの実践
代表者	野宮 謙吾（造形デザイン学科）
目的及び活動概要	<p>（目的）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成24～26年度実施の産業界ニーズGP事業でサブグループを形成した3大学（本学，岡山理科大学，山口東京理科大学）における継続取組の位置付けである． ・本事業では連携協定項目に準じ，①連携大学開講の授業見学，②取組の合同発表会（平成29年度に計画），③「自律的な技術者に要求される能力の共通指標」の検証を実施する． <p>（活動概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3大学連携会議の開催，見学授業リストの集約及び公開（8月） ・岡山理科大学設備の共同利用（8月/3月） ・デザイン学部及び情報工学部学生の岡山理科大学の授業見学と学生交流会（12月） ・岡山理科大学教員の本学授業の見学（9月） ・SPU活動1件（連携先：マルマン株式会社）の実施（8～3月） ・産学官連携授業2件（マルマン渡辺氏/M1_Project 杉野氏）の実施（12月/2月） ・「自律的な技術者に要求される能力の共通指標」に基づく学生アンケートの実施（3月）

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・連携校（岡山理科大学）の授業見学において、初めて学生の参加を実現した。また、教員、学生共に他学部（情報工学部）からの参加を得た。（デザイン学部・研究科学生 6 名、情報工学部・研究科学生 5 名、デザイン学部教員 2 名、情報工学部教員 1 名、計 14 名） ・本学の学生にとって他大学、異分野の取組見学と学生交流により、キャリア教育の観点から新たな視座や刺激を得る機会となった。 ・産学連携事業（SPU 活動、産学連携授業）では、アンケート結果より、学生のキャリア教育並びに教員の FD 研修における効果が得られたことを確認した。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の他大学の授業見学参加にあたっては、教務スケジュールが大きく異なるため、見学日の調整が困難であることを実感した。 ・また、学生の移動手段の問題がある。特に山口東京理科大学への移動は時間的、費用的なハードルがある。 ・本事業は次年度が最終年度となるが、事業終了までに 3 大学連携取組を今後も継続していくための具体的な要件を導き出したい。

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事業名	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発
代表者	佐藤和順（保健福祉学科）
目的及び活動概要	<p>（目的）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リアリティショックを克服できる保育者養成 ・研究力量を有する保育者養成 <p>（活動概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園・保育所・施設等の見学・体験学習、専門性を醸成する各種講演会、現職者の講話の実施 ・「チュッピーひろば」を活用した地域貢献及び保育実践力の醸成を目指す協働授業の実施 ・基礎ゼミナール合同研究発表会の実施及び第 57 回中・四国保育学生研究大会（於：環太平洋大学）への参加・研究発表 題目「手遊びから劇遊びへの展開の可能性」（発表者：安東紗英（学生）他 4 名） ・平成 27 年度実施の「保育者に求められる職務・資質に関する調査」の分析及び結果の公表 日本保育学会第 69 回大会（於：東京学芸大学） 題目「保育者の職務・資質に関する調査」（発表者：池田・佐藤和・中野・京林・新山・樟本）

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・各施設等の見学、講演会、現職者の講話等を通して、保育職の現状を理解し、自らの理想の保育者像を明確化することができた。学修成果については、学修した知見・技術が総合的に求められる「教育実習」において確認。その際、実習園の担当者からの他者評価も取り入れた。 ・学生も参加する学内の親子交流広場事業である「チュッピーひろば」を活用した協働授業を通して地域貢献及び保育実践力の醸成を継続して実施できた。 ・基礎ゼミナール合同研究発表会の結果を踏まえ、保育学生研究大会にて研究発表を実施し、研究力量の芽生えとすることができた。学修成果については、レポートにて学生自身に確認させ、「専門ゼミナール」との連続性・発展性にも言及することができた。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・学年相応の事業展開をすることができた。今後は学修成果の検討をより客観的に実施すること、各取組、協働授業の連携を図り、より効果的な事業展開をする必要があると考える。 ・本事業の主旨であるリアリティショックを克服できる保育者養成に関する成果は、子ども学専攻学生（1期生）の卒業後の就職状況調査を平成29年度に実施することにより判断をする。

キャリア形成支援【学科キャリア教育】新規

事業名	学外文化施設との連携によるキャリア形成への取り組み
代表者	檜尾 聡美（造形デザイン学科）
目的及び活動概要	<p>（目的）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学外文化施設（高梁市成羽美術館、ギャラリーKICHIZAEMON）との連携によるプロジェクトやキャリア形成支援のための実践的な活動を行う。 ・技術者としての知識や造形スキルを養う。 ・社会人としてとして自律的に仕事のできる能力、企画提案力、問題解決力、コミュニケーションスキル、自己管理力の向上を目指す。 <p>（活動概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高梁市成羽美術館のミュージアムショップでの販売を想定したグッズの開発に取り組む。 ・ギャラリーKICHIZAEMONで陶磁器作品を展示する。
成果	・展覧会開催に向け、今までの学修成果を活かして制作に取り組み、完

	<p>成度を上げた作品を市民の方々に公表できた。作品への反応や意見を直に聞くことで、計画、実行、評価を実践的な流れで体験でき、今後の授業や自主制作につながる能力が高まったと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高梁市成羽美術館とのプロジェクトでは、特に優れたデザインは平成29年4月を目標に美術館が商品化を行い、ミュージアムショップにおいて販売することとなった。 ・高梁市成羽美術館（平成28年7月16日～11月30日） ・ギャラリーKICHIZAEMON（平成29年3月9日～3月13日）
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・高梁市成羽美術館とのプロジェクトでは対応授業の特性からテキストスタイル分野が中心となっているので他の分野の参加を検討していきたい。 ・ギャラリーKICHIZAEMONの展覧会では、学内学生への周知が足りず、春休みに開催していることもあり、学生の来場者が少なかった。毎年続けている企画展であり、特に1,2年生へは今後の意欲付けとして宣伝し、学年を越えて上下のつながりを作っていきたい。

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事業名	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム
代表者	島田清徳（造形デザイン学科）
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の自立心を涵養するため、地域の幅広い年齢層に対応できうるワークショップを学生自らが企画立案し、教員・美術館学芸員の監督のもと実施する。 ・実践的な専門能力・実務能力を養うとともに、年齢の異なる人々と交流することにより世代間コミュニケーションを学び、社会への適応能力を高める。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年11月13日(日)、20日(日)、27日(日)、12月4日(日)、岡山県立美術館において、伝統工芸展会期中の来館者に向けて学生が企画した登り窯体験、機織り体験、組紐、糸つむぎ、藍染、ベンガラ染めなどのワークショップを計7回実施した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場に立った計画立案、準備計画、伝えること教えることなど、受入組織及び一般の方を意識しながら様々な体験を通して学習に対するモチベーションを高めることができた。 ・学んできた専門知識や技術を通して社会と関係を持つことにより、実社会における本プログラムの意義を再確認し、学修意欲の向上に繋がった。

課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップのメニューにセラミック系を加えたことにより, 参加者数は平成 27 年度の 187 名から 265 名へと大幅に増加した. 平成 29 年度以降もさらなる内容の充実を図りたい. ・普段は経験することのできない登り窯, 機織り, 組紐などを体験できることから, 参加者にはたいへん好評であった. ・平成 29 年度からは, 学生自身のふりかえりとして, ポートフォリオへの掲載を促したい.
-----	---

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事業名	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施
代表者	山下万吉 (造形デザイン学科)
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科生を対象としたキャリア形成支援「進路選択や就職への意識向上」「ビジネスに対する企画提案力及び制作意欲の強化」 ・学科教員の指導方法の向上・開発 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポートフォリオセミナー①「ポートフォリオプレゼンと公開講評」の開講 (実施日 7/29) : 外部講師/菅公学生服株式会社 開発本部 部長・岩井聡氏 ・ポートフォリオセミナー②「デザイン会社採用担当によるポートフォリオ制作のレクチャー」の開講 (実施日 10/27) : 外部講師/株式会社アドブレン ディレクター・芝原忍氏 ・特別講義及びミニワークショップの開講 (実施日 11/17) : 外部講師/株式会社オインクゲームズ 代表取締役・佐々木準氏 ・特別講義及びポートフォリオセミナー③の開講 (実施日 11/21) : 外部講師/テキスタイルブランドTSUNE代表・小倉和氏 ・ポートフォリオセミナー④「ポートフォリオプレゼンと公開講評」の開講 (実施日 1/30) : 外部講師/凸版印刷株式会社 環境デザイン事業部クリエイティブ本部 部長・寺村和眞氏
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの活動にて学生へのアンケートを実施. 内容の満足度が高く, 具体的な制作ノウハウの修得が伺えた. ・ポートフォリオセミナーの成果として, 段階的にポートフォリオ制作を進めることができ, クオリティ向上に繋がった. ・聴講した担当教員にとっても, 具体的に各自の授業等に反映できる教育のノウハウを学ぶことが出来た.

課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・課題として、「詳細な学修成果の評価の取り方」「時間割及び学内事業・研修・会議による開講時間の調整の難しさ、並びに学科生全員及び本事業担当以外の教員の参加の難しさ」が挙げられる。 ・次年度への展望として、評価の取り方の改善を検討しつつ、本事業がもたらす就業への影響を分析したい。また、より広く学科学生及び学科教員が参加できる開講体制になるよう実施する。
-----	---

エ 教員の教育力向上・開発に関する取組

学生支援【全学・学生相談】継続

事業名	学生相談室業務の機能向上と情報発信のための環境整備
代表者	迫 明仁（人間情報工学科（学生相談室））
目的及び活動概要	<p>(目的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生相談室業務の向上を図ると共に、環境整備と情報発信を通じて学生相談室に対する認知を拡大し、学生生活に問題を抱える学生及び教職員のメンタル面のサポート体制を充実する。 <p>(活動概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談業務に使用するコンピュータ及びこころの健康調査（UPI）用のサーバを最新の機種に更新する。 ・留学生に対応できるこころの健康調査（UPI）多言語版を作成する。 ・来談者の特性を考慮して、カウンセリング用応接セットを低床のものから背高のものに変更する。 ・相談室からの情報発信・面接予約のためのシステム（コンテンツ等）について、関係部局・センター及び学生支援部会と協議の上、構築する。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・相談業務用コンピュータ及びこころの健康調査（UPI）用のサーバー式の更新により、情報管理の安全性・信頼性が向上した。 ・関係教員の協力を得て、こころの健康調査（UPI）の英語版、中国語版、韓国語版を作成し、留学生への適用範囲を拡大した。 ・カウンセリング用応接セットを低床のものから背高のものに変更したことにより、来談者の特性への配慮ができるようになった。 ・相談室からの情報発信・面接予約のためのシステム構築については、次年度から運用開始の全学情報システム及び本学ホームページの全面更新計画にあわせて、運用方法とコンテンツを構築中である。 ・成果の一部は、以下の通り学会発表した。 「学生と取り組んだ学生相談室の環境改善プロジェクト」：山下明美・迫明仁・滝本裕則，アートミーツケア学会 2016 年度大会，札幌。

課題等	<ul style="list-style-type: none"> 平成 25 年度から行ってきた一連の事業（学生相談室の整備と情報発信）は、進行中の一部の課題を残しつつも、ひとまずは当初の目的を達成できたといえる。 学生支援室の新設や学内関係諸規定の変更もあり、学生相談室の業務は、学生・教員のメンタル面の相談を中心としつつも、ハラスメント相談や障がい学生支援の一旦も担うこととなってきた。それらを含めた業務改善の取組は、学内関係組織・教職員と連携しつつ今後も継続して行う必要がある。
-----	--

（3）平成 29 年度教育力向上支援事業

平成 29 年度事業については、岡山県立大学教育力向上支援事業取扱要綱に示す助成費交付対象から、高大接続、入学者選抜方法の改善に関する項目が削除された。また、高大接続事業及び全学的キャリア形成支援事業など、大学教育開発センター企画により実施された事業は、新規重点事業にて申請することとされた。その上で、他の事業費に該当するか否かを観点に含みながら、平成 28 年 11 月に審査を行った。採択・実施された教育力向上支援事業(15 件)は以下のとおり。

平成 29 年度 教育力向上支援事業 採択事業一覧（全 15 事業）

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額 (千円)
情報工学部 情報通信工学科	杉村 藍	アメリカ研修を通じた国際交流と情報・デザイン教育の充実 1	2,350
デザイン学部 デザイン工学科	朴 貞淑	キャリアアップにつながる実践的韓国語学習支援Ⅱ	450
情報工学部 人間情報工学科	高戸 仁郎	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証	513
保健福祉学部 看護学科	實金 栄	看護アセスメント力向上のための看護理工学の導入 第Ⅰ期	550
保健福祉学部 保健福祉学科	坂野 純子	岡山創生学に向けた「音楽介在世代間交流プログラム」の再開発	600
保健福祉学部 保健福祉学科	中村 光	「岡山創生学」としての保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発	409
情報工学部 人間情報工学科	井上 貴浩	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践	570
情報工学部 人間情報工学科	瀬島 吉裕	機械系科目の接続を考慮した学習教材の開発	425

デザイン学部 デザイン工学科	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用 した実践型創造力創出教育プログラ ムの開発	380
デザイン学部 造形デザイン学科	作元 朋子	学外文化施設との連携によるキャリ ア形成への取り組み	500
デザイン学部 造形デザイン学科	島田 清徳	ワークショップを活用した学生のキ ャリア形成プログラム	500
デザイン学部 造形デザイン学科	野宮 謙吾	大学間連携によるキャリア教育プロ グラムの実践	300
デザイン学部 造形デザイン学科	山下 万吉	キャリア形成支援のためのポートフ ォリオセミナー及び企画提案力向上 を目的とした教育プログラムの実施	357
保健福祉学部 保健福祉学科	佐藤 和順	リアリティショックを克服し就業継 続できる力量を有した保育者養成の プログラム開発	535
デザイン学部 造形デザイン学科	齋藤 美絵子	情報工学部・デザイン学部 合同によ る協働教育プログラムの実践	371
		計 (千円)	8,810

3-3 まとめと課題

平成 28 年度における個別の事業の成果については、3-2-(2)で紹介した通りだが、このうち新規申請事業は 21 件中 5 件である。全体として申請内容としては、e-ラーニングなど新たな取組がみられたものの、アクティブ・ラーニングなどの教育方法に関する実践的な研究事業の応募は少なく、引き続き課題を残した。なお、本教育年報から報告書式を改め、取組概要、成果及び課題（終了取組は総括）について記述することとした。このうち成果に関しては学生における学修成果のエビデンスが必ずしも明確でないことが、課題として浮上した。

平成 29 年度事業については、改めて学長方針である教養教育・グローバル化教育・地域連携教育の改革推進の観点に基づき募集を行った。その結果、新規事業申請のなかに、平成 28 年度より開講している岡山創生学に関する事業が複数件寄せられた。

一方、今後に向けての課題としては、教育方法に関する実践的な研究事業の申請を改めて促さなくてはならない点や、合同報告会の実施を通じて取組テーマや組織を超えたノウハウの共有をはからねばならない点が挙げられ、後者については平成 29 年度計画に盛込んだ。また、特色ある本事業の成果は、「学生の学修成果への反映」が究極の目的であるため、全ての採択者に対して、学修成果の測定について付記するよう促し、再計画をお願いしたところである。

今後は、優れた教育研究成果について、本学の教育研究紀要への執筆依頼や教育表彰の対

象として顕彰するなどの工夫を通じて,全学的に教育改善に関する啓蒙を図る必要がある.

第2章 国際交流センターの活動と成果

1 概要

国際交流センターは、本学同窓会から寄贈された建物を活用する形で、平成26年10月にオープンした。本学の関係規程により、業務は以下の通りと定められており、「機能としてのセンター」及び「場としてのセンター」の2つの側面を持っている。

- (1) 本学の教育研究に係る国際交流推進のための企画立案並びに情報の収集及び提供に関すること。
- (2) 本学の教育研究に係る国際交流事業の企画及び実施に関すること。
- (3) 学生及び教職員の外国語能力並びに外国人の日本語能力の向上支援に関すること（岡山県立大学語学教育推進室が所掌する業務を除く）。
- (4) 学生及び教職員の海外派遣の企画並びに調整に関すること。
- (5) 海外からの研究者、留学生等の受入推進に関すること。
- (6) 各学部、学科等が実施する国際交流事業への協力に関すること。
- (7) 海外協定大学との交渉及び接遇に関すること。
- (8) センターに設置する機器等の運用及び維持管理に関すること。
- (9) その他国際交流の推進に関すること。

開設された平成26年度の活動は半年間であったが、アデレード大学英語教育センターの協力のもとでのSkype英語や、学内外の英語教員による「英語村」等を試験的に実施しながら、より効果的な取組の推進に向けて、課題や改善点等を探った。

平成27年度は、専任でセンター長を務める特任教授を4月から新たに採用するとともに、各学科代表8名、英語教員代表1名、事務代表1名の総勢10名の幹事を選任して、本格的に活動をスタートさせた。そして平成28年度には、各種の取組を一層充実発展させていくことができるよう、様々な工夫を凝らした。

センター幹事会は合計3回開催し、基本的方向性や具体的取組内容等を随時協議した。

「機能としてのセンター」では、学長方針に基づく国際交流協定校の増大や学生海外短期研修の充実、インドネシアから学生民俗音楽舞踊グループを再度招いての芸術文化交流の推進、香港、ネパール、インドネシア等の大学との共同研究の推進への支援、留学生受入拡大のための各種調査研究やPR活動の実施及び「博士後期課程留学生特別入学試験制度」の推進など、従来の取組を強化するとともに、国際交流推進の基盤整備としての「国際交流に関する基本方針」の策定等の新たな取組にもチャレンジした。

「場としてのセンター」では、学期中は英語村を毎日「開村」（月～金の4時間）するとともに、週1回のSkype英語を継続したほか、「韓国語村」や季節毎のイベント等を随時開催した。更に、海外とインターネット接続できる機器を活用して、海外の様々な場所と結び、学生交流や入学者選考の審査等を支援した。

2 国際交流における教育活動

2-1 国際交流協定校

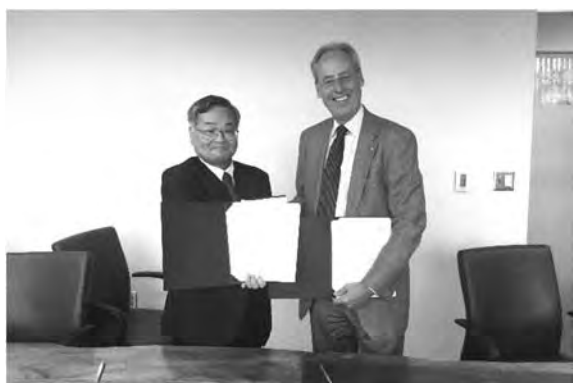
大学間の協定校は、平成27年度末時点で13校だったが、平成28年度には3校増やして、合計で16校となった。この内、アメリカへは、8月に学長を団長とする友好訪問団を派遣して調印式に臨むとともに、交流拡大に向けたトップ会談を行った。

【大学間協定校】

- 平成8年度 (1) バンガー大学 (英国), (2) セント・アンドリュース大学 (英国)
平成17年度 (3) 又松 (ウソン) 大学校 (韓国)
平成19年度 (4) 四川大学 (中国), (5) 南昌大学 (中国)
平成20年度 (6) 延辺大学 (中国)
平成23年度 (7) 東北師範大学 (中国)
平成26年度 (8) ハサヌディン大学 (インドネシア), (9) アデレード大学 (豪州)
平成27年度 (10) トリブバン大学 (ネパール), (11) 雲林科技大学 (台湾)
(12) モンテレイ工科大学プエブラ校 (メキシコ)
(13) モンテレイ大学 (メキシコ)
平成28年度 (14) 河南科技大学 (中国), (15) ポートランド州立大学 (アメリカ)
(16) 東南大学 (中国)

また平成28年度は、この他にも複数の大学との間で交流拡大に向けた意見交換等を行っており、平成29年度以降の進展が期待される場所である。

学部間交流協定では、保健福祉学部がトリブバン大学の医学部(2月)と、また情報工学部がタイのカセサート大学の工学部(12月)と、それぞれ協定を締結した。



ポートランド州立大学での調印式



カセサート大学での調印式

2-2 語学文化研修等

まずは、平成27年度の参加者による報告会を4月に開催して、平成28年度プログラムへの学生の興味関心を喚起した。約200名の参加者があり、学生アンケートを実施して、

「海外研修等で訪問したい国・地域」を尋ねたところ、以下の結果であった。

オーストラリア 88名, イギリス 63名, アメリカ 51名,

韓国 35名, 台湾 17名, 香港 10名 (回収数: 127名 ※複数回答可)

英語に関しては、例年通り、英国バンガー大学へ、8月下旬から約3週間、5名の学生を、また豪州アデレード大学へ、2月末から約3週間、15名の学生を、それぞれ派遣した。

平成25年度のプログラム開始から4回目となるアデレード大学については、課外活動の充実が課題であったことから、平成27年度に委嘱した芳賀浩本学客員教授（アデレード在住）の指導・支援も得ながら、アデレード中心市街地の視察に加え、食べ物や流通の状況、岡山県との交流の概要、都市計画、交通対策、観光振興など、多様なテーマによる特別講義と現地視察を3回実施した。



バンガー大学研修でのフィールド・トリップ



アデレード大学研修での野生動植物公園訪問

韓国語は、又松（ウソン）大学校での研修が実施されなかったことから、平成27年度に続き、ソウル市の梨花女子大学における研修（8月下旬からの約2週間）に、2名の学生を派遣した。

中国語については、応募者がなく、4年連続で不成立となった。

平成26年度にスタートした「南オーストラリア州保健福祉スタディツアー」には、14名の学生が参加し、2月下旬～3月上旬の約1週間、専門研修、英語研修、福祉施設訪問、学校訪問等を行った。

この保健福祉スタディツアーについては、平成29年度からの「授業化」が決定されるとともに、9月に香港（香港理工大学）で実施されて3名が参加するとともに、2月には韓国（又松（ウソン）大学校）でも実施されて15名が参加した。



保健福祉スタディツアー(南オーストラリア州)



保健福祉スタディツアー(香港)

これらに加えて、2回目となる香港スタディツアー(4名参加)を9月に実施して、大学訪問(2大学で授業参観や学生交流等)、文化体験、地域視察、課題設定自主研修等を行った。

また、初めての台湾スタディツアー(3名参加)を3月に実施して、大学訪問(2大学で授業参観や学生交流等)、文化体験、地域視察、ホームステイ等を行った。

一方、例年通り「日本語・日本文化研修」を7月に本学で実施し、台湾の雲林科技大学と淡江大学、中国の河南科技大学の3大学から、学生13名を受け入れた。



香港スタディツアー(市場の視察)



台湾スタディツアー(交流大学の授業参観)



日本語・日本文化研修

2-3 教育交流

「芸術文化交流」は、語学があまり得意でなかったり、国際交流にはそれほど興味関心が無かったりする学生にもアピールできる。このため、平成27年度に引き続き、インドネシアのハサヌディン大学の学生民俗音楽舞踊グループ21名を11月に招き、本学大学祭での公演に加え、音楽や日本文化を通じた学生交流などを実施した。あわせて、滞在中の学生のお世話を行うボランティア学生を本学内で募るなど、相互理解の促進等に努めた。

香港の香港城市大学及び台湾の雲林科技大学からの学生グループを、7月にそれぞれ1日ずつ受け入れ、英語授業での交流、国際交流センターでの交流（七夕祭りなど）、お茶席体験など、本学学生との交流の機会を用意した。

アメリカのポートランド州立大学では、地域課題解決型学習（Community Based Learning）を推進しており、本学での教育に反映できるよう、10月に実施された専門研修に教員1名を派遣した。また、情報工学分野での交流を進めるため、12月に教員訪問団を派遣した。

メキシコのモンテレイ工科大学プエブラ校、台湾の雲林科技大学、米国のポートランド州立大学との間での、デザイン学部の学生・教員の交流（学生グループの短期受入、学生が制作した作品の展示発表会、ワークショップ等）に関して、センターとして可能な支援を行った。



インドネシアの学生と一緒に秋祭りに参加



香港からの学生と一緒に七夕の飾りづくり

2-4 国際交流センター（建物）内での様々な活動

英語村は、英語のネイティブ・スピーカー等とおしゃべりやゲームを通じて、学生に英語の楽しさを体得させる取組であるが、学期中は月～金の毎日、11：00から15：00まで開村した。指導者は、いずれも学外者の中からアメリカ人とカナダ人の男性2名が務め、合計約150回の開村にのべ約1,100名の学生が来訪した。取組のPRと体験者増大を目的に、合計13回の特別イベント（クリスマス・パーティなど）も実施した。

本学で韓国語も教えるデザイン学部教員が、語学学習支援と韓国理解の促進のため、昨年度に引き続き、原則週1回、各1時間の韓国村を開催し、のべ130名が参加した。

アデレード大学との Skype 英語は、バンガー大学及びアデレード大学での語学文化研修等の事前研修としての位置付けも加えながら、原則木曜日の夕方に 1 時間実施した。合計 15 回行い、のべ 80 名の学生が参加した。

その他、留学相談、遠隔での入試選考、各種会議や視察など、平成 28 年度は、総計で約 2,000 名が来訪した。



英語村の様子



スカイプ英語

平成 28 年度は、初めて、英語村への来村の回数や目的、利用前後の変化について、10 月下旬～1 月中旬にアンケートを実施した。リピーターが中心であったことから、サンプル数は多くはないが、以下の結果となった。

(回答者) 21 人 (男子：6 人、女子：15 人)

(学 年)

学部 1 年生：10 人、2 年生：1 人、3 年生：2 人、4 年生：4 人、大学院生：4 人

(利用回数)

5 回以下：8 人、6～10 回：7 人、11 回～20 回：2 人、21 回以上：4 人

(利用目的)

「英語が上手になりたい」19 人、「英語を話したい」16 人

「外国人と話したい」11 人、「異文化を体験・理解したい」7 人

「自分を向上させたい」5 人、「英語の成績を向上させたい」3 人

「外国旅行の準備のため」3 人

(利用前後の変化)

「英語でのコミュニケーションに、より積極的になったと思う」

とても当てはまる：8 人、まあまあ当てはまる：12 人、あまり当てはまらない：1 人

「英語が上手になったと思う」

とても当てはまる：1 人、まあまあ当てはまる：14 人、あまり当てはまらない：5 人

「英語の成績が向上したと思う」

とても当てはまる：1 人、まあまあ当てはまる：11 人、あまり当てはまらない：9 人

「英語をもっと勉強しようと思うようになった」

とても当てはまる：14 人、まあまあ当てはまる：6 人、あまり当てはまらない：1 人

「異文化への理解が進み、より関心が高まったと思う」

とても当てはまる：9 人、まあまあ当てはまる：11 人、あまり当てはまらない：1 人

「海外のことをもっと知りたいと思うようになった」

とても当てはまる：14人、まあまあ当てはまる：7人

「外国旅行に出掛けたいと、より強く思うようになった」

とても当てはまる：9人、まあまあ当てはまる：10人、あまり当てはまらない：2人

この結果から、多くの利用者は、おおむね以下のように考えているらしいことが分かった。
○英語村で外国人と英語を話すことで、自分の英語力を向上させたり、異文化を体験・理解してみたりしたいと希望しているものの、英語の成績を上げたいとはそれほど考えていない。

○英語村を利用してみて、英語の成績が上がったり、英語が上手になったりすることはあまりないものの、英語でのコミュニケーションにより積極的になったり、英語をもっと勉強しようと思うようになったり、異文化への理解や関心が高まったり、海外のことをもっと知りたいと思うようになったり、外国旅行に出掛けたいと思うようになったり、というような一定の効果があると考えている。

2-5 共通教育との連携

小さならしを頻繁に作成・配付するなど、国際交流センター内での各種活動のPR及び来訪者増のための様々な取組を、語学教育推進室を始めとした多くの教員と連携しながら推進した。こうしたことも活かしつつ、海外での語学文化研修等の企画・実施に当たっては、協働体制を一層強化することができた。

2-6 まとめと課題

本格的な取組が実施されて2年目の年であったが、国際交流センターの利用者数は、英語村が1,000名を超えるなど、総計でのべ約2,000名となり、単純計算で本学の学生数以上となった。学生が実践的な英会話を学んだり、国際交流関連の情報を得たりする場所等として、一定の貢献はできていると考えられる。

一方で、センター来訪者の固定化がある程度見られることから、より多様な学生の利用に結びつくよう、情報発信の工夫と強化が必要となっている。その際には何よりも、学生に最も近い立場である教員一人ひとりの理解と協力が欠かせない。

「機能としてのセンター」の役割も含め、取組推進のための「学内人的ネットワーク強化」としては、センター幹事を中心に、その先のつながりも大切にする必要がある。平成28年度までの様々な挑戦を通じて、センターの機能や取組に対する学内理解も進んできており、スモール・サクセスを着実に積み上げて多くの学生・教職員の信頼を得ることが肝要である。

【国際交流センターの主な活動の学部・研究科別のべ利用者数（平成28年度）】

	(保健福祉学)	(情報工学)	(デザイン学)
〈英語村〉	474名	393名	206名
〈韓国語村〉	97名	0名	33名
〈スカイプ英語〉	65名	5名	14名

3 国際交流における教育・研究支援活動

3-1 国際交流協定校

平成27年度に創設した「博士後期課程留学生特別入学試験制度」について、対象校を、中国、韓国、インドネシアの協定校4校に、台湾及びネパールの各1校を加え、合計6校とした。また9月には、ハサヌディン大学において、この制度の説明会を開催した。平成28年度に実施した入学試験には、南昌大学からの1名及びハサヌディン大学からの1名が合格し、ともに平成29年4月に入学予定である。

〈概要〉 入学金・授業料は免除、月額8万円の奨学金、選考は書類と面接（Skype利用可）

協定校等からの留学生を支援するため、7月に留学生連絡会議を開催して、困り事等の確認及び対応策の検討を行った。

協定校等からの交換留学生を含め在籍する留学生の支援のため、前期及び後期に、週2回の「特別日本語指導」（初級：1クラス、中級：1クラス）を行った。

協定校との意見交換や連携強化等のために、新たな協定書の調印時を除き、学長、センター長、センター幹事等が、バンガー大学、又松（ウソン）大学校、ハサヌディン大学、アデレイド大学、トリブバン大学、雲林科技大学、モンテレイ工科大学プエブラ校、ポートランド州立大学、河南科技大学、東南大学を訪問した。

3-2 国際研究協力

ハサヌディン大学については、本学教員の訪問が2回（9月、3月）、同大学からの教員の受入が3回（10月、11月）あったほか、同大学若手教員を、大学院博士後期課程で受け入れており、国際共同研究の機運が盛り上がっている。

ネパールについては、AMDAネパール支部並びにトリブバン大学との交流が鍵となる。両者と連携しながら、大学院看護学専攻の特別授業を現地で実施（12月／学生2名参加）した際には、共同研究についても実践並びに協議を深めた。

香港理工大学については、本学教員が9月と3月に訪問するとともに、同大学教員を1月に受け入れた結果、複数の国際共同研究が進行中である。

さらに、バンガー大学、雲林科技大学、ポートランド州立大学等との間での共同研究の芽が生まれ始めている。

上記の各取組に対しては、要所において、センターとして可能な支援・協力を行った。

3-3 基盤整備

全学の教職員が、理解・認識を共有しながら、各種の取組を効果的かつ総合的に実施できるよう、具体的な行動計画である「国際交流に関する基本方針」を7月に策定した。

学内外へのPRの強化のため、平成27年度に開設した国際交流センターのホームページについて、1年を通して、その内容の充実に努めた。

本学が受け入れている留学生は、1ケタであり、その増大が喫緊の課題となっている。このため、本学のPRの強化、入学試験制度の改善、協定校との学生交流のための要領の整備、留学生への効果的支援、教職員の意識改革など、受入拡大に向けて、課題の抽出や国内外の先進事例調査を、年度を通して実施した。

海外における各種取組の充実のため、香港及び豪州（アデレード）に配置している各1名の客員教授との連携を強化した。また交流が進展している台湾についても、客員教員の配置について検討・準備を進めた。

3-4 まとめと課題

新たな取組を幾つもスタートさせるとともに、基盤整備の面でも、多くの前進があった。

そうした中で、ホームページを始め、例えば外国語対応の充実等、PRの方法・内容については、改善の余地が大きい。広報メディア開発センター等の学内関係機関とも連携を密にしながら、積極的に取り組んでいく必要がある。



スカイプを活用した大学院入学試験



香港の柳生政一客員教授の特別指導

第3章 学術研究推進センターの活動と成果

1 概要

本章では、平成27年10月に発足した学術研究推進センターについて、平成28年度における活動内容を報告する。平成28年度の当センターの活動計画については、第5回教育研究活動委員会において「平成28年度における学術研究推進センターの取組予定について」という項目で下記の計画が示された。

- 1 科研費計画書の作成に係る研修会の実施及びコンプライアンス研修の実施
- 2 研究倫理教育に関する研修会の実施
- 3 科研費計画書の提出前検討会の実施
- 4 科研費採択計画書の閲覧制度
- 5 教員の研究活動に係る環境整備

また、これに先立ち昨年度より計画されていた大学院生全員に対する研究倫理教育を、大学院新生オリエンテーションにおいて、全研究科全専攻科新生に対して金川センター長が行った。また6月には文部科学省研究公正推進室が主催する「研究活動における不正行為への対応等に関する説明会」にセンター員1名と企画広報室より1名の職員を派遣した。次節に各活動について述べる。

2 学術研究推進と教育活動

2-1 科研費計画書の提出前検討会の実施

事前検討を希望する教員が作成した計画書について、学内ベテラン教員が内容、経費の妥当性及び的確な記述などを指導することにより、学内教員の科研費取得を支援した。

- ・ 申込募集期間 7月14日から8月23日
- ・ 計画書（案）の提出期限 9月6日

本年度は助教を中心に5件の推敲・添削依頼があった。ちなみに平成26年度には応募11件のうち3件採択。平成27年度は7件中1件、平成28年度は4件中2件が採択となっている。

2-2 科研費計画書作成・研究倫理教育研修会

開催概要

第1回の全学研修会は、科研費計画書作成支援と研究倫理教育研修を以下の要領で同日開

催とした。なお後半の研究者倫理教育研修にはコンプライアンス順守の内容が含まれている。

開催日時	平成 28 年 9 月 26 日 (月)	第 1 部 14 時 30 分～15 時 40 分 第 2 部 15 時 50 分～17 時 00 分
開催場所	学部共通棟北 8206 講義室	
挨拶	岡山県立大学学術研究推進センター長 金川明弘教授	
講師①	ロバスト・ジャパン株式会社 中安 豪氏	
	科研費計画書の書き方・質疑応答	
講師②	ロバスト・ジャパン株式会社 中安 豪氏	
	研究倫理教育研修・質疑応答	

研修会では、金川センター長による挨拶のあと、ロバスト・ジャパン(株)代表取締役中安豪氏による研修会が行われた。氏は理学博士の学位も有し、企業、商工会議所、大学等においてコンプライアンス違反未然防止等のセミナーや科研費獲得の講師を数多くこなしている。

開催資料

研修資料は、学内教職員専用ホームページで閲覧可能とし、ビデオ記録も学内教職員に対して貸し出しを行えるようにした。また、このビデオ記録を用いて当日出席できなかった教員・職員対象に当センターのウェブページに同じ研修内容を視聴できる機能を設けた。

参加者

本研修会の参加者は 35 名で、その内訳は、教員が 32 名、職員が 3 名、学生 0 名であった。この参加者は昨年の参加者に比べて少数となっているが、それは当日が後期授業開始日だったことに加え、科研費申請要件である研究者倫理研修会の出席が、3 年間の有効期間を有していることに起因していると思われる。

アンケート結果

本研修会後に回収されたアンケート結果を報告する。回収数は 16 件であった。

1. 本日の研修会の内容について、いずれかに○をおつけください。

①非常に良かった ②良かった ③普通 ④あまり良くなかった ⑤良くない
6名 10名

その他（過去最高にわかりやすい研修会だった。）

2. 研修会の時間配分について、いずれかに○をおつけください。

①長い ②普通 ③短い
1名 15名

その他（科研費説明会をもう少し長くしてもらいたい。）

3. 今後、本学の学術研究に関する研修会で取り組んでほしいテーマについていずれかに○をおつけください。（複数回答可）

①科研費申請支援 ②その他の外部資金獲得支援 ③コンプラ・研究倫理教育
9名 7名 4名

その他（特になし）

4. その他, 御意見御要望がございましたら御記入ください。

今後の科研費申請に向けて参考としたい。

2-3 教員の研究活動に係る環境整備

本年度は, 本学においての教員の研究環境改善を目的として, 以下の取組を行ったが, 研究を行ううえで阻害要因となる問題点や改善が望まれる要望を調査した。

第1回アンケート 9月12日から9月23日において, 上記問題点の自由記述によるアンケートを実施した。その結果, 30名(45項目)の回答があり, 回収率は17.6%であった。

第2回アンケート 11月9日から11月22日において, 第1回目のアンケートから, 項目を精査し, 19項目とし, それぞれの要望度を0, 1, 2計10点で与える方法でアンケートを行った。93名の回答があり, 回収率は55.7%であった。

その結果のうち要望度が高かった意見・要望内容を以下に示す。

意見・要望の内容	要望度	内訳		
		保福	情報	デザ
教員個室・担当実験室などに個別空調の設置を可能にしてほしい。	107	53	38	16
土日祝なども空調を入れてほしい。夏季休業も空調時間を延長してほしい。	97	42	40	15
各種委員会や会議が多く, 会議時間も長い。委員会や会議の統廃合も視野に入れて厳選し, 学内運営の簡素化, 効率化を図ってほしい。	97	32	39	26
現行の「教員研究費」と「教員研究旅費」のすみ分けをやめて, トータルの額を教員の裁量で使わせてほしい。	83	22	42	19
学内の各種研修会の回数が多いので, 減らしてほしい。	64	19	35	10
准教授以下の教員の定員増(特に助教・実習助手), または非常勤講師の採用枠を増やしてほしい。	51	31	10	10
他の学内予算を調整し, 研究費・研究旅費を増額してほしい。	51	12	28	11

2-4 まとめと課題

本年度は, 学術研究推進センターが当初掲げた取組はほぼ達成されたと言えよう。科研費については, その申請件数が学科において大きく異なる学部が見られた。よって来年度も引き続き取得奨励に向けての取組を精力的に行う必要がある。また, 研究環境改善に向けて, 本年度はアンケート調査を行ったが, 対応可能なものと, そうでないものがあり, 要望度の

高い空調問題などは引き続き関係部署との協議が必要である。一方,表には記載されていないが,学部生・大学院生への研究発表旅費の支出は一定の成果をみることができた。来年度は要望実現に向けてさらに歩を踏み出す必要がある。

第3部 附属図書館の活動と成果

1 概要

本学図書館は大学設置基準第38条に示す大学附属図書館として、学部の種類、規模等に応じ、専門書、学術雑誌、視聴覚資料等の教育研究上必要な専門的資料を系統的に備えるべく努力をしてきた。また、グローバル化の中で学生に必要とされる広い視野と教養を涵養すべく、一般教養図書、語学学習推進図書についても各学部教員、また共通教育部教員の視点で選書し、充実を図っている。さらに学術情報の電子化や検索システムの整備を行い、学生、教員、地域に向けたサービスの維持・向上を目指し、積極的な取組を進めている。

1-1 図書館活用の推進

1-1-1 図書館の利用状況

平成28年4月から平成29年3月の期間における図書館の利用状況を以下に示す。蔵書冊数は約21万冊でその内訳として、和書が約8割、洋書が約2割を占め、その他視聴覚資料が約2.4%となっている。入館者数は約9万人で貸出冊数は約2万冊となり、平成25年からほぼ同様の推移となっている。施設等の利用状況として、館内PC、研究閲覧室及びグループ閲覧室の貸し出し件数は平成25年から増加傾向にある。研究閲覧室及びグループ閲覧室は、学生の主体的、能動的な学修を支援する場として設けられているスペースで、近年多くの大学や図書館で設けられているラーニングコモンズに準じたものである。グループ学習等による自発的な学修の意識が定着してきているのかもしれない。当館のエントランス部分に設けたラーニングコモンズの稼働率については未測定であるが、常時学生がグループでの学習を進めている様子が見受けられた。

平成28年度図書館利用状況について

(1) 蔵書冊数

(H29.3.31現在)

分類	和書	洋書	視聴覚	合計
0 総記	12,856	3,131	167	16,154
1 哲学	7,954	1,243	186	9,383
2 歴史	6,302	565	462	7,329
3 社会科学	36,791	5,255	874	42,920
4 自然科学	44,732	13,352	1,445	59,529
5 工学・工業	17,440	5,172	373	22,985
6 産業	2,665	431	49	3,145
7 芸術・スポーツ	19,277	4,375	1,417	25,069
8 語学	4,385	3,663	30	8,078
9 文学	11,314	974	67	12,355
合計	163,716	38,161	5,070	206,947
構成比	79.1%	18.4%	2.4%	100%

(2) 入館者数等

項目	開館日数	入館者数 (人)		貸出冊数 (冊)		貸出人数 (人)		学外者利用 (人)
			1日平均		1日平均		1日平均	
28年度	269	91,458	340	18,395	68	8,323	31	2,030
27年度	269	88,196	328	19,022	71	8,637	32	1,929

(3) 資料受入状況

項目	和書		洋書		計	
	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度
図書	1,902	1,900	612	238	2,514	2,138
雑誌	131	130	28	24	159	154
視聴覚資料	72	65	14	12	86	77

(4) 相互協力

項目		件数	
		28年度	27年度
文献複写	複写提供件数	400	467
	複写取寄件数	1,535	1,269
相互協力	借受冊数	41	62
	貸出冊数	161	149

(5) 施設等の利用

項目	件数	
	28年度	27年度
館内パソコン利用者数	4,747	3,539
ノートパソコン (館内貸出)	-	7
研究閲覧室	1,255	1,276
グループ閲覧室	114	146

1-1-2 図書館ギャラリーの利用状況

図書館では、学生・教職員・院生の貸出冊数の増加、また特集本コーナーや、図書館のギャラリーの貸出しにより、図書館の利用率向上を目指している。図書館ギャラリーは、学生や教員に館内の壁面等の空間を有効活用してもらうことにより図書館利用の増加を図ったもので、平成28年度はデザイン学部の学生や教員により多く利用された。図書館利用者に安らぎ

を与えるような展示を意図した.本年度の図書館ギャラリーの利用状況を以下に示す.

	申込者	作品	展示期間	作品紹介
1	Okayama Bookworms	新入生歓迎ビブリオバトル	4/26	ビブリオバトルを新入生やより多くの人に知ってもらうため, 実演し, どんなものかを感じてもらう
2	文芸部	文芸部ポスター	4/26 ~ 3/31	新入生の呼び込みポスターをエントランスの電子黒板のスクリーンセーバーにて掲示.
3	デザイン学部 担当教員	グラフィックアート ~ 俳句のビジュアライズ~	5/25 ~ 6/24	吟行(大学内)により自作の俳句を作成し, 俳句のイメージをグラフィックデザインの手法を用いてB1ボードに視覚的に表現した作品
4	デザイン学部 担当教員	領域演習II課題作品 (2年生)	7/8 ~ 10/7	織技法を用いたタスペトリー作品
5	デザイン学部 担当教員	コピーライティング 課題作品(2年生)	9/20 ~ 11/29	自分の句集のイメージをビジュアル化した作品
6	①デザイン学部 担当教員	①光と影の抽象の構成	10/14 ~ 11/29	①カメラを用いず, 印画紙に直接物体を置いて露光し抽象的なシルエット写真をつくる
	②デザイン学部 担当教員	②美味しいテクスタイル		②「美味しい」をテーマに自由に発想を広げて構成し友禅の技法で布に染色する
7	Okayama Bookworms	ビブリオバトル in 県大祭	11/5	県大祭に合わせてビブリオバトルを開催し, 過去の活動や紹介本の展示を行う
8	デザイン学部学生	図書館の純文学ブックフェア	12/1 ~ 1/15	若者たちにとって敷居が高いと感じやすい純文学の本に, 装丁をリメイクし展示する. 大小さまざまなサイズの本に統一感を持たせ, フェアであることを認識してもらい, 興味・関心を持たせ手にとってもらう.

1-1-3 学生を対象とした図書館利用教育

図書館では蔵書検索方法やデータベース活用法を具体的に示す「図書館ガイダンス」への受講を学生に勧め, 学生への教育・研究支援を図ってきた. 共通教育講義科目「大学で学ぶ」(対象: 全学科1年, 必修)での図書館長担当授業において, 図書館ガイダンス受講を復

習課題として導入した. その他の正課内及び正課外でのガイダンス受講状況を以下に示す.

平成 28 年度 図書館ガイダンス実施結果

○新入生ガイダンス

実施日	参加人数	申込内容	学科
4月～5月	43	大学で学ぶ ガイダンス+OPAC検索	看護
	39		栄養
	63		保健福祉
	55		通信
	57		システム
	52		人間情報
	41		デザイン工学
	49		造形デザイン
合計	399		

○文献の探し方

月	参加人数	申込内容	学科
5月17日	39	文献の探し方 (PubMed・CiNii・医中誌)	フレッシュマンセミナー
9月20日	10	文献の探し方 (PubMed・CiNii・医中誌)	看護学科
10月12日	3	文献の探し方 (PubMed・医中誌・電子ジャーナル)	保健福祉学科
2月13日	5	文献の探し方 (CiNii・医中誌)	栄養学科
合計	57		

○その他

月	参加人数	申込内容	学科
10月7日	10	ガイダンス	総社東小学校生活科授業 「大学の施設見学」
10月27日	40	ガイダンス	倉敷工業高校ファッション 技術科1年生
合計	50		

1-1-4 選書ツアー学生参加状況及び学生希望図書状況

平成 21 年度より実施している選書ツアーは, 学生が学習や研究に役立つ書籍を書店で実際に手に取って選書する企画である. 本年度は 14 名の学生が参加し, 教養書や専門書を選書した. 内訳を以下に示す. また学内で希望図書の申請のあった図書数を以下に示す.

選書ツアー2016（平成28年6月18日実施）

学部	学科	参加人数	新規購入冊数
保健福祉学部	看護	0	0
	栄養	0	0
	保健福祉	2	28
	大学院生	0	0
小計		2	28
情報工学部	情報通信	2	15
	情報システム	3	24
	人間情報	1	12
	大学院生	0	0
小計		6	51
デザイン学部	デザイン工学	4	26
	造形デザイン	2	12
	大学院生	0	0
小計		6	38
合計		14	117

学生希望図書（平成28年度）

学部等	大学院			保健福祉			情報工			デザイン		総計
	保健福祉学	情報系工学	デザイン学	看護	栄養	保福祉	情報通信	情報システム	人間情報	デザイン工学	造形デザイン	
受付数	9	0	0	1	3	2	10	2	1	6	1	35
購入	7	0	0	1	3	2	8	2	1	6	1	31
購入不可	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
申込者数	4	0	0	1	2	2	3	2	1	2	1	18

1-2 英語文献利用講習会

英語文献の利用推進を図るため、平成29年1月20日に講師を招いて講習会を実施した。講義は、論文執筆に役立つ無料文献管理ツールの使い方を中心に行った。参加人数は20名であった。参加者の内訳を以下に示す。

- 教員 8名（看護2, 栄養4, 情報通信1, 造形デザイン1）
- 大学院生 5名（保福4, 情報1）
- 学部生 7名（保福5, 情報2）

1-3 電子ジャーナルの利用

教育・研究推進に必要な英語文献の電子ジャーナル契約の要望が増えている。以下に本学で契約中の電子ジャーナルのタイトル及びその利用状況を示す。今年度は教員への英語文献の希望調査を行い、実状に合わせた英語文献の整備をした。

平成 28 年度 利用可能な電子ジャーナルタイトル

(平成 29 年 3 月 31 日現在)

	分野	ダウンロード数
ScienceDirect (883 タイトル)	健康科学・神経科学等	7493
タイトル名	分野	ダウンロード数
The American journal of clinical nutrition	食品科学・栄養学	87
Applied physics letters	物理学一般/応用物理学	170
The British journal of nutrition	食品科学・栄養学	23
Childhood education	教育学	19
ECS journal of solid state science and technology	物性物理学/物理化学・理論化学/電子材料・デバイス	35
ECS transactions	物性物理学	20
Educational administration quarterly	教育行政・学校運営	6
IEEE journal of solid state circuits	情報科学	42
IEEE transactions on computer-aided design of integrated circuits and systems	情報科学	11
IEEE transactions on computers	情報科学	14
Journal of biological chemistry	生化学・分子生物学	423
Journal of child and family studies	社会心理学・精神医学/家族・ジェンダー	9
Journal of the electrochemical society	物性物理学/物理化学・理論化学/電子材料・デバイス	22
Journal of nursing administration	看護管理	58
The Journal of nutrition	食品科学・栄養学	104
Nature neuroscience	神経科学	29
Nursing older people	老年医学	46
Nursing research	看護学	30
Nursing science quarterly	看護学	7
Proceedings of national academy of sciences	科学技術一般	172
Word & image	言語・言語学	13

American Journal of Public Health	公衆衛生・疫学	0
American Journal of Psychology	心理学	21
Machine-ラーニング	認知科学・人工知能	12
The Journals of Gerontology: Series A	老年医学/生理学	9
Journal of the ACM	情報理論・データ構造・暗号学/データベース/コンピューター一般	0
Public health nursing	看護学/公衆衛生・疫学	2
Journal of Agricultural and Food Chemistry	農業・食品/農学/食品科学・栄養学	47

1-4 リポジトリ公開登録及び利用状況

現在,日本の機関リポジトリ設置機関数は世界有数の規模にまで広がり,教育研究成果の公開やオープンアクセスの義務化も検討されようとする現状にある.このような中,オープンアクセスへ寄与することは研究者や大学,研究機関として必要とされる条件となりつつある.本学におけるリポジトリ公開登録件数及び利用状況を以下に示す.

リポジトリ公開登録件数 1,150 件 (平成 29 年 3 月 31 日現在)

	公開登録件数	ダウンロード数	閲覧
平成 26 年度	29 件	11,608 件	6,488 件
平成 27 年度	879 件	34,399 件	6,286 件
平成 28 年度	242 件	74,318 件	13,269 件

1-5 まとめと課題

図書館利用推進の一環として本年度も図書館ギャラリーの貸出しや学生を対象とした図書館利用教育を実施した.また学生が書店で実際に学習や研究に役立つ書籍を選書できる選書ツアーでは,14名の参加者により117冊の選書が行われたが,応募状況はやや少ない状況であり,今後は企画の周知ならびに意義を認知させる工夫が必要と考えられる.また年間を通じて受付けている学生希望図書には18名から申し込みがあり31冊を蔵書として加えたが,希望図書数としては少ない状況であり,学生の書籍への関心の低さが懸念される.平成29年度より稼働される全学情報システムを活用して図書館のニーズ等について調査する予定である.電子ジャーナルの活用促進を目的として開催した講習会では,参加した学生及び教員に対して文献管理ツールの活用法を教示した.洋雑誌及び電子ジャーナルの利用希

望に関するアンケート調査を実施し,その実状に合わせた文献の整備を行った.洋雑誌及び電子ジャーナルの利用統計を蓄積し今後も利用状況をモニタリングして,よりより学修環境の提供に努めたい.

付録 1
A 入試統計
A-1 学士課程

一般入試

単位:人

学部	学科	平成28年度						平成29年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	28	200	117	33	31	3.5	28	105	64	33	28	1.9
	栄養学科	28	152	140	37	28	3.8	28	106	102	35	32	2.9
	保健福祉学科社会福祉学専攻	28	78	41	32	30	1.3	28	93	56	33	28	1.7
	保健福祉学科子ども学専攻	14	59	37	15	15	2.5	14	68	43	17	15	2.5
	学部計	98	489	335	117	104	2.9	98	372	265	118	103	2.2
情報工学部	情報通信工学科	37	578	308	107	45	2.9	37	527	297	105	51	2.8
	情報システム工学科	37	775	397	129	48	3.1	37	696	351	126	48	2.8
	人間情報工学科	27	291	154	74	44	2.1	27	375	211	65	29	3.2
	学部計	101	1,644	859	310	137	2.8	101	1,598	859	296	128	2.9
デザイン学部	デザイン工学科	30	138	131	35	32	3.7	30	118	112	35	29	3.2
	造形デザイン学科	38	97	92	42	38	2.2	38	97	89	41	40	2.2
	学部計	68	235	223	77	70	2.9	68	215	201	76	69	2.6
合計		267	2,368	1,417	504	311	2.8	267	2,185	1,325	490	300	2.7

○倍率=受験者数/合格者数

推薦入試

単位:人

学部	学科	平成28年度						平成29年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	12	41	41	12	12	3.4	12	37	37	13	13	2.8
	栄養学科	12	39	39	12	12	3.3	12	33	33	12	12	2.8
	保健福祉学科社会福祉学専攻	12	32	32	13	13	2.5	12	26	26	13	13	2.0
	保健福祉学科子ども学専攻	6	21	21	7	7	3.0	6	22	22	6	6	3.7
	学部計	42	133	133	44	44	3.0	42	118	118	44	44	2.7
情報工学部	情報通信工学科	13	29	29	13	13	2.2	13	25	25	13	13	1.9
	情報システム工学科	13	19	19	13	13	1.5	13	26	26	14	14	1.9
	人間情報工学科	13	18	18	14	14	1.3	13	25	25	14	14	1.8
	学部計	39	66	66	40	40	1.7	39	76	76	41	41	1.9
デザイン学部	デザイン工学科	10	13	13	10	10	1.3	10	19	19	11	11	1.7
	造形デザイン学科	12	36	36	12	12	3.0	12	26	26	12	12	2.2
	学部計	22	49	49	22	22	2.2	22	45	45	23	23	2.0
合計		103	248	248	106	106	2.3	103	239	239	108	108	2.2

○倍率=受験者数/合格者数

第3年次編入学試験

単位:人

学部	学科	平成28年度			
		志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
保健福祉学部	栄養学科	13	13	1	0
デザイン学部	デザイン工学科	3	3	1	0
合計		16	16	2	0

○募集人員は、いずれも若干名

○いずれも平成29年度募集せず。

A-2 大学院課程

博士前期課程・修士課程

単位:人

研究科	専攻	平成28年度						平成29年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	看護学専攻	7	15	15	11	11	1.4	7	16	16	14	11	1.1
	栄養学専攻	6	8	8	8	6	1.0	6	3	3	3	3	1.0
	保健福祉学専攻	7	8	8	8	7	1.0	7	7	7	7	7	1.0
	研究科計	20	31	31	27	24	1.1	20	26	26	24	21	1.1
情報系工学研究科	システム工学専攻	52	56	55	50	46	1.1	52	55	53	50	46	1.1
デザイン学研究科	デザイン工学専攻	7	2	1	1	1	1.0	7	2	2	2	2	1.0
	造形デザイン学専攻	9	6	6	6	6	1.0	9	2	2	2	2	1.0
	研究科計	16	8	7	7	7	1.0	16	4	4	4	4	1.0
合計		88	95	93	84	77	1.1	88	85	83	78	71	1.1

○倍率=受験者数/合格者数

博士後期課程

単位:人

研究科	専攻	平成28年度						平成29年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	保健福祉科学専攻	5	8	8	6	6	1.3	5	9	9	8	8	1.1
情報系工学研究科	システム工学専攻	6	1	1	1	1	1.0	6	4	4	4	3	1.0
合計		11	9	9	7	7	1.3	11	13	13	12	11	1.1

○倍率=受験者数/合格者数

B 卒業時・修了時アンケートの詳細

卒業時アンケート

調査項目：以下の集計表に示す 21 項目

調査時期：平成 28 年 3 月 24 日

調査対象：平成 27 年度卒業生（397 人）

回収率：97.7%（保健福祉学部 138 人，情報工学部 151 人，デザイン学部 99 人）

集計方法：学部別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

問 1. あなたの入学年は、

- ① 平成 26 年，② 平成 25 年，③ 平成 24 年，④ 平成 23 年，⑤ 平成 22 年以前

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	0	0	128	7	1	2
情報工学部	0	1	130	18	2	0
デザイン学部	5	2	83	7	2	0
全 体	5	3	341	32	5	2

問 2. 本学に合格した入学試験の種別は、

- ① 前・中・後期日程入試，② 推薦入試，③ 編入学，④ 再入学，⑤ 私費外国人留学生・帰国子女特別選抜・社会人特別選抜

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	99	38	1	0	0	0
情報工学部	112	38	0	0	1	0
デザイン学部	71	22	6	0	0	0
全 体	282	98	7	0	1	0

問 3. 卒業後の進路は、

- ① 就職（専攻と関連する職業），② 就職（専攻と関連しない職業），③ 進学（大学院・編入），④ 進学（再入学・専攻の変更），⑤ 未定・その他

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	113	9	11	3	1	1
情報工学部	64	30	47	6	4	0
デザイン学部	66	17	9	0	7	0
全 体	243	56	67	9	12	1

問 4～21 については、次ページに一覧を示す

平成27年度「卒業時アンケート」の集計

	看護学科	栄養学科	保健福祉学科	情報通信工学科	情報システム工学科	スポーツシステム工学科	デザイン工学科	造形デザイン学科	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	全体
対象者数	42	37	60	44	65	43	48	58	139	152	106	397
回答者数	42	37	59	43	65	43	47	52	138	151	99	388
回収率(%)	100.0	100.0	98.3	97.7	100.0	100.0	97.9	89.7	99.3	99.3	93.4	97.7

【教養的成長】 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか												
「コミュニケーション(語学教育)」系は	3.4	3.5	3.5	3.2	3.4	3.5	3.7	3.6	3.48	3.41	3.63	3.48
「人間と文化の理解」系は	3.4	3.4	3.5	3.5	3.4	3.4	3.6	3.6	3.42	3.44	3.63	3.47
「現代社会に生きる」系は	3.3	3.3	3.4	3.5	3.5	3.4	3.6	3.5	3.36	3.46	3.54	3.44
「科学技術と環境」系は	3.3	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5	3.7	3.5	3.36	3.54	3.53	3.47
「健康の維持・増進(体育を含む)」系は	3.6	3.7	3.7	3.7	3.5	3.7	3.7	3.6	3.69	3.62	3.64	3.65
教育的成長の平均	3.41	3.44	3.49	3.49	3.48	3.50	3.64	3.57	3.46	3.49	3.59	3.50
【専門的成長】 次の教育科目群(主に学部教育に関するもの)は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか												
全学教育科目群「学部教育への準備」系は	3.7	3.7	3.7	3.7	3.8	3.8	3.9	3.8	3.70	3.80	3.86	3.78
学部教育科目の講義は	4.1	4.1	4.1	4.0	4.1	4.0	4.4	4.2	4.11	4.05	4.27	4.12
実験・実習・演習は	4.4	4.5	4.6	4.3	4.2	4.2	4.5	4.5	4.54	4.23	4.49	4.39
卒業研究は	4.1	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.5	4.28	4.29	4.42	4.31
専門的成長の平均	4.07	4.15	4.19	4.07	4.11	4.09	4.28	4.25	4.16	4.09	4.26	4.15
【総合的成長】 あなたが本学在学中に身につけた能力について尋ねます												
社会の一員として生きる力は	3.8	3.8	3.9	3.6	3.6	3.7	3.9	3.7	3.85	3.66	3.77	3.75
基礎学力は	3.7	3.8	3.8	3.6	3.6	3.6	3.7	3.4	3.80	3.64	3.48	3.67
専門的な知識と技術の広がり	4.1	4.1	4.2	3.8	3.9	3.9	4.1	4.1	4.14	3.87	4.14	4.03
創造的に考える力は	3.8	3.7	3.8	3.5	3.6	3.6	4.3	4.2	3.76	3.59	4.21	3.78
自らをみがき発展させる力は	3.8	3.8	3.8	3.5	3.5	3.6	4.1	4.0	3.80	3.54	4.03	3.74
コミュニケーションの力は	3.9	3.9	4.0	3.6	3.6	3.7	4.0	3.8	3.97	3.67	3.86	3.82
ソーシャルスキル・ビジネスマナーは	3.6	3.7	3.8	3.1	3.2	3.2	3.7	3.5	3.71	3.18	3.52	3.44
職業人(プロ)となる意識は	4.0	3.9	4.0	3.2	3.2	3.3	4.1	3.9	3.93	3.27	3.97	3.65
総合的成長の平均	3.83	3.85	3.90	3.50	3.54	3.58	3.98	3.82	3.87	3.55	3.87	3.73
【全般的満足】 全般的に本学の教育は満足でしたか												
全般的に本学の教育は満足でしたか	3.86	3.91	4.06	3.84	3.79	3.87	4.09	3.98	3.98	3.84	4.01	3.93

注)アンケートの集計結果は、5段階評価(1:否定~5:肯定)の平均値を示す

平成27年度「修了時アンケート」の結果

看護学	栄養学	保健福祉学	システム工学	デザイン工	造形デザ イン学	保健福祉 学研究所	情報工学研究所	デザイン学研究所	全体	対象者数	4	5	3	46	5	5	12	46	10	68
										回答者数	3	5	2	46	5	5	10	46	10	66
										回収率 (%)	75.0	100.0	66.7	100.0	100.0	83.3	100.0	100.0	97.1	

【教育と学修】	修士課程のカリキュラム・教育等は、専門力を身につける上で、適切でしたか。	3.00	3.40	2.50	3.28	3.40	3.20	3.10	3.28	3.30	3.26
教育と学修の平均		3.00	3.40	2.50	3.28	3.40	3.20	3.10	3.28	3.30	3.26
【教育と学習】	修士研究を実施した環境について聞かせてください。	4.33	4.40	3.50	3.74	3.00	4.40	4.20	3.74	3.70	3.80
大学院の学業に意欲的に取り組んだと思いますか。		4.00	4.40	4.00	3.76	2.80	4.20	4.20	3.76	3.50	3.79
修士論文の作成や日常の研究について、指導教員から十分な指導を受けることができましたか。		4.67	4.80	4.50	4.24	4.00	4.80	4.70	4.24	4.40	4.33
教育と学習の平均		4.33	4.53	4.00	3.91	3.27	4.47	4.37	3.91	3.87	3.97
【学びの実践】	研究倫理について学ぶ機会がありましたか。	3.33	3.40	4.00	3.28	2.40	3.60	3.50	3.28	3.00	3.27
研究を行うための基礎知識やスキルは身についたと思いますか。		3.67	4.60	3.50	4.04	3.60	4.20	4.10	4.04	3.90	4.03
自分が行った研究を学会等で発表する機会がありましたか。		1.33	2.40	2.00	2.87	1.60	1.60	2.00	2.87	1.60	2.55
自分が行った研究を学会等の論文に執筆する機会がありましたか。		1.33	1.80	1.50	2.24	1.00	1.00	1.60	2.24	1.00	1.95
学びの実践の平均		2.42	3.05	2.75	3.11	2.15	2.60	2.80	3.11	2.38	2.95
【能力獲得】	自分で研究課題を発見する力が身についたと思いますか。	4.00	3.80	3.50	3.65	3.60	4.20	3.80	3.65	3.90	3.71
自分で発見した課題や与えられた課題を研究する場合、研究計画を立てる力が身についたと思いますか。		3.67	3.80	3.00	3.43	3.40	4.20	3.60	3.43	3.80	3.52
修士課程で学んで、取り組んだ課題を解決するための分析や評価方法を学びましたか。		4.00	4.20	4.00	3.98	3.80	4.20	4.10	3.98	4.00	4.00
修士課程での学業や経験は今後の進路(進学先または就職先)で役立つと思いますか。		4.67	4.20	4.00	3.80	4.60	4.60	4.30	3.80	4.60	4.00
能力獲得の平均		4.08	4.00	3.63	3.72	3.85	4.30	3.95	3.72	4.08	3.81
【満足度】	本学の教育について満足することができましたか。	4.33	4.60	4.00	3.96	3.60	4.60	4.40	3.96	4.10	4.05

注)アンケートの集計結果は、5段階評価(1:否定～5:肯定)の平均値を示す

C 全学的就職支援の実施状況

C-1 就職ガイダンスの実施状況

実施日	ガイダンスの内容	実施機関等	参加学生数
6月16日	進路・就職ガイダンス	(株)リクルートキャリア	39
6月23日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校	19
10月 6日	就職ガイダンス	(株)リクルート	146
10月13日	内定者・就職活動報告会	本学キャリアカウンセラー	69
10月20日	自己分析・志望動機ワークショップ	(株)リアセック	46
10月27日	エントリーシート対策講座	本学キャリアカウンセラー	82
11月17日	求人NAVI操作説明会 求人票の見方について	(株)ジェイネット 本学キャリアカウンセラー	33
11月24日	面接力UPセミナー	本学キャリアカウンセラー	78
12月 1日	業界研究講座	(株)リクルート	142
12月 8日	就活準備お悩み解決講座	本学キャリアカウンセラー	45
12月15日	地元優良企業の探し方	(株)ビザビ	38
1月12日	グループディスカッション対策講座	(株)シーズ	9
1月19日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校 総社市, 岡山県警人事担当者	21
1月26日	就活ゼミ～新聞の読み方・活かし方～ 就活直前！総まとめ講座	(株)山陽新聞社 本学キャリアカウンセラー	62

C-2 職業適性検査等の実施と解説

実施日	検査名	実施機関等	受検学生数
6月20日～30日 9月20日～10月6日	職業適性診断	(株)リアセック	97
7月21日	職業適性診断解説講座		

C-3 各種模擬テストの実施

実施日	試験名	実施機関等	受験学生数
4月16日	公務員模擬試験	東京アカデミー岡山校	33
7月14日	SPI+一般常識・時事Web模擬テスト	(株)マイナビ	10
11月10日	SPI模擬テスト	(株)ジェイ・ブロード	41

C-4 就職活動バス（合同企業説明会へのバス）の運行

運行日	合同企業説明会参加場所	主催者	参加学生数
3月 6日	大阪（インテックス大阪）	(株)マイナビ	30

C-5 就職相談員による就職相談

相談日	相談時間	内 容 等
毎週 月曜日 火曜日 金曜日	10:30～15:30	キャリアカウンセラーによる各種相談を実施 ◇相談内容等 ・就職活動のすすめ方 ・履歴書・エントリーシート等書類に関する相談 ・面接対策 など ◇H28年度相談件数 ・ 1, 3 6 2 件

D 国際交流

・英国語学文化研修の実績概要

①期 間：平成28年8月29日（月）～9月21日（水）

②研修内容：英国国立バンガー大学における英語力向上と英国文化体験など

③参加学生：5名

④費用実績：約423,000円※

上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、授業料、ホームステイ費、フィールド・トリップ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

・韓国語学文化研修の実績概要

①期 間：平成28年8月25日（木）～9月9日（金）

②研修内容：梨花女子大学（韓国ソウル市）にて韓国語力向上と梨花女子大学学生との交流、韓国伝統文化体験など

③参加学生：2名

④費用：約156,000円※

上記の費用には往復航空運賃、授業料、宿泊代、食費、見学費及び見学に伴う交通費などが含まれている。

・中国語学文化研修の計画概要

①期 間：平成28年8月20日（土）～8月27日（土）

②研修内容：雲林科技大学（台湾雲林県）にて中国語力向上と文化体験など

③募集人数：10名（最少催行人数5名，応募人数0名）

④費用：110,000円※

上記の費用には往復航空運賃、授業料、宿泊代、施設見学費、諸経費などが含まれている。

・南オーストラリア州アデレード語学文化研修の実績概要

①期 間：平成29年2月24日（金）～3月20日（月）

②研修内容：アデレード大学（南オーストラリア州アデレード市）における英語力向上と文化体験など

③参加学生：15名

④費用実績：380,000円※

上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、授業料、ホームステイ費、ソーシャルアクティビティ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

・日本語・文化研修の実績概要

①期 間：平成28年7月20日（水）～7月28日（木）（9日間）

②研修内容：主として本学と国際交流協定を締結している海外の大学の学生を対象に、日本語講座の開講、本学学生や地域住民との交流、岡山県内の産業・史跡・文化財見学等を行い、研修を通じて学生の日本語能力の向上や相互理解を深めるもの

③参加人員：13名

・日本語・文化研修の実施結果

本年度は、台湾雲林科技大学から7名（男性2名，女性5名）、台湾淡江大学から5名（男性1名，女性4名）、中国河南科技大学から1名（男性）の学生が研修に参加しており、生産工学、環境工学、情報管理、経営管理、ソフトウェア、外国語、日本語、デザインなど多様な分野の学生を受け入れた。本年度の研修は、次のプログラムにより実施しており、昨年に引き続きホームステイを企画して地域住民との交流の充実を図った。

月日 (曜日)	10:00～10:50	11:00～11:50	13:00～13:50	14:00～14:50	15:00～15:50	16時以降
7月20日 (水)	開講式	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
7月21日 (木)	日本語講座	日本語講座	本学学生との交流		日本語講座	日本語講座
7月22日 (金)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	歓迎パーティー
7月23日 (土)	ホームステイ					
7月24日 (日)	ホームステイ					
7月25日 (月)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	授業参加 保健福祉学科	学生交流 保健福祉学科
7月26日 (火)	自由行動		総社市長表敬・総社市内視察・市民との交流			
7月27日 (水)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	修了式		
7月28日 (木)	岡山県南視察 (岡山後楽園、倉敷美観地区、瀬戸大橋)					

・香港スタディツアーの計画概要

- ①期 間：平成28年9月8日(木)～9月15日(木)
- ②研修内容：中華人民共和国香港特別行政区における企業視察，文化体験，香港大学及び香港城市大学学生との交流及び授業参観など
- ③参加学生：4名
- ④費用実績：80,000円※
上記の費用には往復航空運賃，空港税・燃油特別付加運賃，宿泊代及び諸経費などが含まれている。

・保健福祉スタディツアーの実施概要

- ①期 間：平成29年2月24日(金)～3月6日(月)
- ②研修内容：TAFE SA(南オーストラリア州アデレード市)における英語による専門分野の研修及び現地小学校・高校を訪問しての文化交流等
- ③参加学生：14名
- ④費用実績：250,000円※
上記の費用には往復航空運賃，空港税・燃油特別付加運賃，授業料，ホームステイ費，国内交通費・宿泊費及び諸経費などが含まれている。

・台湾スタディツアーの計画概要

- ①期 間：平成29年3月14日(火)～3月21日(火)
- ②研修内容：台湾における企業視察，文化体験，雲林科技大学及び淡江大学学生との交流及び授業参観，ホームステイなど
- ③参加学生：3名
- ④費用実績：約70,000円※
上記の費用には往復航空運賃，空港税・燃油特別付加運賃，宿泊代及び諸経費などが含まれている。

E 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入

E-1 講師派遣

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
和気閑谷高等学校	和気閑谷高校	保健福祉	教授	井村 圭壯	総合的な学習の時間	20	3	H28. 6. 20
倉敷鷺羽高等学校	倉敷鷺羽高校	保健福祉	教授	井村 圭壯	福祉・看護・保育系に進む高校生に伝えたいこと	10	3	H28. 7. 13
色久高等学校	色久高校	保健福祉	教授	井村 圭壯	社会福祉系学部で学べること	30	1-3	H28. 7. 20
倉敷古城池高等学校	倉敷古城池高校	保健福祉	准教授	佐藤 美恵	研究関連の講義	40	2	H28. 9. 20
倉敷南高等学校	倉敷南高校	保健福祉	教授	川上 貴代	食と健康	57	1.2	H28. 10. 4
		デザイン	講師	作元 朋子	デザインから見る陶芸の魅力	10		
岡山龍谷高等学校	龍谷高校	保健福祉	教授	井村 圭壯	福祉・保育・看護・栄養への進学について	40	1.2	H28. 10. 14
玉野光南高等学校	玉野光南高校	情報工	教授	佐藤洋一郎	総合的な学習の時間	37	2	H28. 11. 28

E-2 生徒の受入

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
清心女子高等学校	岡山県立大学	保健福祉	教授	伊東 秀之	総合的な学習・物質科学課題研究※	15	2.3	H28. 11. 22、 H28. 12. 7

※ 講義内容等の※印は連携講座（高校が単位認定を行うことができるもの。）

F 高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）

F-1 講師派遣（校内ガイダンス）

月 日	高等学校名	受講者		内 容
		学年	人数	
6月10日	岡山県立総社高等学校	2,3	30	看護学科の説明
9月20日	岡山県立古城池高等学校	2	21	看護学科の説明
10月26日	岡山県立総社南高等学校	2	21	大学全体の説明

F-2 生徒の受入

月 日	高等学校名等	訪問者		内 容
		学年	人数	
7月8日	広島県立高陽高等学校	2	30	保健福祉学部、情報工学部及びデザイン学部 概要説明、施設見学
10月27日	岡山県立倉敷工業高等学校	1	38	デザイン学部概要説明、施設見学

※ 訪問者数には引率教員等を含む。

G 学生・クラブの表彰

G-1 学生の表彰

保健福祉学部	栄養学科	4年	新實 祐理	日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞
保健福祉学研究科	栄養学専攻(博士前期)	2年	次田 実穂	日本栄養改善学会中国支部栄養・実践研究賞
			加藤 奈々	日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞
情報工学部	情報通信工学科	4年	小松 源	日本経営工学会中国四国支部第43回学生論文発表会優秀研究発表賞
	情報システム工学科	4年	刈谷 優作	第11回コンピュータ大貧民大会敢闘賞
情報系工学研究科	システム工学専攻(博士後期)	3年	服部 憲治	仁科顕彰会 仁科賞
			黒川 達矢	The Thirteenth International Conference on Industrial Management Excellent Paper Award
	システム工学専攻(博士前期)	2年	見船 文香	平成27年度(第66回)電気・情報関連学会中国支部連合大会 情報処理学会中国支部奨励賞
			柴田 和樹	一般社団法人 軽金属学会 中国四国支部優秀講演賞
			田頭 幸三	第11回コンピュータ大貧民大会敢闘賞
			安達 太一	第18回 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS 18th) 優秀研究賞
			竹原 勇朔	The Thirteenth International Conference on Industrial Management Excellent Paper Award
			八杉 奨	平成28年度電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞
	システム工学専攻(博士前期)	1年	岡本 大地	電子情報通信学会2016年総合大会 情報システムソサイエティ・学生ポスターセッション 優秀ポスター賞
			北野 大志	2016 International Conference on Analog VLSI Circuits Student Paper Award
			大久保 政一	第18回 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS 18th) 優秀研究賞
			江川 翔一	第18回 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS 18th) 優秀研究賞
			井内 健人	平成28年度電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞

学 部 デザイン	デザイン 工 学 科	4 年	小野 美也子	E & G Design 学生デザイン大賞 特別賞
			稲原 萌	E & G Design 学生デザイン大賞 特別 賞
			原田 安祐実	JIDA 関西ブロック学生デザイン賞 最優秀賞
	3 年	角川 夕依	平成 28 年度デザインパテントコンテスト 優秀賞 (大学部門)	
	造形デザイン 学 科	4 年	三浦 佳代子	そうじゃ吉備路マラソン応援のぼりデザイン 最優秀賞
			3 年	中村 章衣
		和田 紗夜		第 23 回ヤングセラミストミーティング in 中四国 作品部門 準大賞
		2 年	岡村 琳夏	全国色彩コーディネートコンクール 2017 ポスター 部門 読売新聞社賞
			河野 杏奈	全国色彩コーディネートコンクール 2017 ファッ ション部門 毎日放送賞
			大槇 美穂	「わが街健康プロジェクト。」PR ポスター グラン プリ
大西 沙織			「わが街健康プロジェクト。」PR ポスター 優秀賞	
西村 百花	「わが街健康プロジェクト。」PR ポスター 優秀賞			
森岡 美里	「わが街健康プロジェクト。」PR ポスター 優秀賞			
学 部 デザイン 研究 科	造形デザイン 学 専 攻 (修士課程)	1 年	森本 早智	日本タイポグラフィ年鑑 2017 学生部門入選
全 学 部	全学科	1 年生(「日本語文章作法」 履修者の一部)		平成 28 年度 第 1 回 (通算第 19 回) 日本語検 定 東京書籍賞 (優秀賞)

G-2 クラブの表彰

サークル名		大会名	成績等
ロボット研究サークル メヒヤニカ		第 16 回レスキューロボットコンテスト	レスキュー 工学大賞
軟式野球部	岡本 拓也 (4 年)	第 2 回全日本軟式野球国際親善大会 (GUAM)	出場
軟式野球部	藤井 広俊 (2 年)	平成 28 年度中国地区大学野球春季 3 部リーグ	ベストナイン
軟式野球部		第 11 回中国地区大学軟式野球連盟新人戦	優勝

軟式野球部	平田 将也 (2年)	第21回中国地区大学軟式野球連盟秋季リーグ戦	ベストナイン
陸上部	坂本 裕太 (4年)	第62回岡山県陸上競技選手権大会(やり投げ)	2位
空手道サークル	難波 寧々 (3年)	第60回全日本学生空手道選手権大会並びに東西対抗戦	出場
サッカー部	長崎 史也 (3年)	岡山県学生サッカーリーグ	ベストイレブン

H 委員会等の審議事項

H-1 教育研究活動委員会

第1回（平成28年4月14日）

- (1) 「国際交流アクションプラン」の策定について
- (2) 台湾雲林科技大学を対象とした科目等履修生募集要項について
- (3) 平成28年度の語学文化研修およびスタディーツアーの派遣計画について
- (4) 平成28年度の日本語・日本文化研修の実施計画について
- (5) 平成28年度のインドネシア・ハサヌディン大学の学生民俗音楽舞踏グループの受入計画について
- (6) 平成28年度外国人留学生奨学金の交付について
- (7) 全学情報システム（学務系）の設計について
- (8) C O C +平成27年度実績報告について

第2回（平成28年5月19日）

- (1) 国際交流アクションプラン（仮称）について
- (2) 平成28年度第2回国際交流推進助成費の募集について
- (3) 平成28年度語学文化研修（韓国）の実施計画の再検討について
- (4) 平成28年度後期交換留学生の募集について
- (5) 平成29年度授業科目の新設について（情報系工学研究科）
- (6) 岡山県立大学大学院学則の一部改正について
- (7) 成績分布の組織的検証及び取組について
- (8) 岡山県立大学における成績評価異議申立てに関する要領について
- (9) 学生授業評価アンケートの改正について
- (10) シラバス改正について
- (11) 平成29年度クォーター制対応学事暦について
- (12) 副専攻「岡山創生学」地域演習科目担当教員への配慮について

第3回（平成28年6月9日）

- (1) 国際交流アクションプラン（仮称）について
- (2) 平成28年度第2回国際交流推進助成費について
- (3) 岡山外語学院との連携協力に関する包括協定の締結について
- (4) 岡山県立大学における成績評価異議申立てに関する要領について
- (5) プロジェクトマネジメント実践論について
（保健福祉学研究科、情報工学研究科、デザイン学研究科）
- (6) 大学院のクォーター制移行について
- (7) G P Aの活用方法について
- (8) 成績評価ほか認証評価関連の改善事項について
- (9) クォーター制導入に向けてのスケジュール（資格関係）について

第4回（平成28年7月14日）

- (1) 国際交流アクションプラン（仮称）について
- (2) ポートランド州立大学（米国）との学術交流協定書について
- (3) 河南科技大学（中国）との学術交流協定書について
- (4) 岡山県立大学履修規程の一部改正について
- (5) 認証評価・自己評価書改善案の取組について
- (6) 教育上主要と認める授業科目の定義等に関する説明について
- (7) グレート・ポイント・アベレージ（G P A）制度の見直しについて
- (8) 「おかやまボランティア演習」に係る学生受入施設への経費の支出について
- (9) 「おかやまボランティア演習」参加に要する経費の一部負担について
- (10) 平成29年度授業科目の新設について（情報系工学研究科）
- (11) 平成29年度大学院授業開講計画等の作成について

- (12) プロジェクトマネジメント実践論について
(保健福祉学研究所、情報工学研究所、デザイン学研究所)
- (13) 平成 28 年度 F D 活動における相互授業参観の実施について
- (14) 平成 28 年度教育力向上支援事業の計画内容変更について
- (15) 平成 29 年度前期交換留学生の募集について
- (16) 平成 29 年度転学生の募集について

第 5 回 (平成 28 年 8 月 18 日)

- (1) グレード・ポイント・アベレージ (G P A) について
- (2) シラバスの見直しについて
- (3) おかやま教育週間における取組について

第 6 回 (平成 28 年 9 月 8 日)

- (1) 平成 2 9 年度大学院授業開講計画について
- (2) 平成 2 8 年度第 3 回国際交流推進助成費について

第 7 回 (平成 28 年 10 月 13 日)

- (1) 河南科技大学 (中国) からの交換留学生の受入について
- (2) 台湾スタディツアーの実施について
- (3) 語学文化研修等の参加に係る誓約書の改訂について
- (4) 平成 29 年度 大学院時間割について
- (5) 平成 29 年度 3 研究科共通授業科目の実施について
- (6) 平成 29 年度 教務・学生生活関係スケジュール (大学院) について
- (7) 2016 年度 教育年報の作成について
- (8) 平成 28 年度後期及び平成 29 年度「授業評価アンケート」について
- (9) グレード・ポイント・アベレージ (G P A) の活用方法について
- (10) 評語、評点を適用する際の基準について
- (11) アドミッションポリシーの修正について
- (12) 岡山県立大学教育力向上支援事業取扱要綱の改正について
- (13) 平成 29 年度 教育力向上支援事業の募集について
- (14) 平成 29 年度 全学講義について

第 8 回 (平成 28 年 11 月 17 日)

- (1) 認証評価の追加確認事項について
- (2) 教育研究者総覧及びシラバス外部公開に係るシステムについて
- (3) 教育研究開発機構における客員教授の選考について
- (4) 平成 29 年度大学院開講計画について
- (5) 平成 28 年度後期「授業評価アンケート」について
- (6) 評語、評点を適用する際の基準について

第 9 回 (平成 28 年 12 月 8 日)

- (1) 認証評価の追加確認事項について
- (2) 評語、評点を適用する際の基準について
- (3) 授業科目の新設について (保健福祉学研究所)
- (4) 平成 29 年度大学院授業開講計画の変更について (保健福祉学研究所)
- (5) 授業改善意見交換会の実施について
- (6) 「おかやまボランティア演習」(1 年次) 及び「地域協働演習」
(2 年次) に係る移動経費等への対応について
- (7) 平成 29 年度全学講義の講師について
- (8) 平成 29 年度教育力向上支援事業について

第10回（平成29年1月12日）

- (1) 各学部等の3ポリシーの改訂について
- (2) 平成29年度入学生履修モデルの作成について
- (3) 評語、評点を適用する際の基準について
- (4) 岡山県立大学大学院学則の一部改正について
- (5) 岡山県立大学グレード・ポイント・アベレージ制度取扱要綱の改正について
- (6) 平成29年度大学院新入生オリエンテーション日程について
- (7) 平成29年度大学院履修案内について
- (8) 岡山県立大学独創的研究助成費取扱要綱の改正について

第11回（平成29年2月9日）

- (1) カリキュラムポリシーの改訂について（デザイン学研究科）
- (2) 平成29年度臨時に設ける授業科目について（大学院）
- (3) 岡山県立大学履修規程の一部改正について
- (4) 岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について
- (5) 平成29年度大学院履修案内について

第12回（平成29年3月9日）

- (1) 中国の南東大学との大学間学術交流協定の締結について
- (2) 平成29年度第1回国際交流推進助成費について
- (3) 平成29年度教育研究開発機構客員教授の候補者について
- (4) 平成29年度岡山県立大学特別研究費の募集について
- (5) 岡山県立大学COC+推進本部規約の改正について
- (6) 岡山県立大学大学教育開発センター規程の改正について
- (7) 岡山県立大学履修規程の一部改正について

H-2 教務専門委員会

第1回（平成28年5月19日）

- (1) 成績分布の組織的検証及び取組について
- (2) 岡山県立大学における成績評価異議申立てに関する要領について
- (3) 平成29年度クォーター制対応学事暦について
- (4) 平成29年度授業開講計画の協議スケジュール及び平成29年度共通教育科目の開講計画への要望等について
- (5) 副専攻「岡山創生学」地域演習科目担当教員への配慮について
- (6) 平成28年度教務専門委員会開催日程について
- (7) 4年次生に係る平成28年度末日程について

第2回（平成28年6月9日）

- (1) 平成29年度共通教育科目開講計画について
- (2) 平成29年度学部教育科目の開講計画等について
- (3) 岡山県立大学における成績評価異議申立てに関する要領について
- (4) GPAの活用方法について
- (5) 成績評価ほか認証評価関連の改善事項について
- (6) クォーター制導入に向けてのスケジュール（資格関係）について
- (7) 平成28年度TOEIC I Pテストの実施について

第3回（平成28年7月14日）

- (1) 認証評価・自己評価書改善策の取組について
- (2) 平成29年度共通教育科目の時間割について
- (3) 平成29年度入学生の卒業要件及び学部教育科目の開講計画について
- (4) 平成29年度学部教育科目における時間割編成について
- (5) クォーター制導入に伴う計算機演習室の学生開放時間の減少について
- (6) PROGテスト学生向け解説会および教職員向け報告会について

第4回（平成28年9月8日）

- (1) 平成29年度共通教育開講計画の変更について
- (2) 平成29年度学部教育科目の入学生の卒業要件及び開講計画について
（デザイン学部）
- (3) 平成29年度学部教育科目の時間割について

第5回（平成28年10月13日）

- (1) 平成29年度教務・学生生活関係スケジュールについて
- (2) グレート・ポイント・アベレージ（GPA）の活用方法について
- (3) 評語、評点を適用する際の基準について

第6回（平成28年11月17日）

- (1) 認証評価の追加確認事項について
- (2) 教育研究者総覧及びシラバス外部公開に係るシステムについて
- (3) 評語、評点を適用する際の基準について
- (4) 平成29年度履修案内の原稿作成について
- (5) 平成29年度「大学コンソーシアム岡山」単位互換提供科目について

第7回（平成28年12月8日）

- (1) 認証評価の追加確認事項について
- (2) 平成29年度学部教育科目の開講計画の変更について
（保健福祉学科子ども学専攻・人間情報工学科）
- (3) 平成29年度臨時に設ける授業科目について
- (4) 平成29年度履修案内の作成について
- (5) 平成29年度副専攻「岡山創生学」の実施について
- (6) 評語、評点を適用する際の基準について
- (7) 平成29年度「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について
- (8) 全学情報システム「シラバス」テスト入力への協力依頼について

第8回（平成29年1月12日）

- (1) 平成29年度学部教育科目の開講計画の変更について
（デザイン学部）
- (2) 評語、評点を適用する際の基準について
- (3) 平成29年度臨時に設ける授業科目について
- (4) 各学部等の3ポリシーの改訂について
- (5) 平成29年度入学生履修モデルの作成について
- (6) 平成29年度新入生オリエンテーションについて

第9回（平成29年2月9日）

- (1) 平成29年度履修モデルについて

- (栄養学科)(造形デザイン学科)
- (2) 平成 29 年度履修案内について
 - (3) 平成 29 年度「大学で学ぶ」について

第 10 回 (平成 29 年 3 月 9 日)

- (1) 平成 29 年度履修モデルについて
- (2) 平成 29 年度開講計画の変更について (デザイン工学科)
- (3) ディプロマ・ポリシーの一部改訂について (情報工学部)
- (4) 平成 29 年度 TOEIC L&R IP テストの実施について

H-3 学生生活委員会

第 1 回 (平成 28 年 5 月 19 日)

- (1) 「障害を理由とする差別の解消の推進に関する公立大学法人岡山県立大学教職員対応要領に基づく手続マニュアル」の運用状況について
- (2) 障害学生支援に関する保健室及び相談室の業務について
- (3) 熊本地震復興支援ボランティア活動 (大学コンソーシアム岡山) について
- (4) 岡山県大学生消防応援隊活動について

第 2 回 (平成 28 年 6 月 16 日)

- (1) 平成 28 年度日本学生支援機構奨学生 (定期採用) の推薦について
- (2) 平成 28 年度日本学生支援機構奨学生 (緊急採用) の推薦について

第 3 回 (平成 28 年 9 月 14 日)

- (1) 食堂・喫茶・売店に関する利用者アンケートについて

第 4 回 (平成 28 年 11 月 25 日)

- (1) 岡山県立大学学生支援室規程の一部改正について (案)
- (2) 公立大学法人岡山県立大学施設管理規程の一部改正について (案)
- (3) 岡山県立大学学生生活規程の一部改正について (案)
- (4) 岡山県立大学学生会館学生支援室・茶室・多目的室管理運営要項の一部改正について (案)
- (5) 学生会館アンケートの実施について

第 5 回 (平成 29 年 3 月 21 日)

- (1) 岡山県立大学大学院生の学会発表等に係る助成について (案)
- (2) 平成 29 年度就職ガイダンス等の日程について (案)

付録 2

A 学部ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

※ 表における表記は次のとおり。

ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：DP

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：CP

アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：AP

1 大学

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>本学は、建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。</p> <p>したがって、次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 豊かな教養と高い人間性を身に付けている。 ● グローバル並びにローカルに活躍し得る企画提案力とコミュニケーション力を身に付けている。 ● 専門性を修得し、課題を発見し解決できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>本学は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 カリキュラムは、共通教育科目、学部教育科目及び教職教育科目に区分しています。 2 共通教育科目では、基礎的知識の体系的理解、生涯にわたる知的活動や社会生活に必要な論理的思考力・問題発見力・批判力・情報処理など汎用的技能の修得、地域連携を通じた社会人基礎力や課題解決力の修得、グローバル化の時代に役立つ語学・異文化理解によるコミュニケーション力の修得を柱として、知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を全学生に実施します。 3 学部教育科目では、共通教育科目の修得で獲得した知識と技術を基盤に、所属学科・専攻等ごとに専門の学術を学び、さまざまな社会的要請に的確に対応できる専門性と実践的能力を育成します。 4 学部教育のカリキュラムは、所属する学科等のカリキュラム・ポリシーに基づいて専門性・問題解決能力の修得に向け編成しています。 5 共通教育科目及び各学部教育科目を通じて、地域課題を知り、それを解決に導くための理論と基礎及び実践的方法を修得します。 6 教職教育科目では、栄養学科に栄養教諭一種免許課程、保健福祉学科子ども学専攻に幼稚園教諭一種免許課程を設けています。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>岡山県立大学は、保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部の3学部からなり、「人間尊重と福祉の増進」を建学の理念として、平成5年に設立されました。</p> <p>本学は、建学の理念の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。</p>

	<p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">● 人間・社会・自然について幅広く学び、それらの関係性を探究したい学生● 実学を身に付け、国内・国外の幅広い分野で社会に貢献したい学生● 新技術・知識の創出に意欲を持ち、地域と世界へ向けて情報発信したい学生
--	--

2 保健福祉学部

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>保健福祉学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。</p> <p>したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養】 豊かな教養を身に付けている。</p> <p>【倫理観】 豊かな感性、倫理観を有し、人を支援する心を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 外国語を含めたコミュニケーション能力と企画提案力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性】 看護、栄養、福祉のそれぞれの分野における十分な専門的知識と技術を身に付けている。</p> <p>【課題発見・解決力】 科学的、論理的思考に基づいた課題探究と解決に必要な多様な基礎知識とそれらを活用する能力を身に付けている。</p> <p>【生涯学習力】 将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>保健福祉学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 1年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養】 幅広い教養とともに専門教育を学ぶために必要な基礎知識を身に付けるための共通教育科目として、「人文・社会科学入門」をはじめとする人文・社会科学群科目や「自然科学入門」をはじめとする自然科学科目群において基礎的知識の体系的理解を行います。</p> <p>【倫理観1】 「大学で学ぶ」、「フレッシュマンセミナー」では大学生活に必要な汎用的技能に加えて豊かな人間性と倫理観を身に付けます。</p> <p>【倫理観2】 臨地実習と統合実習・総合演習では、倫理観と人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 保健福祉学スタディーツアー」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。</p>

	<p>【専門性】 専門教育においては、現場での課題解決に必要となる多様な基礎知識と、それらを活用できる実践力を養成するために、各学科において、基礎から専門にかけて講義科目を体系的に配置するとともに、臨地実習を含む豊富な演習・実験・実習科目を設置しています。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習力】 科学的・論理的思考に基づいた課題発見力と解決力、批判力を育成し、将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付ける卒業研究を、いずれの学科においても1年以上履修します。</p> <p>【資格取得】 共通教育と専門教育を通じて、各学科で国家試験受験資格を含む各種資格ならびに教諭一種免許等を得るために必要な科目が履修できます。</p> <p>【教育力】 教職課程を設置している学科・専攻において、履修生は課程の学びを通じて、求められる教育力を養います。</p>
<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 保健福祉学部は、看護学科、栄養学科、保健福祉学科の3学科で構成されています。</p> <p>本学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。したがって求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護・栄養・福祉のそれぞれの分野に明確な目的意識と意欲、情熱を持っている学生 ● 十分な基礎学力を備え、論理的思考能力を貴ぶ学生 ● 人間理解に基づく保健・医療・福祉を学び、その成果を広く地域や世界に発信する意欲と創意にあふれる学生 ● 豊かな感性を育み、様々な人とコミュニケーションできる能力、人を支援する心を身に付けたい学生

2-(1) 看護学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養】 豊かな教養を身に付けている。</p> <p>【倫理観】 看護専門職としてのアイデンティティを形成し、専門職業人の持つべき知識・価値観・倫理観を自ら継続・発展させていく能力を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 グローバルな視点を持ち、看護の実践・教育・研究領域におけるリーダーやスペシャリストとして、必要な看護を創造するために企画や解決策を提案し、社会に貢献できる能力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 人間理解を基盤にしたヒューマンケアリングが実践できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 看護の専門知識・技術を用いて、人々の生涯にわたる多様な健康レベルの人々の健康課題を科学的・論理的に判断し、解決方策を提案できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3】 保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解し、多職種と連携・協働できるマネジメント力、実践力を身に付けている。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習力】 自ら学び続け、将来は看護の実践・教育・研究領域において、問題解決できる力と将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>看護学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 1年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養】 1年次から2年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文社会学入門」「自然科学入門」、専門分野共通の基礎として「健康科学入門」などを設けています。</p> <p>【倫理観1】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理」などの科目を設けています。</p> <p>【倫理観2】 専門科目における「統合と実践カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーショ</p>

	<p>ン能力とグローバルな視点を身に付けます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 保健福祉学スタディーツアー」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得するほか、「国際保健看護論」などを通じて、専門分野の異文化理解を深めます。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。</p> <p>【専門性1】 1年次から2年次までに学部教育「専門基礎分野」等の科目を履修します。ここで、人体の仕組みと病態や人間生活、健康支援や社会制度を学びます。さらに3～4年次への「専門分野」導入として「基礎看護学カテゴリー」をはじめとする、各種の看護学カテゴリー科目について学び、基礎的な知識と技術を修得します。</p> <p>【専門性2】 2年次から3年次には「専門分野」科目を主に履修します。ここで「小児、成人、母性、老年や精神看護学カテゴリー」など各領域の学びをはじめるとともに、「統合と実践カテゴリー」における看護アセスメント、マネジメント教育等を通じて、主要な健康課題と健康増進のための理論を修得するとともに、倫理観に基づいた看護実践を提供できる基盤としての能力を育成します。その上で、健康問題を持つ個人・集団・地域を対象に看護診断をし、解決に必要な知識と技術を育成します。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。</p> <p>【専門性3】 3年次から4年次には「小児、成人、母性、老年や精神看護学」など、各領域別の講義や臨地実習を行います。これらの科目を通じて、人間の尊厳や多様性を学び、科学的根拠に基づくアセスメント及びヒューマンケアリングが実践できる基盤を育成するとともに、他の医療専門職と連携し協働する力を養います。さらに「統合実習」を通じて、これまで学んだ知識・技術・態度を統合し、看護実践力とともに倫理観を高めます。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習能力】 3年次から4年次に「看護研究」「卒業研究」の科目を通じて、これまでに学んだ専門的知識や実践力を広い視点で統合し、生涯に渡って研究的な方法を用いて健康課題を特定し解決策を論理的に説明するとともに企画提案できる能力を育成し、保健医療分野でのリーダーとして必要な基盤を育成します。</p> <p>【資格取得】 本学科は、看護師国家試験受験資格を満たす科目を卒業要件とし、一部の者には助産師国家試験受験資格に必要な科目が選択できるように配置しています。</p>
<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し、地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。</p> <p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人々の健康に関心があり、学ぶことに対する意欲がある学生 ● 他者を思いやり、主体性をもって多様な人と協働することができる学生 ● 看護の多様な側面を学ぶ上で必要な理数系または文科系の基礎学力がある学生

- 探求心があり、根拠を基に論理的に解決する学生
- 何事にも前向きに取り組み、チャレンジ精神が旺盛な学生
- 看護専門職として、地域や国際社会に貢献したい学生

【入学者選抜の基本方針】

看護学科では、高等学校で主体性をもって学習することによって、看護を学問として追及するための基礎学力を備えた学生、看護の実践を発展させる可能性を持つ好奇心豊かで行動力のある学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別選抜（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。

・一般入試（前期日程、後期日程）

前期日程および後期日程ともに、大学入試センター試験では5教科5科目又は5教科6科目および個別学力検査では小論文と面接を課し、高等学校で得た基礎的な知識や技能、思考力、判断力、表現力等を総合評価します。

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。

面接は、集団による方法で実施し、出願書類を参考に学習意欲、表現力、社会性、協調性等を総合評価します。

・推薦入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接は、個人面接を行い、出願書類を参考に、関心、豊かな人間力、知識、教養、探求心等を総合評価します。

・帰国生入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格とすることがあります。

・私費外国人留学生入試

日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格とすることがあります。

2-(2) 栄養学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養】 豊かな教養を身に付けている。</p> <p>【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 食と健康の専門家に必要な資質として、基本的知識・技術を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 栄養学に関する専門職業人として必要な高度な専門的応用知識・技術を発揮できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3】 栄養学の総合的な学びを深め、多職種と連携・協働できるマネジメント力、実践力を身に付けている。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習力】 専門分野における問題発見・解決能力を身に付けている。また、多様な対象者に対して、科学的思考に基づいて適切かつ高度な食・栄養支援を実践するための応用知識や技術を、将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>栄養学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 1年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養】 1年次から2年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文社会学入門」「自然科学入門」、専門分野共通の基礎として「健康科学入門」などを設けています。</p> <p>【倫理観1】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理」などの科目を設けています。</p> <p>【倫理観2】 専門科目における「総合演習及び臨地実習カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、健康を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーショ</p>

	<p>ン能力とグローバルな視点を身に付けます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 「保健福祉学スタディーツアー」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。</p> <p>【専門性1】 1年次から2年次までに学部教育「専門基礎分野」科目を履修します。「社会・環境と健康」「人体の構造と機能・疾病の成り立ち」及び「食べ物と健康」の各カテゴリーの科目の履修を通じて、食と健康の専門家としての基本的な知識や技術について学びます。さらに3～4年次への「専門分野」導入として「基礎栄養学」や「応用栄養学」などの科目について履修をはじめます。</p> <p>【専門性2】 2年次から3年次には「専門分野」科目を主に履修します。専門職業人として必要な高度な専門的応用知識として、「栄養教育論」、「臨床栄養学」、「公衆栄養学」や「給食経営管理論」などのカテゴリーの各論において、栄養学に関する応用的な知識と方法、病態と栄養に関する応用的な知識と方法、集団の栄養に関する知識と方法、集団の給食に関する知識やサービスマネジメント能力、さらには栄養指導能力を修得します。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。</p> <p>【専門性3】 3年次から4年次には、専門分野各論の充実した履修とともに、「総合演習」及び「臨床実習」カテゴリー科目の履修を通じて、栄養学の総合的かつ実践的な学びを深めるとともに、学外の関係機関において「臨床栄養学」「公衆栄養学」や「給食運営」などの、実地での履修を通じて、学外の評価を得ながら栄養学に関する実践力を高めます。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習力】 4年次には「卒業研究」を履修し、科学的に探求する態度、論理的に思考する態度、計画的に実行する態度を身に付け、専門分野における問題発見・解決能力、実践能力を育成するとともに、これまで身につけた知識や技術を、将来にわたって自ら積み上げていく力を育成します。</p> <p>【資格取得】 共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には栄養士免許並びに管理栄養士国家試験受験資格が取得可能となるほか、食品衛生管理者並びに食品衛生監視員の任用資格の取得が可能となります。また、教職教育科目を修得することで栄養教諭一種免許状が取得可能となります。</p> <p>【教育力】（栄養教諭教職課程） 教職教育科目を履修することで教育の意義や食教育実践に必要な知識と技術を身に付け、教育能力を育成します。</p>
<p>A P (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自然科学に関心を持ち、食物と人の健康との関係について科学的に理解・探求しようとする学生 ● 栄養学分野の研究に取り組み、これを発展させて社会に還元しようとする

意欲のある学生

- 様々な人とコミュニケーションができ、真しな態度と思いやりの気持ちを持って人と向き合える学生

【入学者選抜の基本方針】

栄養学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に「化学」や「生物」などの自然科学の基礎をしっかりと身に付けており、論理的な思考力、豊かな人間性、多様な人々と協働して学ぶ態度、コミュニケーション能力、倫理観などの素養を磨いている学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。

・一般入試（前期日程、後期日程）

前期日程では、大学入試センター試験では5教科7科目又は5教科8科目および個別学力検査では理科1科目（化学基礎・化学又は生物基礎・生物）を、後期日程では、大学入試センター試験では5教科7科目又は5教科8科目を課し、高等学校で得た基礎的な知識や技能、思考力、判断力、表現力等を総合評価します。

・推薦入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、出願書類を参考にし、口頭試問（化学基礎又は生物基礎）も実施し、基礎的な知識に加えて表現力、判断力、学習意欲や多様な人々と協働して学ぶ態度等を総合評価します。

・帰国生入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格とすることがあります。

・私費外国人留学生特別入試

日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。

・編入学試験

学力検査では、英語および総合問題の記述試験を行い、大学初等教育ならびに専門教育に必要な基礎知識や技能、思考力、判断力、表現力などを評価します。面接では、調査書などの書類を参考にし、表現力、判断力、学習意欲や多様な人々と協働して学ぶ態度などを評価します。

2-(3) 保健福祉学科

<p>DP (学位授与 の方針)</p>	<p>保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性を兼ね備え、福祉的視点と方法に基づいて、子ども、障害者、高齢者等すべての人々の自立と自己実現を支援し、健康と幸福の増進に寄与することのできる人材を育成することを目指しています。社会福祉学専攻では、特に社会における多様な福祉課題に対処する問題解決能力と共感力をもった人材を、また子ども学専攻では、教育的視点と方法を併せ持った、子どもの育ちと学びに関わる人材を育成することを目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p><社会福祉学専攻></p> <p>【教養】 豊かな教養を身に付けている。</p> <p>【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 社会福祉学と健康科学の知識・理論を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 ソーシャルワークの方法および実践的な相談援助技術を身に付けるとともに、多職種と連携できる力を身に付けている。</p> <p>【専門性3】 ケアワークの方法および実践的な生活支援技術を身に付けるとともに、多職種と連携できるマネジメント力、実践力を身に付けている。</p> <p>【課題発見・解決力】【生涯学習力】 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる知識や技能を将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。</p> <p><子ども学専攻></p> <p>【教養】 豊かな教養を身に付けている。</p> <p>【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 教育学と発達科学の知識・理論を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 子どもに対して実践的な保育および教育の指導や支援ができる力を身に付</p>
------------------------------	---

	<p>けている。</p> <p>【専門性3】 子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を身に付けている。</p> <p>【課題発見・解決力】【生涯学習力】 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる知識や技能を将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>保健福祉学科は、社会福祉学専攻と子ども学専攻の2専攻を設置しています。学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、2専攻は次のような教育課程を編成しています。</p> <p><社会福祉学専攻></p> <p>【導入教育】 1年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養】 1年次から2年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文社会学入門」「自然科学入門」、専門分野共通の基礎として「健康科学入門」などを設けています。</p> <p>【倫理観1】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理」などの科目を設けています。</p> <p>【倫理観2】 専門科目における「生活支援及び自立支援カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 「保健福祉学スタディーツアー」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」「地域福祉論」「地域組織論」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。</p> <p>【専門性1】 1年次から2年次までに両専攻の「専門共通」科目を履修し、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った「福祉」専門職の基礎となる知識を修得します。さらに「専門分野」科目として、「生活支援領域」及び「自立支援領域」の各カテゴリー科目の履修を開始し、社会福祉や介護福祉の基礎について履修します。</p> <p>【専門性2】 2年次から3年次には「専門分野」科目を主に履修し、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った「福祉」の専門職として必要な専門領域の知識と技術を修得します。この履修を通じて、社会福祉学と健康科学の知識・理論の修得、ソーシャルワークの方法および実践的な相談援助技術、ケアワークの方法および実践的な生活支援技術を身に付けます。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリテ</p>

イ演習」を設けています。

【専門性3】

3年次から4年次には、専門分野各論の充実した履修とともに、「専門ゼミナール」で各自が学習テーマを設定し、既存研究のレビューや演習等を通して課題に取り組むほか「研究ゼミナール（卒業研究）」で既存研究を参考にしながら、適切な方法（調査、実験、観察、事例研究、文献研究）を用いて研究することにより、専門性を高めていきます。

【課題発見・解決力】 【生涯学習力】

4年間を通じて、1年次は「入門ゼミナール」、2年次は「基礎ゼミナール」、3年次は「専門ゼミナール」、4年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる力を育成します。特に、研究ゼミナールでは、社会福祉学専攻4年間の学業の集大成として、教員のアドバイスを受けつつ、主に「福祉」に関するテーマを選び、卒業研究とします。

【資格取得】

共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には社会福祉士及び介護福祉士国家試験受験資格取得が可能となります。

<子ども学専攻>

【導入教育】

1年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。

【教養】

1年次から2年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文社会学入門」「自然科学入門」、専門分野共通の基礎として「健康科学入門」などを設けています。

【倫理観1】

共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理」などの科目を設けています。

【倫理観2】

専門科目における「専門共通カテゴリー」科目において福祉の心について学ぶとともに、多くの保育及び幼児教育系科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。

【異文化理解・コミュニケーション力1】

「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。

【異文化理解・コミュニケーション力2】

「保健福祉学スタディーツアー」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。

【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】

「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」「地域福祉論」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。

【専門性1】

1年次から2年次までに両専攻の「専門共通」科目を履修し、子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った「保育・教育」専門職の基礎となる知識を修得します。

さらに「専門分野」科目の学びをスタートし、保育や幼児教育の基礎について履修します。

【専門性2】

	<p>2年次から3年次には「専門分野」科目を主に履修します。子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った「保育・教育」の専門職として必要な専門領域の知識と技術を修得します。この履修を通じて、教育学と発達科学の知識・理論の修得、子どもに対して実践的な保育および教育の指導や支援ができる力、子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を育成します。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。</p> <p>【専門性3】</p> <p>3年次から4年次には、専門科目の充実した履修とともに、「専門ゼミナール」で各自が学習テーマを設定し、既存研究のレビューや演習等を通して課題に取り組むほか「研究ゼミナール（卒業研究）」で既存研究を参考にしながら、適切な方法（調査、実験、観察、事例研究、文献研究）を用いて研究することにより、専門性を高めていきます。</p> <p>【課題発見・解決力】 【生涯学習力】</p> <p>4年間を通じて、1年次は「入門ゼミナール」、2年次は「基礎ゼミナール」、3年次は「専門ゼミナール」、4年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる力を育成します。特に、研究ゼミナールでは、子ども学専攻4年間の学業の集大成として、教員のアドバイスを受けて、主に「保育・教育」に関するテーマを選び、卒業研究とします。</p> <p>【資格取得】</p> <p>共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格取得が可能となります。教職教育科目を履修することで保育・教育の意義や保育・教育実践に必要な知識と技術を身に付け、保育・幼児教育能力を育成します。</p> <p>【教育力】（幼稚園教諭及び保育士養成課程）</p> <p>教職教育科目を履修することで保育・幼児教育の意義や教育実践に必要な知識と技術を身に付け、教育能力を育成します。</p>
<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p><社会福祉学専攻></p> <p>【人材育成像及び求める学生像】</p> <p>保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性に加えて、多様な社会的課題に対処できる共感力と問題解決能力を兼ね備えた、子ども、障がい者、高齢者等、すべての人々の健康と幸福の増進に寄与できる人材の育成を目指しています。</p> <p>社会福祉学専攻では、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った人材を育成することを目指します。</p> <p>したがって、社会福祉学専攻において、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 福祉領域における対象者の自立や成長を促す知識と専門的援助技術の修得に努める学生 ● 福祉的問題に対して科学的な思考力や分析力を養い、問題解決能力を高めようとする学生 ● 豊かな人間性を育み、福祉的支援を求める人々に対して、共感、共生しようとする学生 ● 21世紀の福祉社会や地域社会に貢献する意欲のある学生 <p>【入学者選抜の基本方針】</p> <p>保健福祉学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に、豊かな感性、多様な人々と協働して学ぶことのできる態度、コミュニケーション能力、科学的思考力・分析力、表現力、問題解決能力などを有する学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。</p>

・一般入試（前期日程、後期日程）

大学入試センター試験では3教科3科目又は3教科4科目で基礎学力を、また個別学力検査では小論文で自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、学習意欲、コミュニケーション能力、福祉専門職としての適性等を総合評価します。さらに、福祉活動に貢献する意欲を評価します。

・推薦入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、社会福祉学に関連した知識、学習意欲、コミュニケーション能力、専門職としての適性を、評価するとともに、出願書類も参考にしながら、多様な人々と協働して学ぶ態度や福祉社会や地域社会に貢献する意欲等を総合評価します。

・帰国生入試

小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。

面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。

・私費外国人留学生特別入試

日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。

<子ども学専攻>

【人材育成像及び求める学生像】

保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性に加えて、多様な社会的課題に対処できる共感力と問題解決能力を兼ね備えた、子ども、障がい者、高齢者等、すべての人々の健康と幸福の増進に寄与できる人材の育成を目指しています。

子ども学専攻では、子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った人材を育成することを目指します。

したがって、子ども学専攻において、求める学生像は次のとおりです。

- 子どもの発達と学びを育む知識と専門的技術の修得に努める学生
- 保育・教育的問題に対して科学的な思考力や分析力を養い、問題解決能力を高めようとする学生
- 豊かな人間性を育み、保育・教育的支援を求める人々に対して、共感、共生しようとする学生
- 21世紀の保育・教育に貢献する意欲のある学生

【入学者選抜の基本方針】

保健福祉学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に、豊かな感性、多様な人々と協働して学ぶことのできる態度、コミュニケーション能力、科学的思考力・分析力、表現力、問題解決能力などを有する学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。

・一般入試（前期日程、後期日程）

大学入試センター試験では3教科3科目又は3教科4科目で基礎学力を、また

	<p>個別学力検査では小論文で自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、学習意欲、コミュニケーション能力、保育・教育専門職としての適性等を総合評価します。さらに、保育・教育活動に貢献する意欲を評価します。</p> <p>・推薦入試</p> <p>小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、子ども学に関連した知識、学習意欲、コミュニケーション能力、専門職としての適性を、評価するとともに、出願書類も参考にしながら、多様な人々と協働して学ぶ態度や福祉社会や地域社会に貢献する意欲等を総合評価します。</p> <p>・帰国生入試</p> <p>小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。</p> <p>・私費外国人留学生入試</p> <p>日本留学試験および TOEFL により語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。</p>
--	--

3 情報工学部

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。情報工学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3】 情報工学と関連工学分野の専門知識とそれらを複合的に応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【行動力・課題解決力】 知識を総合的に活用することにより、主体性と協調性を持って課題を発見し、技術者倫理を遵守して解決できる能力を身に付けている。</p> <p>【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>情報工学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 技術英語、卒業研究をはじめとする実験・演習科目により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】</p>

	<p>数学、物理および工学の基礎に関する科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。</p> <p>【専門性2】 学部で定めた情報系基礎科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。</p> <p>【専門性3】 各学科のカリキュラム・ポリシーに準拠した独自の教育課程を用意し、各学科に応じた専門知識と応用力を養成します。</p> <p>【行動力・課題解決力1】 実験・演習科目により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。</p> <p>【行動力・課題解決力2】 1年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得した情報工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。</p>
<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 情報工学科、情報通信工学科、情報システム工学科、人間情報工学科の3学科で構成されています。</p> <p>情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。本学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学の新しい分野の発展に興味を抱いている学生 ● 人間を取り巻く環境によく適合する情報社会を形づくりに貢献する意欲を持つ学生 ● 新技術・知識の創出に関心を持ち、地域と世界に向けて情報発信したいと考える学生 <p>急速に発展している高度情報化社会を支えるインターネット・コミュニケーション技術を用いて、現状の社会を改革し発展させていく夢を持った学生の挑戦を期待しています。</p>

3-(1) 情報通信工学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学、通信工学、電子工学の3つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、情報通信技術（ICT）の利用者視点を理解するとともに、グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点から多面的に物事を捉え先導できる能力を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3】 情報工学の知識を基盤として、情報通信技術（ICT）の根幹をなす通信工学・電子工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。</p> <p>【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見、分析、解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【生涯学習力】 情報通信技術（ICT）の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>情報通信工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 「技術英語」、「卒業研究」をはじめとする実験・演習科目により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、技術文書作成能力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成するとともに、グローバルな視点から多面的に物事を捉え先導できる能力を養成します。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目により、地域が果たす役割を考え、地域の</p>

<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 カテゴリー「学科共通」の授業科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。</p> <p>【専門性2】 カテゴリー「情報工学基礎」の授業科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。</p> <p>【専門性3】 「情報処理工学」、「情報通信工学」、「情報電子工学」の各カテゴリーをバランスよく修得することにより、それぞれの分野に関する幅広い知識と応用力を養成し、さらにそれらを活用して総合的に課題解決に当たる応用力を養成します。</p> <p>【行動力・課題解決力1】 3年次までの実験・演習科目を通して情報通信技術（ICT）に関して獲得した専門知識を、主体性と協調性をもって活用し、課題を解決に導くための方法を培います。</p> <p>【行動力・課題解決力2】 1年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得した情報工学、通信工学、電子工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な情報通信技術（ICT）を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。</p>
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学、通信工学、電子工学の3つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、情報通信技術（ICT）の利用者視点を理解するとともに、グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インターネットを中心とする情報通信技術を学びたい学生 ● コンピュータやネットワークを構成する電子機器やその特性を学びたい学生 ● 情報技術を利用した新しいソフトウェアの創造に興味のある学生 ● 未来の情報通信技術に対する夢や希望を持っている学生 <p>【入学者選抜の基本方針】 情報通信工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。</p> <p>本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に以下の学力を身に付けていることが望まれます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 2 「物理」に関する基礎知識を有していること。

	<p>各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般入試（前期日程、中期日程） 基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4教科6科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。 ・推薦入試 書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・帰国生入試 書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 書類（日本留学試験及びTOEFL(iBT)）の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。
--	---

3-(2) 情報システム工学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学、力学に基礎を置くものづくりのための機械工学、人間と機械やコンピュータを結びつけるインタフェース工学などの学問を身に付け、領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って、新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3-1】 情報工学の知識を基盤として、機械工学、インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。</p> <p>【専門性3-2】 コンピュータや機械をインテリジェント化した機器や実用的なソフトウェアシステム、組み込みシステム、機械システムを設計する基礎能力を身に付けている。</p> <p>【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見し解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>情報システム工学科では、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 「技術英語演習」、「システム創造プロジェクト」、「卒業研究」により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。</p>

<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 カテゴリー「工学基礎」の授業科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。</p> <p>【専門性2】 カテゴリー「情報工学基礎」の授業科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。</p> <p>【専門性3-1】 「ソフトウェアシステム」、「機械システム」、「知的インタフェース」のカテゴリーを設け、情報工学、機械工学、インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力、そして機器設計の基礎能力を養成します。</p> <p>【専門性3-2】 カテゴリー「総合・創造」の科目をはじめ実験・演習科目により講義で学んだ幅広い知識を総合し設計等に活用する能力を養成します。自律型移動ロボットの設計・製作を学ぶ「システム創造プロジェクト」、CAD・CAEを利用した機械設計を学ぶ「機械デザイン演習」、CPUの設計を学ぶ「回路デザイン演習」、人工知能のプログラミングを学ぶ「知能プログラミング演習」等の授業科目を設けています。</p> <p>【行動力・課題解決力1】 実験・演習科目により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。</p> <p>【行動力・課題解決力2】 1年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得した情報システム工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。</p>
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学、力学に基礎を置くものづくりのための機械工学、人間と機械やコンピュータを結び付けるインタフェース工学などの学問を身に付け、領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って、新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報技術を積極的に活用したものづくりに興味のある学生 ● 情報工学・機械工学・インタフェース工学を幅広く学びたい学生 ● 人間の生活や社会活動を支援するため、インテリジェント型機器やシステムの設計能力を獲得したい学生 ● 情報工学と他の様々な専門領域を結ぶ領域横断型の新技術を創出したい学生

【入学者選抜の基本方針】

情報システム工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。

本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に以下の学力を身に付けていることが望まれます。

- 1 情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。
- 2 「物理」に関する基礎知識を有していること。

各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。

・一般入試（前期日程、中期日程）

基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4教科6科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。

・推薦入試

書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

・帰国生入試

書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

・私費外国人留学生入試

書類（日本留学試験及びTOEFL(iBT)）の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

3-(3) 人間情報工学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>人間情報工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性3-1】 情報工学の基礎を基盤として、人間工学および機器設計工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。</p> <p>【専門性3-2】 人体機能と環境変動の特性や人間の動作・行動の解析結果を活かしたシステムおよび人間の感性や生活環境に適合したソフトウェアを設計する基礎能力を身に付けている。</p> <p>【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見し解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>人間情報工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目を配置し、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目を配置し、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 「卒業研究」をはじめとする実験・演習科目を配置することで、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。</p>

<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 「数学系」のカテゴリーを設け、数学、物理および工学の基礎に関する科目を配置することで、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。</p> <p>【専門性2】 「情報系」のカテゴリーを設け、情報工学基礎の授業科目を配置することで、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。</p> <p>【専門性3-1】 カテゴリー「情報系」に情報工学の応用および電気・電子工学の基礎に関する授業科目を配置するとともに、「生体機能系」及び「機器設計系」のカテゴリーを設け、これらに関する基礎から応用までの授業科目を配置することで、情報工学、人間工学および機器設計工学に関する幅広い知識と応用力を養成します。</p> <p>【専門性3-2】 「実験・演習」のカテゴリーを設け、基本から応用に至るスキルを修得する授業科目を配置するとともに、分野横断的な実験と考察を必要とする授業科目を配置することで、人間の生活環境の変化に適したシステムの設計基礎能力を養成します。</p> <p>【行動力・課題解決力1】 実験・演習科目の配置により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。</p> <p>【行動力・課題解決力2】 1年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得した人間情報工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。</p>
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 人間情報工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人体機能の巧みさを工学の視点から解明したい学生 ● 人体機能と人間環境の調和を考慮した「もの」や「サービス」を開発したい学生 ● 情報工学の視点で地域社会の発展や国際社会との連携協力に参加し、貢献したい学生 <p>【入学者選抜の基本方針】 人間情報工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に</p>

<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>以下の学力を身に付けていることが望まれます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 2 「物理」に関する基礎知識を有していること。 <p>各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般入試（前期日程、中期日程） 基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4教科6科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。 ・推薦入試 書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・帰国生入試 書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 書類（日本留学試験及びTOEFL(iBT)）の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。
-------------------------------	--

4 デザイン学部

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>デザイン学部では、本学の理念に沿う実学の体現者として、豊かな教養と深い専門性を備え、新しい時代を切り拓く人材の育成を通じて、グローバルな視点で地域や社会の学術文化の進展及び産業の振興に貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。</p> <p>【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを活用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 領域デザインに求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。</p> <p>【専門性3】 領域デザインに求められる知識・技能を有し、かつ実社会で自律的に活用するため、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。</p> <p>【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。</p> <p>【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>デザイン学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また美術の歴史について、デザイン分野の基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。</p> <p>【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れることで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】</p>

<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや国際交流、卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 1年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。</p> <p>【専門性2】 2年次からは両学科とも領域に分かれて、新たな文化価値を創造するために必要な学科専門教育科目及び講義と演習が体系化された領域専門教育科目を履修します。学科専門教育科目では、各自の志向に基づき、自主的に選択できる演習科目を中心として編成しています。企画提案力に必要な発想から情報分析、課題解決までのプロセスを身に付けるために、領域専門教育科目は複数の専門領域が用意されており、横断的に学ぶことができるよう編成しています。</p> <p>【専門性3】 自ら発見した課題解決のために、1年間を通じて卒業研究を履修します。</p> <p>【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・態度を養います。</p>
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 デザイン学部は、情報化、グローバル化など刻々と変化する社会の動向を的確に把握することにより、自ら課題を発見し、豊かな生活文化の形成に必要な専門力とマネジメント能力を活かして、デザインによる解決を実行し、広く社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デザイナーあるいは関連の職種につく明確な意志をもち、そのための努力を惜しまず、挑戦し続けることのできる学生 ● 様々な科学を学ぶことによって、人間・自然・社会の関係性を主体的に分析・考察し、課題に取り組む力を身に付け、デザインによる解決にいかしたい学生 ● 自ら発見した課題をデザインによって表現し、解決するために、知性と感性の融合によるデザイン発想力・技術力・表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、新たな生活・文化の価値を創造するため、デザインによる解決策を考案し企画提案する力を身に付けたい学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けたい学生

4-(1) デザイン工学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>デザイン工学科では、共通教育に加えて、製品・情報デザイン領域あるいは建築・都市デザイン領域での専門教育により、これらの関係性を知識・技能の修得を通じて学ぶことで、地域社会・国際社会の持続的発展のために、その能力を長きにわたって発揮できる、デザイナー・建築家等の実務担当者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。</p> <p>【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、製品や作品提案等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 製品・情報デザイン領域及び建築・都市デザイン領域に求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。</p> <p>【専門性3】 製品・情報デザイン領域及び建築・都市デザイン領域に求められる知識・技能を活用し、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。</p> <p>【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点やイノベーション対応能力を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。</p> <p>【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>デザイン工学科では、入学者受入方針に沿い、かつ学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような専門教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また、統計学の基礎について、数的データ処理の基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。</p> <p>【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れることで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。</p>

<p>CP (教育課程 の編成・実 施の方針)</p>	<p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや、海外協定校とのワークショップ及び卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 1年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。なお、デザイン工学科生に求められる、立体や空間表現力の基礎として、モデリングやデザイン・ドローイングを学びます。</p> <p>【専門性2】 2年次より「領域専門教育科目」が加わり、学生は「製品・情報デザイン領域」あるいは「建築・都市デザイン領域」何れかの専門科目を新たに履修します。これにより、各領域の学びを深化させ、デザイン基礎技能、発想力、問題発見力、問題解決力としての企画・提案力等の獲得を目指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製品・情報デザイン領域では、プロダクトデザインや、エクスペリエンスデザイン、情報デザインの講義・演習の横断的に選択出来るよう科目を編制し、招来のキャリアプランへの判断が早期かつ柔軟にできるようにしています。 ・建築・都市デザイン領域では、卒業時に国家資格である一級・二級建築士、木造建築士の受験資格を得るのに必要な国土交通省指定の科目を準備し(ただし受験資格によっては実務経験も要求される)、設計製図・建築計画・環境工学・建築設備・構造力学から法規や都市計画まで幅広く学習します。 <p>3年次以降は、企業や官公庁でのインターンシップやデザイン実習を通じて、実社会での業務経験の機会を得るように努める一方で、卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、職業としてのデザインの実際に接することに努めます。また各領域においては、ポートフォリオの作成をうながし、進路に応じたアドバイスを受けます。</p> <p>【専門性3】 4年次では、各領域で学んだ専門知識と技能を活かし、自ら発見した課題解決のために1年間を費やし「卒業研究」を履修します。卒業研究では、学科全教員の参加する中間・最終の2度の発表とその際の指導を経て、卒業作品ならびに卒業論文もしくは卒業研究ノートを作成します。作品は展覧会形式にて学外で発表され、自己の研究成果を社会に発信し、評価を得る機会としています。</p> <p>【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・態度を養います。また「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、継続的な研鑽の必要性を学びます。</p>
---	---

<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 デザイン工学科は、工業製品のデザイン、情報デザイン、建築設計あるいは都市計画などの領域において、地域社会・国際社会を問わず、その知識・技能を遺憾なく発揮できるデザイナー・建築家の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自己の将来像、職業人像をプロダクトデザイナー、情報デザイナーあるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向けて挑戦し続けることのできる学生 ● 自己の将来像、職業人像を建築家あるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向け挑戦し続けることのできる学生 ● 諸科学の知識や技能の学びを通じて、知性と感性を融合させ、デザイン工学諸分野に必要なデザイン発想力やコンピュータ等による製品、情報、空間等の造形技術力ならびに表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、新たな生活・文化の価値を創造するため、製品デザイン、情報デザイン、建築デザイン等による解決策を考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付けたい学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション能力、ならびに外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付け、多様な人々との協働により地域や国際社会に貢献したいと考える学生 <p>【入学者選抜の基本方針】 デザイン工学科では、一般入試（前期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般入試（前期日程） <p>大学入試センター試験および、個別学力検査として実技試験（鉛筆デッサン）を課します。 大学入試センター試験では、「外国語」を必須とし、その他の科目から2又は3（理科の「基礎を付した科目」から2及び理科以外の教科の科目から1）科目を課すとともに、実技試験では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推薦入試 <p>実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 実技では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、個人面接を行い、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、出願書類を参考に、高等学校あるいは中等学校で得た基礎学力、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・帰国生入試 <p>書類審査、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本の高等学校で修得される程度の基礎学力について評価します。 実技では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私費外国人留学生入試 <p>出願時に書類審査を行い、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組</p>
-------------------------------	--

<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>めるよう、日本語および基礎学力を日本留学試験成績および TOEFL あるいは TOEFL iBT の得点により評価します。</p> <p>実技試験では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、出願書類を参考に、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。</p>
-------------------------------	---

4-(2) 造形デザイン学科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>造形デザイン学科では、共通教育に加えて、ビジュアルデザイン領域あるいは造形デザイン領域における専門教育により、これらの関係性を知識・技能の修得を通じて学ぶことで、地域社会・国際社会の持続的発展のために、その能力を長きにわたって発揮できる、デザイナー・造形スペシャリスト等の実務担当者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p>【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。</p> <p>【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品提案等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。</p> <p>【専門性1】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを応用できる能力を身に付けている。</p> <p>【専門性2】 ビジュアルデザイン領域及び造形デザイン領域に求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。</p> <p>【専門性3】 ビジュアルデザイン領域及び造形デザイン領域に求められる知識・技能を活用し、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。</p> <p>【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点や文化的価値の創造力を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。</p> <p>【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。</p>
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>造形デザイン学科では、入学者受入方針に沿い、かつ学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような専門教育課程を編成しています。</p> <p>【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。</p> <p>【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また、日本語の文章作法について、ストーリーづくりの基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。</p> <p>【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れるこ</p>

<p>CP (教育課程 の編成・実 施の方針)</p>	<p>とで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力1】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。</p> <p>【異文化理解・コミュニケーション力2】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや海外協定校とのワークショップ及び卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。</p> <p>【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。</p> <p>【専門性1】 1年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。なお、造形デザイン学科生に求められる、造形力・構成力・コミュニケーション力の基礎として、平面構成、立体構成、空間造形ならびにメディアコミュニケーションについて学びます。</p> <p>【専門性2】 2年次より「領域専門教育科目」が加わり、学生は「ビジュアルデザイン領域」あるいは「造形デザイン領域」何れかの専門科目を新たに履修します。これにより、各領域の学びを深化させ、デザイン基礎技能、発想力、問題発見力、問題解決力としての企画・提案力等の獲得を目指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビジュアルデザイン領域では、グラフィック・写真・映像・CG・Webなど様々な分野を組み合わせ社会のニーズを意識しながらビジュアルデザインを学修すると共に、デザインビジネス展開のための企画提案を行います。 ・造形デザイン領域では、木工・陶磁・染織・印刷などの伝統文化に新しい発想を組み入れ、芸術性の高い造形の可能性を探ってゆくと共に、立体・空間・メディア等の特性を活かし生活文化に貢献できる企画提案を行います。 <p>3年次以降は、領域専門科目の履修を中心に、より深くデザイン専門知識や技能を修得していきます。また、デザイン事務所や企業等での実務経験の機会となる「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、キャリア形成に対する意識を高め卒業後の進路を明確化させ、実社会に通用する力を養ってゆきます。また各領域においては、ポートフォリオの作成をうながし、進路に応じたアドバイスを受けます。</p> <p>【専門性3】 4年次では、各領域で学んだ専門知識と技能を活かし、自ら発見した課題解決のために1年間を費やし「卒業研究」を履修します。卒業研究では、学科全教員の参加する中間・最終の2度の発表と指導を経て、卒業作品ならびに卒業研究ノートを作成します。作品は展覧会形式にて学外で発表され、自己の研究成果を社会に発信し、評価を得る機会としています。</p> <p>【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。</p> <p>【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより4年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・</p>
---	---

	<p>態度を養います。また「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、継続的な研鑽の必要性を学びます。</p>
<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>【人材育成像及び求める学生像】 造形デザイン学科は、デザインによって地域特性を考慮した問題及びグローバルな視点で課題解決に取組み、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し、社会に貢献できるデザイナー及び造形のスペシャリストの育成を目指しています。したがって、求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自己の将来像、職業人像をビジュアルデザイナー、造形デザイナーあるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向けて挑戦し続けることのできる学生 ● 豊かな人間性と美を見極める感性、柔軟で論理的な思考力及び社会に企画提案できるデザインマネジメント力を身に付けたいと考える学生 ● 諸科学の知識や技能の学びを通じて、知性と感性を融合させ、造形デザイン諸分野に必要なデザイン発想力や平面、映像、立体、空間等の造形技術力ならびに表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、ビジュアルコミュニケーションデザインを解決策として考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付けたい学生、または、アートとクラフトの融合分野において解決策を考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付け、生活文化の価値を創造したいと考える学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション能力、ならびに外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付け、多様な人々との協働により地域や国際社会に貢献したいと考える学生 <p>【入学者選抜の基本方針】 造形デザイン学科では、一般入試（前期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。</p> <p>各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般入試（前期日程） 大学入試センター試験および、個別学力検査として実技試験（鉛筆デッサン）を課します。 大学入試センター試験では、「外国語」「国語」等の基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（3科目3教科）を課すとともに、実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。 ・推薦入試 実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、個人面接を行い、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、出願書類を参考に、高等学校あるいは中等学校で得た基礎学力、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。 ・帰国生入試 書類審査、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本の高等学校で修得される程度の基礎学力について評価します。実技では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。

<p>AP (入学者受 入の方針)</p>	<p>・私費外国人留学生入試 出願時に書類審査を行い、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本語および基礎学力を日本留学試験成績および TOEFL あるいは TOEFL iBT の得点により評価します。 実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、出願書類を参考に、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。</p>
-------------------------------	---

B 大学院ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

- ※ 表における表記は次のとおり。
 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：D P
 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：C P
 アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：A P

1 保健福祉学研究科

<p>D P (学位授与の方針)</p>	<p>保健福祉学研究科は、保健・医療・福祉分野における問題点を提起してそれを解決し得る研究能力を持つとともに、専門職としての高度な知識・技術を身に付けることにより、健康で夢の持てる地域社会の実現に貢献し得る人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健・医療・福祉分野における問題点を発見し、それを理論的に解決できる研究能力を身に付けている。 ● 高度な知識と技術を備え、豊かな地域社会の実現に向けて指導者、実践者として活躍できる能力を身に付けている。 ● グローバルな視野を持った専門職として国際貢献できる能力を身に付けている。
<p>C P (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>保健福祉学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力とグローバルな視野並びに高度の専門性を要する職業等に必要なる能力を養うための博士前期課程と、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識並びにグローバルな視野を養うことを目的とした博士後期課程（保健福祉科学専攻）を置いています。 2 博士前期課程は、看護学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、看護技術やケアシステムに関連した諸問題を解決できる人材を育成する看護学専攻、栄養学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる人材を育成する栄養学専攻及び保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる人材を養成する保健福祉学専攻の3専攻を置いています。 3 博士後期課程は保健福祉科学専攻からなり、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うための3大講座を置いています。 4 カリキュラムは、それぞれの専攻のカリキュラム・ポリシーに従って、講義・演習科目と特別研究から編成しています。
<p>A P (入学者受入の方針)</p>	<p>保健福祉学研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健・医療・福祉分野における基本的な問題から応用的な問題を解決し得る国際的な研究者を目指す学生 ● 豊かな地域社会の実現に向け、官・民・産を問わず教育、研究機関で活躍する教育者、研究者を目指す学生 ● 高度の知識・技術を身に付けた専門職として、社会において指導的な実践者を目指す学生

1-(1) 看護学専攻（博士前期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>看護学専攻は、学際的で高い看護の専門的知識と基礎的な研究能力を活かして、保健医療福祉分野における課題を解決し、国内外の看護における実践・教育・研究の場で社会のニーズに応え、貢献できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護実践力を身に付けている。 ● 看護における現象を科学的根拠に基づいて説明し、課題を提起する能力を身に付けている。 ● 国際的・研究的視点を持ち看護の質向上に向けて貢献できる能力を身に付けている。 ● 看護のリーダーやスペシャリストとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>看護学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 看護学の教育・研究に必要な基礎的理論や研究技法及び外国文献の読解力を学修する「看護学専攻共通科目」と「基礎看護学」「発達看護学」「広域看護学」の各専門分野から構成しています。 2 幅広く保健医療福祉に共通する3専攻共通科目では、保健福祉学特論、災害援助特論・演習や国際コミュニケーション特論等を履修できます。 3 「基礎看護学」では、生命科学特論や基礎看護学特論等の講義・演習を通して、看護のエビデンス検証や確立を志向します。 4 「発達看護学」では、小児・母性・成人・老年期のライフステージ特有の看護に関する課題を探求し、人々の健康と豊かな人生を支援できる看護の方法論やシステム構築に貢献することを目指しています。 5 「広域看護学」では、公衆衛生看護学・在宅看護学・国際保健看護特論・精神保健看護学特論を履修し、生涯を通じた人々の心とからだの健康を学際的に探究し、グローバルな視点から根拠に基づく課題解決を図り、看護の質向上にむけて先導できることを目指しています。 6 「広域看護学」では、修士論文に加えて保健師国家試験受験資格を満たす科目を開講し、高度な実践力とリーダーシップを発揮して社会に貢献できる保健師を養成します。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>看護学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護を科学的、論理的に考究し、ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護の実践力を身に付けたい学生 ● 専門分野における知識や技術を高めるとともに研究開発能力を身に付けたい学生 ● 新しいケアの方法やシステム開発を目指す学生 ● グローバルな視点で看護実践と研究を志向するとともに国際貢献をしたい学生 ● 保健師として明確な目的意識を持ち、将来地域においてリーダーとして活躍したい学生

1-(2) 栄養学専攻（博士前期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>栄養学専攻は、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる優れた専門性を備えるとともに、豊かな創造力と問題解決能力を身に付け、それぞれの領域で活躍できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 栄養学領域における理論と技術を身に付けている。 ● 人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決するための専門性や研究能力を身に付けている。 ● 栄養学領域における専門的な技術や知識を地域・世界に向けて発信できる能力を身に付けている。 ● 栄養士のリーダーとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>栄養学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 栄養情報学講座，食デザイン学講座，基礎栄養学講座及び食品栄養学講座を置き，教育研究を実施します。 2 栄養情報学講座では，情報解析技術を活用したデータ解析法と新しい理論構築を基に，近年急速に問題となってきた肥満，糖尿病，脂質異常症をはじめとする生活習慣病の予防と治療を目指した教育・研究並びにスポーツ栄養学の教育・研究を行い，栄養学の最先端の分野で活躍できる能力を育成します。 3 食デザイン学講座では，幼児，児童・生徒，高齢者の栄養指導や調理指導，あるいは一般消費者の食生活全般を対象にした食育において，デザインや色彩の手法を取り入れて効果を得るための教育・研究を行い，食デザイン学の分野のリーダーとして活躍できる能力を育成します。 4 基礎栄養学講座では，一連の生命現象を遺伝子，生体分子，個体，集団などのレベルごとに理解し，さらに未知なる理論を展開して発展させる力を養うための教育・研究を行い，栄養学の基礎と臨床を結ぶことができる能力，並びに栄養学分野の教育・研究機関にて活躍できる能力を育成します。 5 食品栄養学講座では，栄養学を基盤とした天然物化学，酵素化学，分子遺伝学的アプローチにより，新規機能性食品成分の発見や新たな機能性食品素材の開拓，さらに食中毒の原因解明や予防に基づく食品の安全性の評価方法を開発し，健康増進と疾病予防を目標とした安全かつ高機能を有する食品素材の探求を志向した教育・研究を行い，管理栄養士のエキスパートとして食品関連企業，教育研究機関や行政機関において先導的に活躍できる能力を育成します。 6 外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>栄養学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 栄養学関連の教育施設で教育・研究に携わることを目指す学生 ● 医療機関や保健福祉施設で治療栄養に携わる専門的管理栄養士を目指す学生 ● 栄養研究機関や医療栄養関連企業の栄養研究部門で試験・研究に携わることを目指す学生 ● 自治体などの保健施設で地域栄養活動に携わり，栄養指導などのコーディネータを目指す学生

1-(3) 保健福祉学専攻（博士前期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>保健福祉学専攻は、保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる優れた専門性を備えた人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健福祉領域における高度な知識、理論と技術及び論理性を身に付けている。 ● 保健福祉領域における諸問題を解決するための研究を計画・遂行・発表する基礎能力を身に付けている。 ● 生涯にわたって自己研鑽する姿勢と習慣を持ち、国内外の新しい問題に創造的に対応できる力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>保健福祉学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 政策科学講座，社会福祉支援学講座及び保健福祉支援学講座を置き，教育研究を実施します。 2 政策科学講座では，社会保障や児童・高齢者・障害者福祉分野等における制度，政策行政などに関する理論やデータの分析・評価方法を追求する科目を設置しています。 3 社会福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者，病者のウェルビーイングを達成するための臨床的方法・技術の開発・評価及びそれらの理論化を追求する科目を設置しています。 4 保健福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者など多様な人々の適応行動に関わる心理的・身体的特性の科学的な分析を基礎にした保健福祉実践につながる理論と方法を追求する科目を設置しています。 5 当該講座分野の理論と実践の前進に寄与しうる高度な研究成果を生み出すことができるよう，主指導教員を中心としながら段階的・系統的に研究指導を行います。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>保健福祉学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「やさしさ」，「思いやり」，「人間性」といった豊かな社会性と科学性を備え，保健福祉領域でのリーダーとして活躍したい学生 ● 保健福祉領域における専門職として明確な目的意識を持ち，高度な知識や技術及び論理性を基礎にして，科学的方法によって問題の解決に当たりたい学生 ● 高い挑戦意欲を持って，保健福祉領域の未開拓の領域の研究に情熱を燃やすことができる学生 ● グローバルな視点での保健福祉実践・研究に興味を持ち，国際貢献を果たしたい学生

1-(4) 保健福祉科学専攻（博士後期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>保健福祉科学専攻は、人間の健康問題に関して、生命や栄養、看護・福祉など各方面からアプローチし、保健福祉科学に係る学問をさらに深化させることにより、保健福祉問題の解決策を提案できる高度な見識を備えた各専門職領域の実践者、指導者、研究者及び教育者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健福祉科学の学問体系の確立と発展に寄与し、学際的研究を自立して展開する能力を身に付けている。 ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報収集及び発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている。 ● 保健福祉科学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>保健福祉科学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 保健福祉に関わる学問をさらに深化させ、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うために、本専攻に看護学大講座、栄養学大講座、保健福祉学大講座の3大講座を置いています。また、外国人を担当教員とし、英語で講義する科目の設定並びに海外協定校との共同研究の実施により、グローバル教育を行います。 2 看護学大講座では、看護実践を通して生じる諸現象やケアそのものを科学的に解明していくため、慢性疾患患者やがん患者及びその家族が抱える諸問題や、高齢者等のケアニーズに対応する看護システムやケア開発、看護の質向上に資する教育・研究を行います。教育課程は基礎看護学、成人看護学、小児看護学、母性看護学、地域看護学、精神看護学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした看護学特別研究からなります。 3 栄養学大講座では、食事に伴う栄養現象を分子生物学的アプローチにより解明し、病気の予防に活かすため、食品中の新規有効成分の解明、食品の安全性の追求、慢性疾患における代謝調節系の役割の解明を目指した研究を行います。教育課程は分子生物学、栄養科学、食品科学、病原微生物学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした栄養学特別研究からなります。また、外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。 4 保健福祉学大講座では、児童、障害者、高齢者を主な対象として、その自立支援に関する研究を行います。教育課程は、家族保健福祉学、児童保健福祉学、高齢者保健福祉学、障害者保健福祉学、地域保健福祉学、国際保健福祉学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした保健福祉学特別研究からなります。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>保健福祉科学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人間の健康に関する諸問題を解決するために、専門の知識や技術、高度な学問的見識を修得し、自立して研究できる研究者を目指す学生 ● 地域における保健福祉問題を掘り起こして、その対策を立案して、地域における制度や計画作りに参加できるリーダーシップを持った研究者を目指す学生 ● 教育機関や企業、各種研究機関において自立して高度な教育研究に取り組める教育者及び研究者を目指す学生

2 情報系工学研究科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>情報系工学研究科は、情報工学部における学士課程の教育目標の延長線上にその教育目標を置き、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に大いに貢献できるグローバル人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学とそれに密接に関連する工学について、高度な専門性と技術を身に付けている。 ● 得られた知識を融合的に活用して、新たな技術開発・理論展開を持って社会の発展に貢献できる能力を身に付けている。 ● 技術者に求められる高い倫理観、多面的な思考力、それらに培われた実行力や行動力を備えたいうで、自身の専門分野でリーダーシップを発揮できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>情報系工学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 システム工学という専攻名のもと、連携性のある教育・研究体制を敷き、個々の学生が望む価値の多様性に対応できるよう、選択科目を多く設けています。 2 博士前期課程では、修士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じた教育・研究ができるようにしています。 3 博士後期課程では、博士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じたより深い教育・研究ができるようにしています。 4 カリキュラムは、それぞれの課程のカリキュラム・ポリシーに従って、講義演習科目と特別研究から編成されています。いずれの課程においても教員による活発な議論と研究指導に加え、研究科として、また他研究科とも協力してグローバルな幅広い視野と高い応用や研究スキルを涵養します。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>情報系工学研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報処理、情報通信、機械システム、人間工学などの分野において、これらに関する理論や技術を深く修得し、急速に発展する高度技術社会に貢献することに情熱を傾けたい学生 ● 現在、情報工学についての知識は十分ではなくとも、今まで培ってきた専門分野に、情報工学関連技術を取り込み活用・発展させようとの希望を抱いている学生 ● 急速に進歩し、変化する産業社会からの多様な要請に応えるべく、既存の枠組みにとらわれない総合的かつ先端的な技術を修得し、産業社会に貢献しようとする学生

2-(1) システム工学専攻（博士前期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>システム工学専攻は、研究者あるいは技術者の立場から、高度情報化社会の中核となって産業社会の発展を支えていく人材、幅広い技術的基盤を基に「実システム」の創造的な設計ができる人材、豊かな人間性と倫理観を兼ね備えた人材、環境変化や産業構造の変化に柔軟に適應できる判断力とコミュニケーション能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 工学に対する専門的な知識と応用力を身に付けている。 ● 現実の複雑かつ困難な問題に柔軟に対処し、解決できる能力を身に付けている。 ● 急速に発展する高度な技術社会をリードできる研究能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>システム工学専攻（博士前期課程）は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学とそれに関連する工学分野の急速な発展に対応できるように、電子情報通信工学、機械情報システム工学及び人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、学士課程との連続性も踏まえ、教育研究を実施します。 2 電子情報通信工学領域では、次世代ICT技術の開発・展開に必要な情報処理工学、情報通信工学及び情報電子工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 3 機械情報システム工学領域では、情報工学と機械工学を融合した次世代技術の開発・展開に必要なソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学及び機械・エネルギーシステム工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 4 人間情報システム工学領域では、人間の生活支援に関する次世代技術の開発・展開に必要なインテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス及び人間支援工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 5 領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い応用力を涵養します。
<p>AP(入学者受入の方針)</p>	<p>システム工学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学等の分野で高度な専門技術者あるいは研究者を目指す学生 ● 高度情報化社会の発展に、斬新な構想力と実践力を身に付けた技術者として貢献したい学生 ● 専門学術領域を通じて地域産業の振興をリードする意欲のある学生 <p>加速度的に進展する高度情報化社会の中で、産業社会構造の変化に柔軟に対処し、新しい工学分野を共に創造し、新世紀を切り拓く、若さと夢を持った研究指向の技術者を目指す学生の挑戦を期待しています。</p>

2-(2) システム工学専攻（博士後期課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>システム工学専攻は、今後ますます多様化、複雑化する社会からの要請に応えるべく、公的研究機関のみならず民間企業において、情報系の学術分野を現実課題の解決に適応できる研究者及び高度専門技術者を養成することを目標に、専門領域の深化と統合を通じて、新たな問題を発掘し解決する能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 工学に対する深い専門的知識と幅広い応用力を身に付けている。 ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている。 ● システム工学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>システム工学専攻（博士後期課程）は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、学生は希望する研究分野に応じていずれかの領域に所属します。 2 電子情報通信工学領域では、情報処理工学、情報通信工学、情報電子工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 3 機械情報システム工学領域では、ソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学、機械・エネルギーシステム工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 4 人間情報システム工学領域では、インテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス、人間支援工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 5 所属領域の講義から高度な専門知識を修得するとともに、所属外領域の講義の履修により知識の展開力を錬成します。 6 領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い研究能力を涵養します。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>システム工学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報処理、情報通信、システム工学などの分野において、理論や技術を深く修得し、新たな問題を発見し解決することによって、産業社会に貢献することに情熱を傾ける学生 ● 産業社会の多様な要請に応えるべく、既存の枠組みにとらわれない総合的・先端的知識や技術を切り開くとともに、企業活動を社会貢献に導くことを希求する学生 <p>特色ある3学科を基礎にする岡山県立大学大学院情報系工学研究科において、自らの専門分野の深化と他分野との複合化・融合化を通じて、自ら問題を発見し解決できる総合的能力を身に付けることを期待しています。</p>

3 デザイン学研究科

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>デザイン学研究科は、グローバルな視野と感性を持ち、社会を的確にとらえ時代の変化を洞察することで、将来予想される問題を優れたデザインの創出により解決し、豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デザインに係る十分な情報分析能力及び理論構築力を身に付けている。 ● 独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● グローバルな視野と感覚を持ち、独自の優れた個性を発揮できるデザイン制作能力を身に付けている。 ● 高度な専門性とマネジメント力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>デザイン学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 グローバルな視野と感性と独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けるために、カリキュラムは、専攻及び領域の連携を図るべく編成されており、専攻共通科目、領域科目に区分しています。 2 専攻共通科目は、両専攻に必要とされる美学・美術史系の科目を中心として編成しており、現代における造形文化を考察し、解明するための視座の獲得を図ります。 3 豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材育成のため、領域科目では、所属する領域での高度な専門知識、能力、技術を養う科目により編成しています。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>デザイン学研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 国際的な視野と感覚を持ち、独自の優れた個性を発揮したデザイン制作に意欲を持つ学生 ● 新しいデザイン領域の開拓やデザイン理論の創出、もの作りに意欲を持つ学生 ● デザインを通して、人間性を豊かにし、幸せな社会作りに貢献しようとする意識を持つ学生

3-(1) デザイン工学専攻（修士課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>デザイン工学専攻は、地域社会と産業界の要請に応えられる、高度な専門的知識・技能・技術をベースにした総合的な思考力を有する高度専門職業人として多様な価値創造が可能なデザイナー及び研究者の育成を目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析及びデザイン理論による構築力を身に付けている。 ● 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>デザイン工学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を涵養するために、「製品・情報デザイン学領域」、「建築・都市デザイン学領域」の2つの領域を置いています。 2 製品・情報デザイン学領域では、工業製品、日常生活品など製品を対象として、技術と感性の調和を図り、同時にヒトと製品のスムーズな協働（インタラクション）のためにユーザインタフェースなど情報を整理し、豊かな生活を創造する製品の実践的、総合的な教育研究に取り組みます。 3 建築・都市デザイン学領域では、人間生活の根幹となる建築空間を基軸にして、街づくり、都市や地域環境など広範囲な空間領域を対象として、人と環境の調和を目指した体系的・総合的な建築教育とともに、各分野を深く探究する先進的な研究活動に取り組みます。 4 特別研究は、2年間の研究活動を通じて、高度な研究遂行能力を涵養することを目的としています。研究テーマは学生の希望と指導教員の助言により設定され、修士論文及び修士作品あるいは研究科委員会で承認を受けた特定の課題における成果物の作成をします。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>デザイン工学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 既成概念にとらわれず、個性的で、物事の本質を観ようとする自主性のある学生 ● 豊かな創造力と柔軟な思考力を鍛え、自ら問題を提起し、それぞれの創作を通して、解決策を示し、社会や人々の生活・文化の向上に貢献したい学生 ● 最新技術と伝統との融合による総合的なデザイン力によって、ヒトと空間、ヒトとモノ、ヒトとコトの関係性の中から新たな価値を創造し、人々の生活を豊かで潤いのあるものにした学生

3-(2) 造形デザイン学専攻（修士課程）

<p>DP (学位授与の方針)</p>	<p>造形デザイン学専攻は、造形デザイン学の理論と技術を修得する教育研究を行い新たな造形デザイン構築において諸問題を総合的な視点から解決し、社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を育成することを目指しています。</p> <p>したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析・構築力及びデザイン理論構築力を身に付けている。 ● 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている。
<p>CP (教育課程の編成・実施の方針)</p>	<p>造形デザイン学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を複合的に涵養するために、1専攻1領域制を導入し「造形デザイン学領域」で学生は学んでいきます。 2 印刷メディアを主体とした造形構成・編集や、デジタルメディアを主体としたコンテンツ形成におけるデザイン性・機能性が研究できるよう、ビジュアルデザインに関する高度な専門知識、能力、技術を育成する科目群を提供しています。 セラミック・テキスタイル・木材等を使ったアイテムのデザイン性・機能性や、現代を意識した表現の可能性が研究できるよう、造形デザインに関する高度な専門知識、能力、技術を育成する科目群を提供しています。 3 授業の取組としてプロジェクトに関わり、公共機関や企業などに社会提案を行うことで、実践的にデザインマネジメント力を養っていきます。 4 2年間の特別研究では、研究テーマに基づき調査・分析・考察を進め、論と作品制作を通して造形デザイン学を深く探究していきます。
<p>AP (入学者受入の方針)</p>	<p>造形デザイン学専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 造形や構成などの特性を、柔軟な発想と集積した知識によって分析し、さらに独創的な思考力、表現力などを発揮して、新たな造形デザインの価値創造を目指したい学生 ● 情報化社会のなかで、情報を読み解き、またそれらを組み合わせるなどによって新たな課題発見の可能性を探究し、造形デザインによる社会的価値の創造に結び付けたい学生 ● 社会の動向を注意深く観察する力を養いながら、常に問題意識を持って造形デザインが担うべき役割を追究し、培った力を社会貢献にいかしたい学生

編集後記

大学教育年報が大学教育開発センターの担当になってから、3年目を迎えることとなった。1年目（平成26年度教育年報）は、新設された大学教育開発センターの活動が加わったため、さらに国際交流センターも始動したので、それらを新たに加えるという作業があり、教育年報の構成が従来とは大きく変化した。また2年目（平成27年度教育年報）には全学教育研究機構が共通教育部に変更され、共通教育のカリキュラムも大幅に変更されたことの反映、また学部専門課程における記述の項目や記述内容が不統一で一貫性に欠けていたものを改善した。さらに学部ごとに学部と研究科を一体的に記述していたものを、学部と研究科に分離することを行った。本年度（平成28年度）の教育年報においてもそれらは基本的に踏襲されている。しかし、「入学者受入」のみは学部と大学院が一体化していたため、本年度からは学部入試は学部、研究科入試は研究科に配置することとした。昨年と本年のこれらの措置で、教育年報の第1部は基本形が整ったと考えられる。

一方、第2部については昨年度の学術研究推進センターの設置や同センターと大学教育開発センター、国際交流センターが教育研究開発機構の下に置かれることになったのを受けて3章構成とした。ただし、それぞれのセンターの特性も異なることから、相互の統一を図っている点はない。第1章の大学教育開発センターは6部会+1WGを置く大きな書式となっているため、将来的には一つのセンター内の組織としてより分かりやすい記述が望まれるが、今年度の年報では未だ手を入れていない。さらに、第3部には教育の重要な拠点である附属図書館を置き、今年度においてもそれは変わらない。

来年度の事であるが、本学教育データの定量的な部分を充実させるべく、大学ファクトブックとして現在の教育年報の一部、例えば現在の大学教育開発センター部会の一部データや付録を移行させることを構想している。ファクトブックは、それらの単なる移行データで構成されるのみでなく、本学の教育改革に資するような教育関連データについても掲載することになる予定である。

大学教育開発センター長 田内 雅規
(編集責任者)

